THE CENTRAL REVIEW

中央公論

十月號

第三十三年第十一號 第三百六十二號

大正七年九月三十日印刷納本
大正七年十月一日發行（毎月一回一日發行）


染めたと見えぬ
自然の黒髪と全じ色に染る
志らが
赤毛染
ナイス
ナイスの五大特長
□タツタ二十分で染る。
□自然の髪の色艶に染る。
□襟枕に汚染の惧なく。
□洗て剝ず永く保ち。
□用法至極手輕便利也。
價 大瓶七十錢 小瓶四十錢 男子用三十錢
發賣 東京 大阪 丹平商會
全國化粧品賣藥店にあり

■トルストイが天下第一等の書と激稱せるもの也

ヴィクトル・ユーゴー作　豊島與志雄氏譯

■佛の原文直接譯

全譯 レ・ミゼラブル

全四卷 總紙數三千頁

第一卷 新刊

▼中型（密字版）六百九十頁
▼定價壹圓六拾錢
▼郵送料八錢

ヴィクトル・ユーゴーは、佛蘭西近代浪漫派の一大巨匠にして、「レ・ミゼラブル」は、實に其の代表作也。一面、高節の國士にして、敏腕の黨人たるユーゴーは、當時の政壇に獅子吼してナポレオン三世の惡政を痛撃し、國外に追はれて英吉利に流寓すること五年間、此間、滿腔の熱誠を一管の筆に託し、堂々五千有餘枚の一大長篇を成す、卽ち「レ・ミゼラブル」也。その抱懷をジャン・バァルジャンなる一人物に寓して、波瀾多き慘苦の生涯を曲盡するの間、當時社會の各方面に、炬の如き批評の眼を放つ。作者自ら曰く、「地上に無知と悲慘との存する間は、かくの如きの書、亦必ず無用ならじ」と。全篇を貫いて鏗鏘として鳴るものは實に作者が濟生愛民の大精神にして、人道主義の大理想也。或はワーテルローの戰場に千軍萬馬を叱咤する大ナポレオンを描き、或はパリの陋巷に、命運の哀しきに泣く一賣春婦を描く。幾十の人物、幾百の情景、その結構の複雜にして、規模の雄大なる、近代小說中これに匹敵し得可きは、獨りトルストイの「戰爭と平和」あるのみならむ。我が國にも夙に、「噫無情」「哀史」等の名を以て公にせられたるものあるも、何れも梗概に非ずんば重譯にして、本書の如く直ちに佛の原文より譯出して、一字一句苟くもせざる完全譯は曾て有らざりき。新進作家の雄にして、また少壯佛文學者として名ある豊島氏のこの譯一度出づ、我が文壇、始めてユーゴーの眞面目を見るを得む也。

東京市牛込矢來町　新潮社　振替東京一七四二

殆んど無限なる本書の價値

本書は日本文學上最重要のものなるのみならず最も尊重すべき國郡誌、郷土誌たり過去の日本に於ける産業風俗傳説に至る迄一として收めざるはなく實に本邦人文研究資料の大寶庫たり若しそれ家庭の讀物として將た探勝の侶伴としての本書の價値に至つては今更贅言を要せざるべし

挿畫一頁半錢に當らず

幕末の大家大雅堂、應擧、文晁、華山等の靈腕に成れる挿畫一頁の價僅か半錢に當らず用紙印刷費の暴騰、木版刷原本暴騰の今日斯くの如き低廉無比なる本書の如きは實に出版界の一異彩なるべし

斯くの如く浩瀚なる世界的名著の復刻を再びするの機會は近き將來に於て絶對に無かるべし好機を逸せず直に御申込あれ

●豫定部數三千部に滿つれば期限中と雖も入會を拒絕すべし

●〆切期日十月廿五日限り

東京神田南神保町十四番地

大日本名所圖會刊行會

電話本局一四二五番・振替東京二〇〇八八番

豫約規定附 內容見本

御申越次第無代贈呈すべし

會費拂込所 東京銀行神田支店

振替東京三二六七番

沖野岩三郎著

煉瓦の雨

裝幀・富本憲吉氏

四六判布裝箱入
定價壹圓四十錢
送料金八錢

本書の批評感想を執筆せる
十一名家（卷末附錄）

與謝野寛氏
岡田哲藏氏
西村伊作氏
賀川豐彦氏
佐藤春夫氏
三並良氏
富本憲吉氏
加藤一夫氏
與謝野晶子氏
生田長江氏
內ケ崎作三郎氏

「大阪朝日」の大懸賞小說當選者として、頓に文壇に雄飛するに至りし沖野氏の創作九種を集めたるもの卽ち本書である。沖野氏は文壇に於る新進作家であるが、閱歷の貧弱なる青年作家ではない。永き宗教家の生涯に於ける豐富なる經驗と觀察と見聞と思索とは、溫潤にして而も深刻に、周密にして而も徹底せる、一種特異の人生觀を其胸に養はしめてゐる。氏が其の人生觀のレンズを透して社會と人物と事件と運命とを描寫したる此九篇の創作が、文壇諸派の間に於ける大小の潮流傾向に超越して、眞に異色異彩ある獨特の一大境地を拓き出してゐるのは、洵に當然の現象である。思ふに大正七年以後の日本文學を語る者は、是非とも本書を一讀するの必要に迫られるであらう。

新春

德富健二郎著

第四拾壹版發行

三六判四百六十頁
絲金裝羽二重表紙
定價壹圓六十錢
送料金八錢
著者スケッチ色刷
特撮寫眞版五葉

版元　東京市京橋區卅間堀三丁目　福永書店　振替東京四〇四六六番

奥野他見男著

娘の顔も日に三度

菊半截型
三百二十頁
洋裝美本
定價七十錢
郵税六錢

新刊發賣

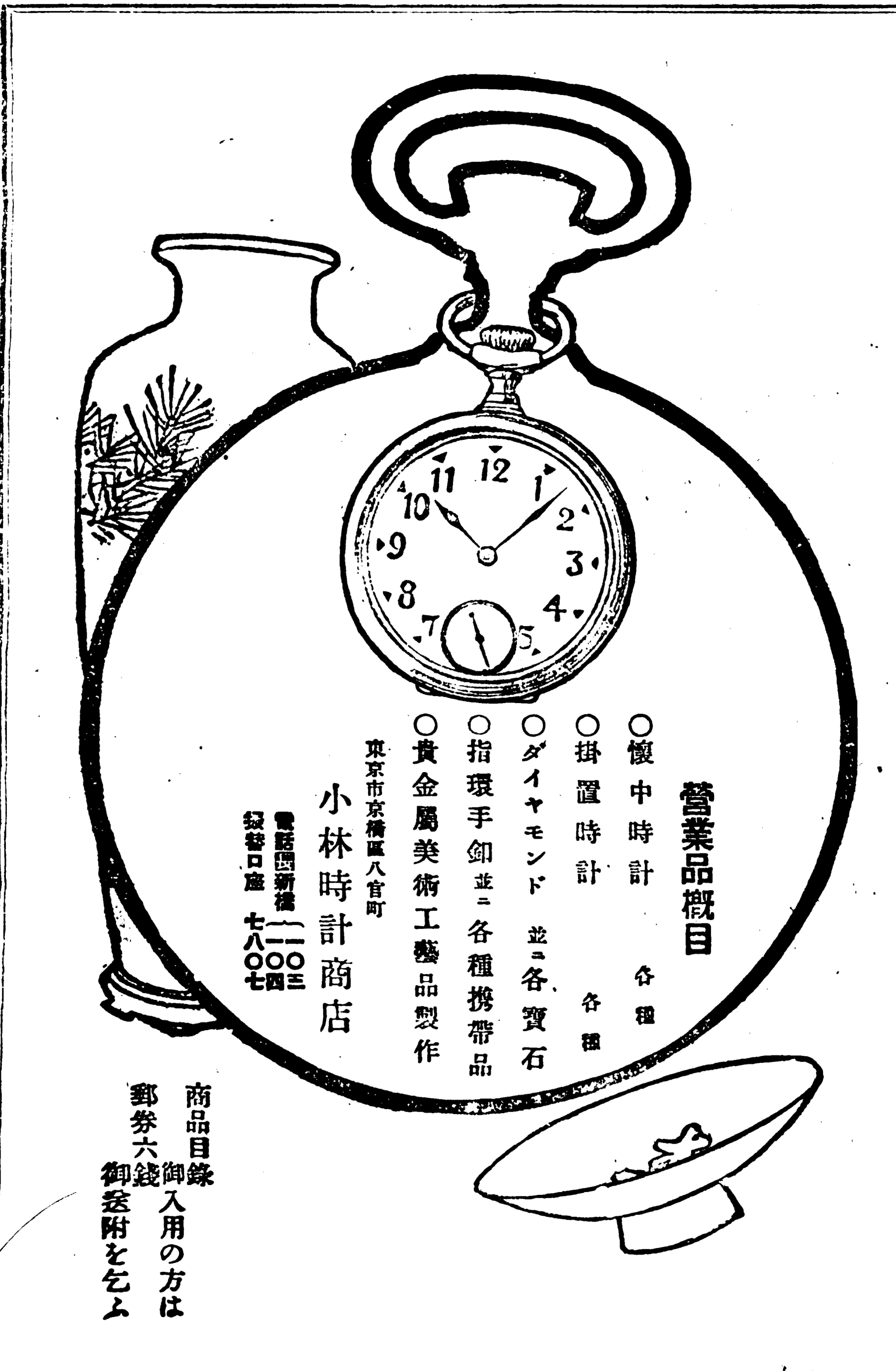
◎愈々出でゝ益々面白し!!

◎全文潑剌として躍るが如し!!

◎著者の名聲今や海外に及ぶ!!

發兌 東京中澁谷町 振替東京七八六四 東文堂

賣捌 東京神田 東京堂


営業品概目
○懐中時計 各種
○掛置時計 各種
○ダイヤモンド並ニ各寶石
○指環手釦並ニ各種携帯品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話㊥新橋 一一〇三
一一〇四
振替口座 七八〇七
商品目録御入用の方は
郵券六錢御送附を乞ふ



"THE DAUGHTER OF HERODIAS"
JOSEPH E. SOUTHALL

原内閣を迎ふ

原内閣成る。天下の勢に促されて出現せる最初の内閣として、吾人は熱心に之を歡迎するに躊躇せず。原內閣は、西松二侯并に山公の推薦に依つて成ると稱せらる。然れども、之を以て一に元老の造る所と做すは、斷じて皮相の見なり。元老の頭領山公が、其胸中に於て西侯固辭の際何人をして大命を受けしむべきかに關し私に別異の見を藏せしに拘らず、遂に心ならずも原氏推擧に同意せざるを得ざりし所以を觀ば、蓋し思半ばに過ぐるものあらん。

寺內內閣が實に元老軍閥を後援として立つものたりしは言を待たず。由來此二大勢力の我國政界に於て如何に有力なりしかは、彼等と共に天下を三分して其一を保有する政黨が、久しく彼等の頤使に甘んじ、少くとも其威力に屈せざるを得ざりしに觀ても明ならん。然も時勢の進運は刻々にして止まず。世界的潮流の波動は、實に識らざる間に政黨の勢力を著しく伸びしめぬ。寺內內閣の沒落は、假令首相の無能と閣僚の失政と多少之を早めたるの觀なきに非ずとするも、其倒壞と共に、其牙城をも平素最も嫌惡する政黨者流に明け渡さゞるを得ざりしものは、畢竟勢の迫る所に非ずして何ぞや。是れ予輩が、原內閣の出現に於て、日本政界の進行が始めて正しき軌道に復歸したるを見るとする所以なり。

然れども吾人の原內閣を歡迎するは、必しも總裁其人の識見を信賴するが爲に非ず、抑もまた政友會の方策を贊同するが爲にも非ず。否其從來の行動に於て、吾人は寧ろ顰蹙す可きもの多きに堪へざるを遺憾とす。唯世界の潮流の彼が如く滔々たり、戰後經營の大業が如何の理想によりて指導せられざる可らざるかの最も明白なる今日、固陋偏狹の寺內內閣の存立が餘りに著しく不祥の異彩を世界に放つを苦とせしが故に、一日も早く政黨政治の確立を期望する外、他を顧みるに遑あらざりしのみ。

於是予輩は切に原內閣に望まざるを得ざるものあり。何の力か彼等を促して廟堂に起つに至らしめしかを、眞率に考慮せんこと是なり。今や國民は、施政の方針を世界の潮流に順應せしめんとするに急にして、政友會の過去の罪を議するに遑なからんとす。知らず、原內閣は、果して能く此國民の宏量に酬い、其期待に背かざるの用意ありや否や。

中央公論



第卅三年第拾壹號
十月號
第三百六拾貳號

歐洲戰の齎すべき世界的革命

ドクトル・オブ・フイロソフイ（ハーヴァード） 鷲尾正五郎

四年間の大戰の試錬を經たる今日、交戰國中果して孰が民主主義であるか、孰れが軍國主義であるか、交戰各國の輿論及び政策を仔細に觀察する識者にとりては、斯る截然たる區別は最早之を認むる事が困難である。一方、大統領ウヰルソンが「世界を民主主義のために救ふ戰なり」と揚言せるに對し、他方、軍國主義の化身と做されたる獨逸皇帝が「世界を資本家主義より救ふべき戰なり」と揚言して居る。假りに今次の大戰は獨逸軍閥の野心より勃發したるものなりとしても、今日の獨逸は、軍國多事の裡にありながら著しく民主主義の發達を現して居る事は疑ふべからざる事實にし

て、之と同時に英米に於て從來の自由思想は各方面に於て新しき國家主義の壓迫を蒙りつゝある事も否むべからざる事實である。

獨逸議會に於ける社會黨の言論を觀よ！　眞の政府に對する忌憚なき批評は他の交戰國に於て殆ど想像だも及ばざる異例である。由來獨逸議會に於ける社會黨の言論は甚だしく挑戰的のものであつたが、現に各交戰國が國を擧げて死活を賭しつゝある時に於て、斯くまでも極端に民主主義を主張して政府に反抗する者は、唯だ獨逸社會黨あるのみである。而して斯の如く徹底的に民主主義を主張する獨逸社會黨が英米の所謂デモクラシーを敵として怪まざる所以は何かと云ふに、之は云ふまでもなく、彼等が所謂英米のデモクラシーを信ぜざるが故である。カイゼルが最近議會に於ける演說に於て、獨逸は「民主主義のため英米の資本家主義と戰ひつゝあるなり」と言つたのは必ずしも僞善とのみ解すべからざるものである。此の言葉は何處か獨逸人の民主思想と共鳴する所があるものと觀るが至當であらう。

之に反して、英米の戰時政治は如何ん？　大統領ウヰルソンの現位置は世界に比類なき獨裁者のそれである。外交を始め閣員の任命及び各種戰時機關の設置に到る迄悉く彼一人の權限内に置かれて居る。今回の西伯利出兵問題の如きに於ても、果して大統領が如何なる處置に出づるやは、宣言書の發布せらるるまで上院の外交委員長さへも確に豫知し得なかつたと云ふ程である。大統領が彼の親近者の意見を參考として殆ど獨斷的に取り極めたる政策を突然議會に發表して之を遂行し、議會も亦大抵の場合は唯々として彼の政策を認めると云ふ有樣である。然らば米國内に華盛頓政府の政策に反對する非戰論者は全然無いかと云ふに、必ずしもそうではない。勞働黨は公式に戰爭援助を宣言しては居るものの勞働者各自は必ずしも主戰論者ではないやうである。現に非戰論或は妥協平和論の色彩蔽ふべからざるハースト系の新聞（最近其の論調は稍々變じたれど）が今尙ほ多數勞働者の中に愛讀せられて居るに鑑みても、米國政府は全然國民

の輿論を代表して居るものとは斷言する事が出來ない。今日の米國政府の代表して居る輿論は主戰論者の輿論である。而して此の主戰論の輿論の中心勢力となつて居るものは何かと云ふに、獨逸側の民主主義者をして言はしむれば、資本家と資本家制度と結託せるツレード・ユニオンの勢力とである。之れ民主主義のための戰爭にはあらずして、資本制度擁護のための戰ではないか。私自身は斯うは斷言しないが、聯合國が獨逸を軍閥の傀儡であるが如く呪ふに對して、獨逸側は英米を資本家閥の傀儡である如く罵る事は最もの事であらうと思ふ。

翻つて英國を觀よ！　戰時政策の必要上現れたる軍國主義的施設は別として、英國が戰後經營のために取りつゝある方針或は取らんとせる方針は何であるか？　明かに經濟的帝國主義政策である。英國政府は領事館を專ら通商調査機關に更めて、相手國商人の信用商況等を悉く領事館を通じて政府の手にて調査し、政府の指導の下に對外通商を行はんとする計畫を立てて居るではないか、其他各種の産業を統一すべき半官半民的中央機關を設置する議案もあり、更に濠洲の首相ヒユーズ氏の如きは、熱心に原料品の管理及び排外的關税政策を主張して、英國有識者の大歡迎を受けて居るではないか。最近セシル卿は獨逸を含める國際平和團の實行し難きを說いて、先づ聯合國の經濟同盟を實現すべき事を奬勵して、頻りに此の問題に就て米國政府に秋波を送つて居るやうである。由來英國の所謂自由主義なるものは十九世紀の自由貿易主義に伴うて起つた思想である。而して此の自由思想が今日迄英國の民主主義の基調であつた。然らば自由貿易主義の根底より破壞されんとする今日英國固有の民主主義は何處にあるか？　自由貿易主義の盛なりし時代に於てさへも、英國殖民政策の權威は海軍と資本家の手にあつたのである。英國政府が殖民地に於て今後如何に寛大なる政治を行ふとも、資本家が經濟上の實權を放さざる間は實質に於て英國の政策は經濟的帝國主義政策である。戰後英國が此の經濟政策を國家管理の下に統一せんとするに到つては、殖民地に對し又世界に對して何の民主主義があるか？　何の民

族自治自營があるか？　私は斯くまで極端に英國の政策を非難せんとするものではないが、獨逸の社會黨が自國の軍閥を呪ふよりも一層英國の資本家主義を悪むのは道理であらうと思ふ。

今次の大戰は之を大觀するに、獨逸にとりては現狀打破、英國にとりては現狀維持の戰である。孰も其の國家經濟上の必然の要求より發したる方針にして、公平なる批評眼を以つて觀る時は、直ちに善惡の判斷を下すべき問題ではない。私は玆に故意に英米の所謂デモクラシーを蔑視せんとするものではないが、戰爭も四年に亘り各交戰國共最初の熱狂的主義主張の爭が殆ど悉く幻滅と化したる今日、英米の社會に於てさへも公平なる批評家がデモクラシーの意義の頗る不徹底なる事を自覺せる場合なれば、同盟國の我々とても之に忌憚なき批評を加へて差支はあるまいのみならず、ただ徒らに英米のデモクラシーのプロパガンダに幻惑されて我帝國の國策を誤るやうな事があつてはならぬと思ふ。

有名なるルシタニヤ撃沈の當時の事である。カイゼルが米國が國際法を破つて英國に彈藥を供給せる事に對し憤慨の餘りリンテルと云ふ獨探を米國に遣して彈藥供給の道を杜絕せんと試みた事がある。リンテルは友人なる米人を通じて竊に二三の勞働黨の首領を買收して、勞働者中に彈藥供給反對同盟を組織せしめ華盛頓市に於て大會を開き示威運動を試みた。其時勞働黨の黨首ゴンパース氏は買收されたる首領連を招いて反省を促した言葉に「彈藥の供給は資本家を富まし從つて勞働者を祝福するものではないか」とある。極端に評すれば之が米國の所謂民主主義である。獨逸の社會黨が資本家と勞働者の結託と罵るのが之である。言ひ換ゆれば英米のデモクラシーとは常識的妥協主義である。"Give and take" "Live and let live" と云ふ精神である。英國の自由主義はマグナ・チャーター以來妥協一遍の歷史である。自分が先づ甘ひ汁を吸ひ人にも吸はせると云ふ主義である。此は英米の如く早くより天下の富を壟斷して、生活に餘裕ある國民には云へる事であるが、國民生活の道が四方八方から强迫されて居る國には云ふべくして行はれない主義である。

アングロサクソンのデモクラシーは論理でもなければ組織でもない。過去に於ける米國の政黨政治は甚だしく腐敗したる寡頭政治であつた。斯の如く論理もなく組織もなき民主主義は我國の如き危迫せる社會狀態に適用せらるべき主義でない事は明かである。

併しながら斯る性質の常識論が「デモクラシー」と云ふ文字一つで、アングロサクソンのプロパガンダとして英米の對外政策に利用せられて一見天下を風靡して居る（實はアングロサクソンの勢力範圍外に於て差程感化力を示しては居らぬ）かの觀があるに對し、獨逸側のプロパガンダと云へば、敵國及び中立國の言論機關の買收其他の奸惡なる手段以外に殆ど何等の施すべき方策がないやうである。果して獨逸は英米のデモクラシーに對抗すべき雄大なる主義主張を有つて居らぬであらうか、此が疑問である。

私は戰後、組織的民主主義は先づ獨逸に於て興るものと觀察して居る。私は此の觀察を述ぶるに當りて主として獨逸の社會主義者ポール・レンシュの說を紹介せんとするのであるが、その前に、獨逸の現在の政治及び社會狀態について、一般の觀察をして置く必要がある。

獨逸軍閥の中心は、前の海軍大臣ティルピッツ氏であつて、彼の一派は政治的には資本家閥と結び、議會には保守黨を後援として居る。先頃の議會に於て、兼ねてカイゼルの誓約したる普通選擧案を破つたものは、云ふまでもなくティルピッツ一派の勢力であつた。此の派は今日尙ほ戰爭强行論を主張して、併合賠償を要求して居る。軍閥の化身と倣されたるカイゼルは實は軍閥の傀儡であつて、彼自身は、戰爭以前より稍もすれば平和主義に傾き易く、ために屢々軍閥の掣肘を受けて居た事は識者の間に周知の事實である。若し戰後、社會黨と政府との間に橋渡しをする人があるならば、私はそれはカイゼル自身であらうと思ふ。而して一方獨逸社會黨の態度は如何んと云ふに、黨は大數派と小數派との二派

に分れ、小數派は猛烈なる排政府黨であるが、政治の實際に於て殆ど何等の勢力をも有つて居ない。之に反して、シャイデマン氏の率ゆる多數社會黨は、戰爭に就ては大體に於て妥協平和論を主張するものであるが、戰局の大勢如何によりて時々その主張の色彩を變じ、必ずしも政府の方針に反對しない。聯合國の評論家は、獨逸の多數社會黨は政府の傀儡なりと謗ふ程であつて、英米佛の勞働黨中には、政府の手先たる彼等の平和提議には耳を借さずと決議する者さへもある。斯く交戰國勞働黨の間に意志の疏通が缺けて居る事は甚だしく平和促進の妨げであるが、深く立入つて觀察すれば、此は止を得ない事で、今次の戰爭は國際社會主義運動を根底より破壞し、露國過激派の失敗は、現實の國際關係に於ては、斯る理想主義運動の畢竟空想に過ぎざる事を痛切に證明して居る。

各交戰國は戰爭の要求によりて産業機關の大部分を政府管理の下に置て居るが、獨逸の多數社會黨は、政府の産業管理を益々擴大して戰後にも永久に之を繼續せしめんとするものである。此は社會黨のみならず、政府側の有識者の間にも屢々主張される所で、其の主張には二つの理由がある。第一は戰後の經濟戰に於て私有資本制度は不利益である云ふ説で、第二は政府の負財は戰後税金によりて到底償却し得る見込なければ、産業官營を行ふより外に適當なる途がないと云ふ説である。此は正しく社會黨の希望である。獨逸の社會黨は速に戰爭を中止して、此の戰後經營に移らん事を欲するのであるが、之に反對する者は、例のテイルピツ一派の軍閥と之と結託せる資本家閥とである。此の派は内政上社會黨の勃興を防ぐためにも、戰爭を強行して、併吞主義賠償主義によりて政府の財政を救はんとするものである。此の中間に立てるカイゼルは、大體に於て國家社會主義に同情のある人と見るべきである。

獨逸の内政上の大勢は斯の如きものであるが、將に勃興せんとする國家社會は、斯る區々たる内政上の問題に止まらずして、實は戰後對外政策の大勢より必然來るべき問題である。私は茲でポール・レンシュの説の紹介に移らんとする。

レンシュは露國の革命に何等の意義をも認めない。露國革命のみならず凡て單に帝政を破壞して共和政治に更める革命に何の意義があらうか。民主主義は帝政の下にも共和政治の下にも等しく成立するものであるが、産業上の革命なくしては孰の政體の下にも成立せずと言ふ。固よりレンシュの所謂民主主義は國家社會主義を豫想したる民主主義であつて、英米の從來の民主主義とは寧ろ正反對のものである。レンシュは之を pan German Socialism と名づけ、主として對外政策の方面より論じて居る。

十九世紀の中頃より稍々頭を擡げたる後進の獨逸が、今日の大を致したるは何が爲めであるか？ レンシュに從へば主として獨逸の優越なる産業制度の賜である。英國が自由貿易主義を取つて國家の産業を悉く大中小雜多の資本家の自由競爭に委ねて居る間に、獨逸は彼の有名なるカルテル組織の下に國家の經濟機關を少數資本家の手に集中し、一方關税の障壁を設けて國内の市場より外國商人の競爭を除き、他方例のダンピングを以つて他國の自由市場に侵入し、兩々相俟つて實業的帝國主義政策の基礎を固めて來たのである。資本の集中は自ら大規模の製造組織となり、大規模の製造組織は軈て製産費の減少となりて、獨逸の實業をして先進國なる英國の競爭に耐へしめたのである。

カールマルクスが其の「資本論」に於て社會主義の經濟學を祖述したる論文中今日も尙ほ動かすべからさる眞理は、資本の集中は經濟的競爭上必至の運命であると云ふ說である。此の眞理をカールマルクスが祖述した時には、專ら一國内の産業に就て觀察を下したものであるが、レンシュは一歩進めて、資本の集中は對外競爭上避くべからざる必至の運命であると說き、資本集中の最もよく行はれたる國家は國際經濟戰に於て最も勢力ある國家であると論じて居る。此は單なる學說ではない。旣に事實上の勢力である。近頃英獨經濟界の報道を見るに、兩國共に銀行の合同が盛に行はれ、英國にては其の形勢に驚いて政府管理の必要を唱へるものさへある。獨逸に於ては、銀行業は殆と Deutsche Bank,

Dresduer Bank, Disconto Gesellschaft の三大銀行の獨專に歸したる觀がある。殊に獨逸に於ては、銀行の外各種の產業機關が資本を合同しつゝある報頻々として到る。

斯る資本合同の大勢は軈て產業官營の途を拓くものと見るべきである。國家社會主義の目的は先づ中流の資本階級を撲滅し飽くまでも資本合同の氣運を促進する事にある。之を極點まで押し詰むれば自然の勢として產業は政府の手に轉ずるであらう。此がレンシュの說であつて、また恐らく獨逸多數社會黨の輿論であらうと思ふ。レンシュの說によれば、獨逸の社會黨は、國家的產業に從事する大資本組織には反對せずして、其の反對する資本閥とは、英米の所謂資本閥、即ち私利私慾のための小資本閥、自由競爭制度の上に建てられたる資本閥であると云ふ。

自由競爭制度の上に建られた小資本閥階級を稱して bourgeoisie と云ふ。今後の英國は知らず、今日までの英國はブルヂョアーの國であつた。英國殖民地の實權は此のブルヂョアーが握つて居る。彼等は人道主義、自由主義、デモクラシーの美名の下に實は私利私慾の掠奪を行ふ者である。レンシュの說によれば、此のブルヂョアー階級を撲滅すれば英國の殖民政策は自ら瓦解するものであると云ふ。而して國家的大資本組織は既に社會主義實行の一歩であつて人民の敵ではないが、自由競爭と結び附けらるる小資本家制度は民の膏血を絞る制度にして、民の敵であり、又非國家的であると斷ずる。

獨逸の多數社會黨が英米のデモクラシーと對抗すべき新しいプロパガンダを發見したと云ふのは即ち斯る意味の國家社會主義の宣傳であつて、英米資本家主義の排斥論である。斯る反資本制度主義が即ち獨逸に於て新しく起らんとする民主主義運動の精神である。英米の常識論と反して此は明かに組織的國家經濟論である。

レンシュは更に英米の僞善を責めて、民族自治自營主義は元來獨逸社會黨の唱出したる主義であつて、大統領ウヰル

ソンの考へた思想ではないのみならず、此の主義を經濟的に遂行すれば、英國殖民政策の瓦解を來すものであると言つて居る。

レンシュが此の主張を公にして以來約半年を經て、汎く獨逸主義者の注目する所となり、中にはレンシュの所說を社會黨の聖書として奉ずべしと云ふ者さへもあるが、能く研究してみると彼の所說にもまだ十分に理論の貫徹して居ない節がある。獨逸一國の經濟組織としては、着々事實の上に現れて行く主張であつて、爭ふべからざる强味を有つて居るが、對外プロパガンダとして果して獨逸の利益と矛盾する所がないか、此は大に疑問である。レンシュ自身も言つて居るやうに、戰後獨逸に取りて最警戒すべき事は、英米が此の主義を取つて逆に獨逸に加へんとする傾向ある事である。

併しながらレンシュは此の主義は戰後世界的革命を齎すべき主義であると信じて疑はない。換言すれば彼は戰後の經濟思想界は獨逸主義の勝利であると信ずるものである。

熟々觀察するに、各交戰國共戰後經營の方針は滔々として國家社會主義の方向に流れつゝある事は否むべからざる事實である。レンシュが攻擊する英米の自由貿易思想と結び附きたる資本家制度は英米に於てさへ既に半ば過去の夢と化しつゝある。英米に於ける戰時の必要から起つた政府の產業管理權は、戰後も決して全然民間資本家の手に返還せらるるものではなからう。之を英國に就て觀るに、一方、政府側の有識者は戰後各種の產業を統一すべき中樞機關の設置を計畫せんとして居る。例へば化學工業に於ては種類を大別して各種類毎に半官半民的中樞機關を設け、該工業に屬する調査研究より原料の集收及び對外販賣方法に到るまで此の機關を通じて行ひ、個々の私立會社の自由競爭より起る從來の弊害を一掃せんと企てゝ居る。他方、勞働黨は既に戰時中政府の管理に屬せる炭坑事業の如きは戰後も之を永久に官營となすべき事を主張し、又戰後經濟界の變動に伴つて必然來るべき恐慌時代に於ける勞働者の利害を保護するため、賃金

の率及び就職の途等は今日より豫め政府に於て之を保證すべしと唱へて居る。

更に米國に就て觀るに、鐵道は固より電信電話も特に官營とならんとして居る。電信電話官營の議は近頃起つた事で、或る私立會社に於ける同盟罷工が此の氣運を促進したのである。米國の同盟罷工は最早政府の干渉なくして解決し得ざる大問題となつて居る。鐵道の官營も戰時の要求に應ずるための施設とは云ふものゝ實は米國參戰以前の大同盟罷工が其の源因となつて居るのである。私は戰後に於ても、同盟罷工が各種の產業を驅つて政府管理の下に置かざるを得ざるに到らしむるであらうと觀て居る。現に米國政府には勞働局と云ふものがあつて、資本家側の代表者六人と勞働者側の代表者六人とより成る委員會を設けて、政府管理の下に各種の勞働問題を解決して居る。尙ほ之に附屬して米國勞働紹介局と云ふものがあつて、各私設會社は米國政府の特許なくして勞働黨以外より新しく勞働者を雇入るべからずと云ふ規定がある。此は固より戰時勞働管轄の必要より起つた規定であるが、同時に勞働黨の利益を保護する施設である事は明かである。斯く華盛頓政府の權限の擴張と勞働黨の勢力の增大とは相俟つて國家社會主義の氣運を作りつゝあるものと見なければならない。

中流階級が一國の中心勢力であると云はれた時代は既に過去に屬せんとして居る。四年間に亘る歐州大戰が齎らしつゝある世界的產業革命は中流階級と小資本家閥を滅ぼさずんば止まない。社會の中心勢力が截然として大資本家閥と勞働階級とに區別せられ、軈て資本家閥の事業が悉く政府の手に移つた時が卽ち國家社會主義の世界である。レンシュが中產階級及び小資本閥の撲滅を主張するのは、社會主義の論理上當然の事であつて、社會の經濟的進化上必至の運命である。此の氣運を事實に於て看取したる英國の智識階級の社會黨と見做されて居るフアビアン派は、近頃勞働黨と合體し、賃金取も月給取も一つに打つて之を勞働階級として取扱ふ計畫を立てゝ居ると云ふ。以つて來るべき社會革命の氣

運を察すべきではないか。

斯る氣運は軈て政治上にも現れざるを得ない。否、既に明かに現れて居る。英國に就て觀ても米國に就て觀ても、今日政治上の實際の中心勢力は大資本家と勞働黨とである。中流階級は社會の平衡を保つために今日も尙は必要なる要素であらうが、最早政治上の原動力ではない。英國の保守黨自由黨と云ひ、米國の共和黨民主黨と云ひ、十年前までは主として政權の爭を中心として發展して來た實際勢力であつて、其の原動力も大體に於て智識階級と中流階級との手にあつたのであるが、今日は半ば有名無實の形式と化してしまつて居る。各黨共其の主義政策に於て格別の區別がなきのみならず、黨の勢力は實際に政治を動かして居らぬ。實際政治の原動力は大資本家の利害と勞働黨の利害とに在る。所謂政黨政治なるものゝ性質は今日に社會に於て理論上より觀るも實際上より觀るも甚だしく曖昧なものとなつて居る。レンシュが帝政と共和政とを新しき民主主義の上から比較して、其の間に何等の優劣をも認めないと言ふのは此の邊の消息を言つたものである。新しき民主主義は、經濟上の革命によりて齎らせらるべきもので、政治の形式とは殆ど沒交涉である。若し政黨なるものが我國に於けるが如く、單に政權爭奪のために存するものならば、宜しく速に葬り去るべきである。今の世に時代後れの政黨政治の夢に耽る我所謂政治家連は、宜しく目を轉じて政黨政治の本家本元たる英國政府の現狀を觀よ。若し國家の危急がロ－イド・シ－ョヂ內閣の如き超政黨政府を必要とするならば、國家の利害は平時に於ても等しく超政黨政治を必要とすべき理ではなからうか。一新聞の力が政黨に優つて政府の運命を支配し得ると云ふ事は、政黨政治に對して何と云ふ深刻なる批評ぞ。

之を要するに、戰後は大資本家閥と勞働黨との世界である。資本の集中は國家の經濟的發展上避くべからざる運命であると同時に勞働者の利害は社會問題として如何なる政府も一日も閑觀すべからざる要件である。而して此の二つを調和

し得るものは國家社會主義を措て他に求むべからざるものである。況して、戰後の世界は列强經濟戰の世界である以上は、大資本家の組織的產業の奬勵は對外政策として愈々必要である。更に之を他方面より觀るに、今次の戰爭は各交戰國勞働者の中に著しく國家主義の觀念を强くし、戰前各國社會主義の間に涵養せられたる勞働者の國際同盟と云ふが如き非國家的觀念は殆ど根底から破壞せられて居る。露國過激派の失敗は國際社會主義運動と云ふが如き理想を一掃し去つたものと觀るべきである。ツロツキー自身も言つて居るやうに、過激派運動の失敗は今後少くとも二十五年間國際社會主義運動を葬り去るものである。然らば今後の勞働者の運動は國家主義の範圍を出でないものと觀るべきである。知るべし戰後の列强は對外政策上の必要よりも對內社會問題の解決上よりも、自ら國家社會主義の方向に進むべき事を。

此の大勢を堰き止めんとする勢力は、英米のブルヂョアーである。英米の小中資本閥卽ち一般に business man と稱せられて居る階級は、最後まで此の大勢に抗して戰ふであらう。また彼等の勢力は今尙ほ隱然として拔くべからざる因襲勢力である。現に日本の大阪朝日毎日に比すべき英國の新聞 Manchester Guardian の如きは國家社會主義の傾向ある政府の議案には悉く反對して居る。英米人は槪して政府が實業をやると云ふ事に對して一種の僻見を抱いて居る。それは實業は競爭である、個人の競爭に依つて發展するものであつて、一定の型に嵌つた政府の遣方では經營し得るものでないと云ふ思想である。此は一應最の事で、今日迄の英米の實業は自由競爭主義によりて發展して來たものであるに違いない。併しながら此の經濟論は不思議にも獨逸に於て餘り聞かない說である。戰前より獨逸のカルテル組織は事實に於て國家的經營であつた。然るに此の組織の下に行はれたる獨逸の實業が自由貿易主義の下に行はれたる英國の實業を驅馳して居たと云ふ事は何の敎訓であるか、英米實業家の經濟思想は英米に固有なる僻見であるに過ぎないと云ふ反證ではないか。若し獨逸の國家では遣れても英米の國家では遣れないと云ふならば、それは國家能力の相違を語る事で

ある。一國の實業を管理し經營しやうと云ふ政府は繁文褥禮の機械的政府であつてはならない事は勿論である。而已ならず戰後の激烈なる國際經濟戰は、産業機關を國家的に統一するの必要を益々强くし、國家存立の自然の必要上、各國をして獨逸に範を取るに到らしむるであらう。英米の因襲的經濟思想は所詮此の新しき大勢に抗すべくもあらずと思はる。

流石に米國は新進の國である。ブルヂョアーの經濟思想は英國に於けるが如くに固い因襲勢力とはなつて居らぬ。今は獨逸に次いで資本の集中が最も能く行はれて居る國は米國であらう。米國の産業は全然大資本家の産業組織となるべき可能性を表して居る。而已ならず米國の戰時政府は著しく實業家の政府であつて、また此等の實業政治家が戰時の、急に應ずる國家實業機關の統一經營に於て素晴しき能力を發揮して居る。一例を擧げて説明せんに、戰時鐵道管理及び財政管理の任務を帶びて居るマカヅー氏の手腕抱負である。彼は野に放てば豺狼の如き實業家で、盛に資本の集中を企てゝ故のモルガン以上の勢力となるべき人物であるが、大統領ウヰルソンが招ひて官途に用ゐて以來、彼の政策は公平無私にして天來の進取的才幹を專ら國家實業經營のために用ゐ、大資本家となるべき人が社會主義の理想を唱へる。彼の言葉に曰く「若し社會主義が民衆の氣運となつて組織的に實現され得るならば、自分は私有財産を悉く捨て惜まず」と。我國に斯る國家經營の抱負と才幹を有する實業家があるであらうか？

若し戰後恐慌時代の到來と共に我國の勞働問題が愈々六ケ敷くなつて革命の氣運を萠す迄に到つたならば、豫め其の大勢を洞察して之を善導し取捨し得る人物が實業家の中にあらうか。政黨の首領連は孰も總て潮流の外に押し流される人計りである。新しき時代を率ゆる人物が實業家の中にもなく政治家の中にも無いとすれば果して之を何處に求むべきか？

英雄戰より民衆戰へ

白柳秀湖

「一」 武器と生産機關

社會組織の變革は必ず生産機關の進歩に伴ふものである。處が生産機關と武器との間には、最も密接な關係がある。たとへば猛獸の牙が、その外敵を屠る仕事に於いては武器であり、肉を引裂いて食ふ仕事に於いては生産機關であると同じやうに、人類太初の機械である弓矢は、蒙昧時代の人間が、直接自分の生存を脅す他の人間と戰ひ、猛獸毒蛇の害を除く仕事に於いては武器であり、山野を跋渉して禽獸の肉を漁り、若しくはその山野を占領して自分の利益を保護する仕事に於いては生産機關であつた。家畜と共に人間最初の私有財産であり、野蠻時代に於ける最も重要な戰爭の道具であつた奴隷に於いて、同樣の關係を見る。奴隷が人間の原始的協同生活に於いて、粗放的の農業に驅使せられ、土器の製造、弓矢の製作等に使用せられた關係に於いては一種の産業勞働者であるが、兵士として戰場に驅使せられ、主人の前に生きた楯として働かせられた關係に於いては一種の武器であつた。之は遙に後世の事であるが、大化の新制に於いて政府が各氏長に對し、正面から奴隷の私有を禁止することの出來なかつたのは取りも直さず兵權を中央政府の手に收め、同時に各氏長の手から土地の利用開發に必要な勞力を解放することの出來なかつた所以で、其革新の要點であつた土地の國有といふことが、徹底しなかつたのも道理である。それは別として、人間の原始的生活に溯り、武器と生産機關とが一にして二でなかつた事情は、人間が牧畜若しくは粗放的の農業を營む以前に於いて漁獵時代と呼ぶ一つの時代を經過したといふ學者の說によつて十分に首肯される。何となれば狩獵若しくは漁撈が人間の生活のすべてゞあつた時代を言ひ換ふれば、それは外界の自然と人とに對する爭鬪が人間生活の全てゞあつた時代で、かゝる時代に於いて武器が生産機關であり、生産機關が武器である關係は少しも異とするに足らぬ。

處が、人間が漁獵生活の蒙昧時代から進んで牧畜若しくは原始的の農業を營む野蠻時代に入り、極めて單純な部落生活をなすに至り、茲に始めて武器と生產機關とが分れて二となるに至つた。即ち其一は爭鬪の道具となり、他の一は產業の器械となつた。今日の人は武器と生產機關とを其目的全く相反する兩極端の器械として取扱つて居るやうであるが兩者の間には斯くの如き密接な關係がある。密接な關係處か、生產機關は今日でも多數を節度し、多數を支配する「力」の實體となつて居る。產業の器械といへば如何にも平和に響くけれども實は多數を制する武器の働きをして居る。それも其筈である。平和の社會生活も元は外敵に對する競爭の必要に促されて發達したもので各人互に相反噬する代りに、其慾望を或る程度に節して種族の保存を全うしようとした形が協同生活である。產業は即ち協同生活の手段である。自ら利すると同時に他を利する唯一の途は產業である。處が產業の最初の器械は武器であつたから、最も精銳な武器、即ち生產機關を最も多く所有したものが、其部落を支配することゝなつた。

太古日本を呼んで「細矛千足國」と云つた。「クハシ」は云ふまでもなく「精銳」である。「ホコ」は必ずしも矛に限らず、一般に「武器」をさした語である。「チタル」は「充實」の意である。即ち「細矛千足國」は「精銳な武器の充實した國」といふ意味である。勿論此美稱は、日本民種が此聯島に從遷した當初、夙く已土に穴居した土蜘蛛とか、所在に部落をなした何々の梟師などいふ異種族との競爭に於いて、その文化の程度、即ち武器の發達が格段の相違を示して居たので、日本民種は殆どいふに足るほどの力を用ゐずして此聯島の先住民種を征服することを得た。「細矛千足國」は、即ち日本民種が先住民種に對して其文化の優越を誇つた語であるが、之と同時に我が民種が最高最貴の氏長として仰ぎ奉る天照大御神の嫡統は常に此精銳なる武器の最も大なる所有者であつたといふことを忘れてはならぬ。

文明の進步と共に生產が過程に大なる變化が起り、武器と生產機關とは漸次に分離して、今日の生產機關は殆ど武器の痕跡をとゞめざるまでに發達したけれども、それが少數者の手裡に獨占されて大多數の民衆を制馭し、社會を支配する武器の職能を發揮して居ることは依然として同じである。

西洋には武器の進步、特に鐵砲の發明を以て中世と近世とを分けた歷史家がある。けれども武器の進步を以て、社會組織の變革を說明するのは、生產機關の進步を以て社會組織の變革を說明するマルクス說の根本的にして科學的なるには如かぬ。何となれば、人間の饑餓は爭鬪より以前に在在した。原始人が樹

上生活から地上生活に移り、原始林を出て平野に移つたのは、器械を使用し始めたのが原因であつたか、それとも他の理由によつて移住を餘儀なくされたのが原因で器械を發明するに至つたのか、此點はかのカウツキーも疑問として居るが、其何れにしても器械發明の最初の刺戟は、爭闘にあらずして饑餓にあつたといふことは何人も一致する所である。果して然らば、同じことでも人間の歷史を武器の進歩によつて説明するといふよりも、生産機關の進歩によつて説明する方が、遙に根本的で且つ科學的である。

「二」 血族全體から一部階級へ

日本民種が此聯島に徙遷した時は、既に蒙昧時代から、野蠻時代の大部分を經過して、將に文明生活に入らんとする過渡の時代であつたといふことは、日本歷史に現はれる太古の社會組織、家族制度、各種の器械その他によつて容易に之を想像することが出來る。太古の武器に矛、弓矢、太刀の三種がある。さうしてその材料には主として鐵が用ゐられ、併せて石も用ゐられた。

(一)矛　弓は人類の蒙昧時代に始まつて、中世の終りに至るまで武器の王として長く其威嚴を保つたものであるが、太古の歷史によると、武器の威嚴は却つて矛によつて代表されて居る。矛がすべての武器を代表したことは、前に述べた「クワシホコ」の例によつても知られるが、それよりも太古巡國の將軍が矛を杖ついて其威容を示したことは記録に著しい事實である。先づ伊弉諾、伊弉冊二柱の神は、天神の命を受け、「天瓊矛」を執つて此國を造り固めたといひ、大己貴神は自ら「廣矛」を杖ついて國中の荒ぶる神どもを平げ、後に此國を天孫に上る時も、その廣矛をそへて獻上したとある。大己貴神の武威を稱へて、「八千矛神」と云つたのに見ても當時矛が武器を代表したことは明かである。

又、經津主神が葦原中津國を巡行された時も戈を執つて其威容を示されたとある。(常陸風土記)矛はかくして將軍巡國の儀表であつた。矛の名には茅纒矛、廣矛(日本紀)黒矛(崇神記)比々羅木之八尋矛(古事記)三刄矛(武烈記)長矛(天武記)手鉾(和名抄)などあるが、之を要するに矛の制造に基く名稱である。太古の矛には鋒刄を有するものと、唯、木の先を削つて尖らしたものとの二種があつた。

太古の武器の中で最も威力のあつたものはいふまでもなく弓矢である。然るにその弓矢を措いて、何が故にかく矛が尊重されたかといふことは大に考ふべきことである。これは私一個の

考へであるが、原始人が原始林を出て、初めて使用した器械は、極めて粗末な矛ではなかつたであらうか。原始人が弓を發明する前に木の枝などで作つた粗末な矛を用ゐたといふことは何人の頭腦にも浮ぶことである。其處で人間は弓矢といふ大なる威力を有する武器を發明した後も、久しく傳統的に矛を尊重したのではあるまいか。之には有力な證據がある。それは我國に鐵砲が渡來して、弓矢の術が殆ど實戰の用に立たなくなり、泰平の遊戯と化した後も、武士は「飛道具」と呼んで鐵砲を卑み、自ら稱して「弓矢取」といひ、「武士の調度」といへば直に弓矢を意味することゝきめて居た。德川時代の故實學者として知られた松岡行義はその「後松日記」に他人の弓を見ることは斟酌すべしといふ弓法の由來を述べて次のやうに云つて居る。

　思へば弓てふものは武士の第一の調度にて、弓折れ、弦切れ、或は矢種盡きぬれば、昔の武士は自害をしけるにや。弓を以て敵をほろぼし鬼をもおどしけるなり。精兵といふも强弓の手垂をぞいふめる。されば弓を見れば其人の器量おのづから知らるれば、深くいましめけるなるべし。八島にて義經朝臣が命にかけて弓を取りけるも宜べなりけり。

之によつて考へると、弓矢が發明された後も人類最初の生產機關であり、最初の武器であつた矛が、久しく武威の表徴として尊重された理由が解釋されぬでもない。

(二)弓矢　太古の武器の中で弓矢の威力が最も偉大であつたことは、「イクサ」といふ語が「射喰はす矢」若しくは「射合はす矢」から出て居るのに見ても直に首肯される。古語に弓を射て矢の物を貫いた形を「射喰はす」と云つた。「仁德記」に、

　是日群臣及百寮を集め、高麗獻ずる所の鐵の盾的を射くはしむ。諸人的を通すを得ず、唯、的臣の祖、盾人宿禰鐵的を射て通す。云々(十二年秋七月記)

とある。「的臣」を「イクハオミ」と訓じ、「令射」を「イクハシム」と訓するに見ても知られる。支那でも矢の物によく當つた形を「飮矢」と云つて居るが、それよりも、「和名抄」の射藝具の所に「射垜」(陸軍にても現に此語を襲用す)を註して、「以久波止古路、世間云、阿無豆知」とあるのは動かぬ所である。次に「イクサ」のサが矢であることは多くいふを要せぬ。「萬葉集」の十三卷に「なぐるさの遠くはなれて」とあるのは、投げる矢の遠く離れてといふ意味で、人の遠く離れて居るのにいひかけた詞である。「綏靖記」の「一發中胸、再發中背」を「ヒトサムネニサアタリ、フタサセニアタル」と訓じ、「天武記」の「射中一箭」を「イテヒトサニアツ」と訓ずることは人の知る所である。(以上伴信友による)

右の說に對して谷川士淸は「イクサ」は「射合はす矢」であるといふ說を立てゝ居るが、それは何方でもよろしい。兎に角弓矢はイクサの最大威力であつた。さうしてその發明は學者の說によると漁獵時代の末にかゝり、日本歷史に於いては天文十一年種子島に鐵砲の渡來するまで武器の王として其威力を保つて居る。されば天照大御神が御弟素盞嗚尊を高天原に邀へ擊たんとし給ふの條に於いても弓矢は其最も嚴めしい威容として記述され、須世理姬が大國主神と携へて、父素盞嗚尊の許を去らんとするの條に於いても、其寢所から生太刀、生弓矢を盜んだと傳へられるなど、太古の歷史には弓矢の威德を稱へた記事が甚だ多い。太古の弓は多く丸木で作つた。矢の柄には柳、篠などが用ゐられた。波士弓、鹿兒弓、鹿兒矢、羽々矢、八目鳴鏑などいふ名稱も見える。

(三)太刀　支那には太古刀劍を鑄造したといふこともあるが、日本の刀劍は初めから鍛へて作つたものであつた。中には稀に石で作つたものもあつたが、既に鐵の利用が一般的となつた民種の間に於いて古い石器の重んぜられなかつたことは容易に察することが出來る。「古事記」には素盞嗚尊が出雲の簸川の川上に於いて退治した大蛇の尾から出たのを「都牟刈の太刀」といひ、「日本紀」には同じ太刀を「叢雲劍」「草薙劍」と云つて居る。多くの考證家の一致する所によれば、「ツルギ」は「ツムガリ」から生れたといふことであるから、先づ古事記の「都牟刈の太刀」から考へて見る必要がある。

「ツムガリ」は「尖り」である。岡本保孝といふ人の「難波江」といふ本を見ると、遠州の方言に「トガリ」を「トンガリ」といつて居る。之で太古に「トガリ」を「ツムガリ」といつたことはいよいよ確であると論じて居るが、遠州の人は何にでも「ン」を附ける癖がある。「乞食」を「コンジキ」といひ「蟻」を「アリンコ」といひ、「小便」を「ションベン」といひ、「車前草」を「オンバコ」といふなど、ひとり「トンガリ」の場合のみでない。其處まで詮索せずとも「都牟刈」が「尖り」であることは何人も肯く所であらう。次に「太刀」は「斷ち」で裁斷の意である。「都牟刈の太刀」は「尖りの太刀」で、「劍の太刀」と云つたも同じこととなる。中には劍と太刀とを區別して、劍は諸刃、太刀は片刃といふやうに解釋する人もあるやうであるが、片刃の太刀の出來たのは後世のことで、太古の刀劍はなべて諸刃であつた。但し、短刀は初めから片刃であつたらしいが、短刀の使用については事實の上に明かでない。けれども既に太刀の存在した以上短刀のなかつた道理はないといふことも云はれるし、垂仁天皇の時、皇后狹穗姬の兄、狹穗彥が叛いて、皇后に大逆をすゝめ奉つた時、一口

の短刀を投けたとあるに見ても、短刀を以て人を刺殺することが急に始まつたとも思はれぬ。短刀の記事の史に見えたのは、垂仁天皇の三年（本居宣長は異説を立てて、遙に前代の事であると云つて居る）新羅王子、天日槍が歸化した時、小刀、石鉾、珠玉等すべて八種の寶を貢獻したとある（日本紀）のが始めであるけれども、之れを以て短刀の起りとなすのは肯へざるの説である。短刀も神代からあつたと見るのが至當であらう。短刀は「カタナ」である。「カタナ」は「片の刄」であるといひ、「片薙」であるといひ、或は「片無し」であるともいふが、武器としては主として敵の刺殺に用ゐられたものに相違ない。

「三」 親征と蘇我物部二氏

協同生活の初めに於いて人類はなべて血族共産制度を以て部落をなした。日本民種は血族共産制度の終末期に於いて此聯島に徙遷し、漸次に私有財産制度に移つて行つた。神代の歷史にはこの血族共産制度の名殘を止むる多くの事實と、私有財産制度の生起を語る多くの事實とが錯綜して、極めて複雜な過渡時代の特徴をあらはして居る。

血族共産制度の時代に於ける戰爭は其民種の占據した地域に於ける食物の缺乏が主なる原因であたつ。或る場合には、水草を逐うて限りなく轉々する遊牧の民と、土地の利用法は極めて粗放的ながら兎も角も農業を營んで一定の土地に住居する農業種族とが境を接することもあらう。又、同じ農業種族でも、肥沃な土地に住んで食物の豐富なものと、磽角な土地に住んで食物の乏しいものとが境を接することもあらう。かゝる場合に於いて一種族の移住は直に他の種族に對する侵略となり、茲に侵略するものと、侵略されるものとの間に其血族をあげての戰爭が起る。かゝる戰爭が血族間の社會的本能を强め、其結合を鞏固にしたことは勿論である。

日本の神代史に於いて戰爭といへば、最高最貴の神々が、親ら太刀をはき、弓箭をたばさんで陣頭に立ち、常に全血族を率ゐて攻防の局に立たれたのも、全く右の關係に基くものであらう。血族共産制度の時代にあつては血族皆兵であつた。日本にありては皇族、皇親、大小の氏長はもとより、之に統屬する良賤の民をあげて戰爭に從事した。日本民種の宗家にして、母種内大家族の氏長でゐませし天照大御神が、素盞嗚尊の襲來に備へんが爲武裝して陣頭に立ち、安河原に於いて誓約をされた如き、高天原から九州に移住された天孫瓊々杵尊が、天忍日命、天津久米命を先驅とし、御一族の神々を左右に從へ、五つの造を後衞とし、二十五の物部を部將として行く〳〵所在の異

種族と戰ひ、日向國に軍旅を進められた如き、九州から大和國に移住された神武天皇が、皇族、皇親を始め、大小の氏長とそれに統屬する良賤の民とを擧げて之を率ゐ、親ら陣頭に立つて諸々の梟帥と惡戰苦鬪の末、遂に大和國を平定された如き、血族共産制度の名殘を止むる戰爭の形が、歴々として指呼されるではないか。かゝる時代の戰爭に於いて血族の主長が勇猛精悍、萬人に優れた英雄でなければならなかつたことは勿論である。天照大御神にしても、瓊々杵尊にしても、神武天皇にしても、萬夫不當の英雄であつたといふことは記紀の叙述によつても十分に推察することが出來る。

併しながら日本民種は其徒遷の初めに於いて既に農業牧畜を知つて居た。奴隷を所有して居た。血族共産制度は明に崩れ始めて居た。母主的家族制度も、父主的家族制度に遷りかけて居た。從つて私有財産制度は駸々として發達し、戰爭の形式にも血族共産制度の名殘は止めて居たが、日を經るに隨つて、私有財産制度に應ずる戰爭の形式が明瞭になりつゝあつた。

私有財産制度の下に於ける戰爭の特徵は、それが血族全體の仕事でなく、一部階級の仕事となることである。血族皆兵の自然の制度が崩れて、武士と稱する戰爭專門の階級が出現し、一部の被治者もしくはその私民が彼等の爲に徵發せられて戰場に驅使せられることである。我國太古の戰爭は實に以上述べた二つの形式の混合體であつたと見ることが出來る。最高最貴の御身を以て戰場に立たせ給ひ、親ら武器を執つて奮鬪遊ばされたのは、戰爭を以て血族全體の仕事とした時代の名殘であるが、天孫移住の時、既に天忍日命、天津久米命があつて其前衞を承はり、特に兵事を以て天孫に供奉するもの丶如き形をなして居たのは、後世に至つて武士と稱する特殊階級の生ずる端緒が既にこゝに現はれて居たとも考へられる。神武天皇以後、天忍日命の後裔大伴氏と、饒速日命(にぎはやひのみこと)の後裔物部氏とが相並んで、禁闕の護衞に任じ、兵事を以て歴代に奉仕するに至り、私有財産制度に應ずる兵制及び戰爭の特徵は愈々明かとなつた。

「四」英雄戰の實狀

かくして血族全體の仕事であつた戰爭は、一部階級の仕事に變つたが、戰爭そのもの丶形に變化はなかつた。戰爭の勝敗は依然としてその中心である英雄の力によつて決した。既に述べた如く、當時の最も威力ある武器は弓矢であつたが、武勇絶倫の英雄は善く弓矢を操縱し、且つ其威力を侵して敵陣に肉薄し、好個の敵を擇んで其力を角するものであつた。我國上古の戰記は、宛として希臘の古詩に見るが如き、英雄と英雄と

鬪を以て花々しく飾られて居る。

神功皇后攝政の初め麛坂、忍熊の二王が叛いて兵を明石に擧げた。皇后は武内宿禰と之を住吉に壓迫し、菟道に追窮し、最後に河を挾んでの對陣となつた。皇后の軍が山背から進んで菟道の北岸に陣すると、忍熊王の陣中から熊之凝といふ勇士が現はれて次のやうな歌を高唱し、先づ武内宿禰に對して戰ひを挑んだ。

をちかたの、あらゝ松原、松原に、渡りゆきて、槻弓に、まり矢をたぐへ、うま人はうま人だちや、いとこはも、いとこどち、いざ合はな、我は、たまきはる、うちの吾兄が、はらぬちは、砂礫あれや、いざあはな、我は。

此歌を意譯して見ると、「敵の屯して居る彼方の松原に渡つて行つて、槻弓に日有矢を番へ、貴人は貴人同志、親しきは親しき同志、互に相鬪うて勝負を決しようではないか。我は人の恐るゝ武内宿禰(内の吾兄)と渡り合はう。彼とて腹の中に砂礫のある譯でもないから矢の通らぬことはよもあるまい。」といふのである。貴人は貴人同志渡り合ひ、親しきは親しき同志渡り合つて勝負を決した當時の陣法、又、その大將分と大將分とのたゝかひにも、最初は弓矢が用ゐられ、最後に格鬪の行はれたことが手に取るやうに此歌によつて窺はれる。事の次手であるから述べて置くが、此戰爭に於いて武内宿禰は忍熊王の勢の容易に侮るべからざるを察して、一つの詭計を案じた。彼は全軍に命じ、一張の弦を頭髮の中に藏し、太刀を捨てて木刀を帶せしめ、岸上より呼んで其戰意なきを示し、弦を斷ち、刀を捨てて相和せんことを提議した。さうして將士をして敵の眼前に其弦を斷ち、木刀を水中に投ぜしめた。忍熊王は之に欺かれて直に全軍に命じ、刀を解き、弦を斷つて其和議を容れようとした。處が皇后の軍は敵が弦を斷つのを見て遽に其頭髮の中より儲ふる所の弦を取出し、弓を張り、刀を佩き河を濟つて一齊に進擊した。南軍は忽にして潰敗し、王は身を以て逢坂に遁れ、瀨の渡に投じて薨じたとある。此頃から弓が如何に重要な武器であつたかは此一場の物語によつて砦く想察される。山河自然の要害に據り、射手を揃へて敵を邀擊しようとして居る軍隊に對しては如何に勇猛精悍なる英雄も、詭謀を用ゐずして之れに近づくことは出來なかつたものと見える。

又、此頃の戰ひに於いて一軍の威力ともいふべき勇將が、矢を優して敵陣に肉薄し、その大將を打取つて全軍の士氣を沮喪せしめた有様は雄略天皇十八年の記によく現はれて居る。雄略天皇の十八年八月、伊勢の朝日郎といふものが朝廷に叛いた。天皇は物部菟代宿禰、物部目連に對して之が討平を命ぜられた。

朝日郎は皇軍の至るをきいて伊賀の靑墓に逆戰し、陣頭に立つて大にその弓勢を矜つた。曰く「見よ、我が發する所の箭はよく二重甲を穿たん」と。物部氏の部下は何れも朝日郞の勇猛に懼れをなして進み得ず、相對峙すること二日一夜に及んだ。玆に於いてか、目連は大に菟代宿禰の怯懦を憤り、自ら大刀を執り、筑紫の聞部大斧手に楯を持たせ、喚き叫んで並び押しに突進した。果然朝日郎の矢は大斧手の翳した楯を貫き、弓勢餘つて其二重甲を貫き、身に入ること一寸の深きに及んだ。けれども剛氣の大斧手は少しも怯まず目連を庇ひつゝ驀地に敵陣に進んだ。目連は敵陣に薄るより早く、楯の蔭から飛出して朝日郎を組伏せ、唯、一刀の下に斬つて捨てた。叛軍は大將の戰死によつて直に潰亂したとある。大將の外に軍隊はなかつた。大將が戰死すれば其部下は戰はずして潰えた。氏長の私有財産たる奴隸にとつては、その戰爭が負けとなつた處で、唯指揮者をかへるだけのものである。刑罰の恐ろしさに働く軍隊が大將戰死の後まで踏止まつて戰ふべき道理がない。

されば、詭計を設けて敵の大將を討取るといふことは一兵を殺さずして敵に打勝つ唯一の策である。日本民種に比しては文化の程度の遙に劣つた大和國の諸梟帥でさへ、天嶮により、弓矢といふ武器を以て拒ぎ戰へば、神武天皇の英邁を以てして容易に之に打克つことは出來なかつた。玆に於いてか大將の暗殺といふことは、上古に於いて最も重要な戰略の一であつた。神武天皇が紀州の熊野から路なき路を穿つて大和國菟田下縣まで進出されると、此處に兄猾、弟猾の兩酋長があつて、弟猾の方は速に歸順したけれども、兄猾の方は容易に屈しない。而も皇軍の勢容易に當るべからざるを見て新宮を造營し、機を設けて、降伏と詐り、饗宴に託して天皇を殺め奉らうとしたけれども、其詭謀は弟猾の密告によつて道臣命に看破せられ、兄猾及び其一族は却つてその機に陷つて全滅したといふことがある。處が、神武天皇はその後國見丘の攻略に際し、兄猾の詭計をそのまゝに用ゐて忍坂(大和城上郡)に大室を堀立て、大饗宴を設け、勇士數十人を選んで膳夫に當て、八十梟帥の餘孽を招いて之を鏖にしたとある。降つて景行天皇の時に至り、皇子小碓命が大命を奉じ、女裝して熊襲の寢室に入り、一刀の下に川上梟帥を刺殺して大和朝廷多年の患害を除いたことは今更事新しく述べるまでもない。之を要するに敵將の暗殺といふことは英雄の武威を以て軍の中心とした上古の戰略の一であつて、近代の政治的暗殺と同一に見るべきものではない。

「五」 馬の個性と人間の生活

上古の英雄戰に「馬」といふ新しい輸送力を附加へたものが中古の騎兵戰である。私は先づ日本歷史の上より見たる馬のスケッチを作らなければならぬ。

野蠻未開の種族の間には馬を知らぬものが少くない。亞米利加發見の當時、アメリカ、インデアンの中には馬上の人を見て半人半獸の怪物が現はれたと騷いだものがあつたと云ふことである。「日本紀」や、「萬葉」の歌に現はれて居る「コマ」が果して源平時代の所謂名馬と同種であつたか、容易に臆斷を許さぬ。或人の說によると日本民種が持つて居たのは駒、即ち小馬で、驢馬の一種に相違ない。馬は北方から徙遷した異種族が持つて來て、之を東北から關東の野に放飼にしたといふことである。後世に至つて關東が名馬の產地とされ、源氏の諸將が之を驅つて懸軍長驅する時、平家の大將(齋藤實盛)をして、

馬は牧の内より心に任せて選び取立て飼ひたれば、早走の曲、進退の逸物を一人して五匹十匹曳かせたり。彼馬乘負せて朝夕鹿狩、狐狩して山林を家と思て馳習たれば、乘ることは知れども落ることもなし。

と感嘆せしめ、更に之を京都なる平家一門の乘馬と比較して、

馬といへば、博勞馬の兎角つくろひ飼ひたれば、京出しばかりこそ首をも少し持擧げ侍りしか、はや乘損じて物の用に叶ひ難し。東國の荒手の馬に一當てあてられなば、更に立あがるべからず。(源平盛衰記)

と愚痴をこぼさせて居る所を見ると、日本民種の持つて來たのは驢馬で、關東の馬とは種が異つて居たといふ考古學者の說も滿更とは思はれぬが、雄略天皇が射獵に召された駒、同じ京育ちでも賴義や、義家の乘つた馬は隨分の逸物であつたらしく、「今昔物語」に現はれて居る藤原時代の競馬馬にも却々精悍なのが居た處を見ると、平家一門の乘馬と、關東武士の乘馬との間に實盛が云つたほどの相違があつたか、否かは疑はしい。何れにしても日本民種が太古から馬を持つて居たことは事實である。素盞嗚尊が天斑駒を放つて田の中に伏さしめ、其皮を生剝にして天照大御神の機屋の屋根から投込んだといふことや、大國主神が馬に乘つて倭國に去らうとするのを、須世理姬が暫しと押しとゞめて、綿々の情をかき口說くといふことなどによつて、太古の生活にも馬が或る程度まで使用されたといふことは分るが、久米博士の云つて居るやうに軍馬として盛に使用され、その進行には「溟渤とゞろき、山岳鳴り响ゆ」(日本紀)る程どであつたか、何うかは考へものである。舟には「かり野」犬には「あゆき」などいふ固有名詞のあつたに拘らず、馬に固有名詞の

見えないのは何ういふ譯か、仁德天皇の時に西海から龍馬を奉つたといひ、欽明天皇の時に大和から良駒を出したといつても、その個性を現はすべき名稱はない。駒といふ普通名詞の外に、其個性を表現すべき名稱のなかつたといふことは、駒の個性が未だ人間の生活に緊密な關係を持たなかつたことを意味するものではないか。

馬の個有名詞の文書に見えた始めは、一條天皇の正歷中である、之は何故であるかといふに、此頃から競馬が盛になつて、馬の個性と人間の生活との關係が漸く緊密の度を加へて來たからである。競馬といひ、流鏑馬といひ、後世に至つては神事の一となり、縉紳の遊戲と化したが、その元は武の調練に出でゝ、騎射の熟達といふことが目的であつた。然らば騎射の術は何時頃から起つたか、雄略天皇が其臣下と駒を並べて大野に獲物を爭はれたことは人の知る所、皇極天皇も好んで射獵を御覽あり、天武天皇に至つては善く馬的射の術に達せられたとある。かくて騎射の術は漸くにして朝廷縉紳の間に流行したものと見え、聖武天皇の神龜四年からは、之が端午の節の御行事となつた。騎射の神社の境内に於いて行はれるのを流鏑馬と云つた。白河院が鳥羽に於いて之を御覽になつたが、流鏑馬といふ語の文書に見えた始めである。(續世繼)競馬や、流鏑馬が流行するにつれて馬の個性が人の興味を惹くやうになり、正歷二年五月廿八日右近の馬場に於いて行はれた競馬の記事には始めて「宮城」といふ悍馬の名が現はれて居る。(今昔物語)「宮城」を先頭として名馬の名は續々として史籍に現はれるやうになつた。藤原賴忠の「節丸」關白道長の「近江栗毛」「別栗毛」關白賴通の「花形」鳥羽院の「薄墨」坊門大納言忠信の「一六」など皆此時代の名馬で、それぞれ面白い挿話を持つて居る。

「六」騎戰時代の英雄

馬といふ有力な輸送力が戰爭に加はつてから、英雄はよき騎手にして同時によき射手でなければならないことゝなつた。さうして精銳な武器とともに良馬の多少が軍の優劣を決する重要な材料の一となつた。壬申大戰爭の後、天下は久しく無事泰平であつたが、奈良朝の末から地方制度が緩解し、藤原時代に入つては地方に豪族の私鬪が頻々として起つた。此私鬪は戰爭の規模が小さかつたからでもあらうが、殆ど純然たる騎戰で、步數の土民(郞黨)を除き、家の子といふ家の子は皆馬に乘つて戰つた。金吾將軍平維茂が奧州で澤俣四郞藤原諸任と戰つた時の軍は、馬の兵七十餘人、步兵三十餘人、合せて百餘人とある。(今昔物語)步兵と云つても之は其領土に附いた土民で、今日の

歩兵のやうな役目をしたものでないことは明かである。同じく(今昔物語)に現はれた東國の豪族、源宛と平良文との私闘を見るに、互に五六百人許りの軍を率ゐ一町ばかりを距てて相對峙し牒合はせて箭を射かけんとする時、先づ宛と良文とが單騎陣頭に躍出で、互に馬を驅け違はせて騎射の術を競つたが、双方とも互角で勝負がつかなかつたので、互に其力量を認めて相和し、家の子、郎等には少しも戰はせずして軍を引いたといふことがある。されば騎射の術は源爲朝や、那須與市よりは七八十年も昔が全盛で、若し壇の浦の合戰が七八十年も前ならば、源氏は決して扇の的に對する射手の人選に苦しまなかつたであらう。頼光の家臣季武の從者には下げ針を的にして百的百中といふ名人があつた。鳥羽院の武者所に詰めたむつるといふ侍は、院から毎日池の鯉をさらふ鶚を射て、鶚も殺さず魚も殺さぬほどに射よとの御諚を受け、かりまたの矢を番へて見事に鶚の足から生きた鯉を奪ひかへした。むつるの郎等に上六太夫といふものがあつてむつるよりも一段の上手であつた。或る時上六太夫はむつるの爲に杜宇(ほとゝぎすの類か)の羽を獲んとてその好みに任せ、最後に飛んで行くのを射て落した。而も近く河の上を飛ぶ時には射て放たず、河を越えて遙か距つた後に射落したので羽が濡れずにすんだとある。同じくむつるの郎等に賀次新太郎といふがものあつて射藝は上六太夫に劣らなかつたといふ。同じ時代に源三左衛門翔といふ者があつて的の串を狙ひ、第一箭を以て前の串に當て、第二箭を以て後の串に當てたといふ。平助綱は當時評判の弓の下手であつたが、それでも家の棟に止つて居る杜宇を射て落す位の力量はあつた。以上の物語は那須與市が扇の的を射た時から數へてザッと百年の昔である。源平時代になると戰爭が漸く大規模となり、從つて歩兵も稍々重要視せられることとなり、騎射の術は少しく衰へた形である。大軍の懸引となると何うしても個人的の技術は衰へる。殊に歩射には强弓が利であるけれども、騎射に馬鹿々々しい强弓は禁物である。頼義義家時代の射手は何れも、程よき强さの弓を以て得意とした。

鎭西八郎爲朝は弓矢の神のやうに云はれて居るが、その得意は歩射で、騎射に於いては往々にして敵を射損じて居る。保元の亂に爲朝を敵とした義朝が、「八郎筑紫に成長して船中に遠矢を射る事、或は之を知らん。走立のいくさは彼が向ほ未だ熟せざる所、若しそれ馬上の働きに至つては、彼いかで坂東武者に敵せんや」と評したのは、强ちに爲朝を恐るる味方の士氣を鼓舞せんが爲のみではなかつたらしい。爲朝は五人張りの强弓に、三年竹の節近なるを山鳥の尾を以て矧ぎ、七寸五分の丸根

の鏃を食はせた恐ろしい矢を番へて先づ伊東景綱の郎等、伊東五を殺し、伊東六を脅かし、第二矢に於いてマンマと山田小三郎といふ敵の荒武者を射損じた。爲朝はそれから莊嚴院の門前に立つて諸兵を指揮して居る義朝を射て其兜の星に中て、「八郎の術未だ至らず」と嘲られたのに激して第二の矢を番へた。爲朝が態と兜の星に中てたなどいふ善意の解釋は何うも信じられぬ。彼は大庭景能に對しても一矢を送つたが、景能の右手に交したのを射損じてマンマと遁げられて居る。要するに弓矢の術は戰爭の小規模であつた賴義、義家時代が極盛で、源平の大戰爭となると、射撃も多少團體的となり、個人の技術は稍々劣へたものと見える。

富士川の對陣に於ける齋藤實盛の歎息によると源平の戰ひは馬の戰ひであつたとも云はれる。此頃になると歴史は殆ど名馬の記事を以て蔽はれて居る。源平合戰の序幕である賴政の擧兵も、宗盛と仲綱との間に於ける名馬「木の下」の爭奪が導火線となつて居る。此頃の大將といふ大將は何れも名馬の持主であつた。殊に源氏の大將になると數多き副馬を備へて功勞ある將士に之を賞賜した。賴朝の乘馬として史籍に其名の現はれたものが十四ある。就中「磨墨」と「生唼栗毛」とは宇治川の先陣で何人にも知られて居る。義經の乘馬は五つが有名である。就中「太夫黒」は一の谷を落し、八島に乘入れた名馬として其素性に種々の說がある。畠山重忠にも六つの名馬があつた。宇治川を渡したのは「三日月栗毛」で、一の谷を背負つて下りたといふのも多分此馬であらう。大名といふ程でもない熊谷直實でさへ、三つの名馬を持つて居た。此點に於いて平家は明に源氏にけをされて居る。

源平戰の實際を見ると、源氏が馬の輸送力によつて、日本國中の距離を短縮して居たことといふものは非常なものである。瀨踏みをして河の深淺を知り、殆ど曲馬に近いはなれ業を演じて嶮阻を越え、十日の行程を一日にして進み、上古の戰爭（忍熊王の亂、壬申戰爭等）に於いて難攻不落の要害とされた陣地を、唯一戰に打破つて疾風の如く日本を席卷した軍事上の效力を思ふにつけても、私達は此偉大なる輸送力の出現が如何に地方の豪族をして其實力を中央の政治に加ふるの機會を早めたかといふ大體の觀察を忘れてはならぬ。土佐から京都に達するに百日を要し、淀川の河口から京都に上るだけでも十三日を費し、（土佐日記）常陸の國府から京都に達するに五十三日を費した（更科日記）昔に較べて、馬の輸送力が如何に中央と地方との距離を短縮したかといふことは戰術、戰法の研究以外に重要な考察でなければならぬ。從來中央の文飾に眩惑し、京都の華美

北蠻に驚いて譯もなくその支配を受け、官位、官職の前に膝づいた地方の豪族が、其實力を自覺すると同時に獨立の生活を始め、反對に地方から中央を制せんとするに至つたのは、此有力なる交通機關の發達に基因する所が甚だ多いと云つてよい。

「七」火藥と團體戰との洗禮

源平戰以來、漸次戰爭の規模が大きくなるに連れて步卒も重要なる戰鬪員の一となり、前九年、後三年の騎戰時代に於いて個人の技術であつた射藝が、稍々團體的に用ひられるやうになつたとはいへ、要するに其後も英雄中心の戰爭といふことに變りはなかつた。處が此英雄中心の軍隊が、火力によつて援護せられる步卒の團體と衝突して、慘ましとも慘ましい悲劇を演じたのは元寇の役であつた。

文永十一年十月十九日、勝ち誇つた元軍は遂に今津の海岸に上陸して、箱崎方面に打つて出た。對馬壹岐の兩島を屠つて虎狼も尙ほ且つ赤面すべき蠻行を敢てした元の軍にも、戰の法はあつた。彼等は鼓を打ち、鑼を鳴らして進退し、展開集中ともに團體的訓練により、火砲掩護の下に秩序整然として押し寄せた。處が之に對する日本軍の陣容は何うであつたか、日本の將士は此時まだ何れも英雄戰時代の古い戰術をそのまゝに承けついで一騎駈の功名手柄を夢みて居た。少貳某なるものが年甫めて十三、初陣とあつて馬を敵陣に進め、勇ましく名乘りをあげて小箭を發したが、元の軍には此遊戲のやうな行動が何の意味やらサッパリ分らない。餘りのおかしさに全軍哄と打笑ひ、鼓を打ち、鑼を鳴らして鬨の聲をあげた。かくて我勇士の一騎駈をするものがあれば、元軍は罠を張つて左右より押し包み、中に取込めて慘殺した。(八幡愚童記)に左の如き一節がある。

楯、鉾、長柄、物の具のあき間をさしてはづさず、一面に立ち並んで、若し寄する者あらば、中に包んで引退き、左右より端を廻し合せてとりこめて皆殺しける。其中によくふるまひて死したる者をば腹を割き肝を取りてぞ呑みにける、

殊に日本軍の惱まされたのは火砲の威力であつた。元軍の發した火砲は、彈丸の大さ球の如く、空に轟き、霹靂の如き響きをしたとある。(八幡愚童記)によれば彼は退くごとに必ず之を發したるもゝの如く、日本軍の馬は多く掉立となつて驚いた。さうして我陣の亂立つに乘じて毒箭を雨の如くに注ぎかけた。鏃に毒を塗つて敵の戰鬪力を殺ぐといふやうなことは血族間の黨爭のみを事として、異種族との戰爭に經驗のない日本軍の夢にも想はざる所であつた。博多、箱崎の一戰は實に日本民種に對する火藥と團體戰との洗禮であつた。

元寇の役に於いて日本の軍隊が火藥と團體戰との洗禮を受けた結果は、歩兵戰の著しき進歩を促し、元弘、建武の頃に至ると雜兵の訓練といふことが、大に重要視せられるやうになつた。歩兵戰發達の結果として先づ槍といふ新しい武器が現はれた。槍といふ文字は「古事記」「日本記」「軍防令」「延喜式」「三代實錄」などに見えて隨分古いものであるが、それは要するに當時の「ホコ」に當て嵌めたもので、「ヤリ」の發明されたのは正しく元弘、建武の頃である。槍の戰記に見えた始めは、建武二年正月三井合戰の時、土矢間から、鑓(槍)長刀を出して散々に突立てたのを義貞の臣、亘理新左衞門が十六本まで奪ひ捨てたとあるのがそれである。(太平記)それに續いては貞和四年十二月、楠正行の住吉合戰にも槍に關する記事が見える。槍の發明者は和田賢秀であるといひ、(雜々拾遺)又、近江の人天國九郎俊長であるともいふ。(古今銘鑑)孰れも南北朝時代の人である。槍はかくて歩兵戰の發達と共に起つたが、その戰爭に最後の決定を與ふる重要の武器となつたのは鐵砲渡來の後である。詳しくいへば槍は鐵砲の渡來によつて愈々其使命の重大を加へたのである。

「八」鐵砲渡來の影響

元軍の用ゐた火砲は、宋代にあつた旋風、單梢、虎蹲などいふもの丶類で、後に葡萄牙人の傳へた鐵砲とは全く其制を異にしたものであつた。けれども元軍の發した炮の威力は英雄中心の我騎戰を、根柢から覆すに十分であつた。元弘、建武の兵亂と共に、英雄の騎戰は漸次兵卒の團體戰に遷り、槍といふ新しい武器も現はれて、日本の戰術、陣法はやがて來るべき大革命を期待するものゝ如くあつた。果然革命の火は、先づ西南の一隅に點ぜられた。時は後奈良天皇の天文十二年八月二十五日、葡萄牙人は種子ヶ島に入つて小銃を傳へた。島主、種子島時堯は島津氏の家人であつたが、葡萄牙人から二挺の小銃を得て家臣篠川小四郎時重といふものに命じ、熱心に火藥の方劑と鐵砲の用法とを研究せしめた。研究の最初に先づ行詰つたものは螺釘の取扱ひであつた。時重は此螺釘の取扱ひに行詰つて一時研究を放棄するの止むを得ざるに至つた。(新井白石の「本朝武器考」にも螺釘といふ文字は使つてない。底を右に廻せば出でゝ左に廻せば入ると書いてあるので何の事か今の人には分らない)處が翌年再び葡萄牙の船が種子ヶ島に來たので、清定といふものが其船中の砲工から螺釘の扱方を敎へて貰ひ漸くにして其製造を究めることを得た。かくて時堯の家中には砲工の術に巧みなるものが續々現はれ、此新しい武器は非常な勢で九州の

地に傳播することとなつた。鐵砲が九州から中央に傳はつた徑路に就いては種々の說がある。時堯は初め之を主人島津家久に獻じ、家久が之を将軍義晴に獻じたといひ、又、時堯が直接之を紀伊國根來の法師杉坊に傳へたともいふが其鐵砲は最初に葡人から得たものか、模造品か明かでない。それは何れにしても種子ケ島に渡つて公然砲工の術を學び、之を中央に傳へて利を營んだものは堺の商人橘屋又三郎である。又三郎は人呼んで「鐵砲又」といひ、諸國の武士爭つて之に砲術を學んだ。更に鐵砲が關東諸國に傳はつたのは、天文十四五年頃、明から歸る進貢船が、暴風の爲伊豆國に吹き流された時、其中に、種子島時堯の子、久時の郎等、松下五郎三郎といふものがあつて之を關東の地に傳へたといふのが比較的事實に近い。「甲陽軍鑑」「北條五代記」の記事は取るに足らぬ。何れにしても鐵砲は天文十二年に種子ケ島に傳はつて三四年ケ程に日本全國に普及した。

小銃についで大砲も天文十九年といふに肥後の大友家に傳はつた。天正四年大友宗麟が豐後國丹生島に引上げて「國崩」と呼んだ大砲は、天文十九年に傳はつた大砲とは全く制を異にして居るといふ說もある。即ち天文十九年のは明の所謂「佛郞機」で天正四年のは「西洋砲」若しくは「紅夷砲」と呼ぶものではないかといふのである。何れにしても戰爭に大砲の使用されたのは、大友氏の軍が丹生島に打寄せた島津氏の軍に對し大砲を以て散々に之を打惱ましたとあるのが始めであらう。かくして我國にも不完全ながら小銃と大砲とが傳はつて、戰術、陣法はもとより、社會組織の根柢にまで一大變革を及ぼすべき、一切の準備が整つた。

（一）戰術、陣法の革命　鐵砲の渡來によつて新に其威力を加へたものは、從來の戰爭に於いて殆ど物の數に加へられなかつた雜兵である。否雜兵を訓練することによつて出來上つた部隊である。英雄と英雄、豪傑と豪傑との格鬪若しくは一騎打によつて軍の勝敗を決した上古、中古の陣法は夢の跡なきが如くに消えて、團體的に訓練された雜兵と雜兵との駈引が之に代つて現はれた。如何に偉大なる英雄も、如何に勇猛なる豪傑も、團體的に訓練された雜兵の砲火には敵し難くなつた。大將の役目は陣頭に馬をすゝめて我名を呼び、祖先の名を誇り、好き敵を擇んで格鬪を挑むことでなく軍の後方にあつて全軍を指揮し、眼を戰の大局に放つて部隊と部隊との聯絡を保持し、個人と團體との心理を洞察し、機の熟するを見ては進擊を命じ、士氣の沮喪せざるに先ちて軍を收容することとなつて來た。

新しい陣法の通則として足輕、即ち古人の郎等を銃隊として第一線に備へ、弓隊を第二線に置き、士分は槍隊として第三線

に控へ砲隊があれば之は後方に陣地（關ヶ原役天滿山麓の放列參照）を占めて味方の掩護射撃をした。戰闘は足輕の火戰を以て開始せられ、弓隊之に應じ、戰機の熟するを待つて侍大將が槍隊に突撃を命ずる。槍隊は所謂「槍衾」を作つて戰陣に突貫する。侍の功名慾が此時に於いて滿たされるのである。彼等は一番槍、二番槍と稱してその「槍先の功名」を爭つた。騎馬の武士も侵襲と同時に馬を乘捨て槍を執つて突撃に加はつた。騎馬のまゝでは銃隊の目標になり易かつたからであらう。此槍隊の突撃に於いて戰闘の勝敗が決した。されば近世の戰爭に於いては此最後の突撃が最も重要視せられ、突撃の武器たる槍は、昔の弓矢に代り、武士の調度として尊重された。但し、弓矢の影が淡くなつて槍の尊重されるに至つた背後に足輕及鐵砲の威力の潜んで居たことを忘れてはならぬ。

足輕隊の大將を足輕大將といひ、槍隊の大將を侍大將と云つた。足輕大將、侍大將の地位は非常に重いもので、戰闘に最後の決定を與ふるものとして、戰國時代の諸侯は何れも之が養成に非常な苦心を拂つた。武田信玄は此侍大將に秘傳として「調の采配」と呼ぶ一種の士氣激勵法を教へ、士卒の「攻撃的精神」を養成することに努めた。（甲陽軍鑑）上杉謙信は足輕大將即ち弓銃隊の大將が、兎角中古の陣法に泥んで自ら陣頭に立ち、足輕と軍功を爭はんとするの弊あるを察し、力を極めて之を制し、

夫れ手組の習にて五人は小組、五合は一組といふ。此所以は花の譬也。其子細は花木冬中能く養ひをなし、寒を防ぎ、念を入れぬれば、春に至つて快く花咲き實るが如し。若し寒中に其養ひ惡ければ春に向つて快く花咲き實る事なし。然れば足輕は花。頭、奉行は其養ひならずや。去る程に足輕の頭自身の功名することを大に禁ず。此道理をかねて頭々より心意に納得さすべし。此理に暗き頭は早々組を差止と可申聞也。
（春日山日記）

と教訓し、尙ほ軍令として、陣中、故なく部下と功を爭ふ大將は當家に叛くものと同罪を以て取行ふへしと布告して居る。

一、自己の働きを專らとして、組の輕卒を捨る事勿れ。既に足輕は合戰の初花なりと云へる事忘失すべからず。
一、所存有つて自我の働きを欲するに於ては、出陣前に其意を述べて組を差上ぐべし。左もなくして自身の働きを好むに於いては、假令軍功ありと雖、返心同然たるべき事。附、敵敗れて渠を追ふ時は、其場によつて自己の働き格別の事。
一、輕卒たりとて賤み、其功を蔽ふべからず。味方の中に一騎或は一歩士にても勇者有るときは、百千の强味といへり。

必竟人々支配する輕卒の中より武功の者出來、登用すること自己の武功より拔群の手柄也。此義心上に曉し、卒に義を勸むべし。吾從者は勿論の事。

試に之を上古、中古の英雄戰と比較して見れば、鐵砲の渡來が我が戰術、陣法の大革命を齎したといふ意味は最も明瞭となる。かくして英雄戰は雜兵戰に移つた。

（二）**築城法の革命**　鐵砲の渡來は日本在來の築城法、要塞戰にも大革命を齎した。鎌倉時代から南北期時代、それから室町時代の末に至るまで、一つの堅固な城砦と、小數決死の勇士さへあれば、或る程度まで天下の勢力を支へることが出來た。さうして其城は人工よりも天然の要害が第一であつた。楠正成の赤坂、千早に於ける、護良親王の吉野に於ける、名和長年の船上山に於ける天然の要害に幾何の人工を加へたとも思はれぬ。彼等は之に兵糧を入れて三十日なり五十日なりを支へ、其間に天下の同志の響應して起つのを待つたのである。決して永久に之を支持しようといふのではない。處が鐵砲の渡來と共に築城の目的が變つた。一時的の目的に應ずる天嶮利用の要塞は殆ど全く無用に歸し、之に代つて火藥の攻擊に耐へ得る永久的の城塞が必要となつて來た。日本に西洋の築城法を傳へたものは、當時九州から京都に入つて盛にキリスト教を傳へつゝありし西洋の宣教師である。織田信長は彼等に聽いて先づ安土に西洋風の城廓を築いた。天主閣の稱は此城の望樓から起つた。天主閣の天主は天主教の天主に通ずるといふ人もある。尋いで松永久秀も之に倣つて志貴城を築いた。茲に於いてか、天下の諸侯は我も／＼と爭つて新式の城塞を築き、新しい武器の威力に對する持久戰の備へが成つた。處が此新式の城塞を築く可き土地は、一夫萬夫を支ふる天嶮に非ず、平原沃野にして四通八達の要路を扼し、水陸交通の便利を必要條件とした。何となれば、此新式の城塞は大名永久の住居であつて、近世の戰術に應ずる多數の兵士を其城中に包容することが必要である。故に其糧食の供給に就いては地味及び水陸交通の便利に深甚の注意を拂ふ必要があつた。

（三）**社會組織の大變革**　處が右の如き戰術、陣法及び築城法の革命によつて中古の社會組織に幾多の重要なる變化が生じた。さうしてそれが德川時代に入つて農業本位の封建制度に大龜裂を生ぜしむるの種子となつた。

（イ）**變化の第一**　は武士の城下生活により、鎌倉以來の土著制度が崩れ始めたことである。英雄戰が雜兵の團體戰に代つてから、諸大名は多數の家の子、郎等を城下に集中する必要を生じた。從來其領土に固着して土地と農民とに對し最も緊切の利

害を感じた武士は、其領土を離れて城下に生活することゝなつてから自然月給を米で受取る「勤め人」の格となり、其生活が漸次城下の町人と深い關係を持つやうになつて行つた。

（ロ）變化の第二　は都市の發達である。都市の發達は必ずしも、砲の渡來に基く大名の築城に促されたものではない。大名の築城以前に於いても、堺、大阪、山口、長崎、博多、赤間關などの沿海都市は既に駸々として發達の氣運に向ひつゝあつた。西洋に於ける都市の發達は十字軍の爲に東西の交通が頻繁となつた結果であるとされて居る。我國に於いても諸大名の築城が都市發達の主要なる原因の一であつたといふに支障はない。上述の如く諸大名が居城を築く爲に撰んだ土地は、都市の發達に最も好適の條件を備へて居た上に、諸大名が其城下に集中した多數の臣屬は、商業の發達に缺くべからざる絶好の消費者であつた。斯くの如くにして各都市の商業は遽に殷賑を極め、町人階級の擡頭、資本主義の勃興に連れて、さしもの封建制度も根柢から動揺を始めることゝなつた。

（ハ）變化の第三　は歐洲中世の市民（Burgess）にも比すべき町人階級の擡頭である。戰術、陣法に大革命が起つてからは、貧乏な小諸侯の存立が全く困難に陷つた。戰争が、大部隊の競争となり、外交、財政、其他の關係によつて、戰争の目的に對し、大局からヂリ〳〵と敵を押へて行く、信長の如き、秀吉の如き有力な大名が現はれては、貧乏な小さい大名は所詮其獨立を保つことが出來なくなつた。玆に於いてか彼等の或るものは土著して郷士若しくは豪農となり、町人の階級に投じて牙籌をとることゝなつた。三井、鴻池、住友等の祖先がそれである。是れ、近代資本家の前身たる中産階級（大名と水呑百姓との中間に介在せる）勃興の由來であつて、私達の最も注意すべき近世史上の社會的大變動である。

「九」幕吏及學者の無見識

斯くの如き戰術、陣法の大變化、換言すれば文明の大進歩に就いて、徳川幕府の重役、若しくは御用學者が如何に無理解、無見識であつたかを見るならば、曾て幕府の老中にしてその晩年には外艦の渡來に對する海防の事にも與つた筈の松平定信が、其著「花月草紙」に於いて、昔の鎧と今の鎧との形の異ふのは何故かといふ問ひに答へて、合戰の作法の廢頹した結果であると歎いて居るのもおかしい。

先づ古の戰はひとり〳〵に道を磨き、名を惜み、譽を後に傳へんことのみ思へば、みをやの事より云ひ出でゝ自らの名を呼ばり出づれば、敵の方よりも劣らじと名乘り出で合ふな

り。さればかたみに物音もせず、目拭ひて之を見る。其打合ふ中にも、いで組まんと聲かけて、打物捨てゝ寄りくれば、力かひなくして必ず打ち難からんと思ひても、左いふ時に組までは名をけがすにぞ。命捨つる道に二つはなしと思ひきはめて、おのれも打物捨てゝ組みあふなり。組みしかれて首取らるゝまでも靜まり返りて見ることなり。敵より組まんとて打もの捨てたる所を斬らば、たやすく斬り得べけれど、名けがれては武士の中に立ちがたく、ことに曲らず、罪せらるべし。されば遠矢に大將などを射るも、いや禮なき事なれば、それが爲に聲かけて後に、射ることなり。(中略)其ふりもやや衰へてより馬を射て敵を打ちとめんともし、あざむきたぶらかしても勝ちてんとするより、多くの人とりこめてうちしことも、うしろより密かに來りて打ちしこともありしなり。

社會の一切の進歩を世の澆季、人心の廢頽として歎いて居る。「後松日記」の著者に至つては更に甚しく、武士の調度といふものが、弓から槍に、槍から鐵砲にと遷り變つて行くのを如何にも苦々しい、心外のことのやうに歎いて居る。

いにしへは弓矢を調度といふ。今は槍を道具といふ。伊勢安齊の翁が、なほ後の世には、鐵砲などや此たぐひになりなんとて笑ひにきとか。

幕府の役人や、故實學者が文明の進歩に伴ふ武器と戰術との發達を無視して恁んなつまらぬ詮議立てをして居たことはやがて、下曾根金三郎や、江川太郎左衛門が幾ら骨を折つても役に立たず、西洋の操典によつて斷引する長州の奇兵隊を征伐に出かけた征夷大將軍の軍隊に、祖先傳來の甲冑に身をかためた兵士が澤山入交つて、假裝行列を見るやうな奇觀を呈した理由を最も雄辯に說明するものである。

「十」兵士の自覺

血族共產制度の時代に於ける人類は、その食物の缺乏より生ずる移住の目的を達せんが爲に、若しくは其共有財產を保護せんが爲に、血族をあげて他の種族との戰爭に從事した。血族共產制度が崩れて私有財產制度の社會になると、其社會の中に階級が生じ、戰爭は一部階級の仕事となつた。戰爭が一部階級の仕事となると之を引受ける專門の武人が生じ、その武人が勢を得て土地を領し、人民を領し、遂に中世の封建制度を打建てた。

弓矢が武器の王であつた間は、英雄が軍の主力であつた。處が西洋に於いても、日本に於いても、鐵砲が弓矢の威力に代ると同時に團體の力が戰爭の運命を支配することになつて、其結果は封建制度を根柢から搖がすに至つた。封建制度が崩れて近

世の國家が起つた。徴兵制度が成立して新しい軍隊が出來た。

新しい軍隊の主力はいふまでもなく、大多數の國民である。軍隊の指揮官はその團體運動の指導者であり、團體心理の嚮導であるに過ぎぬ。大將の資格は鬼神の如き超俗非凡の人格ではなく、實戰の經驗と熟達とである。かくの如く列擧して來ると、今日の軍隊と鐵砲渡來以後に於ける雜兵本位の軍隊との間に何の相違もないやうである。成る程、武器、武裝、戰術、陣法に可なり大きい變遷はあつたが、それは飽くまでも變遷であつて革命ではない。弓矢の戰爭が、鐵砲の戰爭に變つた時ほどの革命があつた譯ではない。人類は盲昧時代から其頭腦の大部分を武器の改良といふことに費して來ながら、而も其武器は弓矢と火藥と僅か二つの階段を經過したに過ぎぬ。人類は餘りに自己の文明を過大に考へぬがよい。

或は、いふものがあらう。飛行機は武器の革命ではないかと。飛行機を過大に恐れるものに二種ある。それは飛行機を持たぬもの、飛行機を操縦し得ぬものから飛行機を見た場合と、何かの特典によつて兵役の義務を免れ、戰爭最中に待合遊びをしたり、芝居を見物したりして居るものが、戰線を無限に擴大する飛行機の恐ろしさを知つた場合とである。前者の恐怖は問題にならぬ。竹片木屑と雖、之を持たざるものから見れば持つた者が恐ろしい。批評家はかゝる場合の感情にまで立入つて考へる義務をもたぬ。後者の場合に至つては少しく問題であるが、監督官廳の取締りが緩い爲に、電燈の架空線が不完全で、雷鳴する毎にキツト落雷する、少し激しい雷鳴になると十ケ所も、十五ケ所も落雷して家を燒き、人畜を害することを少しも意に介せぬ東京市民が飛行機の爆彈投下を過大に恐れるのは少しおかしい。戰爭最中に芝居を見たり、待合に遊んだりして居る人は、生活を保證すべき恒産なくして多くの家族を養ひ、一方に兵役の義務を負つて居る私達の嚴肅な心境は知るまい。飛行機の爆彈で死んでも、砲彈の炸裂で死んでも、小銃の彈丸に中つて死んでも、火藥の威力にひれ伏す運命は同じである。飛行機は今の處未だ火藥の補助機關である。火藥に新しい使用法を加へたといふだけである。武器の進歩ではあるが、革命ではない。

斯く考へて來ると、鐵砲の渡來後に於ける雜兵本位の軍隊と現代國家の新軍隊との間に何等の差異があるか。曰く唯一つある。それは昔の足輕には食祿に對する義務の觀念と刑罰に對する恐怖心との外に何ものもなかつた。彼等の生命は全然主人の私有物であつた。處が今日の兵士には自覺がある。自分は自分及び同胞の生命と財産とを保護し、吳れる國家の存立の爲に戰ふものである。自分は國家の一員である。自分が國家の爲に戰

ふのは自分自身の爲に戰ふのであるといふ立派な自覺がある。此自覺は何ものも之を妨げることが出來ぬ。又妨げてはならぬ。

歷史は決して同じことを繰返さぬ。若し歷史が同じことを繰返すものならば、曾て「土」の源平二氏を生んだ日本は、今や「金」の源平二氏を生んでもよい時勢である。其條件は立派に備つて居る。處が如何に「金」の源平二氏が起らうとしても、斷じてそれを寬假せぬのは兵員個々の國民的自覺である。自分は國家の一員である。皇室の爲に又國家の爲にのみ戰ふものである。決して或る社會的豪族の爲に其利權を擁護したり、其放資の舞臺を獲得せんが爲に戰ふものでないといふ尊い自覺である。眞の愛國心である。然り、世界の平和、人類の幸福と一致する眞の愛國心である。(完)

今次政變の誘因、經過、及び歸結に關する考察

大山郁夫

はしがき

本稿は西園寺侯が內閣組織の大命拜辭に先だつこと一日、卽ち九月二十四日に於て筆を起し、原敬氏の大命拜受の翌日、卽ち九月二十八日を以て書き終つたものである。今回の政變を論ずるに當り、斯の如く後繼內閣確定前より執筆し始めたのは、第一には、雜誌の原稿締切期日のことを考慮の中に置かねばならなかつたのは、無論であつたからである。第二には、後繼內閣が原氏を首班とするそれでなければならないとは、我が徒が頃日來熱心に主張した所であることの外に、實際上の形勢が漸次その方向に移動しつゝあつたことは、容易に見當の附いた所であつたからである。第三には、今回の政變の誘因を論ずるには、勢ひその目的のために必要なる程度に於て寺內內閣在任期間に於けるその政績の總勘定を試みねばならぬものであることは、判り切つた話であるが、然是は何も後繼內閣の顏振れを見るに及ばないで爲し得られる事であつたと考へたからである。斯ういふ始末で、本稿は數

界の空氣の低迷期より書き始めたのであるから、從つてその初頭の書き振りは、後繼內閣未確定の狀態を前提として居る譯である。併しながら、筆者は此部分より既に原內閣の成立を豫想して論歩を進めて居たのであるから、全文の結末に至るまで、論旨の一貫を損はるゝことを全然免るゝことが出來たのは、あらゆる意味に於て筆者の幸とする所である。

（七―九―二八）

（一）時代の變遷

寺內首相が始めて辭意を漏らしたことが、諸新聞紙に依つて傳へられてから、殆んど一個月にもならうとして居るが、後繼內閣が今に未確定の狀態に在るといふことは、驚くべき憲政上の現象と謂はねばならぬ。當初より非常に不人望であり、殊に最近數個月に於て著しく不人望さを倍加した此內閣が、時勢の變遷と事件の進行とに促されて、その閣員の希望如何に拘らず、遂にその末期に達せんとして居ることは、一見恰も國民に安心の一と息を吐く餘裕を與へるかの觀がある。けれども今一歩深く突込んで考ふれば、寺內內閣の倒壞なるものは、その事自身だけで單獨に一問題を構成するものでなく、當然後繼內閣の性質如何に關聯して居るものであるから、國民はこの第二の問題が解決せられるまでは、未だ俄に喜憂を表白し得られないのである。ところが現今に於ては、寺內內閣の倒壞は、寺內首相の九月二十一日に於ける辭表捧呈の一事に依つて、事實上確定したものと見るべきであるが、後繼內閣の問題は今尙ほ依然として未解決の儘に殘されて居るのである。內閣更迭問題に關して直接に何等の能働的作用を及ぼすことが出來ない國民が、此際右の狀況を見て、堪まらなく焦燥の感に襲はれるのは、誠に是非もない次第である。

今回の政變に於て、後繼內閣問題が斯の如く空前の難産を經過しつゝあるのは、一體何のためであらうかと問はゞ、誰しも言下に、我國の政界に於て中心勢力が缺けて居るからと答へるであらう。と言ふのは、此表現樣式は現今に於ては、殆んど一種の慣用句となつて居るからである。併し所謂中心勢力とは何を意味して居るかの問題になると、それは可なり說明がしにくいものとなるのである。普通この句に依つて世人が諒解して居るものは、英國の常時に於て見る如き二大政黨――即ち他の孰れの政黨よりも有力なる二個の中心的政黨のことであつて、斯の如き二大中心的勢力を代表する政黨の存立する場合に在つては、その一方が政權の運用に行詰つて手も足も出なくなると、他の一方が宛も自動的なるかの過程に依つて之に取つて代ることが出來るから、現下の我國に於て見る如き政機の移動の上に

於ける澁滯を見ずに濟むであらう、と言ふのである。如何にも右の如き政黨組織の發達して居る場合に於ては、內閣の更迭の如きも必要に應じて比較的圓滑に行はれるであらうが、併しながら二大政黨組織の完全に行はれて居ない場合には、いつでも政權の授受が行き艱むに決まつて居ることが證明せられない限りは、直ちに現下の我國の政情を以て、該組織の缺乏に基因するものとすることが出來ないのである。

之を我國に於ける過去の經驗に徵するも、平時の英國に於て見るが如き二大政黨組織が實現せられたことは、未だ曾てその例を見なかつた所であるが、政權授受の上に於ける澁滯が、何時も現今の通りであつたとは謂へないのである。現に手近の例を取つて、寺內內閣成立の經過を見ても、將又、その前に大隈內閣出現の模樣を見ても、元老會議の意思が直ちに具體事實となつて現はれたのである。尤も大隈內閣の場合に於ては、清浦內閣の流産事件といふ故障もあつたが、結局元老會議の執成で大隈內閣が組織せられた。若し夫れ寺內內閣の出産に至つては、その産婆役たる元老會議の仕事が更に簡單に片附けられたことは、僅々二個年前のことゝて、尙ほ世人の記憶に新たなる所である。然るに今回の政變に於ては、元老會議なるものが開催せられたことなく、各元老が個人々々に參內して勅問に奉答申上げたのであつて、元老會議としての團體的意見を上奏に及んだ譯ではないのである。是は一見極めて平凡な事の樣であるが、實は非常に重大なる意味の籠つて居ることである。

今回の場合に於て元老會議が開催せられなかつたのは、元來頭數の寡き元老中に於て、種々の意味に於て可なり强き異色を帶びた人物たる大隈侯の加はつて來た事も、將又、同じ頭數の寡き元老中の一人たる西園寺侯その人が、他の三元老の意中に於ける首相候補者であつた事も、慥にその原因中の或る部分を構成して居るには相違ないが、併しながら、その最大原因と見るべきものは、何と言つても元老中の樞軸たる——若しくは樞軸であり來つた山縣公の思想の變化と見るのが、最も肯綮に中つて居るものであらうと思はれる。

新聞紙の傳ふる所にして誤りなくば、山縣公は此際元老會議の首相奏薦は大權干犯の虞ありと思惟したとある。此事實の有無は素より保證の限りではないか、若し果して然りとせば、それは極めて興味あることゝ謂ふべきである。第三十八議會解散の一理由として、議會の多數が寺內內閣の政黨に基礎を置かざるを根據として不信任を決議したのが大權干犯に當るといふのであつたことは、當時寺內首相の言明する所であつた。然るにその時より未だ二個年も經たぬ今日に於て、同じ官僚畑の——

而かもその頭目たる山縣公が、大權干犯論の目的物を轉換したかの樣に見えることは、時代の變遷と言つて仕舞へばそれまでであるが、それにしても我等に取つては、幾分意外のことたらざるを得なかつた。何となれば、今回の場合に於て元老會議の首相奏薦を大權の干犯として否認することは、同時に從來の場合に於けるそれをも、同一の理由に依つて否認する筋合になるからである。されば我等が元老會議の重要人物たる山縣公より、斯の如き自己否認の聲の漏らされた消息を聞いたのは、その理窟の當否を問はず、またその動機の如何を論ぜず、實に喜ばしき驚異であつた。

山縣公の思想が斯の如く變化したといふ事を眞實と假定して、此變化が純理の思索より來つたか、それとも事實の脅威より發したかと考へて見れば、恐らく前者より出でたものでなく、寧ろ後者より出でたものであらうと思はれる。蓋し老年者流は一般に固定せる思想の所有者であつて、純理上の勸說に依つて之を動かすことは容易な事ではないが、併し同時に彼等は、ひどく耄碌しない限りは、普通甚だ利害の打算に明るいものであるから、事實の脅威に對しては可なり敏感なものである。而してこの定說は、老練政治家たる山縣公に通用して最も妥當であることも亦、大抵の人々に異論のない所であらう。

然らば右の如く世上に傳へられた山縣公の思想の變化に對して、少くともその誘因の役目を務めたる事實の脅威とは、果して何を指すものであるかとは、當然次に起り來るべき問題である。我等は我等の見地よりして、此問題に對し一應解答を試みんとするに當り、それが一と口で言ひ盡くせないものであることを發見したる故に、此場合に於て單にそれに『時代の變遷』といふ總括的名稱を附與し、以下項を別にして、順次にその內容に觸れて見やうと思ふ。但し我等が次に述ぶる諸項は、新聞紙に依つて傳へられたる山縣公の思想の變化の噂が事實であると否とを問はず、その客觀的妥當性を失ふことのない樣にする積りで書かんとして居るものであることは、別に改めて斷るまでもない。

（二）政治上の思想と實際

寺內內閣の成立が當初より非立憲呼ばはりの標的となつたことは、是れ明かに我國民の政治思想の最近の趨勢を指示するものであつて、而して我國の政治思想が此傾向を辿る樣になつたのは、主として我國の一般敎育の進步の結果であるが、同時に近來我國の社會生活に於ても次第に隱然たる大勢力を占むるに至りたる新聞紙も亦、之に對して多大の影響を及ぼして居るものであることは言ふまでもない。その外に最近數個年間に於

て、普通の職業的政治家以外に、相當の學識ある幾多の人士が盛に政論を發表する樣になつたことは、極めて顯著なる一の時代相を代表するものであつて、彼等が從來實際政治とは比較的隔絶して居た知識階級を政治的に啓發した程度は、蓋し測るべからざるものがあつたであらう。斯くして我國民の政治思想は、最近可なり長足の進歩を遂げたのは、大に喜ぶべき現象であるが、肝腎の政治の實際が必ずしも之に伴はなかつたのは、緩漫なる漸進主義に甘んずる一種の樂觀論者に取つては兎も角、それ以外の多くの人々に取つては、遺憾に堪へざる所である。是は疑もなく過去に於て憲政的教養を積まざりし我國民の習性にも基因することであらうが、併し、我國に於ける現行選擧制度の下に、知識階級に屬するものゝ大多數が、全然政治の實際より除外せられて居る事實も亦、之に與つて大に力あるものであつたことは、爭ふべからざる事實である。

斯の如き狀況の下に於て、一般國民が思想上寺内内閣の如き超然主義の上に立てる官僚政府を否認せるにも拘らず、その中の約百五十萬の選擧有權者は、第三十八議會の解散後に於て、該内閣の存續のために最も都合よき形勢を作るべくその選擧權を行使した。而して此政治思想と政治の實際との間の矛盾は、直ちに政黨政治家の乘ずる所となつたのである。即ち唯一の在野黨たる憲政會を除いては、表面中立を裝うて居た政友會も國民黨も、口では堂々と寺内内閣の非立憲性を攻擊することに依つて、遺憾なく國民の政治思想に調子を合はすことを怠らなかつたが、さて實際問題となると、例の『時局重大』に藉口し外交調査會を中心として、彼等が公然非立憲内閣と呼ぶ政府と握手することに依つて、巧みに政治の實際に迎合して來つたのである。

併し一旦國民間に根を卸した政治思想は、それと政治の實際との間の矛盾のためにも、幸にも容易に枯死することを免れたのである。當時國民の不評の間に埋もれて居た寺内内閣の御用論客等は、該内閣の成立條件を批難する國民の政治思想と戰ふために、古代のプラトーの『理想國家』の本質を履き違へて『哲人政治』の名に於て、實は第十八世紀式の『賢明なる專制主義』の樣な黴の生へた議論を持ち出し、超然内閣とて國民を基礎としない譯ではないと言つた樣な、頗る尤もらしくもない詭辯を用ひて、頻りに反動思想を皷吹しやうと努力した。けれども國民は最早斯の如き時代錯誤的議論に欺かるゝことなく、最後に至るまで寺内内閣を以て、國民を基礎とする哲人政治家の一團と見る如き不見識を示さなかつたのである。斯くて反寺内内閣的思想は漸次濃厚に赴き、遂に政治の實際の上にもその影

響を及ぼさずんば已まざるに至つた。此機運も亦、諸政黨の見逼がすことを得なかつた所であつたことは、是々非々主義と言つた樣な、人を馬鹿にした標語の下に、事實上准政府與黨の役目を務めて居た政友會までが、當初の是を是とする態度より、次第に非を非とする態度に移つて行つたことに依つて、十分に之を窺ひ知ることが出來る。第四十議會に於ける豫算案の大修正は、その第一の發現であつた。最近に於ける出兵問題に對する原總裁の外交調査會內に於ける態度は、その第二の發現であつた。之に依つて政友會は、若し淺薄な考へで甘んずる積りならば、そが寺內內閣の純粹の支持者でなかつたことを示した氣になり、自ら世間に對して申譯が立つたと思ふ許りでなく、幾分かは誇らはしい心地にもなるのであらう。之に反して寺內內閣の側になつて見ると、首相始め總ての閣僚は、つくづく眞の與黨を持たぬ悲哀を感じて、その年末の政治的信條にも拘らず、往年の桂公の歩んだ道が少くともチラと頭の一隅に浮んだ乎合もあるであらう。清和倶樂部及び新政會の合同計畫は、必ずしもこの幻影に關係があるとも言へまいが、されぱとて斷然關係がないとも言ひ切られないであらう。この與黨を持たぬ悲哀が、山縣公の腦神經に響かなかつたことが證明せられない以上は、同時に新聞の噂に上つた老公の思想の變化が、それと全然無關係であると言ふことが出來ないのである。以上の成行は、之を高處より大觀すれば、一時は政治の實際に蹴落されさうに見えた政治思想が、何時の間にか逆に出て、却て幾分づつなりとも政治の實際を支配する樣になつた過程を暗示するものでなければならぬ。——併し、說明は中々それで盡きないのである。(以上・七—九—二四)

(三) 社會狀態の急變

現戰爭開始以來の我國の社會狀態の變化は、實に目まぐるしい程急速なものであつた。無論此期間に於て起りたるその變化は、明治維新以來の社會的變革の繼續であつたには相違ないが、而かもその速度の急劇なる點に於ては、恐らくそれ以前の四十餘年間の如何なる期間に於ても、全然その比を見なかつた所であらう。尤も明治維新の際の文物制度の改革は、その性質上根本的の或る意味に於ける創始的のものであつたから、歷史的にその繼承者たる其時以來の社會的變革に對してその比較を取る譯に行かないのは、素より當然の筋合であるに依り、そは姑には暫く別問題とするにしても、維新後四十餘年間に於て起りたる一切の社會的變革は、最近四個年間に於て起りたるそれに比較する時は、その總量に於て遙に輕微なるものであると謂つても、恐らく過當ではあるまいと思はれるのである。

殊に注意すべきは、現戰爭開始以來我國の社會狀態の上に起つた著大なる變化は、單に物質的方面に現はれたるに止まらず、精神的方面——若くは寺內首相及びその他の二三の閣僚の慣用語に從へば『國民思想』の方面にも亦、或る程度に於て現はれたのである。右の內、物質的方面に現はれたるその變化の或る部分は、可なり明確なる統計的數字を以て之を現はすことを得ることを得るが故に、その程度を想像することは比較的容易である。今それに關して手近の一例を擧ぐれば、寺內內閣成立以來の帝國議會の議事速記錄を繙いて、勝田藏相が每會期に兩院に於て試みたる豫算編成方針に關する演說などを讀み、殊にその時々の我國經濟狀態の說明を精細に吟味すれば、戰時中に起りたる我國の一般的物質生活上の變化の概況を、或る程度まで數量的に思ひ浮べることが出來るのである。

之に反して、精神的方面に起りたる我國の社會的變化に至りては、それが隱微の間に生成せらるるものであるが上に、幾分でも數量的に表現することが不可能であるから、之と明瞭に指示して言ふことが出來ないのは事實である。併しながら此點に關しても、最近我國の社會に於て起りたる多數の顯著なる事件を綜合し、之に多少の洞察力を加へて歸納的に考慮する時には、その變化の本體をあらまし見極はめることは、左して困難ではないのである。例へば最近數年間に於て非常なる速度を以て增加するに至りたる各工場に於ける同盟罷業の件數及びその程度とか、或は九州疑獄事件の如き異數の現象に纒綿する種々の世態人事とか、或は時局の寵兒たる成金の跋扈、並に之に對する一般民衆の反感とか、或は臨時敎育會議が取扱つた大學制度改革等以下幾多の學制改革案、若しくは各種の試驗制度改革案の討議の上に現はれたる官僚思想と民主思想との怪しき混淆乃至紛糾とか、或は米價問題を切つ掛に勃發したる稀代の騷擾事件及びそが明示若しくは暗示したる社會生活の種々相とかいふ大小無數の事件は、適當なる觀察方法の下に於て之を研究する時は、近來に於ける我國民の精神生活の上に起りたる變化の本質を知る上に於て、極めて有用なる材料となるべきものである。

右に述べた樣な物質的及び精神的變化と、斯かる變化に對する反動の氣勢とが、或は衝突し、或は合流し、百態千姿を呈しつつ我國の社會生活の上に跳梁し、活躍し、盤旋し、抃舞しつつあつた最中に於て、第四十議會が開催せられたのであるから該會期に於て各種の新問題が討議の俎上に拉し來られ、甲論乙駁の沸騰的狀態の中に投げ込まれたのは、蓋し當然の成行であつたに相違なかつた。如何なる場合に於ても事實は最良の敎師であると謂へやうが、此場合に在つて殊にさうであつた樣に思

はれた。第一に歐洲の野に於ける戰局の形勢が直接に我國自身の問題として取扱はれた。聯合側諸國の政治家が歐米の公論壇上に於て表明した戰爭目的論は、軈てまた我國の政府者と代議士との間の押問答の種となつた。將又、我國と聯合友邦との間の共同策應の方法も、盛に討議に上せられた。更にまた、對支對米對印度關係の諸問題は、殊に緊張せる注意を以て演說せられ傾聽せられた。斯くて一方に於ては、我國の政治外交の世界的交渉が、遺憾なく明るみに持ち出されたと同時に、他方に於ては、內政の方面にも幾多の新問題が持上げられた。國防充實の財源を求むるためとあつて、戰時利得稅の如き新設稅、並に既存稅の增率の上にも、その他數種の廢減稅目の上にも、社會政策的色彩を帶びたる案件――それは極めて微弱なる調子の、而かも矛盾だらけのものながら、兎も角一種の社會政策的色彩を帶びたる案件が、三百八十一頭顱の前に、投げ掛けるやうに提出せられた。その上國民思想とか、デモクラシーとか、同盟罷業とか、勞働問題とか、暴利取締とか、物價調節とか言つた樣な、諸般の事實上の新問題を暗示する言葉が、內閣員以下の政府委員、並に兩院議員の唇頭に幾回となく反復的に取交はされた。加之、年來我國の公衆の間に於て熱心に論究せられ、今日に於ては一部分既に討論終結の姿を呈せる選擧法改正案も、別々に政府及び政黨より提出せられ、一應は隨分喧々囂々と、何の結果を見ることなしにではあるが、兎も角正式に討議せられたのである。凡そ是等の新問題は、我國の政府及び政黨の識見技倆に對する絕好の試驗となつたものである。而して彼等の注意が時勢の必要に刺戟せられて、期せずして之に向つたのは、大に多とすべきものの樣ではあるが、併しながら、彼等の孰れもが斯の如き諸種の難問題の前に脆くも蹉跌して、一齊に落第點を附けられねばならぬ慘じめな運命に陷つたのは、返へす返へすも遺憾千萬なることであつた。彼等は權謀機略本位の政治的掛引にかけては、孰れも皆所謂『練達堪能の士』であるかも知れぬが、新時代の必要を充足する力量の段になると揃ひも揃つて低能の極印を打つより外仕方のない代物であることが、十分に國民の前に證明せられたのは、眞に絕大の驚異に値する事柄であつた。憲政開始以來の政權爭奪戰の慣行が、如何ばかり彼等の本然の聰明を掩うたことであらう。

寺內內閣の施政上の功績として認むべきものは、極めて寥々たるが中に、唯一つ特筆すべきものは、そが社會政策を內政上の中心問題とならしめたことである。尤も社會政策の必要は、大隈內閣の終末期に於ても可なりの程度に於て認識せられ、具體的成案としては簡易保險案の如きものとなつて現はれたので

あるが、併しながら社會政策を刻下の最大急務の一として、內政上の中心問題とならしめたのは、一は時勢の必要の衝動に基くものとは言ひ條、寺內內閣の意識的努力も亦相當の程度に於て手傳つて居たことは、我等の如き寺內內閣の反對者を以て終始し來つたものと雖も、餘儀なく之を認めねばならぬ。けれども寺內內閣は折角社會政策を思ひ附きながら、社會政策の失敗の結果として產れ出でたる米騷動といふ稀代の椿事のために、遂に致命傷を負うて斃れねばならぬ破目に立ち至つたのは、抑も何に基因するのであらうか。それは言ふまでもなく、第一には超然主義の上に立てる寺內內閣が、政黨の上に立脚せざるが故に、政友會及び國民黨の如き與黨とも附かず、非與黨とも附かぬ政黨の支持を得んがために、屢ば自縄自縛の運命に陷つたからである。第二には、寺內內閣が事實上に於ても超然として國民の上に標置したがために、民衆を理解すること能はざりしのみならず、一種の平等思想の旺盛に赴ける今日に於て、その閣僚の各個の優越振りが一般國民の深き反感を挑發したからである。第三には、寺內內閣の閣僚の各個の優越意識、並にその官僚思想的痼疾が、彼等の社會政策の本質をして、民衆に取つては却て難有迷惑である所の、所謂溫情主義的社會政策たらしめたからである。（此點は、第四十議會に提出せられた各種の選擧法改正案の失敗に關しては、政府が政友會と共にその責任を頒たざるべからざる境遇に在る事情を參照すれば、更に明瞭に看取し得られるのである。）第四には、總ての閣員、就中社會政策實行の局に當りたる一二の大臣が、見識手腕及び立憲政治家的素質を缺如して居たからである。第五には明治の初年以來の我國政界の宿弊たる政府政商の關係が現今に至るまで尙ほ存續するのみならず、或る方面に於ては却てその新關係を增加して居るがために、政府が社會政策の急所に向つて縱橫に突擊することが出來なかつたからである。最後の――而かも最小のとは謂はれない原因は、寺內內閣が社會政策の實行とは兩立し難き程度の言論抑壓政策を行つたがために、一方に於ては政府民衆間の意思の疏通を閉塞し、他方に於ては幾多の言論家の怨恨を買ひその復讐心を挑發した結果として、彼等をして反寺內內閣的空氣を全國に瀰漫せしめたことである。事實上、寺內內閣の誤れる對言論政策は、その記錄の上に泥を塗つたものであると同時に、幾分それ自身の沒落を早めたものである。――併し是等の諸點に關しては、本文の筆者は數次本誌を通じて私見を述べたことであり、殊に九月號所載の米騷動に關する拙稿に於て多少精論して置いた積りであるから、重ねて之を細說しないことにする。

右の如く考へ來る時は、寺内内閣が現下の時勢に處する上に於て示したるその驚くべき無能は、決してその閣僚の才幹の缺乏に基因して居るものでなくて、主としてその成立の基礎條件の時代錯誤的性質、並にその官僚思想的痼疾に胚胎して居るものであることが判明するのである。之と同時に近來世上の風說に傳へられた通り、山縣公が果して『寺内内閣にも愛想が附きた』と言明したものとすればそれも亦純理の思索より發したものでなくして、全く事實の脅威より出でたものであることが、明確に推斷し得られるのである。山縣公が如何に世評の如く老齡に似氣なく聰明なる政治家であるにもせよ、元來官僚畑の大立物であつて、且つまたその平素の言動に徵すれば、その政治的信條の平明直截なる官僚思想を以て基調として居ることが明白である以上は、純理の思索よりして此結論に到達し得る筈がない。けれども寺内首相の意思如何に拘らず、米騷動を以てその頂點とする内政外交上の失政が寺内内閣の致命傷であつた事實は事實で、何とも仕樣がない譯であるから、その成立當時の產婆役を務め、その成立以後の保姆役を務めた山縣公の眉根は、公が聰明であればあるだけに、その爲めに益す深く顰蹙せられない譯には行かなかつたであらう。『寺内内閣にも愛想が附きた』。――然り、一般國民は山縣公よりも早く、疾くより寺内内閣に愛想を附かして居たのである。尤も寺内内閣と雖も尙ほ此上その椅子に噛ぢり附かうとならば、少くとも來るべき第四十一議會開會の時までは持つには持つたであらう。けれどもさうなれば寺内内閣の組織者等は、その時に及んで遂に永遠に政治的生命を喪失するであらう。彼等が永遠に政治的生命を喪失しやうがしまいが、國民は一向それには無頓著で居られるけれども、山縣公としては此事實の脅威の前に無關心では居られまい。この老公が曩きには寺内首相に向つて『死ぬまで遣れ』と激勵し、後に至つて『寺内内閣にも愛想が附きた』と歎じたといふ風說の前後の間に現はれて居るが如く見ゆる表面的矛盾は、一寸熟考すれば直ちに消散して仕舞ふ種類のものではあるまいか。（以上。七―九―二五）

（四） 寺内内閣と國民思想

（本項を草せんとする日、新聞紙は大命の原敬氏に下るべき形勢を報じた。けれども本篇は、政變の誘因及び經過を說いて未だその終に達しないで居るのであるから、論旨の連續上尙ほ暫く前項を繼承して筆を進め、その一切の歸結に至りては、來らんとする原内閣の組織に關し、今少し立ち入つたる報道に接した後に、之を論述することゝする。）

九月六日の夜、寺內首相はその官邸に於て、清和倶樂部及び新政會の代議士連を招待して晩餐會を開き、その席上に於て一場の演說を試みたが、その中に於て最近の米騷動に就いて左の陳述をなした。

『……その(米騷動の)近因は、米價問題たること勿論なりと雖も、その遠因は、國民思想の變遷、貴賤貧富の懸隔、奢侈荒怠の弊風等、綜合錯雜して秩序を紊亂し、偶ま米價の狂騰に乘じて驀地勃發せしものと思惟せらる。……』

右の一節は、その草案が誰の手に成つたものかは姑く問はず、そが寺內首相の口に上つたものとして見る時は、極めて興味に富めるものとなるのであつて、我等は直ちに之に一應の評論を加へて見たくなる樣な、一種の强き誘惑を感じるのである。けれども今はそれに繫り合つて居る場合ではないから、暫らくその事を差し控へることとするが、併し唯一つ寺內首相が、米騷動の遠因の一として、『國民思想の變遷』を擧げたことに關し、玆に一言を費すことは、必ずしも本文の主題より逸脫することにならないと思ふのみならず、前段に最近に於ける我國の社會狀態の急變に處する寺內內閣の措置の失當を敍するに當り、その國民の精神生活に關する部面を幾分疎略に取扱つた感じがするから、その補充旁々といふ意味に於て、聊か右の一點に觸れて見やうと思ふ。

現戰役が物質上及び精神上、我國の社會狀態の上に急劇なる變化を與へたことは、既に說述して置いた通りである。而かもその物質上の變化は、幾分は計數の上に現はし得らるゝものであるから、何人も之を見逃がすことが出來ないけれども、その精神上の變化は、直接には目に見えないものであるだけに、動もすれば見逃がし易いものであり、又狡猾なる政治家などに取つて之を見逃がす方が好都合と考へる時には、故意に見逃がすことを得るもの——若しくは少くとも見逃がした風を裝ふことを得るものである。然るに寺內首相が少くとも表面上は正直に、彼自身が率うる內閣に取つて可なり痛手であるべき筈の米騷動に關聯してまでも、『國民思想の變遷』を云爲したといふことは單にそれだけの事實として見れば、大に多とすべきものゝやうでもある。けれども問題は、寺內首相が彼自身の所謂『國民思想の變遷』に對し、如何なる批判的態度を持して居るかを知つた上でなければ、未だ以てその最後の解決に達したものと見ることが出來ないのである。

寺內首相は、右に引用した一節を包含する演說のどの部分に於ても、所謂『國民思想の變遷』に對して如何なる批判的語句をも下して居ないけれども、併し、彼がそれに對する批判的態度

を推測するためには、種々の好材料がない譯ではない。それは何であるかと言へば、彼の平素の言動の如きもその一つであるが、更に一層具體的のものを求むれば、彼が曾て第四十議會に[redacted]へた訓示とかの中に於て見られたる國民思想に關する言說などは、崛強なる好參考資料たるを失はないのである。

是等のもの丶中に於て、彼が國民思想の問題に觸れる時には屢ば我國體の精華を引合に出し、申譯の様に例の採長補短を唱へたことはあるが、その様な場合には、同時に外來思想の危險とか害毒とかを說くことを忘れなかつた。是等のことを綜合して考察する時は、彼は近來の國民思想の動搖を以て、安價なる西洋摸倣の多量に混淆するものと思惟し、その意中に於て之を批難すべきものとして居ることは、之を推測するに難くないのである。

近來の我國の社會的事變に依つて暗示せらる丶國民思想の動搖は、その全部、若しくはその大部分、若しくはその幾部分が單なる西洋摸倣より出でたものとするのは、一寸考へると如何にも尤もらしいが、少し突き詰めて考へると、それは決して正當の見解とは謂はれないのである。無論、一部少數の智識階級の中には、讀書若しくは見聞の結果、西洋思想に淫して他を忘れて仕舞ふと言ふやうなことは、全然あり得べからすること丶いふことは出來ない。併しながら大多數の無敎育者を包含する一般民衆が、單なる好奇心より、直ちに聞き嚙ぢりの西洋思想[redacted]的には寧ろ著しく保守的であり、惰性的であるといふ事實を參照するまでもなく、到底あり得べからざることであるといふ理は、容易に想到し得られるのである。

否——近來に於ける我國民思想の變遷は、決して一般民衆が思想的に西洋かぶれに罹つたためではなく、手短かに言へば、それは國民生活上の內的必然性の衝動に出でたるものに外ならぬのである。無論今日に於けるが如く、世界的に交通の自由なる時代に於て、西洋諸國に起つて居る大事變が我國民生活の上に、何等かの影響を及ぼすことがなくて濟む譯に行かないことは、判り切つた話である。此點より見れば、開戰以來各交戰國を通じて起つた社會的動搖とか、若しくは特に露國を見舞つた大革命とかの如きものも、我國の立場より全然對岸の火災視する譯には行かないのである。けれども同時に、我國民生活の奧底に於て、是等の大事變の影響を受容れる狀態が既に準備せられて居るにあらざる限りは、是等の事變の方から押し掛けて、無理遣りにその影響を我國民生活に對して押賣りに來ることは出

來ないのである。此點に關して一例を擧ぐれば、昨年中に於て露國に勃發した大革命は、我國民をして愕然として驚倒せしめたるのみならず、隱微の間に我國民の思考過程及思想樣式の上に或る作用を及ぼしたには相違ないが、さればとてそれは我國民が何等の要求を感じない部分までにその影響を投げ與ふることは出來なかつたのである。それ故、露國に於ては帝政が倒れて共和的狀態――若しくは無政府的狀態が之に代つたといふ大事件が起つたことなどは、我國民の傍觀の眼を極めて强烈に刺戟したけれども、それにも拘らず、我國の智識階級の間にも、將又、一般民衆の間にも、我國自體の政體の變更を要求若しくは主張したものは、一人もなかつたし、又現に一人もないのである。是は決して我國の言論自由の甚だしく限局せられて居るといふ事實に基因して居るものではなく、事實上皇室尊崇を以て不動の信條とする我國民の立場より見れば、政體の變更といふが如きことは、國民生活上の內的必然性とは全然沒交涉であるといふ事實に基因して居るものである。

官僚政治家の眼にも附く樣になつた近來の我國民思想の變遷は、全く國民生活上の內的必然性より出でたるものであるといふ命題は、その所謂國民思想の變遷なるものゝ本質を明確に吟味する時には、一層その妥當性が證明せられるのである。此點を

巨細に論究することは、本文の範圍外に涉ることでもあり、且つ又筆者にも今と言つてその用意がない所であるが、議論の行掛り上、その最も顯著に外部に現はれたる部面を例示すれば、第一、我國に於て殊に不當に言論思想の上に加へらるゝ抑壓の排除を主張する精神的解放の要求。第二、普通選擧制採用、乃至、選擧權擴張の必要を絕叫する政治的解放の要求。第三、甚だ微弱に揭げられたものであるが、大學制度改革案、若しくは各種の試驗制度改革案に關聯して主張せられたる官學特權撤廢の要求。（是は當然他の無數の方面に於ても提起せられざるべからざる社會的解放の要求の前驅と見るべきものである。）第四、最近の米騷動に於て見たる如き、少くとも最低の程度に於ける物質生活安固の保障に對する要求。第五、同じ事件の進行中に於て見たる或る種の局面が暗示する社會的公正の實現――若しくは餘りに著しき社會的不公正の除去に對する要求。第五、近年殊に民心が官僚政治より離れ行く樣になつた事實に依つて指示せらるゝ政治の公明に對する要求……。曰く何、曰く何。といふ風に數へ立つれば際限がなく、且つまた右の列擧樣式は必ずしも科學的分類に據つたものでない外に、尙ほ當然施さざるべからざるその哲學的說明を缺如して居るものとの譏りを免るゝことが出來ないことは、筆者に於て百も承知の上ではある。

が、併しながら兎も角、右に掲げた數項は、最近に於て殊に顯著に社會の表面に現はれたる諸般の事件の基底に潜んで居る精神的要素であつて、同時に此頃の國民思想變遷の方向を指示する資料となるものと思ふのである。所が茲に注意すべきことは、是等のものは孰れも皆、各近代國家生活の健全なる存立のために、絶對的に必要なる條件のみであることである。從つて是等のものは孰れも皆、各近代國家の內的及び外的環境の下に於ては、その國民の國家的理性が健全である限り――若くはその國家的存立力の旺盛である限りは、是非ともその完全なる實現に到達せねば已み難いものゝみである。我國に於ける所謂國民思想變遷の方向が、著しく是等のものゝ方に傾いて居ることは、一は我國が漸次近代國家の通有性を帶びて來たためであり、一は國民の國家的理性――若しくはその國家的存立力の意外に健全であり旺盛であるためであるから、寧ろその足らざるを責むべきものでこそあれ、決してその過ぎたるを咎むべきものではないのである。

斯の如く、近來の我國民思想の變遷は、國民生活上の內的必然性より出でたるものであつて、決して淺薄なる西洋摸倣より來りたるものではないのである。寺內首相の如きは、餘程頑冥なる頭腦の所有者らしく振舞ひて、毫も此間の平明なる理路を看破しやうとはしなかつたのである。さればこそ彼は、右の御用黨代議士招待會席上の挨拶に於て、折角米騷動の遠因の一として國民思想の變遷を擧ぐる程の聰明を示しながら、降つて該騷動の善後策を說く段になると、『……焦眉の應急策としては先づ物價の調節を圖り、國民の生活を安定せしめざるべから』ざることを指摘するに止まるの短見を暴露したのである。斯の如き物質生活安定の目的は、國民を家畜扱ひにする官僚式溫情主義的社會政策の實施に依つても、或は實現し得られやうが、併し國民の要求から言へば、斯の如きものは僅にその一小部分に過ぎなかつたのである。斯う考へて見ると、寺內內閣が折角の思ひ附きの社會政策に躓いて倒れたと同樣に、また折角注意の眼を向けた國民思想の變遷に對する批判を誤り、從つてその對應策に於て失敗した理由も、略ぼ見當が附くのである。所詮寺內內閣を葬つたものは、見えざる――併し強き『時代の力』に外ならなかつたのである。後繼內閣を組織するものは、一時の成敗利鈍に氣を奪はるゝよりは、寧ろ此要點を把握することに向つて、その全力を傾倒せねばならぬものである。(以上・七―九―二六)

(五) 後繼內閣の行艱み

寺內內閣はその成立の根本條件に於て、最終には總てを支配

しなければ已まない『時代の力』と衝突して、遂にその落日的運命に向つて屠所の羊の如き歩を進めたことは、大體上に述べた通りである。唯、理論上寺内内閣の上に疾くより臨むべき筈に見えたこの運命が、事實上極めて遲々として出現したのは、その根本に於ては、寺内内閣の生に對する凄い程の執着に基いたものであるが、而かも此執着的意思をして、大勢に逆行してまでも、久しきに渉つて相當の効果を有せしめた所以のものは、果して如何なる原因に依つたものであらうか。是は遠い所に溯れば、その成立以來それと政友會、國民黨、及び新政會との間に存立したる(それぞれ程度を異にせる)友好關係に歸すべきものであつたが、近い所に降つて來れば、全然後繼內閣の難産に負うたものである。顧みれば、此論文は後繼內閣難より筆を起して置きながら、何時の間にか他の重要なる問題の方面に逸れて仕舞つたが、今は再び元の出發點に復歸する好潮合となつたのである。

一の官僚内閣が倒れて、他の官僚内閣が之に代り得る時代は、我國に於ても永久に去つて仕舞つた。來らんとする時代を支配すべき新勢力は、舊勢力が尙ほ形式的に優勢を維持して居る狀態の下に於ても、既に隱微の間に着々その地歩を占めつつ、最初の機會を捉へて猛然表面に現はれ來つた。即ち從來官僚と妥協しつつ私に潜勢力を養ひつつあつた政黨は、その準備の整うたと共に、官僚に對峙してその本然の地位の獲得のために抗爭すべく起つたのである。而かも官僚の惰性的勢力は、此際尙ほ全然地に墮ちた譯ではなく、尙ほ居然として一方に雄視し、政黨の勢力と一消一長の機を爭ひ得る狀態に在る。この政治上の實際に於ける勢力均衡の上に作用し得るものは、一般民衆中の政治的意識に目覺めたる部分の抱懷する政治思想、並にその產物たる彼等の政治上の信條、感情、及び希望である。而して之が傳播の上に最も偉大なる力を有するものは、現代社會に在つて政治的意義に於ける民衆の重要なる機關たることを以てその本質とする新聞紙である。近年に及んでこの所謂政治的意義に於ける民衆の範圍の著しく膨大したのは、新聞紙の勢力の增大といふ現象の當然の結果であつて、同時にそれだけ、一定時期に於ける政治思想の主流が其時期を通じて有する權威の、決して無視すべからざる有力なる要素となつて來たのである。斯くて政治の實際的局面に於て、政權を中心として相角逐する二大勢力が、略ぼ互角の狀態に在る場合に於ては、その時代に於て優勢なる政治思想の多少の程度に於ける支持を受くる一方が勝ち、その支持を受けざる一方が敗るる破目に立至るのである。寺内内閣が早晩沒落の運命に陷るべきは、斯の如き理路を辿つて考

ふる時は、容易に見極めが附いたのであつて、事玆に至つては、最早山縣公の意思の力は愚か、昔話に聞く清盛の扇を以てするも、竟に之を如何ともすることが出來なかつたのである。

一の官僚內閣が倒れて、他の官僚內閣が之に代り得る時代は、右に述べた如く、永久に去つて仕舞つた。殊に寺內內閣に至つては、尙ほ用ふるに足る官僚の良材の殆んど總てを網羅して居たのであるから、之を拔き去る時は、餘す所僅に隻手の指を屈するにも足りなかつたから、その跡釜に他の官僚內閣を据えることは、單純に不可能であつた。それ故、後繼內閣を平田內閣にするにせよ、清浦內閣にするにせよ、超然主義云々は、最早毛頭問題にはならなかつた。是も詮じ詰むれば、『時代の力』がさせた業であつたのである。

我國の立憲政治が所有するあらゆる內閣組織樣式の見本の內より、超然內閣を引き去ると、殘る所は、官僚と或る單一政黨との聯立內閣(以下單に『聯立內閣』の符牒を以て呼ぶ)と。陸海二相の地位を除きたる以外の純政黨內閣(以下單に『純政黨內閣』の符牒を以て呼ぶ)と。右の意味に於ける純政黨內閣を基礎としながらも、別に二三の異分子を加味して作らうといふ擬似政黨內閣(以下單に『擬似政黨內閣』の符牒を以て呼ぶ)と。それから、各政黨の外に、貴族院、樞密院、外交調査會などの官僚的分子中よりその各個の勢力に略ぼ比例して選拔したる代表者を集めて捏ち上げやうといふ、近頃賣出しの所謂擧國一致內閣(以下單に『擧國一致內閣』の符牒を以て呼ぶ)とである。

右の內初頭に掲げた聯立內閣は、平田加藤提携の形式の下に憲政會內の一部の策士連が劃策した樣であるが、擧國一致內閣にさへ不贊成の口吻を漏らし、公然原內閣の成立を希望する意思を表明する程の雅量と合理性とを示した加藤總裁が、到底それを認むべき筈なく、その他の多數の黨員も之を表立つて主張しなかつた。蓋し斯の如きは、餘りに時代の政治思想の主流と隔絕して居るがために、世間も新聞紙も、眞面目に之に取合はなかつたからである。

然るに最後に掲げた擧國一致內閣は、各種の方面に於て最も呼聲が高かつた樣である。是には種々の理由があるが、その主要なるものを擧ぐれば、第一には、從來內閣製造者の株を獨占して居た山縣公が、當然の理由に依つて政黨嫌ひである所から、超然內閣の成立たないことを發見した場合に、その代替物として擧國一致內閣に思ひ附いたのは當然のことであつた。第二には、擧國一致內閣の首班者として、その門地と閱歷と聲望と思想との上より、官僚と政黨と民衆との間を繫ぐ絕好の懸橋ともいふべき西園寺侯の實在といふ目附け物があつた。實際、西園寺侯を

措いて擧國一致内閣なく、擧國一致内閣を措いて西園寺侯なしと、擧國一致の題目に眼が晦んだ人々に思はれた程も、擧國一致内閣が西園寺侯的であり、西園寺侯が擧國一致内閣的であつた。少くとも彼等の霞んだ眼には、爾が映ずることを誤らなかつた。山縣公も『それ！それ！』と思ひ、松方侯も之に同じ、大隈侯も條件附きに之を賛し、『彼等』も双手を擧げて之に和し、世間も至當のことと思つて之を迎へ、また擧國一致内閣論者中にも、宿命として之を諦め、唯西園寺侯が起つにしても、成るべくは擧國一致内閣を組織するのでなく、政友會を提げて政局に出でんことをとの希望を、空望と知りつつ表白して、徐ろにその結果を待つて居た手合ひもあつた。けれども西園寺侯の態度は、當初より固く決して居たものの如く、元老及び二三の老政客の熱心なる勸告を退け、大命降下以後數日間の持重の末、特に寺内内閣に對する痛烈なる皮肉を含める理由の下に、闕下に伏して大命を拜辭し、剩へ後繼内閣組織者に關する勅問に應じて原氏を奏薦した。斯くて山縣公以下の多數者の擧國一致内閣實現の希望は水泡に歸した。されば一派の人々に取つては、政界の前途の豫測の難きは、天氣豫報の難きよりも難しと思へたであらうが、現代日本に於ける政治思想と政治の實際との交渉點より察すれば、少くともこの瞬時に於ては、大勢がそこに落ち附くべきは、蓋し當然の歸結であつたのである。併し我等はそれを言ふ前に、尙ほ擧國一致内閣の呼聲の高かつた第三の理由を擧げねばならぬ。

――即ち第三には、擧國一致内閣說には、例の『時局重大』といふ好辭柄があり、加ふるに英國の先例もあつたのである。けれども我等は無論、如何に英國の先例があればとて、時局重大であればある程、我國に於ける政情の下に於ては、所謂擧國一致内閣といふが如き官僚と二三の相互的に犬猿の間柄に立てる政黨との水と油との如き數勢力を混淆したやうな不純内閣は、絕對的に不適當であるやうに思つた。且つまた在朝在野に分るる各政黨が、公開せられたる議政壇上に於て國政を討議するは、國家意思の統一を破る行爲ならば、單に時局重大の場合と言はず、平時に於ても到底許すべからざるものであるが、併しながら、右の如く反對の側に立てる在朝在野の各政黨が、國家政策に關して議會を中心として議論を上下するのは、却て國家意思の統一のために最善を盡くす途であるが故に、それだけで國家意志の分裂を促すが如きことは、決してあるべき筈のものでない。殊に我國に於けるが如く、政黨が少しでも國民の監視を離れると、動もすれば官僚化し易き傾向のある所では、政治的責任の所在の擴散せらるべき擧國一致内閣の下に於ては、必ず議

會が沈滯を見るに違ひはなく、議會が沈滯を見れば、從つて政治の緊張が失はれ、政治の緊張が失はれゝば、從つてその公明が掩はれて、封建的專制時代以來今日に至るまで其痕跡を絕たざる陰謀排擠の如きものが、盛に闇黑を利用して跳梁跋扈するであらう。我國に於ても、今後國民の憲政的修養が重なるに從つて、擧國一致內閣主義の實行が、或は可能になる時が來るかも知れないし、又それを實行するを利とする狀態が現出しないとも限らないが、今日は斷じてその時期ではない。時局重大は何も戰爭繼續中に限つたことではなく、戰爭終結後と雖も、依然として時局重大であらう。殊に我國に於て、政黨內閣の練習が未だ積まれない間に、尤もらしく聞えてその實淺薄な俗論的見解の上に立てる、問題の擧國一致內閣が組織せられたる上にて、一朝政局が行詰つた時には、內閣の更迭の上に大遲滯ならばまだしも、大混雜の狀況が示現せらるべきは、今の內より見え透いて居る樣に思へるのである。

所謂擧國一致內閣の最も有力なる論據は、そが動搖性の少きために、現下の政情に於て特に厭ふべきものとすべき頻繁なる政變を見ないで濟むであらうといふ點である樣に見える。併し少し深く考へて見ると、問題の擧國一致內閣の動搖性の少からうといふ推察程宛にならないものはない。水と油との混合が完全に行はれない樣に、擧國一致內閣を構成しやうといふ樣々の異質分子の間の圓滿なる調和は、到底望まれさうにも思はれない。この不調和こそは、近き將來に於ける動搖乃至分裂の基礎となるべきものであることは、左までの洞察力を用ひずとも、明瞭に之を透視することが出來るのである。今少し極端に言へば、我國の政黨は、孰れを見ても、尙ほ未だ政黨としてさへも鞏固なる結合體となつて居ないのであるから、此際俄に政黨的結合を飛び越して、突然擧國一致內閣的結合に移つたとても、それが註文通りの完全なる統一體になれやう氣遣はない。斯の如き狀態の下に於ける擧國一致內閣が、果して動搖性のないものとすれば、それは何等かの無理な技巧の結果であるべきであつて、諸般の情弊は却てその間から生れ出でやうと言ふものである。且つまた、正當なる理由の下に於ける政變は、一般國民に取つては、それ程恐るべきものであらうか。我等は斷じて爾か思はない。當然起るべき政變が何等かのからくりのために起らないのは、それが起るべくして起るよりも、幾層倍も好ましからぬことである。現下に於ける我國の四圍の狀況は、如何にも『時局重大』の四字を正當化する程度の上に在ることは、掩ふべからざる事實ではあるが、而かも正當なる政變ならば幾回反復せられても、それに堪へられない程の壓迫を國民に與へては

居ない。否、寧ろ時局重大に藉口して鵺的內閣を作り、それに依つて政治の沈滯を招き、あらゆる情弊をその間に醞醸せしめて、爲めに百鬼夜行の狀態を準備する事の方が、遙に國民の健全なる國家的生存を毒する可能性に富んで居るのである。

右の外にも尙ほ我國の政界の現狀の下に於て、所謂擧國一致內閣を非とすべき理由は幾通りもあるが、左までは思ふに依りそれはこの位の處で止め、以下更に進んで、それにも拘らず、現下の政變期に於て擧國一致內閣の叫び聲の高かつた第四の原因を擧げねばならぬ。

——卽ち第四には、憲政會の有力なる部分に於て唱へられたる寺內內閣政友會同罪論が、一寸聞くと如何にも尤もらしさうであつて、爲めに政友會內閣の成立を不合理である樣に見えしめ、寧ろ擧國一致內閣を當然の歸結であるかの樣に彩つたのである。政友會は例の是々非々主義を以て寺內內閣に臨み、時には豫算案に對する大修正を施すことに依つて、可なり猛烈に『多數黨の威力』を示しなどしたが、そんな事は程よき處でその鋒鋩を斂め、大體に於ては寺內內閣の御用黨の役目を務め來り、殊に外交調査會に於ける原總裁の地位を通してその外交を翼贊し、最近に於ては出兵問題に關して寺內內閣の放縱を抑制したものの、今度は內政の方面に於て、米騷動の後に當つて『多數黨の威力』の鳴りを鎭め、只管拱手無爲の體たらくで、その開けて待つ口の中へ、『熟柹』の自然に墜ちて來るのを待ち設けて居たのは、黨略のためとはいへ、我等が憲政會の諸君と共に、大に政友會の爲めに取らざる所であつた。是に於て憲政會の寺內內閣政友會同罪論は、兎も角見掛けだけでも立派に成立つた譯である。

殊に憲政會の少壯派と呼ばるる一團は、政友會は寺內內閣と同罪であるから、憲政の常道より見て、寺內內閣が政權の運用に行詰つて倒れたからには、その下に於て唯一の在野反對黨であつた我黨こそ之に代るべきであると主張した。若し彼等が唯此點で踏み止まつて、どこまでも加藤內閣說を持して始終したのであつたならば、我等は後に述べんとする所の理由に依つて、彼等の所謂『純理論』に對して同意を表することを拒まんとするにも拘らず、彼等の衷情を諒として、まだその上に彼等の態度を壯とすることとすら出來る筈であつた。けれども彼等が『然れども……』と切出して述べたその後の妥協論が惡るかつた。

彼等は『然れども現今に於けるが如き、我國の憲政の變態的過渡期に在つては、西園寺侯を中心とする擧國一致內閣の出現は致方がないにしても、萬一官僚閥族が擧國一致の美名の下に、その權勢を扶植せんとするに於ては、少壯派は相當の手段に訴

へて反對運動を起すであらう』といふ主意の申合せを爲したのである。彼等の此申合せは、その語句に於て迂餘曲折を盡くし、その意味に於て曖昧模糊を極め、少くとも人をしてその最主要點の那邊にあるかを捕捉するに苦しましめるが、併し之に相當の情理解釋を加ふる時は、下の如き意味を含蓄するものと見られるのである。卽ちそれは恐らく『加藤內閣を成立せしむるのが最善の道であるが、その成立の見極めが到底附きさうにもないから、次善を得る手段としては、政友會內閣の成立を寛假するよりは、寧ろ憲政會を包含せる擧國一致內閣を認めることにしやうが、擧國一致內閣中に官僚的分子が混入するのは到底免れないから、それを無條件的に認めるとなると、少壯派の純理論の看板に傷が附く。それ故、官僚閥族がその間に勢力を扶植するを許さずとさへ公言して置けば、純理論の手前に申譯が立つ。而して如何なる程度に官僚的分子が混入するのを以て官僚閥族がその間に勢力を扶植するものと見做すべきかは、各人の自由解釋の圈內に在る事で、從つて又少壯派の自由解釋の圈內に在ることであるから、是は占めたものだ』といふ意味であつたらう。孰れにしても、彼等は縱し間違つた前提の上に立ちながらも、飽くまでその純理論に徹することを務むべきであつて、而して此際彼等がその純理論に徹する方途は、成敗利鈍を眼中に置かずして、唯どこまでも加藤內閣の主張に殉すべき一事であつた。併し萬一彼等が如何しても妥協論をしなければ氣が濟まないといふのであつたならば、彼等は宜しく事實のロジックの前に暫く忍從して、政黨內閣の主張を擲つよりは、寧ろ我黨內閣の主張を擲つて、『官僚臭の當然混入すべき擧國一致內閣を寛假するよりは、寧ろ熱湯を呑む心地になつても、純政黨內閣たるべき原內閣を認めやう』と出るべき處であつた。而して是が妥協の最大限度であつて、彼等は之を超えてはならぬ筈であつたのである。然るに彼等がこの政黨道德の命令を破つて、遂に自黨內の多數者の御都合主義に調子を合せたのは、彼等のために惜みても餘りあることである。

併し寺內內閣の下に於ける唯一の在野反對黨であつた憲政會こそ、當然該內閣倒壞の後を承けて政權を執るべきものであるといふ議論は、政黨內閣が既成の事實である場合に於てのみ成立つ議論である。換言すればそれは、寺內內閣が寺內內閣でなくて、幾分でも政友會內閣であつた場合に成立つ議論であつて、その前提が缺如して居た現前の場合——卽ち是から政黨內閣を作らうといふ場合に於ては、到底成立たない議論である。政友會は大體に於て寺內內閣を助け來り、而して政界に於ける大抵の術語が明確なる一定の科學的定義を有して居ない今日の狀態

の下に於て、屢ばその『與黨』と呼ばれ來つたことは成る程疑ひもなき事實であるが、それに拘らず政友會は、在野黨であつた點に於て憲政會と變らなかつたことは、憲政會が自黨のことを單純に『唯一の在野黨』と呼び得ずして、面倒ながら『唯一の在野反對黨』と複雜に呼ぶの外がなかつた事實に徴しても、十分に之を證明することが出來るのである。

右の外に、尙ほ寺内内閣時代を通じて、憲政會と政友會とは、内政外交上の主要問題に關しては、政策上殆んど同一意見を有して居たのである。殊に第四十議會に於ては、内政上の主要問題であつた國防計畫及增・廢・減・新設稅等に關し、また最近の出兵問題に關し、全然同一步調ともいふべき態度を持し、殊に後者の討議の沸騰して居た頃は、この兩黨の提携までが世上の問題にせられた位である。孰れにしてもこの兩黨は、多くの場合に於て寺内内閣を引摺つて、兩黨の立場にまで齎らし來つたものである。故に寺内内閣の政策にして立て直しを要するものとせば、同一の理由に於て兩黨の政策も亦立て直しを要するのである。我等は前段に於て、寺内内閣が時代の轉換期に處する政策を誤まつたことを責めたが、それは該内閣が當事者の地位に在つた理由に依つて、勢ひ攻擊の鋒をそれに向けたのであるが、若し兩黨――若しくはその孰れかが局面に立つて居たものとすれば、恐らく攻擊の鋒を兩黨――若しくはその孰れかに向けざるを得なかつたであらう。而して今や、一切の政策の改造期に際して、過去に於ける政策の失敗の當の責任者たる寺内内閣の退場を促すのは素より當然であるが、さて今我等が擧國一致内閣を非とする立場よりして、兩黨の内の孰れかを取らざるべからざるものとせば、是までの筋途を考ふれば、兩黨の要求權が略ぼ互角であるが故に、我等はその取捨に迷はざるを得ないのである。けれども我等は或る他の點に於て、兩黨の要求權に一長一短の比較すべきものが尙ほ殘存して居ることを認めるのである。

卽ち憲政會は唯一の在野反對黨として、第三十八議會以來の每會期に於て、初回は國民黨と共同し、而して次回以後は單獨に、專ら憲政上の立場より寺内内閣に對する不信任案を提出したのである。是事は今回の政變に際して、憲政會の要求權に對して、多大の强味を加ふべき筈のものであつた。けれども何を言つても同黨は、衆議院内に於て百二十名内外の議員を有するに過ぎざるのみならず、他の總ての黨派を擧げて敵側に廻はして來たのであるから、事實上自黨を中心として政黨内閣を組織することは、來るべき第四十一議會に於ける解散の斷行を眼中に置いても、甚だ足許が危ぶないのである。之に反して政友會

は、その從來の憲政的立場が寧ろその弱點を構成して居るが、併しながら自黨を中心とする政黨內閣を組織する能力から言へば、到底憲政會の比ではない。成る程政友會は衆議院に於て百六十餘名——卽ち全院の半數に約三十名も足らぬ數量的勢力を擁して居るに過ぎないが、國民黨及び淸和新政二派とは從來友好關係を持して居た上に、官僚內閣との從來の關係上、貴族院との交涉に於ける難關をも比較的容易に潛り拔け得る狀態に在る。是は優にその數量的勢力の不足を補充するに足る事實上の勢力である。尤も之あるがために、政友會の憲政的立場が益す弱味を增す譯であるが、併しながら困つたことには、此間に於て政友會を中心とする政黨內閣を認めないとすると、官僚臭の更にそれよりも甚しき擧國一致內閣の出現を可能とする結果となるのである。故に、擧國一致內閣と政友會內閣との間に於ける取捨選擇は、善惡二物間に於けるそれでなくて、二個の惡物間に於けるそれである。唯政友會內閣が擧國一致內閣よりは、憲政上の立場より見れば惡分子が遙に少く、良分子が遙に多いのであるから、憲政會少壯派の言ひ草ではないが、現今に、けるが如き我國憲政の變態的過渡期に於ては、政友會內閣の成立をも、遺憾ながら一大政治的進步として迎へねばならないのである。之に反して、若し大隈侯の意見の一半に從つて、憲政會の憲政的立場の强味を立て通さんがために、飽くまで政友會內閣の成立を妨ぐる時は、結局憲政會內閣も出來ず、原內閣も出來ずして、政友會內閣よりも更に惡しき擧國一致內閣を以て甘んじなければならないといふ、虻蜂取らずの結果に陷るであらう。此理由に依り我等は、加藤憲政會總裁が、自黨內に於ける聯立內閣說や擧國一致內閣說に與みせずして、率直に原內閣成立の希望を公言したる態度を多とせざるを得ないのである。

擧國一致內閣說の呼び聲の高かつた理由を述べて居た間に於て、我等は同時に、政黨內閣說が之に對抗するに足る程の實勢力を有するを得た理由をも共に述べ盡くしたから、今は別に項を設けてそれを細說する必要を認めない。要するに最近に於ける政局の停滯は、之を高所より達觀すれば、擧國一致內閣說と政黨內閣說との間の交錯紛糾のためであつて、斯の如き渾沌狀態の比較的長期に亙つて繼續した所以は、今回の政權爭奪戰に於て、舊來の政治上の實勢力の外に、尙ほ政治思想が有力なる一新勢力として加はり來つたからである。此意味に於て我等は、今回の政局轉換期に於ける後繼內閣難を以て、寧ろ憲政上の一新時期の誕生に先だちてその母體が受けた苦悶と見るものである。唯此度の政變に於ける敗者たる官僚の勢力の、尙ほ隱然たる地步を占めて一方に割據し、何時復活するかも判からない狀

態に在ることは、我等の大に警戒せざるべからざる所のものである。而かも之を防禦する最大の武器は、時代の政治思想を淨化し、深化し、精神化し、且つ之をして一般民衆の間に普遍化せしむることであらねばならぬ。(以上・七ー九ー一七)

(六) 當然の歸結

西園寺侯が山縣公の手を代へ品を替へての熱心なる勸告を斥け、自家獨立の判斷に從つて大命を拜辭し、同時に御下問に應じて原政友會總裁を奏薦に及んでより、山縣公以下の官僚政治家、及び官僚的老猾政黨政治家、並に無邪氣若しくは有邪氣に彼等に迎合したる多數の論客の、さしも頑固に主張したる擧國一致內閣も、その成立不可能の見込みが遂に確實となるや、豫ねて久しく停滯に停滯を重ね來りし政局は、此瞬間より驚くべき速力を以て疏通し始め、數日ならずして原總裁の大命拜受となり、政友會を中心としての政黨內閣組織の端緒が、玆に極めて自然に開かれたのである。

果然、政黨內閣の招徠が時代の趨勢であつて、縱令一時たりとも此趨勢を阻止して居たものは擧國一致內閣組織の計畫であつたことが、白日の如き明瞭さを以て立證せられた。とはいへ如何に政黨內閣の機運が時代の趨勢であつたにしても、この趨勢の進路を開通することに於て、西園寺侯その人の個人的明察及び努力が多大の貢獻を爲したことは、恰も此趨勢を一時たりとも阻止したる擧國一致內閣の試みをものにしたことに於て、山縣公その人の個人的見解及び干涉が大に手傳つたのと同じことである。併し觀じ來れば、それもこれも皆共に、更に大なる人類の政治的進化の、更に長き過程の縮圖を構成する一場の小波瀾に過ぎないものであるが、唯此間に在つて聊か注意すべきことは、時代と人物との關係が、そのあらゆる意味に於て、そこにも歷然として指摘すべく示現せられて居ることである。

斯くて今回の政變は、一種の政黨內閣の成立を以てその當然の歸結に達した。而して『中原の鹿』にはあらぬ一個の『熟柿』を手に入れたものが、實に政友會に外ならなかつたことも亦、おのづからなる歸着點であつた。

政友會が『熟柿』を手に入れたといふことは、同黨が鬪はずして政權に有り附いたことを暗示するものである。我等は政友會の獲物が『中原の鹿』でなくして、單に一個の『熟柿』であつたことを、同黨のために遺憾とするものである。寺內內閣在任期間を通じて政友會は必ずしも、少くとも『中原の鹿』に似たるものを射るべき機會に事を缺かなかつた。殊に最近に於ける米騷動の後こそは、政友會がその『多數黨の威力』を適當に行使すべき時ではなかつたか。然るに政友會は鬪ふの難きを棄てて、寢て

待つの易きに就いた。此間の掛引の機微は、總裁及びそれを繞ぐりて運行する『諸星』の苦心慘憺の餘に出でたことでもあらうし、また黨員の多數の目には、それが聰明なる頭腦より割出された巧妙なる黨略とも見えやう。けれども歴々の『諸星』の苦心の畫策も、獲る所は『熟柿』唯一個とは、單に外間に對して滑稽に聞えるのみならず、その結果より見れば政友會の弱味となり、延いては折角出來上つた政黨內閣の弱味ともなるべきものである。原內閣が簡明直截なる『純政黨內閣』なる能はずして、前段に於て筆者が假りに命名した『擬似政黨內閣』たらんとする傾向を強く有して居るのは、全然とは言ひ得ざるも、少くとも一部分はそのためでなければならぬ。

兎も角、原內閣は鬪はずして得られたる獲物である。即ち一は近來に於ける政治思想の進歩に依つて促されたる時代の趨勢に依り、一は西園寺侯の賢明なる措置に依り、尙ほ一は山縣公が事實の脅威の前に餘儀なく示した謙抑に依り、また一は恐らく加藤憲政會總裁の聯立內閣乃至擧國一致內閣に耳を假さなかた合理的態度に依り、即今議會に於ける絶對過半數黨にあらざるも、尙ほ且つ最優勢黨であるといふ好地位に在る政友會が、僥倖にも鬪はずして手に入れたる『熟柿』がそれである。從つてそれは極めてデリケエトなる果實であるが故に、その保存法及び利用法に就いては、政友會はその之が獲得を可能とならしめたる諸原因を最も精細に考察して、必要なる工風を講ずる所がなくてはならぬ。而して政友會をして此獲物に有附くことを得しめたる諸原因中に在つて、その最も有力にして且つ重要であつたものは、近來に於ける政治思想の進歩に依つて促されたる時代の趨勢に外ならざることは、政友會內閣が殊に愼密に省察せざるべからざる一要點である。尙ほ政友會內閣に對する要望に就いては、稿を別にして一言する積りである。

政友會內閣の成立に依つて出で來りたる政黨內閣が甚だ危ふ氣なものであつて、其上反動的氣勢が尙ほ極めて回歸し易き狀態に在るものであることは、憲政會及び國民黨も共に留意せねばならぬ所である。憲政會は反對黨として堂々として戰ふべしと言ひ、國民黨は是々非々の態度を取るべしと言ふが、孰れにしても兩在野黨が政策を中心として、堂々と公明正大なる抗爭を爲すは、大に結構なことであるが、併し是以外に亘り無用に機略を弄して、強いて局面の混亂を惹起し、延いて世間より大なる期待を受けて居る政黨內閣の信用を裏切つてはならぬ。政黨內閣の信用は、三黨共通の利害關係であることは、彼等が此際特に考慮を費さざるべからざる所である。各政黨及び一般國民は、今後と雖も正當なる政變は決して避くるに及ばないと同

時に、政變は常に正當なるものであらせる樣に努めなければならない。

『擬似政黨内閣』の形式を以て現はれさうな原内閣は、上來說述した諸理由に依つて、その成立の過程及びその組織の根本性質に於て、政黨内閣としては完全なるものでないのみならず、完全に甚だ近いものでもないが、併し同時にそが超然内閣に優れるは素よりのこと、所謂擧國一致内閣に比しても、遙に優つて居るものであることは、現下の我國に於ける民衆間に流布する政治思想より見て、明確に斷言し得られるのである。總ての改革運動に於て、一擧にしてその理想に到達し得られるが如きことは、縱し絕無にあらずとするも、極めて稀にのみ有り得ることである。この點を顧慮することに依つて、我等は一方に於ては、政友會内閣の成立に對して條件附の歡迎を與ふることを躊躇せざると同時に、他方に於ては、反動的氣勢襲來のあらゆる機會に對して、緊肅せる注意を以て常警戒線を張らんとするものである。（以上・七―九―一八）

食物の生物的眞價を說いて榮養學的根據なき食糧節減を排す

醫學博士　永井潜

（一）

『大凡物不得其平則鳴』とは韓文公の一喝した所である。而して其平かならざる點が、外から壓迫せらるゝ事に由つて起る場合も勿論多いにあるのであるが、然し人の自然の本性に基ゐて、肉體の生理的關係より、將た精神の本能的欲求より起つた不平であると、其鳴る事も亦最も大なるものである。

哲學者が何と云はうとも、當分戀と饑ゑとで世界の
狂言が行はれて往く

とシルレルは云つて居るが、實際生命を保續して行く上に於て、最も熱烈なる欲求は此二つである。人の生活に缺くべからざる

ものは衣食住であるとは、昔から言ひ來つた所であが、生命の炎を燃やす最も大切なる油は食物である。食物を外にし衣服や住居に腐心するのは、恰度金銀の「ランプ」を螺鈿の机の上に置いて、さて油を注ぐことを忘れたと同じである。いかでか生命の光明を望むことが出來やう。衣と住とを取つて直に之を食に列べるのは、大に其權衡を失して居る。『命は食に在り』。之れ即ち食物に對する欲求の大なる所以であつて、而して又此欲求を滿足する事の出來ない不平の、鳴ること最も甚だしく、而して其の鳴るや最も怖るべき所以である。『我れにパンを與へよ、然らずんば死を與へよ』といふ聲が、若し社會の一角に起つたならば、其社會は即ち危いのである。此意味に於て、食物の問題は啻に一身一家の問題たるのみならず、亦實に天下國家の休戚に關する大問題である。

西歐に於ける今爾の大戰役は世界人類の社會的生活に一大革命を起ささねば已まない。其餘波は滔々として極東に位せる我帝國にも押寄せつゝ、各方面に甚劇の動搖を喚び起してゐるが、而かも上下擧つて安閑無爲、食糧問題に關する其動搖の如何に大いなるべきかを忘れて居たが爲めに、不幸にして最近の不祥事を喚び起したのは、實に聖代の一大恨事である。然し乍ら、之に依つて上は廟堂の士より下は一童僕に至るまで、榮養問題が如何に重要なる意義を有するかを自覺せしめ、之に關して非常な注意を喚起した事は、寧ろ喜ぶべき現象である。吾人は須らく此活劇に鑑み、此危機に際會して、協心戮力此重要なる問題を調査し、我帝國の前途の安寧と福祉との爲めに、十分解決の途を講ずべきである。

食糧問題の解決が、決して單純なる仕事でない事は言ふまでも無い。或は經濟方面より、或は殖産方面より、或は交通方面より、凡ゆる社會的施設に依つて其供給を潤澤ならしめ、其價を低廉ならしむ事も必要であらうし、或は衞生學的見地の下に之が節約の途を講ずる事も必要であらうし、或は國民の嗜好を顧慮して適當に之を指導して、有利なる榮養をなさしむる事も必要であらう。斯く其爲すべき事は一にして足りないが、要するに其等の凡ゆる手段を最も有効ならしめ、且つ徹底せしめる爲めには、榮養に關する正當なる知識を、あらゆる階級を通じて行き亙らしめなければならぬ。

（二）

何故に吾人は食物を攝らねばならぬか。生活體は時々刻々活動を續けて居るものである。其活動の力は何處より來るかと云ふに、體成分をなせる種々なる有機化合物が、分解され酸化される爲めである。仍で之を補ふ爲めに必ず一定量の有機成分を、

外界より仰がなければならぬ。食物が即ち夫れである。殊に小兒の如く發育時期にあるものは、單に失はるゝ所の、物を補ふ爲めのみならず、新に身體を形ち作る爲に必要なる量の養分をも攝らねばならぬ。

有機成分の內、身體の成分を成せる最も大切なるものは蛋白質で、人間の身體に就て見ても、水分の六割七分を除いて剩り三割三分の中、約二割は蛋白質及び其分解物から出來て居る。脂肪の如きは人によつて多少の相違があるが平均二分五厘、鹽類約一割、含水炭素は極めて僅かしか無い。其等の成分を補ふ爲めに攝る所の食物は如何と云ふに、其主なる物質は蛋白質、脂肪及び含水炭素(澱粉糖類)である。尙其外水及び鹽類が含まれて居る。此等の物質を養素若しくは食素と總稱するのである。此の養素若くは食素は榮養上大切なる價値を有つて居るものであるが、何れも味ひ無く、或はたとひ味ひを有する物ありとするも極めて無趣味で、其儘では到底必要なる分量に於て攝取する事は出來ない。併し乍ら天然の產物中には、此等の實用的成分の外、尙ほ種々複雜なる化合物があつて、或は之に芳香美味を與へ、或は此等の養素の活用を完全ならしめて居る。前者を一般に嗜好素といひ、後者を「ヴイタミン」又は「アクセッソリー・ファクトル」と稱んで居る。

嗜好素の必要なるは啻に之に依つて食慾を喚起して、食物の攝取を十分ならしむるに止まらず、同時に消化液の分泌を盛ならしめ、消化吸收を完全に行はしむる利益がある。「スープ」の如き味の素の如き、何れも夫れである。

「ヴイタミン」の必要なる事は一七七六年の昔に於て、有名なるカピテン・クック氏が早く已に心着いた如く、永い航海を續けて新鮮なる肉や野菜の供給を斷たれると、壞血病に罹かる事實から觀ても明瞭である。殊に近時脚氣の研究から、白米を雞や鴿などに與へて起る所謂白米病なるものは、糠の中に含まれて居る「ヴイタミン」の缺乏に基くといふ事が明かになつて以來、一層其の研究が八釜しく成つて來た。此の「ヴイタミン」の效能が如何に著るしいものであるかは、次の關係を見ても明かである。卽ち五萬瓦の糠を取つて、それから引取り得る「ヴイタミン」の量は、僅かに〇・四瓦に過ぎぬ。今鴿を白米のみにて養ひ、白米病に罹つて危險な狀態に陷つたものに、其百分の一卽ち四瓱瓦を與へると病氣が恢復して來る。罐詰め等貯へられたる食物中には漸次「ヴイタミン」が分解して缺乏する爲め、種々の害が起つて來るのである。

（三）

翻つて最も大切なる成分たる蛋白質に就て考へて見ると、此

物を形造る土臺と成るものは、種々なる種類の「アミノ」酸であつて、其「アミノ」酸の種類及び其組合せ方の如何に依つていろ／＼異つた蛋白質が出來るのである。同じ血液の蛋白質と云つても、人間は人間、馬は馬、羊は羊とそれ／＼違つた性質を顯はし得るのは、全く此「アミノ」酸の關係に基くものである。蓋し蛋白質は非常に複雜せる分子の構造を示せるもので、多數の原子がいろ／＼に排列せられ、其排列の如何に依つて蛋白質の性質が變り得るものであるから、殆ど際限無く種々の種類が出來る。ミーシエル氏の言ふ所によると僅々四〇の炭素元子を有する簡單な蛋白質でも、理論上一億萬の種類を生ずることが出來る。然るに蛋白質によつては、七〇〇以上の炭素元子を有する物もある。以て如何に其の多數であり得るかを窺ふことが出來る。斯樣にして蛋白質の性質は獨り動物の種族に依つて異るのみならず、八釜しく云へば、同種族の動物でも、其各個體に從つて異る事、恰も人心の異るは人面の異るが如きやうな狀態である。

斯の如くいろ／＼特殊の性質を帶びたる蛋白質を食物として、夫れで自分の身體に固有する蛋白質を補給新成しようといふには、勢ひ食物として取込める種々性質を異にする蛋白質を、一遍細かに分解して、各種の「アミノ」酸となし、さうして其內から必要なる材料を取つて、之を自分の身體に固有なる蛋白質に組直す事が必要である。消化作用の大切なる點は全く此處にあるのである。それであるから食物として蛋白質を取込む際に、成るべく自分の身體の蛋白質に代り得るやうな材料を、充分持つて居れば居る程榮養上都合が好いのである。從て犬を養ふに犬の肉を以てし、蛙を養ふに蛙の肉を以てする時、其榮養は最も有利に行はれるのである。何となれば、斯かる場合には其身體を作り上げるに必要なる材料が缺ける事が無いからである。

之に對して同じ量の蛋白質でも、其性質が懸離れて居て、其中にある「アミノ」酸の種類及び數が、其動物のそれに比べて非常に異つて居る場合には、榮養上の價値は遙かに劣る者である。最近まで之等の點に氣を附ける人が少くして、同一量の蛋白質であれば、動物性の物であらうが、植物性の物であらうが、將た又獸肉であらうが、魚肉であらうが、吾人の食物として榮養上の價値に少しの徑庭の無いものと思つて居た。然るに近年になつて其點に關して一新智見が加へらるゝに至つた。伯林の有名なる榮養學の泰斗ルブネルといふ人の許で、ソーマスといふ人が此點に關して研究した成績に據ると、同じ植物性の蛋白質でも、米から得た蛋白質と小麥から得た蛋白質とでは、榮養上の價値が頗る違ふのである。米の蛋白質一〇〇瓦は人間身體の蛋

白質の八九瓦に成り變る事が出來るのに反して、小麥の蛋白質一〇〇瓦は僅かに三七乃至四九瓦、玉蜀黍の蛋白質一〇〇瓦は三〇乃至四〇瓦にしか成る事が出來ない。此關係を名づけて生物的眞價と呼んで居る。

斯樣な譯であるから榮養問題を根本的に解決しやうと云ふのには、從來やり來つたやうに、單に其食物を分析して、蛋白質、脂肪、含水炭素、水、鹽類の分量を測つただけでは不十分である。進んで其生物的眞價を討ねなければならぬ。去り乍ら之に關する研究、就中本邦の食品に關しての此の知識は實に幼稚である。幸にして本邦人の主食品たる米の蛋白質は、西洋の主食品たる小麥のそれに比べて榮養的眞價が頗る高い事は、大に心強くする次第である。馬鈴薯の榮養的眞價も、小麥の夫れよりも遙かに多くして、一〇〇瓦の馬鈴薯の蛋白質は、七〇瓦の人體の蛋白質に代り得るものである。此の點から論じても、榮養學者が戰時に於ける小麥の缺乏を補ふべく、馬鈴薯を以てするのは最も策を得たものであると言ふことが出來る。

（四）

次に含水炭素の食物としての意義を考へて見ると、後に云ふやうに、食物として日々最も多量に取らるのは含水炭素である。而してそれが身體の成分となつて存續されて居るのを、ると、云ふに足りない微量である。此點から考へても、含水炭素は身體の成分を形造る上に價値が無く、從て攝れば從て消費せられ、專ら勢力の根源と成ることが明かになる。蓋し含水炭素は尤も易く分解酸化されるもので、力の根源となる上に於て最も便利である。脂肪は如何と云ふに食物として攝る所の分量は最も少い。實際脂肪は消化吸收が割合に困難で、餘り多く攝れば下痢を催すだけで、悉く之を吸收する譯には行かない。去り乍ら脂肪は其中に頗る多量の勢力を貯へてゐる。蛋白質及び含水炭素は體内で燃える場合に、四・一カロリー（一カロリーとは水千瓦を攝氏の一度だけ高むるに要する熱量）の勢力を放つに反し、脂肪は九・三カロリーの勢力を出し得るものである。即ち二倍半も勢力に富んで居る。從て燃えて熱を出して體溫を保つて行くが如き場合には、最も必要なる作用をなすものである。但、脂肪も含水炭素も共に其の分子中に窒素を有つて居ないから、窒素を含んだ有機成分たる蛋白質に變り成る事は出來ない。從て食物として如何に多量の脂肪や含水炭素を取つて居ても、それだけでは到底身體の蛋白質の消耗を補ふ譯には行かない。隨つて又生命を維持する事は出來ない。然し乍ら脂肪や含水炭素を攝る事によつて、之を取らなければ消耗せらるべき身體の蛋白質を庇護し、蛋白質の分解を節約する效力がある。

（五）

次にどれだけ食物を攝れば健康を保つ上に差支へはないかと云ふと、獨逸の有名な醫化學者フォイト氏は、獨逸の多數の青年男子に就て毎日十時間、中等度の勞働をする者に於ては、平均次の如きものであると述べて居る。

蛋白質	一一八瓦
脂肪	五六瓦
含水炭素	五〇〇瓦
總カロリー	三〇五五
（利用カロリー	二八〇〇）

利用カロリーと云ふのは、攝取した食物の幾分が不消化で吸收を受けないから、それを勘定に入れて實際吸收された部分についての「カロリー」を查べたものである。此れが卽ち夫のフオイト氏の保健食量と云はれるものである。今フォイト氏の保健食量を日本人に直して見ると、日本人の體重は獨逸人の體重の七〇乃至七五基瓦について約六〇基瓦で其五分の四にしか當らぬから、此事を勘定に入れて、又日本人の食物は澱粉に富んで脂肪が少い事を顧慮して見ると

蛋白質	九五瓦
脂肪	二〇瓦
含水炭素	四五〇瓦
總カロリー	二二四〇
（利用カロリー	二二五〇）

となるのである。實際又本邦人の日々攝取する食物を、種々なる階級に渡つて調査した結果は、平均一日、

蛋白質	一〇〇瓦
脂肪	二〇瓦
含水炭素	四八〇瓦
總カロリー	二五六〇

となつて居つて、フォイト氏の保健食量とよく一致した成績を上げて居る。

尤も此内一番問題となるのは蛋白質の分量であつて、實際蛋白質及び脂肪に富んで居る動物性の食品は、澱粉に富んで居る植物性の食品に比べて價が高い。隨て粗食して勞働に從事して居る人達が、果して日々蛋白質の一〇〇瓦、（之を肉に直すと約百二十目の量と匹敵する）を取つて居るか否やは頗る疑問である。此等の點に眼を着けてフォイト氏の保健食量では蛋白質が大に贅澤ではないか、必要に應じては之れ以下に蛋白質の分量を下げて、而も能く人體に於ける蛋白質の新陳代謝を完全に維持して損失なからしむることが出來はしないかと云ふ事に考

へ及び、自分自身麥飯、味噌、香の物等を攝つて研究をされたのは本春逝去された故隈川宗雄先生であつた。而して實際其豫想は適中したのであつた。フオイト氏の保健食量から割り出して見ると、大人は一日一二〇瓦の蛋白質即ち一九瓦の窒素（蛋白質は其中に一割六分の窒素を含むから）を攝ることになる。然るに隈川博士の實驗に依ると、蛋白質の分量を其半分以下に下げて一日に攝り得る窒素の量は八・八瓦でも、他の脂肪や含水炭素の供給が十分であれば尙榮養上差支へなく、十分に身體の蛋白費を補ひ得る事が確かめられた。獨り隈川博士のみならず、多くの研究家が此問題に着目して、隨分著るしく蛋白質の量を減じても差支へない事實を報告して居る。即ちシユルフエルト氏に據れば四・七瓦、フレッツチャー氏に據れば六瓦、シーベン氏に據れば七・五瓦、ヴアン・ゾンメルン氏に據れば四乃至六瓦である。殊に此點に關して頗る大仕懸けの實驗をして居るのは米國のチツテンデン氏であるが、氏は割合小男で五〇基瓦の體重しか有つて居ないが、其自分の身體に就て一日の蛋白質攝取量を三〇・七瓦まで下げても、尙蛋白質の新陳代謝に損失の無い事を報告して居る。其他尙十三人の兵士、七人の運動家に就て實驗をして、餘程多い場合でも七五瓦、少い場合には三五瓦の蛋白質で其の需要を充たす事が出來ると結論して居る。同じく米國の榮養學の泰斗メンデル氏は、自分の身體に就て實驗して、蛋白質の攝取量を五〇瓦まで下げても差支へ無いと述べて居る。

此等の研究に由つて榮養學上食物の節約に關して根據が與へられて居るのである。蓋し生物の體は極めて微妙なる調節作用を表はすもので、一定範圍内では若し多量の蛋白質を攝るならば、矢張體内で多量の蛋白質が壞はれて外に出て來る。それに反して攝取すべき蛋白質の量を節約すると、それに伴つて體内に於ける蛋白質の分解量も亦減つて來る。恰も餘計收入があると自ら浪費を行ひ、收入の減つた時には之を愼んで、收支相償ふやうにすると同じ關係が、人體の蛋白質の經濟の上にも見られるのである。勿論之は或る範圍内で云ふ事で、此の範圍を超えて非常に餘計攝れば體の蛋白質は增加し、之に反して非常に僅か取る時は之が消耗を補ふことが出來ずして、何れも其調節は崩れて終ふが、併し或る程度までは斯の如き調節作用あるが爲めに、蛋白質攝取量を減じても、榮養上少しも憂ふべき結果を見ずに濟むのである。現に今回の大戰爭に於て必要上餘儀なくされて、從來學者が實驗室に於て小仕懸けに行つた實驗的結果を大仕懸けに證明して居る。例へば戰爭前には獨逸の國民は每一日平均二九三二カロリーを有する食物を攝つて居たのである

が、戰時にはそれを減じて一三八〇カロリーにして居る。伯林では切符制度で明かに此事を實行して居る。又亞米利加の慈善團體が白耳義の避難民に慈善的食量供給を切符制度で行つて居るのも二〇〇〇カロリーを標準として居る。斯樣な譯であるから必要に迫られゝば、隨分食量を節約し得るものである。就中最も高價である蛋白質は、止むなくんば標準的保健食量の二分の一若くは三分の一に節約しても差支へ無いことが唱へらるゝに至つた。此榮養學上の知識から割出して危急存亡の場合に方つては、人々は安心して食量節約の命令に服從して可なりである

加之、一派の學者の意見によると、老衰が起り身體が弱るのも、其の主なる原因は、飽食して其の過量の食物が腸管內で腐敗し、有害物が出來、之れが吸收せられて害を及ぼす爲である、隨て節食は保健長壽の秘訣であると言つて居る。さりながら此所謂自家中毒說なるものは、未だ學問上十分の根據を有つて居るとは言へない。

（六）

此の減食問題と同時に食量經濟の上に閑却すべからざる問題は、一面食物の分析を行ひ、殊に進んでは榮養的眞價の關係を考へて、經濟上廉價にして且つ又榮養價の大なる物を選んで、調理に上ぼす事が大切である。具體的に云へば我國に於ける米の收穫は明治四十四年より大正三年に亙る最近五年間の平均高は五千二十五萬石、明治三十八年より四十二年に亙る五年間の平均は四千七百三十餘萬石で、先づ一年五千萬石と見て差支へ無い。而して人口の增加する割合と米の收穫の增加する割合とは相伴はないのであつて、年々に不足を告ぐる爲、多き時は五百萬石平均三百萬石の外米及び朝鮮米を輸入して居る。一方又美味に對する欲望は年々增加して、德川の中葉までは民衆は米と云へば皆玄米を食として居つたのに、精米が一般に行はれ、且つ其程度も强く、同時に又農民の如き多數の階級の人は、麥粟稗等の雜穀を主食品として居たのに、白米を食ふやうになつた。此等の關係が相待つて年々米の不足を告げる事が著るしくなつて居る。之を救ふには宜しく既に述べた榮養學上の研究を基礎として、適當なる代用品補給品を見付けなければならぬ。今最も廉價にして、且つ米と同じく含水炭素に富んで居るもの多量の產額を有する物を尋ねると、先づ第一に甘藷がある。其出來高は一年約十億萬貫である。十億萬貫の甘藷の含水炭素を以て米の含水炭素を補はうとすると約四億萬貫の白米、卽ち約一千萬石の白米を救ふ事が出來る。甘藷は此意味に於て最も大切なる米の代用品である。吾人は宜しく靑木甘藷先生に感謝すべきである。殊に或る地方卽ち中國の島々の如き水田なく隨て米の

收穫の無い地方では、住民が永年甘藷を主食品として居るが、榮養上差支がない。して見ると甘藷の栽培を一層盛んにし、其の浪費の無いやうに注意せねばならぬ。次ぎに蛋白質に富んだ而かも比較的廉價なるは豆類である。大豆の收穫は一年約三百七十萬石で、之を以て米の蛋白質に代用すれば、約千六百六十萬石の白米に該當する。日本では大豆の利用が割合に能く行はれて、或は味噌、醬油を造つて居るが、西洋では殆ど之を家畜の飼料として用ゆるに過ぎない。次に日本の食品の缺點は脂肪に乏しい事であるが、廉價で且つ繁殖もよく、脂肪にも蛋白にも富んで居て、最も推奬に値すべき食物は落花生である。落花生の脂肪は四四・五パアセントで之を白米の〇・八パアセントに比べると五十倍に登る。而して其收穫高は一年約四十萬石で、其脂肪を白米のそれに代用し得るならば二千萬石の白米に當る。殊に落花生は沍寒の荒地にも出來るから、北海道の如き朝鮮の如き土地に是非栽培を推奬したい。

尙ほ米節約の問題より考へて見ると、清酒を造る爲めに日本米、就中特に其の品質の優良なるものを消費することは大いに考へなければならぬ大問題である。從來造酒の爲めに消費する米の石高は一年平均三百乃至四百萬石であつたが、昨年は一躍して五百萬石以上になつて居る。之れは畢竟成金氣分の然らしめた結果で、食品節約上最も留意すべき問題であると信ずる。酒が衞生上有害であることは今更言ふ迄もない、況んや其の爲に此の必要缺くべからざる貴重なる主食品を消費すること如斯甚だしきに至つては、之を不問に附する譯には行かぬ。一知半解の徒は說をなして曰く、造酒を制限せば尤も大切なる稅源を失ふと。併しながら釀造高を減じて、夫の代りに稅率を高むるも可なり、況んや幾百萬石の白米を助くることによりて優に稅源に失ふを補ひ得るに於てをやである。

其他食品經濟の上より論ずれは、同じ金を以て購ひ得る食品の榮養價は、其品質の如何に由つて著るしく相違する、從つて日常榮養學上の智識に基いて、如何にせば最も廉價に最も確實に、而して榮養に適せる食品を買ひ得るかに注意を拂はなければならぬ。

更に又食物の問題は感情生活と密接な關係を有して居る。假令實用的經濟的であり、又榮養價が高いと云つても、嗜好に叶はねば駄目である。此意味に於て食品の選擇調理が深き研究を要する所以である。

（七）

今や我國でも戰爭の影響を蒙つて食品經濟・食品節約の聲が矢釜しくなつた。此秋に方つて人々自覺して一粒の米一片の肉

も之を節約することの實行は頗る大切であるは言ふ迄もない。去りながら玆に一言せざるべからざることがある。元來人心は動もすれば極端から極端に奔るもので、食量節約の聲喧しきに連れて、何等榮養學上の基礎を顧慮する事無くして、無暗に食量を節減するを以て能事とする傾向を生じたのは頗る憂ふべき事である。食量節約を實行せんとせば、宜しく榮養學的智識と之に對する信念を以て事に當るにあらざれば、到底確實なる效果を上ぐる事は出來ないのである。例へば近時小學校の兒童の食品を制限せんとし、乃至女學校中に於ても無茶主義を唱導し、之を强ひんとするが如き企を聞くが、之を行ふ前に先づ宜しく如何なる榮養學上の基礎の上に立つて行ふべきかを熟慮して貰らいたい。然らざれば其の行ふ所は殆んど無意義である。食糧節約は危急存亡の場合人々が自覺して之を行ふ事は、小は一人、大は勿論國家の生存の上に非常に大切な事であつて、自分は之を推奬するに吝かではない。が、一面から云へば食糧問題は實に人間の感情生活の大切な部分を占めて居るもので、『人は食はんが爲に生きて居る』といふても敢て不當でないのであるから、十分愼重に之を考へねばならぬ。殊に榮養學上から言つて、戰爭の如き已むを得ない場合には、一時は最小限度にまで下ぐることを忍ぶとしても、永く確實に榮養を維持して行くに之で差支がないか否かは疑問である。場合に依つては之が爲に身體の衰弱を來たし、生殖力の減退を招くといふ意見を述べる學者もある位だから、唯一圖に之を節約するのは策を得たものではない。『人間菜根を嚙んで百事成すべし』と云つたのは昔の簡素な生活に甘んじられた時代の事で、現代の如き複雜なる社會生活に於て容易く實行し得べき事ではない。若し許すならば十分なる榮養を取り、以て又十分に活動する事が、人々の希望する所で、又た不平無からしむる所以であらねばならぬ。此意味に於て自分は榮養學上の智識が、國民の凡ゆる階級を通じて徹底的に行き渡り、若し一旦緩急あらば外から强ひらる事なしに、人々各自覺して食物の節約を行ふに至る事を望むと共に、一面極端なる節約主義、卽ち單に『節約の爲めの節約』といふ謬つた消極主義に陷つて、延いては國民の元氣を阻喪せしめ、其活動力の減退を招くが如き事の無いのを希望して已まないのである。ハイネ歌ふて曰く

Amerika, du hast es besser
Als unser Kontinent, der Alte.

自分は此の意味に於て夫の自由自由と口癖に云ふ「ヤンキー」、アノ贅六の「ヤンキー」が、此の世界の大變亂に際して、共心戮力よく政府の命令に服從し、自制克己或は「パン」無しの日、牛肉無しの日豚無しの日を勵行し、以て世界の食糧を左右し、其富を吸收し、或は年を閲せずして遠く百萬の大軍を西歐の戰場に送りて戰局を左右し、所謂富國强兵論を行ふの知慧と覺悟とを羨ましく感ずると同時に、小成金の跋扈する國、斯の米騷動の持ち上る國の前途を如何せんと憂へずには居られない。而して之が根本的の救治策は、唯一眞教育の徹底にあるのみと信ずる一人である。（完）

編輯餘錄

一記者

時代錯誤の内閣と云ふより外評すべき言葉なかりし寺内内閣は、我等の希望し又豫言した如く、遂に其見苦しき最期を遂げて、原新内閣は純政黨内閣に近き形を以て出現した。世間では西園寺侯起つべしとか、擧國一致内閣でなければならぬとか、或は結局官僚政黨の聯立内閣を見るより外仕方がなからうとか、いろ〳〵の論があつたけれども、我等は密かに其短見なるを哂つて、時代の大勢は、遂に原内閣に歸すべきことを確信し、一日も速かに其實現を期待して居た。之れ我等が原氏や政友會を信任するが故ではない。衆議院に多數を有する政黨に政機運用の中心を置くことが、今日に於ては國民と政治とを近接せしむる唯一の捷徑であり、國民と政治とを近接せしめずしては、健全なる憲政の進歩があり得ないからである。國民が政治的に覺醒すれば、國民の意嚮を無視しては多數黨として存在し得る譯がないから、國民の意嚮が多數黨の形に於て反映せらるべき筈である。今日の多數黨が實際に於て國民の多數の意見を代表しないからといつて、次期の總選擧に於ては眞に國民の意嚮を代表するものが多數黨となるべき憲政の常道の確立に向つて、何等積極的方策を講ぜずして、只漫然多數黨破壞すべしとか、一黨一派に國政を委ぬべからずなど云ふ議論をなすものが政黨員中にもあつた。之れ自ら政黨主義を輕んずるの短見者であり、又官僚政治家に乘ずべき機會を與ふる點に於て、政黨主義の叛逆者である。我等は斯くの如き迷妄の意見の少からず世にあらはるゝを見て、半ば憤り半ば冷笑しつゝ、政局が遂に多數黨の手によつて收拾せらるべきを待つてゐた。我等の觀察は誤らなかつた。勢と力を止め得るものは遂に無かつた。西園寺侯の拜辭は直ちに原氏の拜命となり、原氏の拜命は三日を出でずして新内閣の成立を齎らした。我等は此内閣の成立を以て我憲政史上に可なりの重要なる意味あるものと認めた。從つて十月號の發行は、十日位は後れても、新内閣の批判研究を出來る丈け速に讀者に報告するのが、政論雜誌の至當の任務であると信じた。然るに幸にも萬事が豫想通りに進み、寄稿家諸先生も特別の厚意と同情とを以て我等の趣旨に援助を與へられたが爲めに、十日とは後れずに發行するを得たのは我等の滿足と感謝に堪へざる所である。原内閣の今後の施設經營は我等の嚴密なる監視の下に立つべく、其經綸政策は我等の獨立なる批判論評の對象となるであらう。又我等は此機會に於て、原氏並びに政友會が官僚軍閥との間に結び來つた妥協苟合の惡緣を斷つと同時に、反對黨に對して執り來つた陰險不公明の態度を改め、其臺閣を退くに方つては必らず潔く反對黨に其地位を讓り、我國に於ける立憲の常道、原無爵内閣に至つて初めて確立を見たと云ふ光榮ある歷史を作るべき義務を彼等に負擔せしむるが爲めに、新内閣は最も屢々我等の眞率なる警告に接し、最も激しき策勵の言葉を聞くであらう。而かも其成立後未だ一週日を出でざる今日、我等が卒先して劈頭第一に、其成立の由來•經過•歸結を研究し、新大臣の論評を蒐め、代表的政論家の新内閣に對する要望を掲載するを得て、他の雜誌の十一月號に於て試みらるべきことを、十月號に於て成し遂げることを得たのは我等の密かに誇りとする所である。即ち發行日に於て七八日を後れたりと雖も、内容に於て一ケ月を先んじた勘定である。此點は讀者に於ても恐らく諒恕せらるゝ所であらうと信ずる。

原內閣に對する要望

原內閣に要望す

――國民を基礎とする政治の曙光として原內閣を歡迎す――對外、對內の二大事項――最も須要なる國民生活問題の解決――藏相と農相との協力――物價調節よりも通貨調節――講和問題の準備――我より進んでの平和併進――教育界の刷新（考朽鈍物の一掃）――原內閣の成績は將來の政黨內閣の運命に關する重大事

法學博士　福田德三

原內閣の成立は甚だ歡迎す可き事である。其意味は、二大政黨對立論抔の陳腐な考からではない、又た政黨內閣が理想的政治と思ふからではない。否政友、憲政兩會とも政權を取つた過去に於て決して善政を行つたのでないことは國民の熟知する處で、此點に於ては官僚內閣に替ふるに政黨內閣を以てしても替つて替りばへのないことは疑ふ可からざる所である。乍併兎に角衆議院に多數を占めて居る政黨が國政の料理に當ることは憲政の常道であつて、殊に無爵者の原氏が首相となることは、形式の上から丈けでも大進歩で、軈て眞に國民を基礎とする政治の行はる可き端緒が開かれたものとして慶祝せざるを得ぬとである。憲政會の人々と雖も自黨內閣が出來れば結構だが、それも出來ない事が明かであれば、其次ぎには原內閣が善いと考ふるに相違ない。之に對して政府政友同罪論などを唱へて、ケチを附ける者があるのは、甚だ怪しからぬ事と思ふ。彼等が多年凡ゆる辛酸を嘗め盡くした揚句、やつと大正七年の今になつて曲りなりにも衆議院多數黨の內閣を組織する事が出來たのは、日本の憲政史上に一大紀元を劃するものである。それを今更ら擧國一致內閣や人材內閣などと唱へて、漸く成立した政黨內閣にケチを附けたがるのは、甚ださもしい根性と云はなければならぬ。原內閣の壽命もどうせ二年か三年のものだらうが、其次ぎには加藤內閣が出來る順序である。若し今日原內閣の出來るのを妨げて、平田や清浦のやうな官僚內閣でも飛出させたら、次ぎの加藤內閣の出現もそれだけ遲れて來る譯ではないか。

寺內內閣政友會同罪論などは實に愚論である。一體政友會、

らは黨員として一人も寺内内閣に這入つて居なかつた。唯外から政府を援けただけである。而かも事々物々に援助を與へたものではない。却つて粗末千萬な新税案を否決したことゝ、無用有害なる所謂自主的出兵を拒んだことゝ、兎に角二つの點に於て政府の失態を匡正して善い方へ指導した。同罪を論ずれば、寧ろ憲政會が其罪を分たなければならない筈だ。何となれば寺内内閣が失敗した物價調節なるものは、其源を大隈内閣に發したものである。時の農相河野廣中氏が米價調節、蠶絲救濟を企てゝ、抑も政府の力を以て物價を調節し得可しといふ一大惡政を始めたのは大隈内閣の當時である。即ち俑を作つたものは大隈内閣である。だから若し物價調節の失敗、米騒動の罪を糺して、其責任の爲めに寺内内閣が倒れたものとするなら、政友會が政府と罪を分つ可き度合よりも、憲政會が罪を分たねばならぬ度合の方が遙かに多い。而かも寺内内閣の米價調節の失敗は善意の失敗である。國民生活の困難を輕減せんとの主義から起つたもので、其方法こそ拙劣を極めたものであつたが、其趣意は賞讃に値する。殊に何人も嘗て手を附けなかつた暴利取締を斷行したことは一大英斷と云はねばならぬ。然るに同じく物價調節でも、大隈内閣のは國民の一部分たる地主と米の生産者の利益の爲めに、國民全體の食料品を高くしやうとしたので、其實行法の拙なるを責むると同時に其精神をも非難しなければならぬ。斯の如き調節は成功しても排斥しなければならぬ。況んや失敗に終つたに於てをや。否、根本的の非難は、抑も一國政府の力を以て物價を左右しようとし、又左右出來るものと思はせたのは、是れこそ官僚萬能、政府萬能主義で、憲政會領袖連が年來主張せる民權の自由とは正反對の思想である。而かも民權の大本山と稱する大隈侯の内閣にして斯く國民全體の生活を犠牲とし、經濟界の大理法を全然蹂躙した政策を取つたのは、大浦事件よりも更に其罪が大である。我輩は此時それまで常に尊崇して居た大隈侯にすつかり愛相を盡かして終つて、斷じて二度と再び侯に日本の國政は托すべからずといふ確信を得た。憲政會は無論同罪である。就中蠶絲救濟に至つては、極めて少數の蠶絲製産者及び生絲商人の爲めに莫大の國資を消費して顧みなかつたのは、斷じて許すべからざる曲事で、況んや總選擧間際に行はれた不都合をや。

之に對して政友會には輸入米の關税撤廢に反對した小罪惡がある。又た工場法の施行に反對したと云ふ大失態がある。聞く所によれば近く大正七年八月に於て滿期となつた工場法第三條の除外例を、更に延長しようといふ議が當業者から政友會へ提出された。斯の如き誘惑が來たのも、平素資本家の利益を圖る

に汲々たる所があるから彼等に附込まれたのである。幸に寺內內閣の農商務省が斷乎として之に反對したので、可憐なる工女が十四時間働かされるのを免かれたのは誠に結構である。二度と再び斯かる愚案は顏を出して貰ひたくないものだ。原內閣が出來るとして、其內閣の最大缺點は之れである。尤も之れは獨り政友會內閣ばかりの缺點ではない。恐らく憲政會內閣が出來ても此缺點は共通であらう。即ち今日の政黨は常に自黨の利益に專らで、國民の生活の安定向上を圖るよりも、寧ろ富豪、財權者、實業閥に結ぶものである。故に政黨內閣が出來たのは喜ぶべきも、それによつて遽かに日本の政治が改善され得べしとは思はれない。官僚內閣と毫しも變らないかも知れない、否、或はそれよりも惡いかも知れない。殊に政友會は鐵道敷設とか港灣の修築などいふ利權問題を利用した歷史があるから、愈々自黨內閣を組織した曉、此點は大に懸念に堪えないことである。

然しながら此等は過去の罪惡で、今更ら咎め立てゝも仕方が無い。將來の希望として、原內閣は全然過去の態度を改め、政黨本位資本閥本位でなく國民本位でやつて貰ひたい。無論政黨內閣が出來ても、今日のやうな有樣では大して善くはあるまいと思ふが、然し幾分でも善くならうと心懸けて努力して呉れなければ困る。

偖て我輩が原內閣にし對て希望する所は差向き對內、對外の二大事項にある。對內問題とは、物價騰貴より來る國民生活の不安である、對外問題とは近く來る可き（吾輩は爾か思ふ）講和問題である。物價騰貴の最大原因を兌換券の過增に在りと信ずる我々は、高橋是清氏の藏相たることに極力反對せねばならぬ。高橋氏は個人としてはエライかも知れないが、其思想たる今日の場合に大臣と成るには全く不適任である、何となれば彼は有名なる通貨膨脹萬能論者である。氏は常に揚言して通貨がいくら膨脹しても物價を高めるものではないと云ふ黴の結晶したやうな古い此經濟論を得意になつて振廻すのである。「生兵法は大傷の基」で、生じつか經濟論などを知つて居なかつたら、こんな愚論を吐かなかつたであらう。昔漂泊時代に僅かに學び得た經濟論が、出世した今日の氏に累ひして居るのだ。容易に說を變へる事は出來まい。假りに大臣になつて初めは輿論の勢に怖れ、通貨膨脹論を口にする事はないとしても、氏位の年齡となれば肚の中から改める事は出來まい。不相替膨脹一點張の財政政策を取ることであらうことは實に迷惑千萬な事である。

物價騰貴の最大原因が通貨膨脹に在る事は十月の「太陽」に論じて置いたから、玆にはそれを繰返さないが、原內閣の第一の仕事は物價騰貴から起る國民生活の不安を取除く事にあると確

信する。それをしなければ原内閣の壽命は無い。折角成立した政黨内閣の健全なる發展を熱望する一人として、我輩は物價騰貴の根本原因を取去る事に鋭意努力して貰ひたい。之れが何よりも今日の急務である。それが出來れば獨り原内閣が民心を得るのみならず、又日本に於ける政黨内閣の前途大に祝福すべきである。無爵の人原氏が總理大臣になり、又藩閥以外の出身者たる原氏が内閣を作る事は、國民生活に密接な關係のある人が政權を取つた意味に於て、我々は歡迎するのである。其人が國民の眼前に横はる大困難を取去る事が出來なければ、其内閣の存在は全く無意義である。官僚内閣でさへも仲小路氏の如きは、精神だけは國民生活の不安を憂へて百方苦心した。政黨内閣にして若し之れに劣るやうなら全然其存在の意義は無い。若し高橋氏のやうな人が財政の局に當つたら、國民の生活はいよ〱不安を來たすであらう。國民の不幸之より大なるは莫い。斯くてはやがて原内閣を咀ふ聲が起り、延いて又日本に於ける政黨内閣の前途に一大蹉跌を生ずるものと確信する。

元來通貨膨脹を防止するのは決して困難ではない。之を行ふには唯確信と勇氣と誠意とがありさへすれば、他に何等の技巧をも要しないのである。此點から云へば精しくは知らないが山本達雄氏の方が良い。山本氏は武富氏と共に在外正貨の眞相を幾分か國民に知らせるやうにした人である、今日のやうに我々が稍々詳しく在外正貨の狀況を知ることが出來るになつたは氏の御蔭である。從來の官僚は悉く手品を使つて秘密にし、全く國民に在外正貨の額を知らさなかつたが、少しく知らせるやうにしたのは慥か憲政會の武富時敏氏であつた。此の武富氏の英斷は世間の人々が餘り云はないが、我々から見るとなか〱進歩的な處置であると賞讃するに憚らない。山本氏は之より更に一層詳密に在内在外正貨の額と政府及び日銀所有の正貨の額とを分別して國民に知らせるようにしたかと思ふ。尤も同氏が在外正貨を以て正貨準備に充つる事を全廢するか、若くはそれに制限を置かなかつたのは殘念である。然し兎も角山本氏の處置は官僚内閣時代より勝つて居る。山本氏が誠意を以て研究したら、在外正貨を兌換券の準備に充つるを全廢する英斷に出でるかも知れない。少くとも愚論謬説を以て頭を滿たさず、虚心坦懷輿論の指示す所に聞く事が出來るかと思ふ。兎に角誰が蔵相になつても世間の輿論に聞き、自分も十分研究し、大藏省も十分調査して、今日の禍根が在外正貨の準備にある事に氣が着き、之を全廢するやうにして貰ふことを切望せざるを得ぬ。先入の偏見に囚はれた人や、銀行業者とか、實業家とか、資本閥の權勢に頭の上がらぬ人々は斷じて御免を蒙りたい。

次には農商務大臣に其人を得なければならぬ。仲小路氏の熱心は嘉す可きも、其方法は如何にも拙劣を極めた。農商務省の屬僚中には俊秀の士も居る事と思ふが、それを統轄する大臣に其人を得なければ駄目である。原內閣の農商務大臣は仲小路氏の精神は受け繼いで貰ひたいが、同氏の施設を其儘踏襲して居ては困る。それでは到底物價騰貴を緩和することは出來ない。殊に國民經濟調査會へ置土產として提出した米價調節の方策——外米の專賣、內地米の最低最高價格の公定、卽ち米價が公定の最低價格以下に下落すれば政府が買入れ、最高價格より以上に騰貴すれば政府が賣出すといふ如き案は非常な愚案である。置土產も物によりけりで、斯の如き愚案は置いて行かれて迷惑する。仲小路氏の熱心には敬服を惜しまぬ我輩も、いよ／＼出でていよ／＼拙なる其方法には呆れ返らざるを得ない。英吉利穀物政策史の一端でも知つて居る人ならば、此方策を愚案と云ふに相違ない。斯の如き案は英吉利を初め歐洲大陸でも屢々試みられた案で、新案でも何でもない。而かも成績如何と云ふに一つも成功したものはない。それを疑ふ者はどんな簡單なるものでもよい、英國の穀物政策を書いた書物を見れば直ぐ合點が行く。エリザベス以來十九世紀の初めに至るまで英吉利はそれを捏ね繰り返して居た。斯の如き黴の生えた案を置土產に再び擔ぎ出して來て、國民經濟調査會に提出したのは愚の骨頂である。若し調査會に若干にても見識のある人が居るならば、此くの如き愚案は卽日政府へ衝き戻すであらう。恐らく農商務省では英獨の戰時の食品管理策を穿き違へたものであらう。英、獨を初め他の交戰國は互に戰時非常の場合だから管理を行つて、物資の調節をするので、我邦現在の如き物價騰貴に對して行ふものとは性質が違ふ。亞米利加がフーヴアーを擧げて食物管理をやつたり、獨逸が穀物官營法をやつたりするのを日本が直ちに眞似しようとするのは、如何に自主獨創の思想が無い日本と雖も餘りに甚だしい。

原內閣の農商務大臣は先づ仲小路氏の愚案を一掃して、所謂白紙主義でやらなければならぬ。仲小路氏の精神は學ぶ可きだが、彼の實行した施設は高閣に束ねなければならぬ。さうして改めて國民の輿論に聞き、又專門家の研究にも依賴し、新規に案を立てなければならぬ。米價だけ調節すれば他の一般物價は自ら調節されるといふやうな根本誤謬を一擲しなければならぬ。否、政府が政府の權力を以て經濟生活の基點たる物價其物を左右し得るとか、又は左右すべきものとかいふ考を一擲して終はねばならぬ。政府が物價に干渉すべき特定の利益、特別の理由のある場合に限るのであつて、其の場合には收用令も公定價格

も官營管理もよからうが、今日の場合はそれを要求してゐるのではない。今日の場合は一般の物價騰貴を防いで貰ひたいのである。物價其物の調節は政府が物價に干渉したからとて出來ぬ。勿論干渉して調節の出來る場合はある。其場合は個々の物について政府が干渉するのは可いが、然しそれは除外的施設であつて原則的施設であつては困る。それが原則的施設になると經濟組織を根本的に破壞して終ふ。他日はいざ知らず今日は直ちに決すべきではない。況んや狹き官省の間に跼蹐せる俗吏の机上の考案を實行せられては堪つたものではない。官僚政治の最も惡い缺點を暴露したものである。

政府が爲すべき今日の急務は物價調節でなくして通貨調節である。通貨調節は政府の當然爲すべきことであつて、又政府が一日も怠つてはならぬ義務である。何故なれば通貨は國家の有する造幣大權、鑄造特權の二獨占權の當然の結果である。何を貨幣とするかを定めること、其の定めた貨幣を製造發行する權限は全然政府にある。故に之を調節するは政府でなくてはならぬ。政府は國民生活の必要に適應して按配せねばならぬ。即ち通貨を調節する義務を有つて居る。然るに寺内内閣は此く當然爲すべき事は少しもやらず、全く通貨の殖えるに任せて殖え放題に殖やし、却て反對に逆も出來ない、又當然爲すべき事でない方面にヤキモキしてゐた。物價は政府がどうする事も出來ないものである。日本國中に何千萬石の米を生產さすかといふ事を國家で定める事は出來ない。又何千萬石の米を消費さすかを定める事も出來ない。其需要供給の關係から物價が定まるので、需要供給の關係をどうする事も出來ないのに、結果たる物價をどうかしやうとするのは無法である。今日の經濟生活は生產も分配も消費も、皆國民の自由活動に托するを原則とする。無論其處には弊害はある。弊害は國家が矯正せねばならぬが、こ弊害の爲めに其原則を打壞するのは今日の社會組織を破壞するもので、社會主義の要求する所である。其要求を容るゝならよいが、さうでない以上は、生產、分配、消費も之を指導する事は出來ない。何人も之を指導する者が無いから自由競爭で自ら定まる所に定まる。それが物價となつて表はれるのである。それを左右するには其本源を捉まへなければならぬ。例を擧げれば米である。土地を國有にして農業を官營事業として終へば、其生產は政府が勝手に定める事が出來る。それでも年の豐凶によつて豫期の成績を擧げられないが、大體の統一が出來て、米の一石を三十圓なり二十八圓なりに定めることは出來る。恰も鹽の專賣煙草の專賣と同樣である。或は土地を國有にしないまでも、農產物は凡て其生產者が政府に賣渡さなければならぬと

する事、獨逸の今日の如くにすれば、それは米價の調節は出來る。世に所謂米穀官營論なるものは之れであらうが、日本では實際其處までは行つて居ないから、物價の調節は畢竟出來ない相談である。米價騰貴を暴利を貪る者があるから起ると云つて、米の賣買をする者のみ取り締まるのは無效である。勿論彼等の內には暴利を貪る者もあらうが、然し正當なる者が又決して少くないのは事實である。英國や獨逸のやうなら仕方が無いが、日本の現在は其處まで行つて居ない。世上の米穀官營論の如きは如何にも周章狼狽の態で餘りに一步飛び離れて居る。一步退いてもつと自然的な、もつと當面の急に應じた方法を講じなければ駄目だ。而して其方法が無いかと云ふに、有る。通貨調節が卽ち之れである。唯米のみならず近來の洋紙木炭等の如きは思ふに著るしい買占め賣惜しみが行はれて居るに相違ない。洋紙の如きはザラ紙の外輸入を禁止して居るが、それにしても今日さう急に需要が殖えた筈はないし、又國內の生產高がさう減つたとは思はれない。然るに其價格が殆ど每日のやうに騰がるのは何處かに何かあるに相違ない。增貫や岡半同樣の輩が洋紙界に跋扈してゐるかも知れぬ。

然るに、米許りに干涉して米については戒告や處分を受ける者があるに、其他は增貫岡半以上の者があつても少しも取締られて居ないのは不公平千萬である。卽ち暴利取締によつて物價調節をやり得ると思ふのが間違である。やつても迚も出來る筈は無い。取締令は結構で、若し增貫の如き不德漢が顯はれたら處分してどし／＼勵行して貰ひたいが、それは物價調節の爲めではない。暴利を取締るのは物價の廉い時でも必要である。物價調節と暴利取締とは全然引離してしまはなければならぬ。故に原內閣の農商務大臣は仲小路氏の失敗を一掃して、隔意無く大藏大臣と談合し、農商務省は大藏省の下に立つて働くやうにしなければいけない。大藏省がやらぬとて農商務省が代つてやるのは權限の踰越である。今までの寺內內閣の施設は机上の俄か案で、獨り取引所の仲買人が之を晒ふのみならず、常識に愬へて見ても無茶苦茶である。何よりも之を根本的に破棄しなければならぬ。

軍事外交と云ふと政治の二大項目とされて居るけれど、今日はそれよりも急務なのは國民生活問題である。此新しい問題を前に控て內閣を形造るのは政治家としては寔に千載の一遇で、手腕があれば其手腕を示し、見識があれば其見識を示すべき絕好の機會である。原內閣にして此大問題を解決する事が出來れば、卽ち立派に試驗に及第したものである。將來の國政を屢々料理して貰はなくてはならぬ。若し依然として少數資本家の利

給に厚く、國民生活に沒交渉な施設を行ひ、又は黨略本位の政治をやれば、多數黨必ずしも多數黨たるを保し難く、國民の輿望は政友會を離れ、政黨内閣が出來てもやはり駄目で、「變しと見し世ぞ今は戀しき」やはり官僚にやつて貰つた方がずつと善いと云ふやうになる。若し斯うなれば日本の憲政の退歩である。出來た政黨の内閣、無爵の總理大臣に健全なる發展を遂げさせ一度びんが爲めには、我々は政友會自身の爲めにも眼前に横はる國民生活の解決に大に熱心せん事を希望する。然るに嘘か眞か新聞の傳ふる所に據ると、政友會の或る人々は物價騰貴の解決などは譯はない、官吏の俸給を増せばよい、さうすれば銀行會社等民間でも増俸するだらうからと云つたさうだが、以ての外の心得違ひと言はざるを得ぬ。其樣の心得では迚も國政を托することは出來ぬ。

次には講和問題である。我邦は此度の戰爭には常に日和見の態度を執つて來た。自ら進んで何事も爲さなかつた。大戰は何時終るであらうか唯々英米政治家の鼻息を伺つて見る。英國は單獨不講和で我邦をも束縛して居るが、これは單獨不講和ではない、英國以外の聯合國から講和發議權を奪つたに過ぎぬ。英國自身は自分が講和をしようと思へば何時でも單獨講和をやるに相違ない、否他の聯合國を强制して加盟せしむるに相違ない單獨不講和は英國には通用しない、英國以外の國のみに通用して却つて其手を束縛する口實となつて居る。乍併其英國も最早講和を望んで居ること切なりと信ずる。最近着のステーチストは、佛國に於ける聯合軍の成效なるものは其實大失敗である」聯合國には一人の天才的名軍人は居ないと斷言して居る。表面には强がりを言つて居る英國も今や大に講和の必要を切に感じて居ると思ふ。獨墺側は勿論である。即ち講和の來るは遠いことではないと思ふ。原内閣は其在任中に講和成立を見ることと覺悟せねばならぬ。而して從來の日和見でなく我邦より進んで講和の促進に盡力し、世界に於ける日本の發言權を「ワンス、フオーア、ヲール」に確定す可き大任を荷ふ覺悟を持つて貰ひ度い。我輩一人の希望としては彼のウヰルソンの十四個條の講和綱領の如きものを我邦より聯合國に提出して貰い度いと思ふ。ロイド、ヂョージやウヰルソンの大演説に隨喜の涙を流す計りが能事ではない。我邦の外務大臣なり總理大臣も一度位いは世界的の發言を爲す可きである。我邦が一個のプログラムを提出して之に基いて講和の促進を提議し、若し獨墺聞かざれば更に大々的に出兵するも厭はぬ。併し公平な條件なれば今や獨墺は之れに耳を藉す覺悟は持つて居ると思ふ。單に peace offensive などと蹴飛す可きではないと信ずる。官僚内閣と事替り兎に角

議會に多數を有し、可なりの民望を後援として居る原内閣は正に之を勉む可きである。而して對内の最大問題たる物價騰貴防止は講和の來らざる限り決して十分に其目的を達するものでない。對内の此政策を成效せしむるに就ても、對外的に自主的講和の發議は緊急の必要事である。（此事は『中外』九月號に論じて置いたから併讀を乞ふ）

尙附け加へて置きたいのは教育の方面に就いても、從來の型を破つて貰ひたい。尾崎氏が一度文部大臣になつて僅か數ケ月しか在任しなかつたが、官僚のやつて來た官吏言論拘束の規則を廢した事は、積極的には何もしなかつたが、消極的には結構な事であつた。だから「退がは尾崎氏よくやつた」と喜ばれたものである。折角出來た政黨内閣であるから、從來の官僚式の施設を一掃して貰ひたい。凡そ文部省程無學無識の輩の集まつた所は無い。具體的に云へば近頃の外國語學校長と音樂學校長との首の向き換への如き之れである。向き換へられてノコ〳〵轉任して行く校長も不見識だが、文部省で校長を輕く見てゐるのが根本的の間違ひである。外國語學校の校長としては語學の教養といふ事に十分の見識十分の經驗が無ければならぬ。音樂學校の校長でも同じで、校長は必ず音樂家でなければならぬとは云はぬが、相當の修養のある人でなければ駄目である。それを甲から乙にすげ換るのでは、校長は「ヘッド」でなくして「キャップ」である、麥藁帽を鳥打帽に代へるやうな無造作な始末である。之れでは學校が治まらず生徒が騷ぐのも當然である。文部省自ら斯く校長の地位を輕視するから、生徒が之を侮るのはて無理もない。外國語學校の校長の如さは校中一人の同情者のないまでに失態を重ねたのである。其首をひよこつと換へ音樂學校へ持つて行つた、侮辱された音樂學校の迷惑は同情に堪へぬ。一事が萬事で、こんな事は今に初まつた事ではない、昔からさうなのである。我々は過去二十年間出入頻繁なる無能低能校長の驅逐に殆んど半生を銷磨して仕舞つた苦い經驗を持つて居る。校長が不適任で治まりが着かず、學校が騷ぎ出すと鎭壓するが、抑も文部省が校長や教師の無能老朽を其儘に放擲して置くから、直接利害の關係ある學生の迷惑は此上ない、ソコデ騷ぐので騷ぐのは當然である。文部省が適任者を選ぶ誠意さへあれば學校騷動杯は起るものではない。然るに一種文部省閥なるものがあつて其黨派の者でなければ校長に出さない。學校を文部省の巡査派出所と心得て居るのだ。否直轄學校は文部省老朽官吏の掃き溜とせられて居る。そんな事で一國の文政が振ふ筈はない。今日の直轄學校には無能老朽の教師が充滿してゐる。半數以上も皆低能か老朽の先生ばかりである。少し氣慨のあ

り學問の出來る者は、腰を屈して文部省の直轄學校に居はしない。幸にして文部省が壓迫を加へる事の出來ない帝大には、屑も勿論尠くないが、大體に於て他より優れた敎師が集まつて居る。然しそれとても其待遇は、普通文官よりも劣つた待遇を與へて居るではないか。今度大臣になるであらう元田肇氏と同期に大學を出て、學德双び高く篤學の點に於て天下一品と云はれて居る宮崎博士の如きは、其俸給は一局長にだにも如かない。斯くの如き待遇をして居て尙且つ日本の學問の向上を望むのは木に緣つて魚を求むるものである。幸に帝大には斯樣な物質的待遇の厚薄を眼中に置かない宮崎先生の如きがあるが、然し之は稀な例外で萬人に之を望むことは出來ない。直轄學校あたりでは、少し目先の利くものはドシ／＼飛出して成金所の手代になるものが多い。畢竟斯の如きは文部省が無能で一國の文政を托するに足らない證據である。願くは政友會内閣は文部省に伴食大臣を置く事をやめて、有力なる大臣を置いて文部省閥のを打破斷行して、愚物、鈍物の團集を我敎育界から一掃して貰ひ度いものである。原内閣にして以上の方面に若干成績を擧げれば、それこそ政黨内閣の前途は祝福すべきである。其他の事は機を得たら論ずることとして、今は最初の希望として此れだけを述べて置く。（七年九月二十六日談）

原内閣に對する要望

法學博士　吉野作造

發表されたる顔觸を見ると、純然たる政友會内閣である。樞密院に當りのよい所、貴族院の操縱に便宜な所二三枚を加ふべしと云ふやうな俗論を空吹く風と聞き流して居るやうな趣がある。斯くては表向きどんな事を云ふにしろ、樞・貴兩院より常に同情ある援助を期する事は出來まい。竊かに相談を受けるだらうと豫期して居つたものゝ當て外れの不平は姑く措くも、之で政黨内閣の組織が段々堅まつては大變だといふ官僚系の内面的一大煩悶は、必ずや事每に勃發すべきを疑ふことは出來ない。只之に對して原内閣は如何なる應酬を試るだらうか。巧みに敵の鋒鋩を避くるに苦心するは妨げなきも、之に阿附諛合して一時の苟安を貪るは純政黨内閣の爲めに取らざる所である。過渡期の事であるから幾多の困難はあらう。が、新傾向に乘じ、又新傾向に迎へられて起つた新内閣としては、何處までも新勢力に根據を据ゆることの外に取るべき途が無いではないか。今は昔、第三共和國設立の始め、多數にして且つ因循なる王黨と戰ふ爲めに、生氣に充ちた小數の共和黨がどれ丈けの苦心とどれ

丈けの發憤を示したかは原內閣の當さに學ぶべき所である。彼にあつては共和政體の確立、我にありては立憲帝政の確立、各々目標をこて異にすれ、前途に横はる障礙の種類は略ぼ同樣である。新內閣の閣僚諸公は、遠大なる理想と雄渾なる手腕に於て、大正のチエーたり、大正のガンベツタたるを得るや否や。

新らしき勢力に根據を据ゆるとなれば、どうしても文字通りの意味に於ての善政主義で行くより外はない。寺內內閣のやうな舊勢力によつて立つものゝ善政主義を振り廻すは初めより無意義である。善政主義は政界の進行が正しき軌道に復つて後にいふべき問題である。今や原內閣は已に舊き勢力に據らず、又舊き勢力に遠慮するの必要なしとすれば、彼等には何等かの口實を以て善政の看板を糊塗するの情實がない。斯くして一方に於ては眞正なる善政主義を以て國民の良心に訴へ、他方は誠實なる政策を以て一部の官僚閥族の公平なる批判に訴へなければならない。寺內內閣に對して政友會の取つた所謂是々非々主義は、官僚對政黨の根本關係から觀て決して純正なる態度ではなかつたけれども、原內閣に對する樞密院貴族院等の態度として は是非共是々非々主義に依らしめなければならない。と云ふ意味は、是々非々主義を表面の口實として官僚一派が漫然原內閣を苦しめるやうな態度を許すといふ意味ではない。樞・貴兩院の如きは、もと政黨の爭に對して一方に偏するの態度を取るべきではない。すべての政黨に超然とし、是を是とし非を非とするの良心の判斷の鋭敏なるべき所に彼等本來の使命がある。從來の官僚は此點に關して餘りに不謹愼であつた。政黨の名を避けて而も政黨以上に政爭に沒頭して居つた嫌ひがないでもない。原內閣が眞に民政の利害に立脚した善政を布き、官僚をして反對したくとも反對することが出來ないやうにするのが、一面に於て又我國政界の風潮を一新する所以にもなる。獨り現內閣諸公の利害の爲めばかりではない。

以上の見地からして新內閣に向つて予等は次の三點に特別の用意あらんことを繰り返して希望して置く。

第一に大いに自重せられんことである。今や世間一般が原內閣の成立を何となく歡迎して居る事は疑ひない。併しながら此歡迎は、原總裁其人や政友會其物に對する依賴の直接の反映と自惚れるならば大いなる誤である。之は政界の新展開を希望して居つた一般の民心が、計らず展開し來つた政局運行の新傾向を悅ぶの結果である。國民は從來已に久しく官僚軍閥の跋扈を

厭つて居つた。寺内内閣がいよいよ失脚せねばならぬ破目に陷つた際、政界の樞機を握るものが尙元老の一派なることを見て居つた國民が、後繼内閣に擧國一致主義の實現を要求したのも畢竟、此美名を假りて新らしき内閣をもつと廣き國民的基礎に作らしめんとする自然の魂膽に出づるものと見なければならない。然らざればあれ程熱心に擧國一致を要求した民心が、純然たる政黨内閣の出現に對して、又同じ程度の熱心と感興とを以て之に對する意味が分らないからである。然らば國民の眞に希望せるものは擧國一致にあらずして國民的基礎に立つ内閣であつた。此要望が卽ち原内閣を出現せしめたものである。然らば原内閣は此勢を透觀し、而して此期待に辜負せざるの誠實なる覺悟がなければならない。從つて目前の小利害に齷齪すること無く、殊に官僚軍閥の勢力に對し、又憲政會無他の敵黨に對しては小策を謹み、大局に立つて大政黨に相應はしき行動に出でなければならない。

第二に右と關聯して予等は特に今日の政界に尚強大なる隱勢的威力を有する官僚軍閥に過當の顧慮を與ふるなからんことである。無論徒らに之を敵とするの必要はない。けれども常に之を味方たらしめんとする事は決して正當なる心掛けではない。之を味方とするの必要があるならば政策を以て行くべく、斷じて其他の方法を取るべきではない。若しそれ官僚軍閥が、是を是とし非を非としてあらゆる政爭の上に超越して公平なる監督を爲すの地位を自ら棄て、我から進んで政爭一方の對手たり得べき獨立の勢力たらん事を企つるが如きあらば、之れ老耄れが向ふ鉢卷をして兒童の喧嘩に飛び出すやうなもので、見つともない事甚だしきのみならず、又爭を公平に收め且つ導く所以ではない。從來の政黨は餘りに官僚軍閥の勢力が强かつた爲でもあらう、此點に關しては却つて弊害を助長した譏を免れない。此點に關する新内閣の施設は我々の最も注目すべき所である。若し夫れ一方に出兵反對論者として、露國の過激派に相當の理解ある人として知れた内田外相と、積極的膨脹主義の吹聽者であり、出兵論の張本人として知られた田中陸相とを同一内閣に列ねて、當面の東亞外交を如何に指導するかに至つては、無爵宰相の手腕の試金石として特に注目せんとする所である。

第三に、繰り返して云ふがどこまでも**民衆の勢力に根據を置けといふ事である。政界の大事を一**から十まで民衆に計れとは云はない。多少の秘密はどんなデモクラシーの國にも免れない。只廣く計るの態度を根本に於て失はざらんことは吾人の斷じて新内閣に要望する所である。大事ある毎に一々元老に意見を求めるのは元勳尊重の意味に於て何等妨げなき所なりと雖も

餘りに之に掣肘されて時代の要求に遠ざかるは謹むべきことである。就中元老官僚等の目前の壓迫に餘りに重きを置くが如きは國民の決して喜ぶ所ではない。又公平に考へても民衆の勢力などゝいふものは普段には更に現はれない。殊に日本の民衆は平素は極めて溫順である。けれども一旦不滿に燃え不平に勃發すれば、柔順なる小羊も狼の激しさに轉じ、意外の局面を呈するの例は已に近く我々の經驗した所ではないか。普段は柔順しい。小面倒な壓迫は元老や官僚や軍閥やから來るからとて、之と結んで不知不識の間に民衆の不滿を醞釀するのは策の得たるものでない。而已ならず政友會が實の所今日まで廣く天下の同情を繫いで居なかつたのは專ら之が爲めではないか。然るにも拘らず國民は寛大にも過去を許して、政友會に先の罪を償ふの好機會を與へた。此好機をムザ／＼利用しないのは迂愚不明の甚しきものたるのみならず、又大政黨として國家に報ずるの所以でもない。民衆を友として民衆の幸福を計れ。斯くするは又同時に民衆を教養し、民衆を訓練し、上下心を一にして社稷の富强を計る所以でもある。

以上根本的要望の外に於て當面の具體的問題に關し更に希望する所數項を掲げて此論を結ぶ。

第一は對露對支問題の根本的解決である。時の政府が何と說明しても、從來此方面に一貫の國策の無かつた事は爭ひ難い。殊に最近に於ては支那並びに西伯利方面に於ける帝國官民の行動は支離滅裂を極むるものであつた。而して之が根本的解決は、只だ之れを一外交問題としてよく解決の出來る性質のものではない。更に溯つて考へれば、之れ實に一個の思想の問題である。目下內外兩面の政界に滔々として流れて居る世界的思想を的確に諒解し、尙且つ之れに忠實に順應するの態度を缺いては、如何にして對支對露の外交問題を解決することが出來るか。之れが根本的解決を新政府に求めて果して滿足を得るや否やは別問題として、兎も角我々國民は如何なる新政府に向つても常に之れを繰り返して止まざるものである。

第二に又之れと同じ根本思想から內政上の各方面の改革をも希望して置きたい。寺內內閣は時勢の進運に應じて種々の改革事業の調査に骨折ると共に、他方に於ては神祇局の設置に數萬の國帑を投ぜんとして居つた。之れによつて敬神の風を養ひ得べしとするのは已に時代錯誤である。言論自由の尊重は勿論、社會の各方面に洽ねく生氣を發動せしめ、潑溂たる新精神を以て一貫するやう各種の改革を希望するものである。殊に教育の刷新に就ては特殊の努力を希望するものである。一々個々の項

目は擧げない。

第三に吾人の豫ての主張たる選擧權擴張に就ては、又新內閣に對する要望の重大なる一項として之を揭げざるを得ない。政友會は先に一度普通選擧主義を衆議院に於て是認した。只之に黨略以外幾何の誠意ありしやは大に疑なきを得ざるも、兎に角時勢の進運今日の如きものあるに際しては、少くとも之れに對して廣汎なる且つ眞卒なる調査考究を爲すの必要はあらう。小選擧區の問題以外、選擧法の根本義に重大なる變革を加ふるは政友會の希望せざる所と聞いて居るけれども、若し果して之れが爲めに選擧權擴張問題の考究を等閑に附するが如きことあらば、之れ黨略の爲めに國務を疎かにするの譏は免れまい。

第四に經濟政策の確定を要求したい。就中最も肝要なるは食料品問題、税制の整理並びに勞働問題の解決であらう。目前の對策としては正貨收縮の問題もあるけれども、斯くの如きは少數富豪の反對を意とせざるの覺悟があらば譯も無く解決の出來る小問題である。更に大いなる決心を要するものは前揭の三點であらう。之れによつて國民の生活問題を根本的に解決するのでなければ、新內閣は充分に民衆の好意に酬い、國家の恩顧に報ずるものと云ふ事は出來ない。若し夫れ國家の經濟政策の他の一面の重要問題として、對外貿易殊に原料品の輸入、加工品の輸出の問題に就いては、單に之れを經濟問題として而已ならず、對外的交際と深き交渉を有する問題として考究するの必要がある。早い話が、對支對露の外交問題の處理が差し向き非常に重大な關係を我經濟的發展の上に有つて居るではないか。こゝになると經濟問題も亦一面に於て又思想問題を伴はざるを得ない。否、國民の品格によつて解決すべき問題となる。新內閣に果してかゝる解決に就き適當に國民を指導するの敎養ありや否や。

更に全體に通じて最後に一言して置きたいのは、如何なる方面の施設についても目前の事功を擧げることに餘りに腐心せざらんことである。派手な一時的の空疎な題目には、已に前內閣時代に於て國民は食傷して居る。目前の事功を擧ぐるに急ぐの結果、國內に於ては多大の國帑を徒費し、國外にあつては小智小策を弄するものに任かせ過ぎて、どれ丈け帝國の信用を害して居るか分らない。此點を緊縮監督するは又新內閣の重要なる任務でなければならない。

原內閣に對する外交上の希望

エム、エー、エル、エル、ビー　米田實

原內閣は成つた、予は憲政發達上、此無爵宰相の出現を喜ぶと共に、少しく外交上の希望を述べて見度いと思ふ、先づ注意を促し度いのは、歐洲大戰開始以後の帝國外交が失敗又失敗、同盟國の不信を買ひ、中立國の蔑視を招き、戰後動もすれば「孤立」の難境に立つの危險を醸成して居ること之である、之は英米以下諸外國の政情及び言論界の調子に注意するものゝ觀取せざるを得ぬ所である、此狀態が一掃せられざる限り、日本の外交は、八方塞りであつて、講和會議に於ても、戰後の東亞及太平洋問題に於ても、思ふやうな活動が出來る筈が無い。之は帝國外交に執りて根本的に重大な問題の一である。

此狀態を發生した原因には種々の要素がある、遠因としては日本が日清戰爭に勝つて臺灣を收め、日露戰爭に勝つて樺太南半と滿洲の一部を收め、次で朝鮮を併合した所から、外國の一部短見者流は已に日本人こそ恐ろしい好戰國民で、領土膨張に熱中せるが如く誤解し始めたのである、實際日本人は決して好戰國民で無い、唯だ日清、日露兩戰役の如き、眞成の自衞的戰爭であつたけれども、一部少數外人は已にお世辭にこそ此點を承認すれ、心中竊かに疑懼を禁じ得なかつたのである、近因としては歐洲大戰が起り、日本の戰爭參加となつたが、其後に於ける大隈寺內兩內閣の外交は、內容に於て無理想であり、遣り口に於て拙劣であつて、爲めに愈多數白人をして日本を飽く迄不信義的、火事場泥棒的、侵略利己的なるが如く、第二の獨逸なるが如く思はしむるに至つたのである、殊に大隈內閣が如何なる行違ありてか、彼の對支要求に關する虛僞の陳述に依つて同盟國外相サー、エドワード、グレー氏を驚倒し、寺內內閣が萬事に軍閥の本色を發揮し、往々聯合國との協調を缺き、時に親獨を疑はしめた如き予は最も悲む可き事件であつたと思ふ、又た此間に乘じて、獨逸が日英、日米離間の爲めハースト系以下の諸新聞を利用したことも、歐米に於ける日本誤解の發生及増長に與つて力あつたことは言ふ迄も無い。

原氏及政友會は我外交狀態斯くの如き時期に於て廟廊に立つのである、極力妖雲を排除して白日を見るを期せねばならぬ、殊に帝國外交は日英同盟を經とし、日支及び日米親善を緯とせねばならぬ以上、此三國に於ける「日本膨脹主義」の疑惑は、最も之を一掃するに力めねばならぬ、此任務果行に於て、原內閣が政黨內閣であることは、英米の信用を得る點などでも有利

であると言はねばならぬ。

又た言ふ迄も無いことだが、政黨内閣實現と共に、其外交も舊式的歐米に敎へられたイントリグを眞似ずに、公明な遣り口を採らねばならぬ、内に於ては國民の輿論を基礎とすると共に、國民をも信任する外交でなければならぬ、外に於ては堂々正々、大義を四海に布くの風がなければならぬ、若しそれ彼の元老軍閥に左右せられて外交方針を二三にする如きは、此際積弊に鑑みて斷然之を止む可きであり、又彼の外交調査會の如きも、寧ろ全然廢止するを可とし、若し廢止が出來ぬにしても、之が爲めに所信を斷行し得ず、聯合國の信用を失した寺内内閣の二の舞をせぬ覺悟が必要であらうと思ふ。此公明あり此勇氣あり始めて世界の信を得可きである。

以上は時弊に慨したるまゝ、外交の大體に付き注文を述べたのであるが、然らば原内閣は唯此消極的外交丈けで善いかと言ふに、決してソウで無い、蓋し帝國の前面を見ると、幾多の重大問題が蝟集して居る、之に對して積極的外交策が必要なることは無論である、が唯だ之も上記の外交振の刷新と相俟つて行はれねばならぬ所である。

試みに其一二例を擧げんに、第一は差當り西伯利問題である、帝國の出兵は對露關係、帝國の實力、聯合國の利益等を考慮して適當とする程度に於て繼續することであらうが、同時に同方面に於ける帝國の經濟的關係は聯合國の同意を得て之を保護せねばならない、帝國は毫も政治的野心無く、友邦露西亞の獨立を尊重すること勿論であるが、又他方から見ると西伯利は帝國の接壤地域であり、利益關係密接である、就中東淸鐵道の如き、滿蒙と帝國との關係、南滿鐵道の立場などを見れば、孰れの外國よりも、帝國の利益が重きを置かれねばならぬのである。予は敢て米國の西伯利鐵道投資を非難するものでは無い、一九一五年ムルマンスク鐵道を布設し北氷洋と露都とを聯絡する捷路を供給した米國の功績は英佛日の共に感謝する所であつて、同國が今亦た一轉西伯利に同樣の援助を與へんとするも喜ぶ可きことである、今春上下兩院議員六七名、財界名士ウアンダリップ、同フオード、以下より成る露國救濟兼投資團の組織の如き、スチウンス君以下鐵道技師團派遣の如き、敬服の外無き次第である、又市俄古富豪クレーン氏等の農民援助策も結構である。併し目下已に聯合國が協同して對露援助に當つて居る以上は、之等の事業も聯合國が均しく之を共にし、之を負擔す可きものでは無からう乎、之を極言すれば、日本と密接なる一小部分に對しては、日本から比較的に「重い勢力」を求むることは之ありとしても他の大部分に對しては聯合列國中の一國に委せず、

其共同負擔、勢力均衡を主張するが當然ではあるまい乎、予の意見に依ると、日本の侵略的野心無きことが能く與國に了解せらるゝ時は、此點の解決も割合に容易だらうと思ふ、次ぎは支那問題である。之は大分世間で論議せられた所だから、悉しくは言はぬが、要するに日本の爲政者が眞意は兎も角も形體に於て支那の一黨派を援助し、軍器及資金を供給して他派鎭撫を企てしめたかの如き觀を呈したことは、之實に中米ニカラグア、ホンヂユラス、サルヷトル等で見た惡例を東洋に復活したもので、之も支那人及外人に我が動機を疑はれ、侵略的野心を包藏する無きやを思はしめたものである、言ふ迄も無く日本は侵略的野心を包藏せず、唯た其經濟的必要から、支那より十分に且つ自由に原料品供給を受くることを希望するに過ぎぬのだが、在來の外交振りでは却つて支那にも外國にも正反對の印象を與へたのである、予は支那に於ける我經濟的發展策の成功が重大であれば重大である丈け、原內閣が之迄の外交振りを一新せんことを希望せざるを得ぬのである、次ぎに重要な問題は講和及之に對する準備である、之に就ては大隈、寺內兩內閣共に多少の功を樹てゝ居ることと信ずるが、大部分は今後に於ける原內閣の事業でなければならぬ、米國參戰せる今日に於て殊に然りである、予は之に就ても原內閣が信を與國に博する外交振りに依つて、一方に支那、米國、濠州の對日懸念を消散しつゝ、膠州、山東鐵道、南洋諸島等の處分につき、當然の成功を齎らすことを決心せねばならぬと思ふ。

　之を要するに予は閥族內閣仆れ、最初の政黨內閣らしき政黨內閣が出來した今日に當りて、切に新內閣が閥族流外交の缺點を一掃し、帝國が蒙れる疑惑を消散せしめて與國との協調を完全にし、以て我が重大なる外交上の主張及び方策を貫徹せんことを望むのである、若しそれ箇々の問題に就ての詳細なる注文の如きは短篇の盡し得る所でないから之を省くこととする。

　知らず、政友會內閣は能く此希望に副ひ得る乎如何、從來西園寺內閣、山本原聯立內閣の施設及び最近迄の政友會の態度は、國民をして首肯せしめ得ざるものが尠く無い、幸ひに今回の內閣に於て大功を樹てゝ信用を回復して貰い度いのである。

憲政上より新內閣に望むことの數々

大山郁夫

新內閣は嚴正なる意味に於ける『純政黨內閣』ではないが、

同じ『擬似政黨内閣』であるにしても、一見我等の豫想以上に政黨的色彩の强い内閣であつた。

といつて敢て之に對して無條件的に滿足の意を表する譯ではない。無論出來ることなら、それが純政黨内閣であつて欲しかつた。その内陸海兩相の椅子は、現行官制上如何ともすることが出來ないにしても、(孰れは改革せられねばならぬ要點ではあるが)、その他の七つの椅子の上には、矢張り原首相と同じ黨籍の人を置かせたかつた。併し原内閣の成立の過程を見れば、それは望まれないことであつて、寧ろ出來上つた原内閣が豫想せられた原内閣よりも、幾分政黨的色彩の濃厚であつたことを、無論諦めの態度を以つてではあるが、喜ばなければならない樣にも思へる。

蓋し當初に於ては、原内閣の中へは、官僚的分子や、薩派的分子が引入れられる事と豫想されて居たが、内田子以外には官僚畑から引抜かれて來た人はなかつたし、單純な薩派からは誰れも遅れて來られなかつた。此結果を生ずるに至つたまでの經緯を述べることは、自分の使命でもなければ、本文の目的でもないことは、改めて斷るまでもない。

けれども外相といふ最も重要なる地位の一つを黨外の人に與へたことは——若しくは與へねばならなかつたことは、外交調査會存置のことと共に、今次の政變中に在つて、我國の憲政のためにも、政友會内閣そのもののためにも、最も痛恨に堪へざることの一つであつた。そこで政友會内閣に對する第一の希望を言ふ必要が生じて來る順序である。卽ちその對官僚關係上より如何なる障害があらうとも、極力それを排斥して、内田氏をして政友會の黨籍に歸化せしめることである。その他の點より言へば、内田氏を原内閣の外相とすることには、別に批難すべき根據もなささうである。殊に内田氏は、第二次西園寺内閣の下に於て、原氏が内相であつた時代に、外相の地位を占めて居たといふ表面上の關係もあり、又更に一層重要なる事は、内田氏は寺内内閣の對露外交の否認者として、その遣露大使としての地位を擲つことをすら憚らなかつた人である。

原首相が法相を兼ねて居るのは、餘程込み入つた事情がなくてはならぬ。無論平沼檢事總長、及び鈴木司法次官に持掛けた相談を斷られたのが、その第一の理由であらう。而して右の二氏がその相談を拒絶したことは——若しくは、しなければならなかつたことは、寧ろ二氏の不名譽にもなるまいが、決してその名譽にはならないと同時に、政友會内閣に取つては、二氏の拒絶はその名譽にはならないにしても、決して不名譽にはならないのである。唯原首相の兼任は、野田遞相や中橋文相の役割さへあ

る世の中と思へば、決して政友會中その人がなかつた爲めでなかつたのに決まつて居る。けれどもそれを單一の自黨員には振り宛てずに、首相の兼任にして居るのは、その間に餘儀なき事情が伏在して居る爲めと見るの外がない。何れ首相の司法兼任はその內に釋かれて、誰れかが專任になるのであらうが、政友會內閣に對する希望としては、此問題を四邊への振り合ひに構はず、絕對に合理的基礎の上に於て解決して貰ひたいことである。

斯う少しづつ考へ直して見ると、新內閣が同じ『擬似政黨內閣』であるにしても、政黨的色彩が可なり濃厚であるといつた最初の言ひ前は、餘程制限を要するものとなつた。

是といふのも新內閣が鬪はずして天下を取つたことの當然の歸結である。鬪はずして取られた天下は、また鬪はずして失はれ易いものである。そこで第三に新內閣に望まねばならぬことは、新內閣が鬪はずして天下を取つたといふその出發點などに一向頓着せず、今後は公明正大なる理由の下に於て、憲政上の立場よりしては官僚軍閥に對し、國策上の立場よりしては在野反對黨に對して、遠慮會釋もなく鬪ふべきに鬪つて貰ひたいことである。新內閣は、政友會がその妥協の歷史を棄てねばならぬ時代が、正に眼前に到來して居ることを認めねばならぬ。政友會內閣の成立を可能ならしめた諸原因中の最大原因たる『時代の力』は、政友會に對して、主義のため及び國策のために、鬪ふべき必要のある鬪ひを廻避せざるべきことを要求して居るのである。新しき時勢は、何事に附けても簡明直截を好み、廻り諄いことを一番に嫌ふのである。

右に關聯して第四に新內閣に希望したきことは、新內閣が如何に國策上より在野政黨と爭つて居る場合と雖も、憲政上の主義の立場よりして官僚と爭はざるべからざるに立至らば、一時政黨と休戰してまでも、兩者の力を結合して之に當る心懸けを持つて貰ひたいことである。これは政友會だけに希望した所で始まらない話であるが、他黨に對しては又別に此注文を持出すこととして、先づ差當り特に新內閣に向つて此事を一言して置く。これは新內閣に向つて、憲政的に瓦全に安んぜんよりは、寧ろ玉碎を擇ぶことを慫慂する場合を生ずる結果に導くかも知れないが、それも仕方がない。新內閣が產れたばかりなのに、既にその壽命を算へるのは、極めて早計の樣でもあり、また不祥事の樣でもあるが、併し如何に死すべきかの問題は、如何に生くべきかの問題の連續であつて、その間に輕重の差いないものとすれば、今の內にそれを考へて置くことも必要である。此點より見れば、新內閣は、それ自身が早晩死期に際會する時には、

その遺産を官僚に與ふることなく、反對黨に與ふるだけの用意をして置くことが肝要である。政黨内閣制度の下に於ては、政黨の政界に於ける生死は、循環的であり回歸的であることを原則とするが故に、我國の現狀に於けるが如く、政黨以外にも尙ほそれに劣らぬ大勢力が後方に控へて居る結果として、折角出來上つた政黨内閣も、動もすれば足許から崩れ易き狀況の下に在る場合に於ては、政黨内閣制度を保護し維持することは、在朝在野の各政黨に取つては、一種の共同的利害關係でなければならぬ。官僚派中には、今尙ほ原内閣の成立を以て、元老を先鋒としたる官僚團の恩惠に依るものと思ひ、原内内の跡は官僚が讓り受くべきものであつて、その跡は官僚政黨互立時代が續くであらうと思つて居る手合があるが、客觀的立場より無批判的態度で立論すれば、それに關しては『或はさうであるかも知れないし、或はさうでないかも知れぬ』と言ふより外はないが各政黨の目的論的立場より見れば、さうであらせてはならぬ。而して各政黨にそれぞれ對する自覺さへあらば、その意識的努力で[redacted]さうであらせない様にも出來るのである。故に此際各政黨に向つて、此點に對する自覺を要求することは、極めて必要な事であるが、玆には前と同じく、先づ差當り新内閣に向つて之を言ふ。

第五に新内閣に望むべきことは、新内閣の成立は、その最終の點に於て時勢に負ふものであることを、呉々も考慮の内に置いて貰ひたいことである。新内閣員諸君の多くは、從來その黨略黨策に參した人々であつて、昨年初の第三十八議會に於ける在野反對黨の寺内内閣不信任案提出時代以來、是々非々主義の戰術に沒頭して、隱忍(!)自重(?)、以て『熟柿』を手に入れたる今日に及んだ關係上、事件の蔭に隱れたる經緯や機微が妙に目に附いて、虛心平氣に時勢を達觀する上に於て、多少の不便を有して居るであらう。殊に彼等の各個が、その對寺内内閣關係及び對寺内内閣員關係ばかりを見詰めて居ると、多少官僚派の見解に同じく、新内閣の成立は少くともその一半は官僚の抑損に出づるものと見えないとも限るまい。けれども何時ものことであるが、殊に米騷動以後、生に對する執着心を凄まじい程度に發揮したる官僚が、他に何の理由もなしに、衆議院に於ける絕對多數黨でもない政友會に天下を讓らう筈がない。彼等をして百計盡きて政權を政友會に渡さしめた最大理由は、見えざる『時代の力』である。それ故、政友會は『時代の力』に對して感謝すべき理由をこそ有して居るが、官僚の恩惠に對して感謝すべき理由を毛頭有して居ないのである。從つて、假りに國家の政治を以て勢權把握者の私有財産であると見做した處で

新内閣が鋒を逆まにして、『時代』――若しくは『民衆』の味方となつて、官僚の勢力を退治に掛らうとも、不義理にはならないのである。况んや、國家の政治は誰れの私有財産でもなく、全然國家の公器である筈であるから、理論上その間に譜代恩顧の關係とか、私的義理の關係とかが起りやう筈はないのである。若し實際上そんな關係が存立して居るならば、それが存立して居るのが惡いのであるから、一も二もなく是を除き去らねばならぬ。故に政友會は官僚には何の憚る所もなく、自由にその手腕を揮ひ、官僚が今後尚ほその勢力恢復を圖る樣なことがあらば、それに對する過去の關係などには何の差し構ひもなく、敢然として之に挑戰せねばならぬ。唯政友會はその投恩者たる『時代の力』に對しては、極力その要望に從ふことを努力せねばならぬ。此點よりしては、政友會は先づ時代を無視したる寺内内閣の秕政を改むべきは素より、政友會自身が曾て時代に對して犯したる罪惡を贖はねばならぬ。殊に我等言論を以て立つ者の最大註文をいへば、新内閣は官僚政友會共謀の罪惡の記念たる現行新聞紙法の如きを速に改廢し、更に又同じく官僚政友會の共同行爲を以て阻止したる現行選擧法改正事業を躊躇する所なく復活して、以て時代に陳謝する所がなければならぬ。又外交調査會の如き立憲的精神に背馳せる秘密外交の奧殿たる時代錯誤的機關の如きは、宜しく急速に之が撤廢を畫策して、公開外交主義實現の機運を招徠せねばならぬ。重ねて言ふが、廻り諄いことは時代精神の最も憎惡する所である。又政友會が黨本位の政策を中心として、屡ば國民一般の利害を、地方的利害、若しくは階級(殊に農民)的利害のために犧牲に供して顧みなかつた樣なことをした態度を改めねばならぬ。國民本位の政策を實行することが、新内閣の生くる道を支配すると共に、その死する道をも支配する要素とならせたいは、この政黨内閣を迎ふるに當つて、我等が抱懷する衷心の希望である。他のすべての事は、皆この一點より流れ出づべきものである。

第六に――而して最後に我等が新内閣に希望したいことは、そが平民内閣としての特徴を極度に發揮するを努めんことである。新内閣がその本來の素質如何を問はず、一般公衆より案外の快感若しくは好感を以て迎へられて居る樣に見えるのは、好かれ惡しかれ、そが無爵内閣であつて、何となく肩が張らない感じがするからであらねばならぬ。『政府の威儀部』などいふことが、さも重大な事でもあるかの樣に、舊式の民權思想で固まつた政治家に依つてさへも唱道せられたのは、つい數年前の事であるが、今日ではそれが既に隔世の事の樣に思はれ出したのは、大戰開始以來の時勢の舊變に基くものであらう。現代は威儀

よりも能率といふ時代である。否、能率が實質的威儀となつた時代である。堅苦るしい候文や漢文崩しの文章體が急速に廢れて行つて、多數の新聞紙の社說欄に今尙ほ時代錯誤が行はれて居るといふ驚くべき事實を別にすれば、論文のやうなものまでが、頻りに口語體で書かれ出した時代である。新內閣が無爵內閣であることが、その事だけで何事かを意味するものの樣に思はれるは、全くそが此時勢に投合した爲めである。官僚內閣の倨傲が民衆の反感を挑發したのも、政黨內閣の愛嬌が民衆の歡迎を强要しつつあるのも、根本に於ては同一理由に出づるものである。けれども愛嬌だけが平民內閣の唯一の特徵と思ふのは、飛んでもない謬見である。殊に愛嬌は瓢簞鯰に墮し易い傾向を有して居るものであることは、大に警戒を要することである。官僚が不言實行の蔭に隱れるのも、政黨が不得要領の饒舌に淫するのも、共に根本に於て官僚思想に基因するものである。發句ならば吏靑嵐でも作るのである。それ故新內閣に對しては、內[redacted]前に理解可能式に陳述し、陳述する所は國民の同意を得た上で必ず實行せんことを希望する。而かも如何なる事を實行するにも、官僚式繁文縟禮は大禁物である。更に又、繁文縟禮は高等政策實行の上に於て禁物であるのみならず、中央及び地方の官廳の行政事務の上にも、同樣に禁物であることを記憶して貰ひたい。官廳の行政事務の上に於ける繁文縟禮が除去せられた曉には、國民生活上の苦惱がどの位減縮するかは、到底測られないのである。而かも官廳には、形式と規律とを混同する官政思想の毒が廻り過ぎて居るから、一朝にして之を除去することは容易なことではなからうが、さればとて之を其儘にして置くべき筋合のものではない。孰れにしても我等は、新內閣員諸君が十分此點に注意して、從來の官僚式繁文縟禮に代ふるに、平民內閣一流の新しき能率主義を以てせんことを熱望して已まないのである。(七——九——二九)

原內閣に希望すべき事

文學博士　三宅雪嶺

[redacted]一には寺內內閣の後を承けたものとしてゞあつて、何人が內閣を組織しても望むべき事であり、二には特別に原內閣に希望すべく、他の內閣が成立したならば、希望條件を改めねばならぬ事である。

內外に差懸つて居る國政問題は、如何なる內閣が成立すると

も、解決の宜しきを得、よく執行するやうに望まずに置けぬ。日本が加入して居る世界戰亂は何と始末が着くか。新內閣が二年間續くとせば、講和談判及び其善後策は、其の手に於て爲さるべき順序である。內閣員は恐らく之を待ち設けて居らう。功名手に唾して得べしとは此事である。然し危險の伴ふは言ふまでも無い。彼等自らに危險は無からう。從來責は重く罰は輕い事になつて居る。失敗しても辭職さへすれば濟む。然し國家に伴ふ危險を忘れてはならぬ。迂濶の事をして取返しがつかぬ。日本が何の位置に立つか。主動者となるか、追隨者となるか。聯合國の協議で動くものの、其間に自ら區別がある。歐洲方面には最も利害關係多きもの、又は最も多く力を伸したものが主動者の位置に立ち、他は之に追隨するのであつて、味方には英・佛・米、敵には獨逸が主なるものとなる。日本で餘り大きく口を利くのに六つかしい。我が大使の技倆で何かの差があつても、シテの役を勤むるは六つかしからう。けれども東洋方面に於て、日本は唯他に追隨して安ずる譯に行かぬ。自國の安全を圖る點に於て、自ら主張し、他で之を拒む場合に、飽くまで爭ふを當然とする。東洋では日・英・米・獨の利害衝突する惧れがある。露が國力を恢復すれば、之れ亦其中に加はる。日本では獨逸が青島に根據地を持つて居るのを、平和に害ありとして之を攻略し、尙ほ太平洋に於ける獨領をも之と共に攻略した。當時東洋で最も力あるは、日本及び英國であり、英の勢力扶植が我れに優り、我れに於て今少しく我國の勢力を伸したいと考へた。日英同盟で互に協同するものゝ、幾分の暗鬪を免がれなんだ。併し何と云つても同盟國であり、又甚だしく利害の衝突する事も無い。互に長短相補ふの關係になつて居ると言ふて可い。近來在支英人も稍悟る所あつてか、事が都合好く運び來つた。

所が新に米國が加はり、何邊まで勢力を伸すか量り難い。今の米國發展は何國でも餘り豫想して居らなんだところであり、米國自ら意外の感を催して居る。百五十萬の陸兵を送り、尙續々送らうとし、而して昔に聞えた獨逸の强兵と鬪つて屢々之を破る。敵の疲れた後とは云へ、勝利を得て居る。國富んで兵が强い。さなきだに何事も世界一を以て居る米人は、我が力斯くの如しとの振舞をする。實に目醒しい發展である。眞に正義人道を重んずる者あれど、又唯力を恃み、弱者を威壓しようとするのがある。米洲の事は米の承諾を得ねばならぬといふを擴張し、世界の事は米の承諾を得ねばならぬといふ勢を生じ來つて居る。東洋で之と協調し得ぬではないが、勢に乘じた米は、或は止目途も無くならぬとは限らぬ。如何に之と協調するか、原

氏關係者は、曾て日英米同盟の意嚮あるとの事であるが、此方で思ふやうに先方で思ふて呉れるか如何か。支那の事、西伯利の事、日本の獨斷で決定すべきでなくても、下手に間誤付いては着々先手を打たれる。東洋方面で他國の追隨者たるを餘儀なくされる。日露協約は幾分か此邊の考もあつたが、今は全く效能が無い。長い物には卷かれると諦めるか、又たは强ち從來の關係を墨守せず、强いて壓迫されるならば、我れ亦了簡ありといふ所まで出づべきであるか。英、佛と何の關係すべきか、獨逸と何の關係すべきか、此間の折衝容易でない。何國贔負といふ事では、事を處する事は出來ぬ。帝國附近に對しては、帝國自ら主動者の位置に立ち、他と協調する時にも、之れを忘れぬやうにすべきである。

内國では財政經濟が重要なる問題である。高橋氏なり山本氏なり財政に當つた時は、日本が債務國であつて、如何に金貨の外に出づるを防ぐかを考へねばならなんだ。積極消極の差はあつても、[redacted]として金の多いに困るといふ始末である。困る筈なけれども、實際困つて居る。前は輸入超過で、重金主義の弊を見やうと思つても見えず、今は其弊が露はれて來て居る。金が剩つて困るなど、從來の習慣で考へ及ばぬ所である。高橋は通貨と物價との關係無いやうな事を云ふ。何にしても物價騰貴は事實であり、實に驚くべき騰貴となつて居る。米騷動は他にも種々事情あれど、國內の人が食ふに相當するだけの米が無いに出るは疑を容れぬ。賣れるだけのものを賣る。輸出し得るだけのものを輸出する。大抵のものは高く賣れる。內に金貨が澤山になつて、品物が足らぬ、食物も足らぬといふ關係になつた。多數の收入が多くなつたので、物價騰貴も妨げないと云ふもの丶、暮しに困難する者の尠くないは明かである。多數は收入が多くなつたとしても、一方に濡手で數百萬數千萬を積んだ者あるの傍、其日暮しに困る者あり、低い官吏、低い銀行會社員が生計に困るとは、健全なる狀態とは云へぬ。頭が熱し、足が冷えて居る形である。何とか之を治療するやうにせねばならぬ。一方に利得稅を課し、一方に救濟金を頒つなど、治療の手當であるけれど、根本的治療でない。米騷動は或るはづみで出來たもので恐るゝに足らぬとするか、さう高を括つて居れるか何うか。何國でも變[redacted]造作も無く鎭壓し得られると云ひ、又鎭壓し得るが、層一層大なる騷擾が起り、遂に手の下しやうが無くなる。今はそれ程の事でなく、それ程の事でない所で防がねばならぬ。然し現在の勢が何處まで續くか。講和が成立つて尙ほ續くか或は速からず勢の變ずるか、當局者は凡ゆる機關

を以て査べ得るたけ査べ、宜しきを得るやうにせねばならぬ。今のやうに事實權を持たせ、他の競爭を禁じ、而して唯賞與配當を多くし、設備の如何を構はぬもの丶いろ〳〵あるが如き、何時か破綻無くして濟まぬ。政府から保護金を得、七割の配當をして居るものがある。政府へは飲食を節して稅金を納める者が到る處にある。此邊の事をとくと考へて然るべきである。

其他何の方面にも註文すべき事あるが、特別に原内閣に望むべき事がある。何にしても初めて無爵の首相が出來たとて、少くも面白半分に歡迎せられるのは全く無意義でない。實に勢の變化を示して居る。有爵者中に首相適任者が無いとあつては、心細い次第のやうであるが、有爵者に人が無いのでなく、無爵者に人が有るやうになつたのである。民主主義とか民本主義とか、いろ〳〵「民」の字の附いた事を云ふが、多數民衆を煽動するが爲めとしては誤まる。實に年々歲々民衆の力が伸びて來て居る。教育の普及する結果とも云へるし、社會全體としての發達とも云へるし、事實を云ふのである。明治十年、二十年、三四十年、以て今日に至るまで、年々明かに民衆の力の伸び來つたのを認める。百萬長者の數へ切れなくなつたのを以つても分かる。首相も有爵者に限つて居れぬ。無爵に有爵者以上の適任者を見出し得らる丶。原内閣員は自分だけ政黨内閣を作り得たとして誇らず、全體の趨勢の然る所として、從來官僚の弊と認むべきものを除くに努むべきである。餘計な事に手數かけ、直ぐ片附く事を幾日も延引するやうな事を廢止すべきである。成るべく勿體を附けぬやうにするが可い。米國で外交の秘密無いやうにすべしとあるが、當分外交に望みがたい。然し内政に望むのは少しの無理がない。時として秘密を肝要とする事もあれど、何でもない事まで秘密にするは惡い。官吏は民衆を敵とすべきでない。人を見れば泥棒と思へといふのは惡弊であつて、官吏が事毎に秘密を守るのは、斯く民衆を見るに外ならぬ。民衆に對してのみでなく、官吏互に相疑ふに到りては、弊風も亦極まる。直ぐと悉く秘密撤廢といふ譯には行かぬが、力めて秘密を少くすべきである。物事に勿體を附けず、隱し立てせず事實を事實とするやうにすべきである。公明正大といふも畢竟此の邊から出て居る。原内閣員が此の邊りで、官僚内閣當時と異る所を明かにしたならば、世に益し自ら益するであらう。

官僚が政黨に敵意を挾み、政黨内閣の不可を唱へ、世間に之を贊成する者あるは、政黨員が政權を利用して私利を貪る形跡があるからである。伊藤公が山縣公と政黨の是非得失を爭つたのも其點が主になつて居る。政黨が政權を占めては、何ういふ惡い事をするかも知れぬとは山縣の持論である。伊藤は天皇に

奏上し、自ら政黨を造る事に決意した。從來の政黨組織を一變するの覺悟である。議員のみを以て團結し、地方に別段支部をも置かうとせぬ。即ち地方で利益を爭はしめぬが爲めである。所が一伊藤の思ふやうに行かぬ。何と云ふても蟻の集るは甘い物を指しての事である。政黨の勢力を擴張するには、種々の情弊を忍ばねばならぬやうになり。伊藤は苦々しく思つたけれど、だん〴〵改めやうとの事であつた。

それから大分年數を經て居る。無爵者が首相となれる程、社會一般に變じて居る。前には利益を以て釣らねば人が集まらなんだが、今はさう爲なくても相應の人を得る事が出來る。政友會は鐵道、港灣、土木等の利を以て黨員を釣る事になつて居り今も急に之を改める事は出來まいが、改める事が出來ぬとせず、出來るだけ改めるやうにすべきである。何程か黨勢擴張に不利であらう。利益を以て釣る効能は著るしい。然し擴張を遲くしても、黨弊を改める方が、今後政黨の位置を鞏固にする所以である。政友會は內閣を占めてから黨弊が改まつたとなれば、今後黨弊を指摘して政黨を攻擊する事が減ずる。或は無くなる。若し政友會內閣成立の爲め、各地方で政友會員が長官と結托して私利を貪るやうになつては、山縣公の政權を政黨に手渡してならぬと云ふのは先見の明を示す事になる。官僚盛り返しの實を見るであらう。それでなくても次の內閣は憲政會內閣でなく官僚內閣と推定する者がある。原內閣員たる者は深く此の邊の事を考ふべきである。之れ彼等の心得次第であつて、才幹如何の問題でない。內外國政の事は無能で能くする事が出來ず、或は望んでも益がない。併し官僚の風を改め、且つ政黨の弊を改める事は、其力の及ばぬ所でない。國勢を處するの宜しきを得ん事を望み、若し之を能くし得ぬとならば、せめてもの事に官廳及び政黨の改善を行つて貰ひたい。

原內閣に對する我等の註文

松山忠二郎

一

原內閣は形式の上に於て政黨內閣である。而して政黨內閣は輿論政治の行はれる所以である。先帝陛下の明治初年に發布せられた五ケ條の御誓文中、「萬機公論に決す」といふ御[illegible]行される端緒である。故に主義としては原內閣は私共の歡迎する所である。

然らば原內閣に對して何も註文する事が無いかと云ふに大い

にある。私共の原内閣を歡迎するのは以上の形式に於てゞある。憲政上の見地からである。政策其他の點に於ては、原内閣に對して大に註文が無いでもない。今後大いに論爭しなくてはならぬ事が有ると思ふ。然らば吾人の原内閣に對する註文は何であるかと云ふに、其註文を明かにするに就ては、先づ原君初め政友會の從來の缺點を擧げるのが捷徑(ちかみち)である。缺點とか短所とか弱點とか或は失策とかいふものを擧げて、之を矯正せん事を註文するのが捷徑である。

二

然らば政友會の從來の缺點は何であるかと云ふのに、其第一は元老及び軍閥の鼻息を窺ふ事である。元老及び軍閥に對して思ひ切つて反對する事をしない點である。心中隨分彼等の專橫を憤る場合も度々あるだらうと思ふが、之を正面から攻擊せず其鼻息を窺ふ事である。其一例を云へば、先年陸軍擴張案の問題になつた時に、何時までも其態度を決せず、例の白紙だと云つたが如き、又近來熟柿の落つるのを待つと云ふが如き、何れも皆表面から正々堂々と元老とか軍閥とかに反對する事を躊躇した證據である。

然し元老及び軍閥の本尊と云はれる山縣公は、餘り政友會が好きでないのである。肝腎の原君なども決して好くは思つて居ないのである。殊に彼は政黨内閣を最も忌避するのである。故にかゝる人に向つて、お世辭を使つたり、其鼻息を窺つたり、若しくは反對を躊躇した所で、何もならないのである。決して好意的に政權を讓つて呉れたのではないのである。やはり力を以て取るの外はないのである。其實例は今回の政變に於て最も明かに證據立てられた。山縣は政黨の首領は總理大臣に適しないと云ふのである。それで西園寺侯の外に適當なる總理大臣が見當らないと云ふのである。決して原君を推薦するのは山縣の本志でなかつたのである。それにも拘はらず今回意外に早く原君に大命の下つたのは、内部から西園寺侯の推挽した事もあるであらうが、第一に政友會の力で取つたのである。山縣が政友會の力は如何ともすべからずと考へたからである。決して好意的に呉れたのではない。今度と云ふ今度は原君も此理窟が分らなければならない。從て今後は從來の如く悧巧な態度は罷めて何時も力で政權を取るといふ覺悟をして貰ひたい。力といふても決して腕力を意味するのではない。暴力でない事は無論である。唯憲法上與へられたる衆議院に於ける多數の力を以て取るといふ意味である。從來原君が元老の鼻息を窺つて、所謂圓滿授受を夢見て居たが爲めに、其總理大臣になるのが今日まで遲れたのである。初めには力で取ると決心すれば、既に三年も以

前に原君は總理大臣となり得たであらうと思ふ。例の憲政擁護會の時に最期まで踏張りさへすれば、元老も軍閥も其權威を失つて、日本は明かに政黨政治と成つたのであつた。而して加藤子も既に一回位は總理大臣になつたらうと思はれるが、衆議院に何時も多數を占めて居る原君の如きは、夙くの昔に總理大臣と成り得たらうと思ふ。原君が今日總理大臣と成つたに就て、吾人の第一に註文すべき事は之れである。

三

第二に政友會の從來の缺點は、動もすれば黨本位に傾く事である。國家よりも黨を本位として意見を定めるのであるまいかと思はるゝ點である。從來の例に據つても、頻りに鐵道とか港灣とかいふものを黨勢擴張の爲めに利用した形跡がある。それから總選擧の場合の便利を思ふて、自分に利益になるやうな府縣知事を各地に配つた形跡がある。尤も此最後の點は獨り政友會とは云はない、大隈内閣の時にも隨分やつた事である。故に政友會のみを[redacted]つたのは事實である。そこで世間からは政友會は凡て黨本位で仕事をするといふ批難を受けて居る。之れは政友會が今まで屢々責任の衝に立つたからで、餘計に目立つたのであらうが、世間に左樣な批難のあるのは事實である。故に新内閣にして若し第三者の信用を博しようといふなれば、此點に於ても大いに反省して貰ひたい。縱令黨勢擴張の爲めには少々不利益であつても、國家本位を以て凡ての問題を解決して貰ひたい。

四

第三は政友會の主義方針が今まで餘り明白でなかつた。頗る曖昧であつた。謂はば瓢簞鯰の形があつた。例へて云へば前記の憲政擁護會の時分には、大に軍閥官僚の打破を叫呼したものである。根本から徹底的に元老政治を打破しなければ、日本の憲政は進歩しないと主張したものである。然るに其後は往々にして官僚若しくは軍閥と妥協する。昨年の議會に國民黨が不信認案を提出した時に、之に贊成せずして寺内内閣を擁護したるが如き其例である。此點から云へば政友會の憲政上に對する主義方針が不明である。外交上に於ても左樣である。歐米に對する外交、支那に對する外交、とんと政友會には徹底したる主張が明かでない。其時々の問題に應じて進退を決するは言ふまで[redacted]財政經濟に就ても左樣である。從來政友會のして來た跡を考へて見るのに、或は積極であつたり或は消極である。何れが政友會の主義方針か分らぬ。現に閣僚の中には消極的財政家を以て有名な農相山本達雄君も居れば、飽くまで積極方針を執る藏相高橋是淸男も居

る。從て目前の問題として物價調節・通貨收縮に對して、政友會内閣は如何なる方針を取るか不明である。斯くて憲法上外交上財政上に於て主義方針の明かでない事か、之れ亦政友會の缺點である。今後は之を矯正して貰ひたいものである。

五

最後に政友會の缺點とは云はないが、從來我國の外交上に於て大いなる缺點がある。政友會の新内閣が此缺點を矯正されん事を切に希望する。それは外交上の不統一である。霞ケ關外交と陸軍外交とが勝手放題に不統一なる仕事を爲る事である。外務省には外務省の方針があり、陸軍省特に參謀本部は參謀本部で一種の意見を持つて居る。啻に意見を有つて居るのみならず、外國で實際に之を行ふ。其處で日本の外交が頗る不統一になる。殊に軍人外交は無鐵砲なる事をするので、第三國の信用を損する。其例を云へば大隈内閣の時に、參謀本部では頻りに支那で活動した。外務省の同意する場合もあつたが、時に持て餘した場合もある。縱令或程度までは外務省と同じ意見であつても、大に其程度を越えて活動し過ぎた。之が爲めに外國の信用を傷けた事は爭ふべからざる事實である。例の後藤男の秘密出版と云ふものに記載されてある事件、即ち後藤男が大隈内閣の外交の亂暴なる事を指摘した事があるが、それは即ち軍人外交の弊である。或程度まで大隈内閣も同意見を有つて居たかも知れないが、實は大隈内閣で此軍人外交を押へる事が出來なかつたのである。それで軍人が出先きで亂暴な事を爲たのである。所が此弊は獨り大隈内閣時代ばかりでなしに、何の内閣の時でもある。現に寺内内閣の時――陸軍大將元帥寺内伯が總理大臣である其時に於ても、外務省と參謀本部との外交の統一が保てなかつた。それで我國は特に西伯利に於て、言ふに忍びざる失敗を爲してゐるのである。此事實に就ては明白にいろ／＼話したい事はあるが、今之を話すの自由を許されてないから、詳しい事を赤裸々に云ふ譯には行かないが、昨年來西伯利特に東部西伯利に於て、軍人外交がさん／＼襤褸を出したのである。その亂暴にして不體裁なる事は、後藤男が嚮きに大隈内閣の時に秘密出版で素破拔いた以上の事である。之れが爲めに聯合與國の信用を傷けた事は大きい。現に米國が西伯利に於てチエツクを援助するに就ても、日本だけに頼まず自らも出兵し、遠方から英吉利や佛蘭西の兵隊をも招いて、何となく監視的態度に出でた事は、日本の軍人外交が聯合與國の信用を傷けた結果である。縱令信用を傷けないにしても、斯樣に外務省は外務省、參謀本部は參謀本部で出先きで勝手な仕事をすると云ふ事は、日本の外交を不統一ならしむる原因である。之れが我外交上の

大いなる缺點である。是非共此缺點を矯正したいと思ふ。原內閣が之を爲し得るか否やは疑問であるが、吾人の註文としては之を矯正したいものである。

其他小さい問題に就てはいろ〳〵註文もあるが、それは限りある場處に於て論し盡くされない所である。而して比較的小さき問題は何うでもよい。失策があつた所で大した事はない。今後どんな問題が起るかも知れないが、差當り吾人の政友會內閣に對して希望する所は前記の通りである。之れだけ出來れば先づ大成功と云はなければならぬ。

外には自主的協調、內には國民と協調

中野正剛

▽顔觸れよりは政策

原敬氏を首相とする政友會內閣が成立した。世間には人材は官僚以外に無いやうに思つて居た向もあつたが、あの顔觸れならば不足は無い。床次、山本、中橋、野田など何れも立派な大臣と云ふて可い。世間で野田を非常に詰らぬやうに云ふが、腕前から云つたら今度の大臣中寧ろ大に優れて居る。何も青表紙讀みさうな顔が大臣の適任者とは云へまい。世界の大勢に餘り無學だと云へば、寺內內閣の大臣達でも今度の大臣達でも十把一束、何れも同樣で特に野田を云々する事はあるまい。世界の大勢に處すべく閣員等が何れも古臭いと云へばそれまでの事、日本に大革新を行はずして內閣を組織するとすれば、先づあの邊で我慢せずはなるまい。原氏を首相とする內閣としては上々の顔觸れを網羅したと見ねばならぬ。其上我國では憲政施行以來第一回の政黨內閣であるから、其前途の多幸ならん事を希望せざるを得ない。

此政黨內閣が猛進一番將に仆れんとする閥族の殘類を蹴散し、立憲政治の新紀元を開く事には何人も異存はない。然し乍ら政黨も大分久しく官僚に屈服したり、閥族と妥協したりして來たので、官僚は黑、政黨は白と明白に是非を決定する譯に行かぬ。殊に妥協から情意投合それから是々非々といふ奇怪な經[redacted]出來てそれが强くさへなればよいとは云ひ難い。先づ政友會が官僚の城塞に突進するは固より必要であるが、官僚と區別すべき大政策を樹立し、之を携げて進む事を考へねばならぬ。

▽外交上の一大轉換期

政友會總裁新總理大臣原敬氏は外交調査會にも與つて、外交の樞機には悉く參與してゐるから、帝國が外交の一大危機に臨んでゐる事は萬々承知の次第と思ふ。一體原氏は外交調査會に列したから、前内閣と外交上の責任を分つ積りであるか、抑々外調には列したが其遣口が氣に喰はぬので、今度の政變を來すべき空氣を醸したのであるか、其邊少しも明白でない。外調で原氏が政府と意見を異にすると云ふ話は屢々傳へられたが、最近西伯利出兵問題に就て、政府の大規模の出兵計劃を叩き破り、聯合國との協調を保たしむるやうにしたのは原氏である事は、政府系の通信や新聞やが漏す所の消息である。

原敬氏も内政問題に懸けては一廉の横着者である。外務省生活は短かつたが、其間にも局長位の位置に居りながら、大臣次官等が餘り馬鹿正直で、歐米の強大國の要求となると少しも値切る事も出來ないで、直ぐにお辭儀するのを抵捂しく思ひ、あれは軟弱と云ふよりは懸引きが足りないのだと嘆息して居たさうだ。嚮きに協調論を唱へたのは何も米國に屈從しようとの意味ではなく、浦鹽以外に兵を出しては馬鹿らしいと云ふので、先づ以て高襟風に聯合國との協調などく洒落れ、それを以て當面を糊塗したのかも知れない。それであつて見れば今日融通の道を考へねばならぬ。

熟く考へて見るが可い。今は前日と對米關係は全然反對となつて居る。曩きには浦鹽以外に兵を出さぬ事が米國との協調を保つ所以であつたが、今度は大規模も大規模、有繋のバイカル博士や新派喜劇の九博士達さへ思ひ附かぬウラル以西の大規模出兵を斷行する事が聯合國との協調を保つ所以となるやうになつて來た。此事に關する予の詳細の意見は「東方時論」十月號所載「時論」及び「國難四邊より迫る」を一讀せられたい。

原首相は協調の文字を重んじ、從來の態度を一變せる今日の英米とも尙協調を保つの必要を認むるであらうか。

▽内政上の協調は國民を相手とせよ

外に向つての協調論は非常の危機に瀕んでゐる。協調も結構であるが自主的協調でなければならぬ。日本は對西伯利問題に關して爲すべき事と爲すべからざる事とを明白にせねばならぬ。爲すべき事は如何なる妨害あるも斷じて之を爲すべく、爲すべからざる事は如何なる列國の勸誘あるも、決して之を爲さぬといふ事は先づ肚の中に決めねばならぬ。之を定めて後の協調でなければならぬ。此根本が定まらぬ協調は屈從の別名である。原敬氏は獨り外交上のみならず、内政でも協調が好きである。その野に在つた時、常に私語して曰く、「官僚閥族の政見にも同意しないか、兎に角政權を取らねば何事も出來ない。それで

取るまでは少しは無理も通させてやらねばならぬ。」と。之が即ち原敬氏が妥協政策と是々非々政策の間に逡巡する理由である。隨分巧い事を云つて居るが、こんな行懸りで天下を取つた曉、サア政權を取つた以上は乃公の考へ通りにやるといふ風に巧く行けるか如何か。協調で取つた天下は協調で保たねばならぬ。原敬氏は國民との協調を破つても元老との協調さへ保てば可いと思つて居るかも知れない。今度内政上に協調を保つならば、眞正の民意と協調を保つて貰ひたい。田中義一君が陸軍大臣となつたが、此人は前内閣の援段政策、大規模出兵の張本人である。原氏が此人を陸相に据えたのは元老軍閥と協調を保つ下相談が出來たのではあるまいか。原氏は軍閥を喜ばせるやうな巧い事を云つて居る。「寺政も正立者だが豫算なんどにアンナに愚圖々々して消極的では面白くない。陸海軍の豫算も大に積極的に立てねばならぬ。………」と。積極的の法たるや大によし。唯此積極的とは何を意味するか。海軍が少し進めば陸軍も附いて進む。[redacted]が、陸軍擴張の必要が認められないとすれば、其處に國民を眩惑する爲めに勝手な手品を使ふ。外からは聯合軍の强い脅迫的勸誘が來る。之に卷かれて置くのは一時を糊塗するのに都合が好い。其上名義を壯大にして獨逸軍國主義の根本的打破など叫びながら、列國の御機嫌を取ると共に、理屈の立たぬ陸軍擴張の理由を空德利から絞り出すといふ手品の材料にする事も出來る。畢り軍閥との協調を保つ爲めに國民を欺き、民意との協調を無視するといふ順序になりはすまいか。

更に注意しなければならぬ事は、外交と共に國民の生活問題であるが、原氏は之れにも隨分妙な手品をやる方ではあるまいか。滑稽なるは通貨膨張論者の高橋是清男を大藏大臣に据え、通貨縮少論者の山本達雄氏を農商務大臣に据えてゐる事である。高橋男の通貨膨脹論には隨分不純なる動機も含まれて居るかに傳へられて居るが、不純な事をやる位な漢(をとこ)だから大きな仕事も出來やうと思はれたのであらうか。之に反して山本氏は正直者として、潔癖の西園寺侯に見出された人だか、正直と噂される程あつて手捌きは小い。此手捌きの小い山本氏が農商務省で小規模の物價調節などやる後から太腹の高橋男が背後から通貨の膨脹をやつては堪つたものではない。今日通貨を縮小して[redacted]は學者の定論である。又國民生活の前途を憂ひ民意を尊重せんとする者の必ず執るべき政策である。然し之は成金達には受けが惡い。財閥を背景とする政治的勢力を維持せんとする者は之を喜ばない。其處で原氏は一方に山本氏の細腕で小さく國民を懷柔し、一方高橋

男の太腹で大きく財閥、成金、ボス政治家と協調を保たうといふ方針ではあるまいか。

今日の場合折角政黨內閣が出來たのであるから、我輩の希望から云へば、原內閣は成立早々外は自主的外交の大方針を確立し下に聯合列國と協調を保つならば、是非共自主的協調といふ事に肚を据え、同時に內は元老軍閥や財閥と協調を失するも、多數國民と協調を保つの政策を樹立せん事を宣言して貰ひたい。而して無理でも憲政會國民黨を引つ張り出して、國民を背景として三黨轡を並べて樞密院、貴族院、元老、軍閥、財閥との協調を破るのは勿論、場合によつては是等と戰爭を開始するの覺悟を定めて貰ひたい。どうせ初めて出來た政黨內閣であるから舊勢力との折合も宜しくない。世人が云ふやうに短命であるかないかは知らないが、何れ人氣が惡くなれば又々閥族共に叩き潰されるに違ひない。然し此閥族共は今は隨分臆病になつて居るから、原內閣が國民一般と協調を保つて行きさへすれば、容易に之を叩き潰す事が出來るであらう。原內閣は玉碎せんと欲せば國民と協調を保ち、舊勢力に向つて挑戰するが好い。否、玉碎ではない、之れ玉として全きを保つ所以である。民意を無視し閥族に向つて愛想的に協調を保たんとするなどは、對外政策に自主的方針なく、屈從的に聯合列國に向つて協調を尊敬するのと同じく、之れでは瓦全を保つ事すら困難である。我輩は內治外交上政友會內閣が幾多の六づかしき行懸りに居るに拘はらず、敢然として右の如き方針の下に勇往邁進せん事を切望して已まない。

政黨內閣の責務極めて重大

文學博士　澤柳政太郎

官僚とか閥族とふものが多年獨占してゐた政權を維持する力を失ひ、玆に芽出度く原內閣が成立するに至つたのは、寧ろ自然の進歩かと思ふ。然るに政黨內閣は時機が未だ早いやうに感じたり、政黨は未だ國政を運用するに足る實力を有つてゐないやうに思つたりするものが少くないやうだ。政黨でも世間でも平素は事毎に責任內閣の出現を要望したり、政黨內閣の必要を絕叫しながら、いざそれか出來やうとすると、之を歡迎せぬやうな態度に出でるのは甚だ怪しむべき事である。縱令政友會の主義政策に反對する者と雖も、憲政の運用は政黨內閣に據つて行るのが當然と思ふならば、反對黨でも其成立を歡迎し、益す

政發展の機運を促進せねばならぬ筈である。

純然たる政黨內閣ではなかつたけれども、今から二十年前に出來た松隈內閣、之れも今から十數年に出來た隈板內閣の如きは、今日の言葉で云へば藩閥內閣から政黨內閣に政權が移らんとしたものである。然るに政黨は健全な發達の道を辿らずに、或時は肝膽相照と云ひ、或時は情意投合などゝ唱へて、閥族に妥協したり屈服したりした爲め政權は逆轉して再び官僚藩閥の手に收められて今日に至つたのである。此逆轉は何から起つたかといふに、外からの力即ち官僚や藩閥の力で逆轉させられたのでなく、內から割れたので、決して他から打破されたものではなかつた。松隈內閣も內輪揉めから瓦解したが、隈板內閣は殊に甚だしかつた。今日まで內閣が藩閥とか官僚とか云ふものゝ手にあつた事は、誰を怨みんやうもない、政黨其物の行動宜しきを得なかつたからである。然るに時勢の進運はさういふ曖昧の組織を許さぬやうになり、玆にやゝ純然たる政黨內閣に近いものが出來た。之を逆轉せしめると否とは恐らく政黨其物の今後の行動如何にある。無論官僚なども好意は持たぬであらうけれども、然し彼等が幾許妨害を試みても、もう其力で之を逆轉する事は出來まい。即ち政黨內閣が益す發展するや否やは、政黨其物の行動覺悟に據つて定まるものと思ふ。第一次の政黨內閣たる榮譽を擔ふ政友會は、餘程自重してやらなければならぬ。反對黨も初めて正々堂々と爭ふ事が出來るやうになつたのだから、飽くまで公明正大な態度を以て之に對抗するやうにありたい。

原內閣に對しては具體的の希望もいろ〳〵あるが、大體を通じて世間が官僚內閣といふやうなものを、主義として餘り歡迎しなくつても、今日まで容認して來たのは能率の問題である。まだ官僚內閣の方が當局者としては仕事出來る。政黨內閣などは何が出來るかといふ考が國民の間に大分ある。極端な人は政黨內閣は自分の黨派を主として國家を第二に置くから、國利民福を害するなどゝいふ頑迷な考さへ抱いてゐる。固より之は固陋の見解ではあるが、有能の政府としては官僚の方が有能で責任のある仕事を爲ると考へる人は隨分少くない。之れは所謂松隈內閣や隈板內閣が、何事もせずに內輪喧嘩に耽り、偶々爲す所は獵官運動で、眞面目な人をして眉を顰めしめるやうな事を行つたからである。今度政友會內閣が出來、而して當局者をしての成績を上げねば、國民をして自ら其一部分の疑念を拂ひ去らしむる事になる。さうすれば玆に初めて政黨內閣の健全なる發達が期せられるやうになる。それであるから我輩は一つ十分なる成績を上げる事を新內閣に希望せざるを得ない。實績を上げ

て政黨内閣の效能を發揮して貰ひたい。

新政府は國民に向つてどういふ聲明をするか知れぬが、寺内内閣の沒落を來たした米價問題或は廣く物價の調節は、何人が局に當つても極めて困難な問題であるが、之を適當に解決出來ぬやうでは其壽命も永くはないであらう。又出兵問題の後を善くし、多年の懸案で、前内閣の沒落の原因であつた對支の問題を改善する事も亦困難の問題である。元來政友會は對支問題に就いては、謂はゞ白紙で形勢觀望主義を執つて來た。如何に形勢が變化するかが見込の着かぬ間は、輕卒に手を出す譯には行かない。此點で大隈内閣は手を燒いた。寺内内閣も不干涉主義を取つたが、時に干涉主義になつたり、形勢觀望主義になつてそれを一貫する事が出來なかつた。然し形勢を觀望する主義は一時已むを得ずして取る主義で永久の主義ではない。今日では積極に如何なる方針を執るかを定むべき時期に達してゐる。

序でながら教育方面について一言すると、多年の懸案であつた學制問題は、教育會の會議で十中の九部通りは決定して居る。未だ公令制度とは成つてゐないけれども、恐らく原内閣も此決議を尊重して行くに相違ないと思ふし、又それが當然である。教育會議で決定したものが非常に名案妙策とは思はないけれども、之を捨てゝ又考へ直しても、より優れた方法解決を得る事は六つかしい。のみならず折角此處まで漕ぎ着けたのを後に戻して考へ直さうとしては、僅かな歲月の間では迚も解決か着くものではない。一體學制改革を教育會議で決定したのは、唯懸案を解決したといふ事だけで重大の意義がある。何時までも懸案として居る間は、教育の施設や、局部々々の刷新や、又最も大切な内容の改善も根本が不解決だと凡て手控へにする。斯くして二十年の間學制問題が懸案のまゝ解決されなかつたので、殆ど實質的の内容の改善は却て手控になつて居た。それが解決されたのだから、今後は爲すべき事は實行し、内容實質の改善を圖る事が出來る。之を再び後に戻して考へ直すやうな事にすれば、教育の進步發達は全然阻害されて終ふ。であるから原内閣は恐らく教育會の議決を尊重して、其實質内容の改善に努力するであらうと思ふし、又是非さう爲る事を希望せざるを得ない。

終を完うして政黨内閣をして本及第たらしめよ

法學博士　浮　田　和　民

今度の政黨内閣の成立は、内外に對して好感情を與へるで

らうと思ふ。原内閣の長所だの特色だのは、已にいろ〳〵新聞によつて報道され、世間でも承知の事であるし、私も大體同感であるから、玆にはそれについて言を費す必要はなからう。唯私は内外に對する變化だけでも原内閣の出現は非常に好結果を來すものであると信ずる。

從來の寺内内閣には有力なる人物も居つたから、强ち個人的には排斥する譯には行かぬが、内閣其物の特色が寧ろ獨逸式であつた。議會或は立憲政治といふ事は唯形式に止まつて、實力實權は官僚就中軍閥で握らうといふ遣り方であつた。故は聯合國側に立ちながら、常に聯合國側から猜疑の眼を以て見られた。寺内其人が一向政治家外交家でないから、無用な言論を弄して聯合國側の惡感情を惹起せしめた事が少くなかつた。兎に角今日世界の大勢は、内部に於ても、外部に於ても、民本主義に歸着して居る。此の思潮に反對するものは獨墺側の主義方針であらねばならぬ。外交上では民本主義であるが、内政上兎角軍國主義と云ふ體裁では、どうしても日本國民は世界の輿論に背馳する事になる。今度の戰爭で世界の輿論の歸嚮する所は分つた。世界の輿論と云つても、少數と多數の意見である。英、米、佛、伊といふ所に世界多數の輿論が歸着して居る。世界の大勢に立ち遲れた日本は、善かれ惡かれ、内外共に世界の大勢に從つて行かねばならぬ。日本の政黨は不完全であつて一向民意輿論を代表して居ないかも知れないが、併も民意輿論を代表するものは議會より外はない。又代議政治を行ふ以上、多數の意見に從はねばならぬ。議會多數の意見が民間の多數の意見を代表するのが原則である。然るに寺内内閣は之を破壞するを唯一の手段とした。議會の多數が民意を代表するとせぬとに拘はらず、官僚或は軍閥の都合の好いやうになれば、政黨や議會は腐敗させても構はないと云ふ遣り口であつた。斯の如き世界の大勢と逆行する内閣では、戰爭の終局及び其善後策を託する事が出來ない。多數國民を代表し、民意輿論に基いて平和會議に主張するのでなければ、到底日本の意思は世界の輿論に徹底しない。此意味で原内閣の成立は、世界に對する日本の地位を進める上に至極結構であると思ふ。

内政上に要求すべき事は、政黨の今後の改善である。原内閣の遣り方一つによつて、今後日本に於ける政黨政治が進歩に向ふか退化に後戻りするかといふ事を決する事が出來る。從來政友會は餘り官僚閥族に屈從して惡政を助長した歷史があるから政友會が最も先きに成功して政黨内閣を成立せしめた事は、一面政友會の恥辱と云へるが、今までに例の無い政黨内閣が出來た事は政黨政治の全體から觀て慶ぶべき事である。明治十四年

以來政友會を初め憲政會國民黨が、憲政の手段として之を實現せしむる爲に奮闘努力した〻體の上から觀察すると、原内閣の成立は惟り政友會許りの成功にあらずして、憲政會、國民黨、其他板垣、大隈、伊藤の三氏の盡力の結果である。其點から云ふと原内閣の成立はやがて政黨政治が日本に於て初めて假及第をしたやうなものである。從來政黨と云へば政府は敵のやうに視て、之を撲滅し破壞し腐敗させるやうな手段を取つて來た。然し今や藩閥が其勢力を失ひ、官僚だけでは到底將來の國家を指導する力が無く、何うしても政黨に據る外はない、議會政治が日本の國體に缺くべからざる機關と成つた以上、それを圓滿に運用する者は政黨でなければならない。今後の國政は政黨を待たなくては到底運用する事が出來ないと藩閥官僚共に自覺した。其結果官僚は先づ政友會に政權を讓つた。從來も政權が政黨の手に入つた事實はあつたが、それは一時已むを得ず内閣を政黨に乘取らしたのである。然し松隈内閣でも隈板内閣でも、乘取つたには乘取つても、之を維持出來ずに仆れた。今度は官僚の方から納得して政權を讓つた。完全ではないけれども、兎も角も政黨内閣が假及第をしたのである。此内閣が數年續き、此内閣が民意輿論に副はないといふ時に、他の反對の政黨が民意輿論を代表して之に代るとすればいよ〳〵本及第である。原内閣の次ぎに薩長の官僚内閣が出來るやうな事があれば、政黨政治は落第である。原内閣の出發點は餘り名譽でなく、半分恥辱であるけれども、其施設如何と其終りを美くしさへすれば、全然政黨政治の面目を完して玆に本及第となるのである。故に原内閣の終焉が憲政の進步發達の上に重大なる意義を有つ事になる兎に角一旦内閣を組織する事が出來た以上、世界の大勢の歸着する所に從て民本主義の政治をやらなければならぬ。上を仰いで官僚閥族に迎合し、政權を把る事にばかり齷齪するやうでは駄目である。下を向いて民意輿論の示す所に據り、民本主義の外交、民本主義の内閣、民本主義の教育をやるのでなければ、政黨政治には成つても立憲政治にはならないのである。

夜長(よなが)の御準備(おしたく)

燈火に親しむ時季が来ました。
マツダランプは間違ひない電球です。
大丈夫な事に於て、
明るい事に於て、
徳用な事に於て、
皆様の御好評が何より証據です。

神奈川縣川崎町 東京電氣株式會社

販賣部 東京、銀座尾張町一ノ一、電話新橋長一〇五九、一九三、三二一二、一三七四、

出張所 大阪、西区阿波座通一ノ五、電話新町長六三〇、長八九九、八九八、

門司 西本町三ノ二九、電話、長四十、長六八二、

D-132



余の活動はオノトの力、余の成功はオノトの力。オノトを使用して以來余の敏活は二倍を増し、余の行く路を光輝を以て照され、恰も坦々たる大道を自動車を疾驅する如く愉快に快活に張り切りたる元氣を以てビジネスの成功の門に入れり。

余の活動はオノトの力、余の成功はオノトの力。



オノト萬年筆
無飾 金七圓
飾付 金八圓以上

オリオン萬年筆
無飾 金貳圓八拾錢

アルビオン萬年筆
飾付 金五圓五十錢

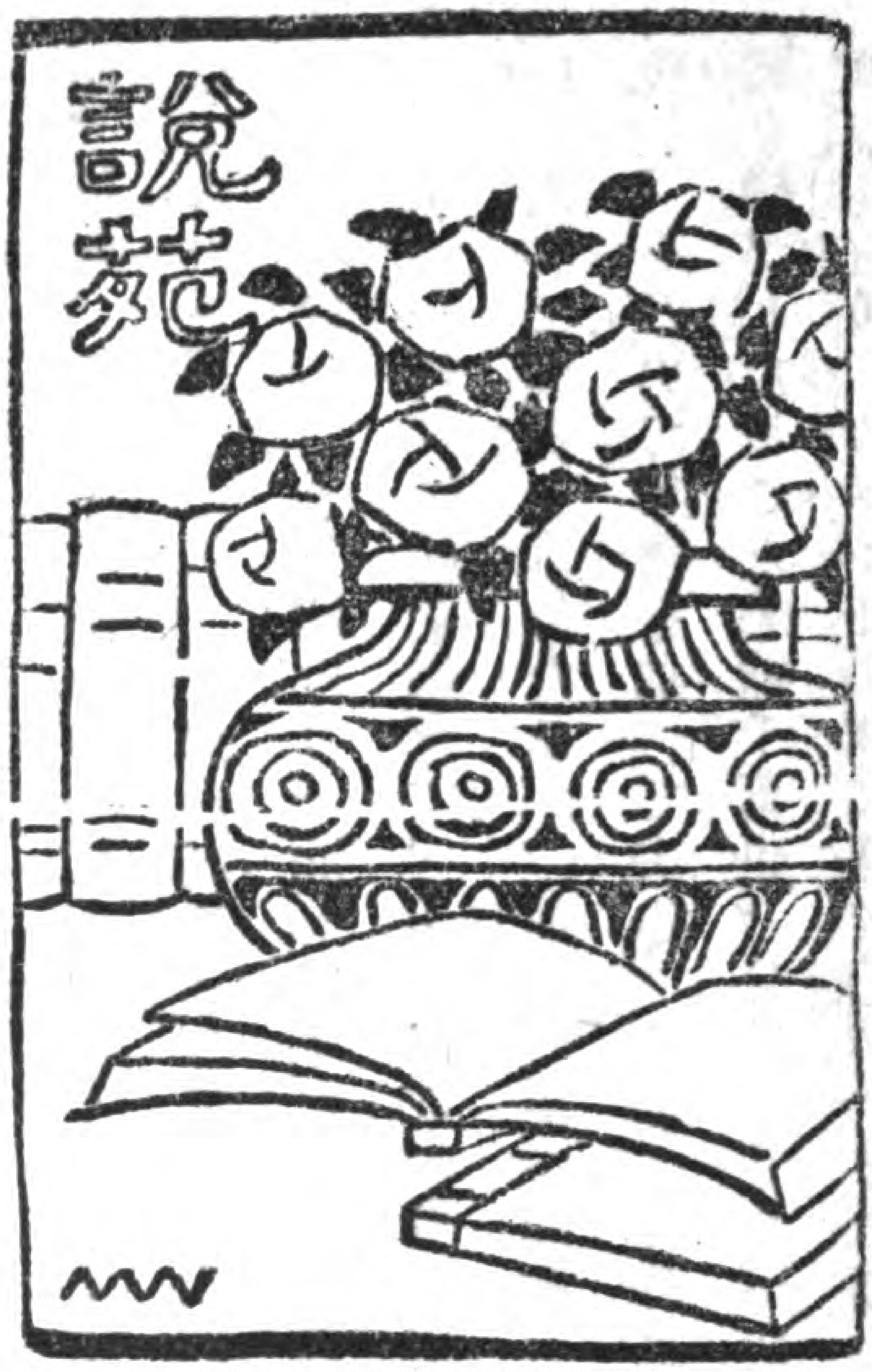
萬年筆用 **アテナ・インキ**
金参拾五錢
送料各金十二錢

東京市日本橋通

丸善株式會社

大阪心齋橋筋
京都三條通

福岡上西町
仙臺國分町



鐵窓の三十日

大町桂月

一

しるし無き物を念はずは一つきの濁れる酒を飲むべかるらし

酒の名をひじりとおほせし古の大きひじりの言のよろしさ

古の七の賢き人ども〻欲りするものは酒にしあるらし

賢しと物いふよりは酒のみて醉泣するし優りたるらし

言はむすべ爲むすべ知らに極まりて尊き物は酒にしあるらし

中々に人とあらずは酒壺になりにてしがも酒にしみなむ

あな見にくさかしらをすと酒のまぬ人をよく見れば猿にかも似る

價なき寶といふともひとつきの濁れる酒に豈にまさらめや

夜光る玉といふとも酒のみて心をやるに豈に如かめやも

世の中の遊びの道に樂しきは醉泣するにありぬべからし

この世にし樂しくあらば來む世には蟲に鳥にも我は成りなむ

生けるもの遂にも死ぬる物なれば此世なる間は樂しくをありな

もだし居てさかしらするは酒のみて醉泣するに猶如かずけり

大伴旅人の酒を讃する十三首の歌、啻に萬葉集に異彩を放てるのみならず、古今歌壇に卓出す。余さき頃三十八年ぶりに

て故鄕の土佐に行き、大伴の一族の土佐に現存せる家に就き、系圖を閲して、余は旅人五十代の孫なるを知り、『然りしか、〱、旅人の裔たる者、豈にます〱酒を飮まざるべけむや』とて、朝飮み、午飮み、晩飮み、夜半飮みて、泥醉をつゞくること、六十日の久しきに及びしは、嗚呼我れながら馬鹿の程度を通りこして、實に狂氣の骨頂也。

二

成人して後、始めて父祖代々の墓に謁せしことゝて、余の頭腦は知らず〱系圖の中に沒了す。當年後藤伯を擁して、朝鮮に大波瀾を起さむとせし大島更造翁も、余と同じく旅人の血を引ける人なることを、系圖の上にて知れり。豐川良平翁、余が十五六歳の頃、明治義塾に塾僕たりし際に、塾長と仰ぎし恩師なるが、近年、その家紋が余の家紋と同じく四ツ丁子なるを見て、『はてな』と思ひしに、展墓の結果として、豐川翁も同じく旅人の血を引けることを聞けり。而して未だ系圖上の精しきことを知らず。一日其門前を過ぎて、ふと、この事を明かにせむと思ひ、入つて面會を求めたるが、取次の男の面會を拒絕するに立腹し、その男に無禮を加へて去る。さるに其爲め、恩師の玄關を騷がしたること恐縮千萬也。分疏せざるべからずとてまた舞ひもどり、セメントの塀に墨くろ〲と大書して曰く、

『豐川先生、私は明治十五六年の頃、明治義塾にて高恩に浴したる者に候。今日訪問せしに、取次の人、私を虐待す。故に大に憤る。』

書き終つて、よく〱見れば、豐川家の塀にはあらで、其隣家の塀也。今思ひ出しても、我れながら噴飯す。いよ〱以て狂氣の沙汰也。

三

醉ひくたびれて、書齋に泥臥せしに、東川楊舟先頭となり、松本道別、弘田東行、田中桃葉等の面々之に次ぎ、顏も知らぬ白服の人さへ四五人加はりて、どや〱と亂入し、白服の人の手にて余の手足を捉へて、余を胴上にす。余其何の故なるを知らず。且つ驚き、且つ怒りたるもの、孤身隻手、到底敵すべからざるを知り、唯足に餘裕ありしまゝ、白服の一人を蹴たるだけにて、復た抵抗せず。楊舟口を開いて曰く、『貴方はアルコール中毒なるを以て、斷然之を治するの處置を取らむとす。これ親戚一同熟議の結果に出づ』。余曰く、『發起人は汝か』。楊舟默して答へず。白服の人、素早く余の左腕に注射す。余曰く、『いくらでも注射せよ』。答へて曰く、『一回にて足れり』。『さらば余を卸せ』と云へば、疊の上におろさる。余顏を少し斜にして疊に俯し、兩手を伸ばして背後に交叉す。なほ余の手足を押ふるもの、

あり。余曰く、『決して抵抗せず。余を押へつくるな』白服の手なほ離れず。『男子の一言』と云へど、なほ離れず。『先生が斯く云へば、大丈夫なり』と、桃葉の云ふに及んで、始めて離る。『桃葉さすがに余を知る』とうれしく思ひぬ。『道別、汝も楊舟と同意か。絶交するぞ』と云へは、道別聲を厲まして、『絶交せらるるも厭はず。後でわかる事なり』といふ。『桃葉、汝も同意か』と云へば、涙を含める聲にて、『仕方なし』といふ。余復た言はず。

果敢や人間の身體、唯一滴のモルヒネは十五六分經つか經たぬ間に、余の魂魄を天外に奪ひ去れり。

四

眼を開けば、電燈高く蚊帳の上に在つて明か也。四方を見廻して、余の家にあらざるを知ると同時に、楊舟の言を思ひ起して、何處かの病院なるべしと氣付く。さるにても、六疊の一室空漠として、煙草盆もなく、煙草もなく、茶器もなく、七度の近眼なる余の、眼鏡さへも無し。『よく／＼我を虐待するものかな』と、不平の念むら／＼と起りしに、忽ち見る、余の足の方より蚊帳まくれて、犢鼻褌の裸男入り來らむとす。余驚き上半身を起して之に接近すれば、『救つてやらうか』といふ。『何を救ふぞ』と問へば、右手を頭上にあげ、二本の指にて項をこつ／＼叩きながら、『我は神樣なり』といふ。『さては狂人なり』と薄氣味惡く、『荒立てゝは不可なり』と思案して、手をふりつゝ、『今はねむければ、止めてくれよ』と穩に言へば、思ひの外、おとなしく、そろ／＼出で行く。『斯る狂人の居るからは、普通の病院にはあらざるべし』と思ふにつけ、『虐待もその筈』とわかる。而して蚊帳の外の鐵窓を見るに及んで、憤怒の念、忽ち心頭に勃發す。余は物心覺えてより、この時ほど烈しく怒りたること無し。心臟鼓動し、手腕ふるへ、頭腦、顔面と共に熱す。『我を狂人あつかひにするとは何事ぞや。本當の狂人ならば、我れ甘心して、狂病院に入りもせむ。然るに我れは酒亂したるのみ。眞に狂せるに非ず。楊舟や、道別や、東行や、桃葉や、年來親しく交れる人々にて、余深く之を信ず。苟くも男ならば、正々堂々と余に面說すべき筈也。而して余若し理を非に枉ぐるやうならば、その時に始めて非常手段を取るべき筈也。然るに事此に出でず、一回も醫師に診察せしめず、無理無體に余を昏睡せしむるは、卑怯千萬也。又無禮千萬也。余は飼犬に手を噛まれたるやうなもの也。いよ／＼以て絶交せざるべからず』など、思へば思ふほど、憤怒の念加はりて、じつとして居られず。蹶起して廊下に出づ。恰も午前二時を報ずる時計の音聞ゆ。左の方にも、右の方にも、白服の看護人、椅子に腰かけて

見張れるさま也。右方へ行けば、『何處へ行く』と、看護人余を咎む。『我は七度の近眼なり。寢ても、起きても、眼鏡なしには居られず。醫局に行きて之を訴ふるつもりなり。』『夜深し。醫師は眠れり。夜明けてのちにせられよ』。『こゝは何處ぞ』。『巢鴨の石川病院なり』。『石川とは醫學博士の石川貞吉の事か』と念を押せば、『然り』といふ。『さらば余の舊學友なり』と、心忽ち降りて、おとなしく引返す。引返したるものゝ、どの室も同じやうなる室にて、眼鏡なければ、ますく余の室がわからず。まごくせしが、『こゝなり』と看護人に敎へられて、又も蚊帳の中にもぐり込む。

五

余が憤怒の念も『石川の病院』に、一時まぎれたり。今の第一高等學校の前身なる第一高等中學校の豫科三年の間、余は石川博士と共に學びたりき。豫科を終へて本科に入る際、同學の大多數は、醫科に入れり。その中に、藤浪鑑、橋本節齋、川島慶治、長野純藏、岡村龍彥、内田愼太郎、林蓮太郎の諸氏あり。石川博士も其一人也。一部分は法律科に入れり。中村進午、副島義一、丸山嵯峨一郎、辰野宗義、久保田政周、小田切磐太郎、宮尾舜治の諸氏これ也。政治科に入りたるは、甲野莊平、矢板寬の二氏也。工科に入りたるは、島安次郎、田淵精一の二氏也。

而して余一人文科に入れり。同學凡そ百人ありたるが、三十年の昔の事とて、多くは余の記憶に存せず。さるに石川博士は眞率なる點に於て、篤學なる點に於て、俗氣なき點に於て、異彩を放ちたるを以て、特に余の頭腦に印す。殊に近年二三回相見しこともあり。余その人物を信じ、其學を信じ、其術を信ず。博士は庄内の產、祖先以來、醫を業とすること、博士までにて八代の久しきに及ぶ。父は養貞と稱し、詩歌を善くせり。弟二人、長を文學博士藤井健治郎氏となし、末を醫學士平瀨享三氏となす。博士は斯る家柄に人となり、始め内科を修め、轉じて精神病を研究し、いづれも其堂に上れるのみならず、其室にさへ入れる也。

六

余の心今や唯早く博士の診察を受けむとの念を以て充たされたり。他の萬念を放棄して、その事のみを思ふほどに、又うとく眠る。

ばたくと廊下を步く足音の繁きに、目を覺ませば、夜は明けはなれたるが、起くるに懶ければ、また目をつぶる。隣室をはたく音やら、掃除する音やら、廊下を拭ふ音やら、語る聲やら、叫ぶ聲やら、いろく耳に入りて、睡氣自ら去りたれど、なほ起きず。一人入り來りて、余の蚊帳をはづし、たゝみて一隅に

置くさまなるも、なほ目を開かず。足音ます〳〵繁くなり、物言ふ聲益騷がしくなりて、眠らむとしても眠られず。起きて自ら蒲團をたゝみて、蚊帳の上につみかさね、窓に面して坐す。鐵棒ありて、顔は出されず。目の屆く所、横は二三十間に限られ、遠くなるにつれて、少し開く。窓の近くに、若木一列に立てり。十數間さきの黒板塀の上には、人家の屋根見ゆ。唯雀の鳴くのみにて、窓外はいと靜か也。『顔を洗へ』と看護人に呼び出され、導かれて洗面所に至りて顔を洗ひ、口をそゝぐ。室にもどりて、こたびは廊下に面して坐す。いろ〳〵の人、足をとゞめて余を見入る。余眼鏡なければ、誰を誰と見分くること能はず。その中に、例の『神樣』、一歩を余の室に入れて、『救つてやらうか』といふ。余可笑しさを忍んで、おとなしく手をふれば、『神樣』もおとなしく默々として立去る。

七

朝食にとて、看護人の持ち來れる饌の上に、牛乳瓶三本つゝ立てるを見て、『牛乳は酒毒を消すとの事にて、平生朝は牛乳を飮み居るが』と、ひとり頷づく。なほ食ぱん二片あり、砂糖を盛りたる小皿あり、味噌汁あり、漬物あり、余は味噌汁と牛乳一本とぱん一片とを飮食して止む。食後、看護人藥を持ち來りたれど、余斥けて飮まず。

一醫來りて診察したるが、石川博士にあらざるを以て、余はろく〳〵相手にせず。『やがて院長來診すべし』とて立ち去る。看護人に向つて、院長出勤の時刻を問へば、『九時頃なり』といふ。九時の音を聞く。醫局はこなたなるべしと見當を付けて、廊下を左に行けば、見張の看護人の外に、テーブルを擁する白服の男あり。顔はさまで老いざるに、頭全く禿げて、てら〳〵光り、幅廣き顔の下部は漆黒の長き髯鬚に蔽はる。一見頗る魁偉也。『これやこの病院を娑婆の地獄とすれば、獄卒は看護人、閻魔はこの人にや』と、目をそばだてゝ、『院長はまだ出勤せざるか』と、問へば、破鐘の如き聲はりあげて、『まだなり』といふ。一たび引返して、また行き、『院長はまだか』。『まだ〳〵』。又行きて、『まだか』。『まだ〳〵。』

時計十二時を報ず。また行きて、『平生午前九時に出勤するに今日出勤せざるは、病氣にや、差支あるにや。電話にて聞いて吳れよ』と云へど、應ぜず。『出勤して居るに相違なし。我は決して逃亡を企てず、亂暴もせず、若し不安心ならば、余を縛してなりとも、院長の居る處へ伴ひ行け』と云へど、なほ應ぜず『さらば院長の出勤するまで、こゝに在らむ』とて、廊下に坐る。『それが即ちキ印なり』とつぶやく。癪にさはれど、自ら制して、『こゝに居りては、邪魔になるか』。『邪魔なり』。『さらば』

とて、室に引返す。

看護人、午食を持ち來る。『院長に逢ふまでは斷じて食はず。持ち去れ』と云へば、『それは小さき了簡なり』とつぶやく。これも癪にさはれど、自ら制して、何とも言はず。看護人饌を置放しにして行く。午後二時過ぎに至り、看護人來りて、『どうしても食はれぬか』。『食はぬと云ひたる以上は食はざるなり』。『湯はいかゞ』。『湯なら飲む』と、湯呑に湯を受けて飲む。『今一杯』とて、都合二杯飲む。『晩食は如何』。『晩は食ふから、持ち來れ』。看護人安心したる顔付にて、饌を收めて去る。

朝も午も酒を口にせざることは、六十日以來、今日が始めて也。口寂しくはあれど、平生朝飲と午飲は廢せざるべからずと思へるを以て、さまで苦痛には非ず。斯くて余の酒氣は去るのみにて、新には加らず。鐵窓の裡と知りて、自制力も起り、院長の名を聞きて安心せり。殊に二杯の白湯は、忽ち余の頭腦をして、恰も夜の明けたる如く感ぜしむ。白湯の効能を知ること、余に於ては、これが空前也。

今や余は全くしらふとなりぬ。鐵窓に向ひて沈思す。『院長に面會を迫りたるは愚なるわざなりき』と反省し、『楊舟等に對して、怒りたるも、あさはかなりき』と自ら取消す。往いて『閻魔』に向ひ、『先程までは、酒氣の殘れるまゝに、院長との面會を迫りたるが、今や酒氣全く去れり。決して面會を迫らず。余の一身を以て、院長に一任す。安心せよ。又酒氣ありしまゝに今朝の醫師に無禮せり。願くは我が爲めに謝せよ』と言ひすてゝ、室に入りて窓に向ふ。

ふと顧れば、『神樣』いつの間にやら、余の側に在り。余を見て、例の『救つてやらうか』といふ。『救ふとは、何をするぞ。說法するなら、聽かむ』。『說法はせず。頭を採んでやらう』といふ。『それなら眞平』と手をふる。『神樣』手を合せ、暫し拜みて立去る。馬鹿げたる顔付の小男也。『あれで「神樣」とは』と、余ひそかに噴き出す。

看護人晩食を持ち來るまゝに、おとなしく食ひぬ。藥をすゝむるまゝに、おとなしく飲みぬ。蒲團を布き、蚊帳をつれるまゝに、おとなしく臥しぬ。余の頭腦、今や恰も一天霽れ渡りたる如くなるが、雲翳なきにしもあらず。『文筆上や其他約束したること多く、他に對して爲すべきことも多し』とは、一の雲翳也。『然し、この境遇にては、止むを得ず』と、天に分疏を爲す。『妻子衣食の資に窮すべし』とは、又一の雲翳也。『然し、二三年は工面のつく筈なり』と、自ら首肯す。『余の面目地に墮ちむ。余の家系に汚點を印せむ』。とは、これ又一の雲翳也。『然し、一時の事なり』と自ら慰む。かくて、

雲翳も去れり。すや〳〵眠れる筈なるに、なほ眠られざるは、二十年來酒のまぬ日の無かりしことゝて、腹の蟲の承知せざるにや。

八

この世ながらの地獄に落ちては、いやでもおうでも、余は一の亡者也。『閻魔』に作はれて、地獄の佛ともいふべき院長の前に引き出さる。院長先づ『眼鏡は』と問ふ。『命より二番目に大切なる眼鏡無くなりて、我は一昨夜以來盲目に成り居るなり』と答ふれば、『さぞ困りたらむ』とて、『閻魔』を顧み、『病院にあるか、無きか、無ければ、取りにやれ』といふ。『預り居りぬ』とて、眼鏡を持ち來る。懷しや、余は盲目の域を脫して、天地忽ち明か也。

『我れ平生君の文章を讀むに、酒の事に至りては、我々專門家より見れば、はら〳〵思ふことありしが、たうとう君自ら危地に陷りたるなり』といふを、對話の打留にして、先づ余の脈を取る。次に余をして兩手を伸ばさしむ。左手の五指殊に大にふるふ。次に咽喉の奧を驗し、『これは〳〵』と打驚き、『これ見よ』と部下の醫師にでも敎ふるらしき態度にて、『閻魔』を顧みたるが、『閻魔』は唯眼をきよろつかせるのみにて、見やうともせず。次に暗室につれゆきて、余の目を驗し、もとの室に戻れば、部下の醫員來り侍す。余をして寢臺の上に腰を掛けさせて余の足を空に浮かさしめ、院長手づから余の膝頭を叩く。左足大にあがる。聽診器にて胸背二つながら驗し、腹部を按じ、胃のあたりを強く押して、『痛いか』と問ふ。『痛くなし』と答ふ。全裸にさせて、余の體重を驗して、診察全く終る。『さまで重からず。我れ必ず之を治せむ。胃腸も惡く、神經も衰弱し居れば、ゆる〳〵治療せよ』。『一週間も辛抱すれば、可なるか』。『あせらずに、唯我に一任せよ。』

九

新館に移さる。足掛け三日の間、余の居りしは、一區と稱する處也。

病院の構造は、凡そ二百坪ばかりの運動場を中央にして、病室四面を圍む。東方にありて南北に長きを洋館と稱す。洋館の南部は女の病室にして、北部は男の病室也。男の病室はなほ洋館の北端より西に延ぶ。これを一區と稱す。一區盡くる所、一折して洋館と相對す。そのとりつきが二區にして、三區その南に連る。二區の北端一折して大廣間となり、碁盤將棊盤オルガンなどの設備あり。女の病室は洋館の南端より西に折れて、男の一區と相對する處を一區と稱す。又一折して洋館に對し、男の三區に連れる處を二區と稱す。男女共に二區に沈靜室を置く、

これ地獄の中の牢屋也。診察の一室、洋館の中央、女室の間に突出し、外科室、暗室之につゞきて、醫局、藥局事務室の一構に連る。洋館の南端に、浴室あり。炊事場其東に接す。男の病室、別に洋館の北端より突出して、東に延ぶ。これ即ち新館也。

二箇所の男女兩室の界には、嚴重なる關門あり。男女共に洋館と一區との間に關門あり。女の洋館より玄關に行くにも關門あり。男の洋館と新館との間には關門無きが、新館より玄關に行くには關門あり。患者をして一歩も病院の外に出づること能はさらしむ。一區二區三區に在る者は、洋館と新館とに入り來ること能はざるが、洋館と新館とにある者は、一區二區三區に入ることを許さる。又すべての女患者と一區二區三區の男患者は、各別に時間を限り、看護人護衞の下に運動場に入れらるゝが、洋館と新館とにある男患者は、女患者運動場にある時の外は、いつにても之に出づることを許さる。病室の區別は入院料の高下に由らず、病の輕重と危險性の有無とに由るとかや。

一〇

新室に移るより早く、二人の同病者と相識れり。一は福島縣の人にて會社員也。『一升の酒量あるが、友人の轉任やら親戚の祝事やらにて、晝夜連飲すること一週間に及び、酒毒腦に入りて思考力無くなり、記憶力なくなり、終に幻聽をさへ聞くに至り、驚いて上京して、この病院に入りてより、幾んど一箇月に垂んとす。今や幾んど恢復せり』といふ。今一人は、余が新室に移ると同時に、新に入院したるが、靜岡縣の人にして、酒の醸造を業とする家の若旦那也。『三年の間、日々三升の酒を飲みたるなり』といふ。この靜岡男の年を問へば、『三十五歳』。福島男の年を問へば、『三十六歳』也。『我れは必ず斷酒す』と、福島男先づ言ひ出す。『君は如何』と靜岡男に問へば、少し躊躇しけるが、『我も斷酒せむ』といふ。さらばとて、三人共に斷酒を誓ふ。余一絶を作つて曰く、

痛飲淋漓不レ顧レ身。言々語々吐二天眞一
一朝斷レ酒君休レ怪。應レ識人間德有レ隣。

余折り〳〵手を伸ばすに、ふるふこと日を追うて減ず。初め三人して、手を伸ばしあひたるに、福島男は幾んどふるはず。靜岡男と余とは、同じ程度にふるへり。數日の後に手を伸ばしあへば、余のふるふこと少く、靜岡男のふるふこと多し。負惜みを云ふやう、『先生は我より早く酒毒減じたるに非ずや。手の練習が熟したる也』。

福島男は十日ばかりにして退院せり。その後、三四日にして靜岡男も退院せり。余は赦免に洩れて俊寛の思なきにしも非ず。

福島男のある間は、をり〳〵其妻來り訪ひ、靜岡男のある間は二人の妹交代して來り訪ひて、地獄の空に、脂粉の香漂ひたりき。

余を訪ふもの無し。音信を通ずることをも禁ぜらる。『あの靜岡男にして退院が出來るならば』とも思へど、院長の『我に一任せよ』の一言を服膺して、退院を迫らず。

一

暴飲の天罰と思へば、自ら恐縮して、少しも酒を思はず。煙草と茶とは、註文すれば、之を得ることを知れど、自ら制して註文せず。『鎌倉の禪寺に座禪でもするつもりになりて靜坐せよ』とて、院長は余に書物を與へず。紙筆をも與へず。又敎ふらく、『夜眠られざる時は、唯穩臥して、目をつぶりて、南無阿彌陀佛でも唱へ居れ。腦の休養になるなり』。余その言の如くす。一週間ぐらゐは、夜眠られざりしが、心身共に輕快を感じ、酒毒の六七分は既に去りたりと思はる。看護人いづれも余を見て、『よく成れり』いふ。『神樣』も余の顏を見て、『よく成れり。神樣の効能があらはれたるなり』。『さては入院の當夜余の睡眠中に神術を施したるなり』と氣付き、『さるにても、如何なることをするか』と好奇心を起し自ら進んで、其救を求む。『神樣』喜んで、余の頭をもみ、首筋をもみ、肩をもみ、腕をもみ、背をもむ。按摩と異ることなし。この『神樣』、極めて穩和也。一日運動場にて、『見せてやる』とて、天理王の踊とやらを演ぜしに、整然として、少しもくるはず。自ら狂へりとは知らずして、唯一意に人を救はむとし、舊患者の馬鹿にするものは、馬鹿にさせて、敢へて咎めず。新患者に向つて、必ず『救つてやらうか』を試み、拒めば拒むに任せ、應ずれば欣々として之を救ふ。その心掛けは、實に『神樣』也。

二

石川病院の一大名物ともいふべきは、『佛樣』也。もとは軍人にして、少將までにもなりたる人なるが、『佛樣』になりて後は自ら『鱗祥入道直佛』と稱し、『涌きいづる深山の清水汲みゐるゝ手桶の心知る人ぞ知る』といふ一首の歌を、その用ゐる手桶の蓋に書きしるして、心を清水と澄まし、晝となく、夜となく、目覺めて居りさへすれば、聲はりあげて、口早く『南無阿彌陀佛』を連唱す。一回毎の長さ一時間内外に及ぶ。人に對して、口を開かず。便所と浴室とへ行く外には、室外に出でず。看護人に對しても、用を命ずる外には、何も語らず。年は六十前後に見ゆ。軀幹大也。頭の後方に殘れる髮や、分量多き口髯や、かなり長き頭髯や、少部分だけ灰色になりて、全體は白し。狂味を帶びたる目付を別にしては、風采堂々たる將軍也。

佛殿ともいふべき『佛樣』の室は、新館の最奥を占む。この室に限りて、障子をたてきる。そつと行きて、障子の破れ目よりのぞくに、机の上に、『南無阿彌陀佛』と書きたる札を立て、その前に白木の三寶を置きて、赤黃白三つの小餅を積み重ね、線香立に線香を立つ。香烟縷々としてのぼる。『佛樣』はと見れば、腰なき淡黃色の袴を穿きて坐る。上半身は裸體也。首に大なる珠數を掛けたり。左手を曲げて、その五指を胸の前にそろへ、右手に團扇を執りてあふぎつゝ、『南無阿彌陀佛』を連唱す。音吐朗々たり。『我子の菩提を弔ふつもりにや』と問へば、看護人首をふりて、『いや〳〵山師の女山伏にだまされて、いつしか佛樣になりたりとの事也。』

一三

風呂は隔日にわく。いつも『佛樣』一人にて、先づ浴せしめらる。その次に、『運動場の王樣』と余とが、二人にて浴せしめらる。この三人だけ午前中に浴し、他の一同は午後になりて、どや〳〵一時に入浴す。

『運動場の王樣』は、自ら『王樣』と稱して、日々運動場の中央に立ちて、大聲はりあげて說法す。三十五六歲と見ゆるが、味噌ッ齒にて、子供々々したる顏付き也。炎天に頭を蓋はず。肌拔ぎになりて、そろ〳〵前後に步を移す。『天より生れたる者は善人なり。地より生れたる者は惡人なり』などいふことを、連絡なしにしやべりつゞけて、聞く者あらうが、無からうが、一向頓着せず。說法すめば、何やらわからぬことを歌ひつゝ、ぐる〳〵運動場をまはる。この人には、別に看護人附添ふ。風呂に入るにも、附添人に伴はれ、その手にて垢をおとされ、拭はれ、犢鼻褌をしめられ、衣服を着せらる。自ら洗ふことを知らず。注意せずんば、いつまでも湯舟を出でず。その肥滿すること、飛びはなれて患者に冠たり。而して余は最も瘦せたるものゝ一人也。附添人見くらべて、『面白き對照なり』と笑へり。

一日十二三歲の少女、一人の男に伴はれて、『運動場の王樣』を訪ふ。互に顏を知らず。傍より『これが父上樣』と云へば、少女うなづく。『これが孃樣』と云へど、『運動場の王樣』は首をふり、『我子なら、このやうに綺麗では無き筈なり』とて承知せず。憐れや『運動場の王樣』、病院にあること七年、鄉に歸れば百萬圓の富豪の旦那樣なりとかや。

一四

『佛樣』に亞ぎての名物は、自ら『總務大人』と稱する一老人也。『佛樣』の顏も身のたけも短きに反して、顏も身のたけも長く、口髯には二毛あるが、髮は濃くして黑し。五十五六歲に見ゆ。人と語を交へず。常に鐵窓に向ひ、必ず右足を上にして坐

す。瞑目して肩を怒らして考ふることもあり、机によりて何か書くこともあるが、一日の大部分は、兩手を前につきて、新聞を音讀す。講談物に至りては、節をつけて、講談師の口調を學ぶ。なほ進んで新聞に無きことまでも、滔々として語り出す。『講談師の出來損か』と問へば、看護人曰く、『いや〳〵醬油の釀造を業とする一富豪也』。

一目狂人と氣付かるゝは、本箱に『大本營』と書きしるせること也。一日『佛樣』之を見て、娑婆の將軍なるだけに大に怒りて、『大本營とは何事ぞや』。『何事でも好し。汝は何者ぞや』。『我は少將なり。汝は何者ぞや』。『朕は陛下なるぞ』。『佛樣』赫と怒りて、取ッ組合を始む。看護人よりてたかりて、漸く引分けたりとかや。

余一日冷かして見むとて、その室前の廊下にて、一患者に向ひ、『おい〳〵君、大本營とあるが、まさか此處が大本營ではあるまじ。さては大本營にありたる本箱なるか。それにしては餘り見すぼらしき本箱に非ずや』と、少し聲を張りあげて言ひ放つ。聞えたる筈なるに、ふり向きだにせざりき。

新聞を音讀するにても、讀書力は推して知るべく、『大人』を『大臣』よりも上と思へるにや。毎月一回は必ず內閣總理大臣に宛てゝ、命令的の端書を出す。而してポストには入らずして、看護人のポケットに沒收せらるゝことを知らざる也。

一五

梅毒の內攻したるなりとて、晝となく、夜となく、唯臥して、食うて、糞する患者あり。一夜大便にゆきしに、この患者全裸のまゝにて糞壺に落ち、上半身だけ床板の上に露はれ、平氣にて立つ。余驚いて看護人を呼ぶ。看護人又他の看護人を呼びて、二人がゝりにて漸く引上ぐ。この患者はをり〳〵蒲團の中に排泄す。當番の看護人、その度每に蒲團を洗ひて、運動場に干す。その看護人、二區に移りしに、間もなく一狂人に強く胸をつかれて、苦しみ居りたりき。

一看護人余を冷かして曰く、『この病院には、神樣あり。佛樣あり。王樣あり。いろ〳〵あり。先生は何にや』。余答へて曰く、『先生は矢張り先生也』。『先生と云ひて灰吹すてにやり」の先生にせられては、ちと困るが、「先生と云はるゝほどの馬鹿でなし」と氣張るやうな小丈夫にはあらず』。

院長を除くの外、醫師も、看護人も、患者も、多かれ、少かれ、文字ある者は、余を先生と呼ぶ。『閻魔』は、先生と呼ぶこともあり。『さん』附けにすることもあり。扇、紙、筆、硯をとりそろへて持ち來りて、余に揮毫を乞ふもの、引きも切らず。もと患者にして、今は看護人となれる一青年、『何か我々の訓戒

になることを書いて下され』といふ。『よし〳〵』とて、『餘りに清くして、餘りに正しくして、餘りに高くして、餘りに深切なる者は、終に狂するに至るべし。世に處するには、腹を大にして、呵々大笑するを要す』と書けば、『これ先生自身より割り出したる狂人觀なるか。先生は社會の事に通ずれども、未だ狂病院裡の心理狀態に通せず。人の狂するはそのやうなる單純なる事情に非ず。ゆる〳〵この病院にありて、狂人を觀察せられよ。我々の如きは、愚劣なる癖に、世上の成金を羨むの餘、終に狂したりき』とて笑ふ。

一六

『先生の著書を愛讀したるが、うれしくも相見るを得たり』とて喜ぶ青年もあり。『先生の著書を多く讀めり。多年執筆せられたる「學生」廢刊したるを以て、狂するに至りたるか。平生青年に說法せられたる身が、自ら狂することゝなりては、先生は最早社會的に死亡せり。お氣の毒千萬なり』といふ青年もあり。この青年は醫學士也。『君はそのやうな小さき了簡ゆゑ狂するなり』。『さらば先生は如何にして狂せられたるか』。『君も醫學士ならば、醫師が病毒を研究せむとして、自ら病毒に罹ることを目して、職に忠なりと思ふならむ。我は酒を研究せむとして、自ら酒毒に罹れり。事に忠なるものに非ずや』と眞面目くさりて答ふれば、醫學士から〳〵と打笑ひて、『それが卽ち狂氣の沙汰也』。

この醫學士瘦せて、ひよろ長きが、腕押に妙を得たり。人を見れば、必ず腕押を挑む。何人も敵する能はず。余にも挑む。余わざと、『ベンチの上にては、いやなり。地面の上なら』と云へば、『それは狂氣なり』とて應ぜず。一日余より進んで腕押を挑む。一戰直に敗る。これより余は醫學士を呼んで曰く、『腕押の王樣』。

『腕押の王樣』は、帶を緩く腰にしめ、運動場に出づるより早く、拔き足さし足して女室の窓に近づき、看護婦めがけて、何やら話しかけ、また拔き足さし足して引返へす。

『僕は何處で遊んでも持てたり』と自負する青年あり。余之に諢名をつけて、『色男』と呼べば、にこ〳〵笑ふ。この『色男』も運動場に出づれば、運動もせず。ベンチに腰もかけず。直に女室の窓に近づき、看護婦に對して歌ひ、歌ひ終つて、にこ〳〵引返す。

今一人、女室の窓に近づきて歌ふ青年あり。自ら早稻田大學生なりと稱し、をり〳〵早稻田の校歌をうたふ。狂氣大に癒えたるが、何處かに痴態あり。余に向つて、『我は潔癖にて、自ら苦む。之を治するの方なきにや』。『糞を攫んで見給へ。度重な

れば、必ず不潔を嫌はざるに至らむ』と言へば、唯苦笑す。『雅號をつけて下され』といふに、『しばし待たれよ』とて別れ、後相逢ひし時、『蜀水と付け給へ』と云へば、『蜀水とは如何なる意ぞ』と問ふ。『濁の字を分析したる也。君の潔癖を治せむには、自ら濁らざるべからず』。『なる程』とうなづきて、紙筆を出すまゝに『蜀水』と命名したる次第を書きて、一首の歌を書きそへて曰く、

山川の清き流も末つひに濁りてこそは大魚棲むなれ

『我が妻强情にて困る。これにも何か我を戒められたるやうな雅號をつけて下され』。余しばし考へて、『柳眠女史にては如何にや』とて、又一首の歌を書きて曰く、

春風に打任せつゝ若柳さはらぬ枝に綠さすなり

一七

圖らずも、運動場のありたることは、砂漠を旅する人のオーシスにあひたるも斯くやと思はる。まして、櫻樹二重の舛形に植ゑられ、外側に四本づゝ、内側に三本づゝありて、日一日清蔭常に地に横はれり。余喜んで運動場内を步きまはる。

院長余に告げて、『無念無想になり、何事も怒らずに、唯靜坐せよ』と云へり。これ運動すべからずとの意には非ず。然るに『閻魔』聞き噛りて、『あまり運動せずに、室内に引籠つて居れ』といふ。『知らずや、我は旅行家として名ある者なり。殊に運動して可なることは、副院長の承認を得たる也。疑ふならば、往いて副院長に聞いて見よ』と云へば、閻魔また咎めず。

櫻樹の外側を步數にて測るに、凡そ四十間あり。一廻り半すれば、一町となる。百度詣を爲すが如く、紙線を手にして、一廻り毎に、石段の上に一紙線を置きて路程を測りて、毎日四五里の路を步き、『脚力未だ衰へず』とて、自ら喜ぶ。

くろがねの窓にも活ける心地して日に五里步む葉櫻の蔭

運動場より見れば、男室の事もわかり、女室の事もわかる。普通の病院にては、死に瀕せるもの多くして、何となく陰氣なるが、こゝの病院の患者は、頭腦内に故障あるだけにて、いづれもぴん〳〵して居りて、從つて陽氣也。又滑稽味多くして、人をして笑はしむ。端唄をうたふものあり。詩を吟ずる者あり。義太夫を語るものあり。櫻の葉を口に啣へて、雞の啼音を眞似する者あり。怒る者あり。笑ふものあり。說法する者あり。長々と獨語する者あり。女室の方には、三味線に合はせて歌ふ聲も聞ゆ。

一日の中、最も多く運動場にあるものは、余なるが、余につぎて最も多く遊動場にいづる一患者、常にシャツのみを纏へるを以て、『シャツ男』と諢名す。その一擧一動、人をして笑はざ

るを得ざらしむ。頭の半分禿げて、年は四十前後に見ゆるが、運動場に出で來りて、いろ〲滑稽なる遊戯を爲す。目を手拭にて掩ひ、小さき弓を張り、箸を矢に代へて五六尺の前に射放ち、手拭を脱して、その矢を見て一笑し、矢を收めて、そろ〲引返すが如きは、その一例也。好人物らしき柔和なる顔付にて、人を見れば、にこ〲笑ふが、をり〲目を怒らし、聲はりあげて、獨り物言ふ。支離滅裂して、何を言ふやらわからざるが、大體は虐待せる者に對して不平を洩らすやう也。この『シャツ男』、夜は壁によりかゝりて眠る。蒲團を布かず。蚊帳を釣らず。同室に一醫師あり。この人は幾んど室外に出でず。晝夜常に蒲團の中にもぐり込む。たま〲起き上れば、必ず鏡に照らして櫛にて髮を掻きわく。この人も蚊帳を釣らず。二人室を同じうして、顔を見合はし居れど、一度もその語りあへることを見ざりき。

一八

一區には、按摩の『神樣』の外、畫の『神樣』もあり。一區二區三區の間を濶歩して、叱つたり、諭したり、教へたりして、支配者を以て、自ら任ず。室にある時は、必ず畫をかく。初め自ら『神』と稱し居りしが、余戯れに『神は畫をかくものに非ず』と云ひければ、『さらば』とて、自ら『大統領』と稱するに至れり。一日往いて、その達摩が酒徳利を提げてよた〲歩くさまを描けるを見て、もらひうけて、一詩を題す。繪が繪そらごとなれば、詩も詩そらごと也。

九年面壁創二禪門一。遺德千秋接二釋尊一。
誰識壯時山上寺。一樽貰レ酒下二前村一。

余が病院にて得たるは、この繪の外に、今一つ詩あり。原哲二郎といふ老醫の作也。

一夜池中粲有レ文。白龍枉入小魚群。
誰知他日昇天後。呼起千山萬嶽雲。

一九

二區受持の看護人、常に一患者と碁を圍む。その患者、余の名を知りて、喜んで曰く、『我れ明日はこの病院を出づ。先生も出でられよ。我は理想的世界漫遊を爲さむとす。準備既に成れり。志賀矧川は學者なれば、伴ひて事實を調査さすべし。先生も來給へ。先生は文士なれば、紀行を書き給へ。』余を見る毎に、この言を口にす。『漫遊狂』とも云ふべくや。挑まれて、碁を圍む。二目を置かせて、看護人には勝味多く、『漫遊狂』には惡戰苦鬪す。『漫遊狂』自負して曰く、『我は初段に二目の碁客也。今は頭を痛め居るを以て大に弱きなり。』なるほど、陣立は申分なきが、戰鬪に至りて見落し多し。初段に二目は、まんざら狂言では無

きかと思はる。五六日の間は、毎日往いて碁を圍む。初めは一勝負にて止めしが、いつしか二回となり、三回となり、五六回となる。腦に惡しと自覺して、自ら碁を斷念せり。『漫遊狂』を戒めて曰く、『君も病院にある間は、碁を打つこと勿れ。』と

二〇

夏の夜の狂女の聲に明けにけり

興奮して他に危害を加ふる者は、直に沈靜室に投ぜらる。一夜も居れば、沈靜して出さる。入れかはり、立ちかはり、沈靜室に入れらるゝ者絕えざりしが、三日と長く居る男患者は無かりき。女の方の一の沈靜室も、入れかはり立ちかはりしが、他の一は、余の在院中、一人の狂女を鎖したり。年三十ばかり、着物の袖なきを着て、紐にてしめて、髮をふり亂す。目覺めて居れば、絕えず牢中を步き廻りつゝ、大聲にて怒號す。少し沈まれば、何やらのべつに饒舌る。饒舌るかと思へば、歌ふ。歌ふかと思へば笑ふ。笑ふかと思へば又怒號す。少しもじつとして居ることなし。余毎朝目さむれば、直に洗面所に行くに、必ずこの狂女の怒號を聞く。

女患者の運動場にあるを見るに、ベンチに腰かくるもの多く、步くにしても、唯ぞろ〳〵步くもの多きに、この狂女のみは何やら歌ひつゝぐる〳〵步行をつゞけて、少しも休まず。姿勢整然たり。運動場爲めに活く。この狂女出でざる時は、平々凡々也。

『あの狂女の叫びは豆腐屋の呼聲に似たらずや』と一患者いふに、『なるほど』と合槌うちつゝ、五六人にて眺め居りしに、一患者忽ち『豆腐屋』と叫ぶ。狂女おのれの事と氣付きけむ。廻り來るついでに、何やら擲ちて行く。その擲ちたるもの、冷かしたる者に中らずして、余に中る。何かと見れば、小さき甲蟲なりき。

二一

狂女の聲も、余の室には屆かず。朝夕唯雀の聲を聞く。平生は少しも耳にとまらざりしが、鐵窓より出づる能はざる身となりては、何となくなつかしく、我を慰むるかとさへ思はる。

くろがねの窓に雀をきゝてより世になつかしと思ひそめぬる

一夕鐵窓に面して坐す。十六夜の月の光かすかに植込を洩れ來る。

くろがねの窓におきふす身にしあればあはれと思ふ葉がくれの月

斗牛の間に徘徊するにや。月の梢を離るゝこと遲々たり。

いざよひの月の木立をいづるまで待つぞ久しき酒も無くし

て

一時間ばかりにして、明月天に出づ。

こよひこのさやけき月を酒なくて獨りかも見むくろがねの窓

往事を思ふに、唯夢の如し。

くろがねの窓にもたれて假寢して醉ひし昔を夢に見るかな

二

一箇月にして退院し、直に山水の間に靜養すること、又一箇月に及べり。

我是乾坤一酒仙。不レ求二聲響一不レ求レ錢。
好收滿腹虹霓氣。去向白雲流水邊。

三

『萬事傷心在二目前一。一身憔悴對レ花眠。黃金用盡敎二歌舞一。留與他人一樂二少年一。』と、司空曙の詠じけむ、それは美人の事也。

我には一の愛瓢あり。同じ鄕里の土佐の人なる掘見熙助氏の贈る所にして、其自ら作れる所に係る。二升五合の量ありて、其形は模範的正瓢也。殊に表皮を存す。表皮なる哉〱、表皮ある瓢をとて、數年來道行くついでに古道具屋を探したるが、一つも見當らざりき。たま〱この瓢を得たるも、今や我には用なし。友人を思ひくらべ、酒量我れに二三倍して、而かもその壯大なる軀幹より判ずるも、斷じて余の如くアルコール中毒には罹らざるべき東川楊舟に贈る。

君におくる心をくめよ成りひさご成りし處も同じふる里

旅繪師

村松梢風

一

其の町は、鐵道線路から三里奥へ入つた山間にあつた。南へ走るに從つてだら〱と低くなり、そして兩脚器(コムパス)の脚のやうに開いて、靜かな日の海のやうな青々した波をうたせてゐる稻田や、緩やかに流れてゐる河や、豊な村落を其間に挾んでゐる山脈が其處から急に險しく押し迫つて來て、空は半分位に領域を縮

めら れ、河水が俄かに勢ひを增して奔つてゐた。時代から取り殘されて老ひ朽ちてしまつたやうな寂れた町が、陰氣に、哀しげに、河に沿うて細長く續いてゐた。町の入口には長い木橋が架かつてゐた。南の町へ通じる一條の縣道を走つて來る舊式の鐵道馬車が橋へかゝると、馬は速力を緩めてコトコト蹄の音を立てゝ步いた。すると馭者は馭者で、出來る限り長く息を吹き込んで町中に聞かせるやうに喇叭を鳴らした。

　それは八月に入つたばかりであつた。車軸を流すやうな豪雨が三日三晩降り續いた。此の世の終りを思はせる晦暝が夜も晝も天地を包んでゐた。山は底を洗はれて、すさまじい音響と共に瀧のやうに崩れ落ちた。河水は見る見る物凄く量を增して行つた。根こぎにされた大木だの屋根の形も其のまゝの家などが逆卷く流れの上をフハリ〳〵浮いて通つた。堤防は到る處決潰して、桑田は忽ち泥海に化した。橋といふ橋は一つ殘らず落ちてしまつた。堅牢な町の橋さへ眞中から二つになつて、折柄水見物に出てゐた人々を乘せたまゝ大船のやうに徐かに流れて行つた。其の雨が止んだのは三日目の午過ぎであつた。軈て雲の切れ間から幾條かの光線が白刄のやうに中空に閃めき始めた。嘗へやうもない恐怖と陰鬱のどん底から救ひ上げられた人々は、歡喜の聲をあげて太陽を仰いだ。其の日の暮れ方は夕陽が空一面に羽を擴げて、まだ水に浸つてゐる下界を紅々と彩つた。

　或日私は久し振りで町を訪れた。亂雜な洪水の跡を劇しい陽が炒りつけてゐた。河水はまだ柳葉色に薄く濁つて、平素よりも勢よく流れてゐた。大きな石ばかりごろごろしてゐる河原では、大勢の人夫が假橋の工事を働いてゐた。

「××さん」

　盆栽の根締めにでもするつもりであらう。妙な形の石を大事そうに持つてゐる老人が私の名を呼んだ。それは懇意な宿屋の隱居であつた。其の家は直ぐ橋の袂にあつて、過ぎ去つた此の町の繁榮を想はせる大きな二階建の幾棟かが河に臨んでゐた。老人は私に對つて、其の口から何遍人に繰り返したか判らない洪水の話を更に新しい興味を持つたやうに語つてゐたが、軈て突然、

「内に繪の先生が泊つてますから遊びに行つて御覽なさい」と云つた。

　遊歷の畫家だの書家だの碁打などは、此の町へ入つて來ると大概其處へ泊つた。私はそれ迄に幾人かの遊歷者に其處で會つてゐた。繪だの書などを揮毫して貰ふことよりも、私はさうした人達の話しを聞くのが面白かつた。旅から旅へ渡り歩く放浪者の肌合が好きであつた。其の中には、飲んだくれの老詩人も

あつた。宿の勘定を溜めたまゝ女中を連れ出して駈落ちしてしまつた若い油繪師もあつた。

老人は我家の方を振り向いて立つてゐたが、二階の廊下を女が膳を運んで通ると、

「お――い、繪かきの先生はおいでなさるかあ――」と皺枯れた聲で呶鳴つた。

宿屋の表は店口と內玄關と二つに分れてゐた。角力取のやうに肥滿つた亭主が、肌襦袢一枚で格子になつた料理場で働いてゐた。それと反對に蟋蟀のやうに瘦せてゐる女將は、小さな金庫に脊を向けて頻りに帳合ひをしてゐた。畫家の泊つてゐる室は河に面した下座敷であつた。私が其の室を訪れると、丁度午睡でも貪ぼつてゐた處と見えて、其の人は少しボヤケたやうな顏をして私を迎へた。

「さあずつと此方へ」

荒い棒縞の浴衣からはみ出しさうに肥つた畫家は少し皺枯れ聲で愛相よく云つた。いが栗頭で、疎らな顎髯を生やしてゐた。然し、此の畫家の容貌のうちで一番强い印象を人に與へるのは其の眼であつた。細く凄く一の字に迫つた眉と稍あぐらをかいてゐる鼻との間に深く剜り込まれた其の眼は寧ろ小さい方であるにも關はらず、炯々と煌いて異樣な光を發してゐた。私はと目見るより、此の畫家が非常な熱情家であることを感じた。

「四條派畫家岡本雪彥」と印刷した名刺を彼は私に呉れた。

「先生はどちらからおいでになりました？」と、私はいつも遊歷の人に對つて第一に訊く言葉を發した。

「M町から來ました。此處は大變面白い處ぢやいふ話を聞きましてな」

「處が入らしつて見ると餘り面白い處でも御座いませんでせう。然し先生、御仕事の方は如何です」

「いや、仕事は一向――。何せい來る匆々あの洪水ですぢや、此の騷ぎでは繪どころでは有りますまいて。仕方がないで、無意味に籠城しとりますんぢや、はゝゝゝは」

雪彥氏の言葉には餘程上方訛りの調子があつた。私はフと、江戶末期に於ける四條派の大家岡本豐彥の名を思ひ出して訊いて見た。

「先生は豐彥と御關係がお有りなんですか」

「豐彥は私の曾祖父さんです。いや然し、徒らに祖先の名を辱めるに過ぎませんぢや」

と雪彥氏は眞實己れを卑しむやうな口調で云つた。私は對き合つて話してゐるうちに又一つの特徵を彼の容貌から見いだした。それは迫つた眉を一層寄せて物を云ふ時、眉間に深く刻み

込まれる二本の皺であつた。全體彼の容貌には、流浪の生活を送つてゐる者に特有な險しい陰慘とした感じが、對者の胸に食ひ入る程極めて露はに力強く現はれてゐた。稍暫らく雜談をした後で私が「何か畫いて頂き度い」と云ふと、雪彦氏は言下に、

「承知しました、大いに畫きませう。私も半月程繪筆を持たんで、實は髀肉の嘆に堪へんで居りましたんぢや」と息込んで云つた。

さて何んな物を畫いて貰はふかと私が考へてゐると、再び雪彦氏が云つた。

「小さうては面白うない。大作がして見度いですな。四枚續きの襖一杯の繪を畫きませうか」

私は吃驚して相手の顏を見詰めた。正直な處、私はさして繪が欲しい譯ではない、かうして會つて只歸ることも出來ない譯はゞ義理づくである。何れ丈の手腕が有るとも知らない畫家に對していきなり四枚續きの繪を依頼するといふのは餘程冒險で、義理としては荷が勝ち過ぎてゐた。

「甚だ失禮ぢやが、私は畫料は頂戴せいでもえゝ。私は氣が向けば無料(たゞ)でも何んでも畫く。其の代り氣の進まん時はどない云はれても筆を採りませんぢや」

私は雪彦氏の感興に乘つてゐるらしい様子を見ると、強いて反對する譯にもいかなくなつてしまつた。畫料の事はともかくも、此の場合先方の好きな繪を畫いて貰ふより外に仕方がなかつた。

軈て使に出した者が大きな畫箋紙を澤山買つて持つて來た。雪彦氏は直ぐ貪ぼるやうな態度で其の紙を四枚續けて疊の上へ並べて、扇子だの火箸だの、仕舞ひには私も手傳つて庭の石ころまで拾つて來て文鎭代りに置いた。そして女中に命けて丼や皿を持つて來させ、卷簾から繪筆を出して丼の水で洗つた。

「冬の景を畫きますかな」

かう云つて雪彦氏は中央へ突膝をして暫時紙面を睨めてゐたが、軈て水を含ませた筆の先にぽたりと墨をつけると、一番右の端へ持つていつてスル／＼と木の幹を一本書いた。見てゐるうちに繪は面白い程速く出來ていつた。雪を頂いた連峯、水の涸れた溪流、梅林、草葺きの人家——さうした幽邃な荒涼とした風景が極めて雄勁な筆致で描き出された。雪彦氏は四ん這ひになつて最初の間は腕卷りをして畫いてゐたが「暑うてどむならん」と云つて中途から素裸體になつて筆を揮つた。彼は繪の急所へかゝると、線を引ひたり點を打つたりする時「ゑツ」とか「呍」とか鋭い氣合を發した。其の度び毎、圓々膨らんだ顏へ紅く血がさして、便々とした腹が護謨細工のやうに大きく波

をうつた。

「まづこんな處ぢや」

最後に雪彥氏はかう云つてカラリと繪筆を抛り出したが、矢張り畫面を睨めたまゝフウフウ苦しさうな息を吐いてゐた。そして、

「是は美濃國の山奥で見た實景ぢやよ」と、初めて私の方を見て云つた。

二

私は大概の日に一度は雪彥氏の宿を訪ねた。何時行つて見ても雪彥氏は肥つた軀をもて扱つて疲勞した猛獸のやうにごろごろしてゐたが、私の顏を見ると勢よく撥ね起きて、旺んに旅の話をしたり彼一流の畫論を聞かせたりした。然し、繪の依賴は一向に來る樣子がなかつた。此の町へ來ると直ぐ土地の經師屋に運動を依賴して名刺代りに半切を五六枚渡して置いたのに、其後經師屋が一度も顏出しゝないのは不都合だと云つて雪彥氏は憤慨してゐた。其の經師屋とは私は懇意な仲だつたので私からも運動を賴んだり、尙私自身も親しい人達の間から無理に註文を取つて來たりした。さうかうしてゐるうち、ぽつぽつ自然に註文が集まつて來始めた。雪彥氏は、晝のうちは大概繪筆を握つて暮すやうになつた。彼が繪を畫いてゐる時は二た間も三間も手前から直ぐにそれが判つた。それは例の氣合の聲で知れるのであつた。

「向うで聞いてますと、何かの道場でも有るやうですよ」

かう云つて私が笑ふと、

「君、繪の生命は筆力にあるんぢやよ。眞の筆力は、呵呍の息と運筆と間髮を入れぬ呼吸のもんぢや。鼻歌をうたひながら畫くやうなヘナヘナした繪は繪ぢやない。ありや樂書といふもんぢや」と、雪彥氏は眼をいからせて云つた。

或日、雪彥氏は私の顏を見ると、

「君、今日は御前揮毫の禮式をやつてお目に掛けよう」と云つた。私は高貴の人になつて床の間の前に座らせられた。雪彥氏は私の膝から少し離れた邊へ繪絹を展べたり繪道具を整頓して並べたりしてから、さも尤もらしく恭しい態度で型の如き禮式をして富士山の繪を畫き始めた。然し雪彥氏が膝の出さうになる浴衣の前を掻き合はせて畏まつてゐたのはほんの最初だけであつた。

「えらい暑いな、今日は。敵はん。特に着物だけ御無禮しよう」

かう云つて雪彥氏は直ぐに裸になつた。褌一つで大眞面目に御前揮毫をやつてゐる雪彥氏の恰好が餘り滑稽なので、それ迄澄まして見てゐた私は思はず笑ひ出してしまつた。すると雪彥

氏は、とぼけたやうな眼つきをして、「何卒、御前にもお膝をお崩し下さい」と云つた。

「こら御覽、筆洗の水がちつとも濁つとらんぢやろ。是がなか〳〵六ケ敷いわい。つまり、無駄墨を遣はんちう心掛けぢやな。私等は若い時分こんな事を稽古したもんぢや。それがどうです現今の畫家は、大家ぢやなんと威張りくさつて、御前揮毫の間際に慌てゝ禮式を習ふ奴さい有るんぢや。そんな心掛けの手あひに、本統の畫が畫けよう道理がないな」

雪彦氏は談話にみが入つて來ると、富士山の繪を抛つて置いて旺んに喋り出した。大ていの場合雪彦氏の舌鋒は、現代美術の墮落を痛嘆したあとで、當代の大家に對する峻烈な攻撃やら罵倒やらに歸着するのが例であつた。現代の繪畫が如何に低級なものであるかといふ例證として、假りに徳川時代の僅かに小名を成したに過ぎぬ畫家の作品を採つて見ても、必ず現代の大家には勝ること數段であると云つて彼は斷定した。「文展なぞなつとらん」と彼は口癖のやうに云つた。就中堂々たる審査員が、全然故人の粉本の摸寫に過ぎない繪を臆面もなく出品してゐるなどは言語同斷であると云つて憤慨した。

「改良せんけりや駄目です。いまに日本の美術は滅亡してしまふ。今年はもう行けんが、私は來年あたり上京して大いに覺醒運動を起して遣るつもりぢや」と雪彦氏は憂國の志士のやうな口調で云つた。

三

春と夏がやゝ遲れて來る代り、山に接近してゐる此の土地は秋の訪れは一倍早かつた。わせ柿は八月のうちからすでに色づいた。何んとなくざわつき易い風が、黄金色の稻田に果てしもなく波をうたせた。堤の叢には一面に彼岸華が咲き亂れた。夜になると何處かゝら太皷の音が聞えて來たり、思はぬ遠方の空に音もなく上つて消える花火を見ることなどもあつた。それは村々で行ふ鎭守の祭りの景物であつた。

私は暫らく振りで雪彦氏を訪問した。町の橋は未だに工事の半途であつた。宿の襖は葦簾が唐紙に變つてゐた。雪彦氏は明るい椽の方に向つて絹地へ密畫を畫いてゐた。すると其の側で此家の女中頭のお増といふ女がせつせと着物を縫つてゐた。

「まあお珍らしいぢやありませんか、毎日みんなであなたの噂をしない日はありませんでしたよ」とお増は手早く縫物を片着けながら云つた。

「つまらぬ用事が續いたもんだから」と私はお増が出して呉れた座布團の上に坐つて「先生は相變らずお忙しいやうですね」

「いや、忙しい程でもありませんぢやが、お蔭で思うたより、

澤山仕事をしましたんぢや」と雪彦氏は滿足らしく、何時にない穩やかな笑みを浮かべて云つた。それを見ると私も衷心から嬉しくなつた。

「それはまづ結構でした」

お增がこしらへてゐた着物は、細かい飛白の紬であつた。

「お增さん、それは先生の召物かい」

「えゝ」とお增は茶を入れながら云つた。

「そろ／＼單衣でも暮されんで、お增さんに賴んで買うて貰ひましたんぢや。それに私もな、もう大分此の土地も永う居ましたで、近々のうちに切り上げうと思つてますぢやよ」

「そうですか、それはお名殘り惜しいですな。で、今度はどちらの方へ入らつしやるんですか」

「さあ、別段目的はないのぢやが一と先づN市へ行つて見こつもりです」

「お馴染になつた方がお發ちなさる時は、本統に厭なもんですねえ」お增はしみじみとしたやうに云つた。

共晩私は雪彦氏と別盃を酌んだ。お增も私達の仲間入りをした。雪彦氏は平常晩酌一本と極めてゐたが、飲み始めると隨分いける口だつた。お增は名うての飲んだくれで、醉ふと必ず男のやうに口嘗めずりをしたり呂律の利かぬ卷き舌を使ふのが癖であつた。

「先生、此の土地の感想をきかして下さい」私がこんなことを云ふと、

「そうぢやな、先づ寂びれた處に詩趣が有るんぢやろな。景色は河向うから町を見るのが一等えゝ。私が着いたのは夕景ぢやつたが、町の眞中にある宮な、あの丘の枯木に烏が群れてゐたつけ。旅慣れた私らでも一寸感傷的になる景ぢや。さう／＼、恰好が淺草の待乳山に肖とると思つたつけ」

「ちよいと、待乳山つて。端うたにある山？」

「そうぢや／＼」

「先生はもう何年位遊歷をなさつてるんですか」

「鄕里を出たのが丁度卅の歲ぢやつたで、足掛け十年になるかな」

「十年？」私は駭いて云つた。「然し、時々京都へはお歸んなさるんでせうね」

「否、一度も歸らん。私は一家を成す迄斷然鄕里の土は踏まん決心をして出て來たんぢや」

「先生は御家族はお有んなさらないんですか」

「有ります。家內と悴が一人居りますんでな、家內も困つとりますぢやろ。風の便りぢやで詳しうは知らんが、仲居奉公して

悴を育てとるさうですて」

雪彦氏は盃を啣みながら眼を伏せて暗い表情をした。

「それぢやあ奥さんが可哀相です。それに先生、一家を成す迄といふ心願でしたら、もうお歸りになつても宜いぢやありませんか」

單なる氣休めのつもりではない。私は此の場合さう云ふ以外の言葉を知らなかつた。

「いや駄目々々。私は他人の惡口も云ふが、自身の實力もよう知つとる。私などの藝術はまだ／＼未成品ぢや、遠――い處を歩いてるんぢや」

談話が理に落ちて座が滅入つてしまつた。三人共各々異つた心持で哀愁を感じてゐるやうに默つて酒ばかり飲んでゐた。河にはところ／＼簗の松明が燃えてゐた。お増が氣を利かして熱い銚子を持つて來たのをきつ掛けに私達は再び威勢よく飲み始めた。然し酒が弱い私は直きにまゐつて倒れてしまつた。

「おや××さん、あなたもう駄目？ 意久地がないねえ。先生、今晩は徹夜で飲みませうよ」

「徹夜ならえゝが、またいつかのやうに潰れてしまはれると閉口ぢやよ」

「大丈夫、いゝえ今晩こそ大丈夫」

あとの二人はいつ迄も飲んでゐた。時々お増が銚子を取りに起つて行つた。何時の間にか、私は睡りに落ちてしまつた。

雪彦氏が此の町を發つて行つたのはそれから二三日後であつた。間際になると、宿の人達は皆心から別れを惜しんだ。私達は――それは四五名の宿の女中と、雪彦氏の唯一の携帶品たる古びた靴を提げて行つた男衆とであつた――幅の狹い假橋を渡つて、對岸の馬車の立て場迄雪彦氏を送つて行つた。雪彦氏はお増が仕立てゝ呉れた素新らしい紬の着物に七子の五ツ紋の羽織を着て、是れだけは古いセルの袴をはいてゐた。私と雪彦氏は一番先登に立つて肩を並べて歩いた。柔かい初秋の太陽が斜めに照らして、一行の影法師が細長く河原に映つた。

「もう是れで先生にはお目に掛れませんね」私は横から逞ましい雪彦氏の顏を眺めて云つた。

「そんな事はない。私も行く／＼は京都へ歸るつもりぢや。そしたら手紙を出しますよつてな、是非訪ねて來て下さい」と雪彦氏は固い口ぶりで云つた。

錆びたレールの上に、ペンキの剝げた十人乘ぐらゐの馬車が待つてゐた。箱の中には已に四五人の乘客が入つてゐた。

「時間が來てゐますから直ぐ乘つて下さい」と、詰襟の服を着て駒下駄を履いた車掌がせき立てるやうに云つた。

「左様なら」
「御機嫌よう」
「左様なら」

雪彦氏が乘ると直ぐ馭者はチョッ〳〵と舌打ちをして手綱を引いた。馬はコト〳〵音を立てゝ驅け出した。すると見送りの連中は直ぐに元來た方へ歸り始めた。しかし、私とお増だけは一番後に殘つた。私はお増が眼をうるませてゐたやうに思つた。

四

それから一年餘り過ぎた。都では文部省主催の美術展覽會が開かれてゐた。毎日の新聞紙は其の記事やら寫眞やらを滿載した。近年此の展覽會が世の視聽を牽き始めたことは非常なもので、從つて其の反響も絶大であつた。其の頃私は屢々雪彦氏の事を思ひ出した。かうした華やかな世界を餘所にして空しい流落の旅を續けてゐる雪彦氏が痛ましかつた。可惜才能を持ちながら徒らに世を白眼視してばかりゐる雪彦氏が悲しかつた。

或日新聞を手にした私は、三面の上段に載つてゐる「文展の大椿事」といふ大題目に何より先き眼をひきつけられた。脇に「熱狂畫家墨汁を揮つて審査員の作品を塗抹す」といふやうな註が附いてゐた。私は何んといふ理由もなく「はツ」としてある錯覺にうたれた。私は慌てゝ記事を讀み下した。

「昨日は絶好の秋日和に上戰竹ノ臺に開催中の文部省美術展覽會は珍らしき人出を呈せるが午前×時頃觀覽人中に打ち混りたる紋付袴にて顎髯を貯へたる一壯漢審査員室に立入り審査員―氏の出品畫に近寄ると見る間に矢庭に墨汁を含ませたる海綿を以て畫面を眞一文字に塗抹し人々の立ち騷ぐ間に尙續いて同室に陳列せる審査員數氏の作品に對し同樣の暴行を爲したるを漸く馳せ着きたる警官事務員等にて取り押へたるが暴漢は「余は狂人には非ず厚顏無恥の彼等に天誅を加へたるなり」と豪語し悠々として引致されたり取り調べの結果此の者は京都市――四條派畫家岡本雪彦……

「到頭遣つた」私は新聞紙を取り落して思はずかう獨り言を發した。あの炯々たる眼中を物凄く血走らせ、肩を怒らせて群衆の中を警官に引かれて行く雪彦氏の風丰を私は眼の前に見るやうに感じた。

雪彦氏はやかましい罪名に問はれて懲役二ヶ月に處せられた。出獄後の彼の身の上がどうなつたか、それは私は少しも知らない。京都へ歸れば手紙を寄越すと云つたが、其の後何年經つても、未だに私の處へは何の消息もない。それとも私の事などは、旅先きで會つた數限りない人間の中の一人として疾うに彼の腦裡から消え去つてしまつたのかも知れない。それならば結構で

ある。もう彼れ是れ鬢髮に霜を置く年配にもなつてゐる雪彦氏が、萬一旅鞄を提げて未だに遊歷してゐるかも知れないといふことを考へると私は胸が痛くなる。

武藏野農村の研究

小田内通敏

一

武藏野に關する文學も讀まず歷史も知らぬ自分が、武藏野に對して一種の馴しみと溫かさとを感ずるのは、三年の間何百回となく其土を踏み、田畑を觀森林を眺め、農家を訪れ茶店に憩ふた實感から來る。

今や秋涼、涼日野外の跋涉に暮らすも、倦怠を覺えぬのみか寧ろエネルギーのクレーションを感ずる好季に際し、武藏野に對する自分の實感を語り、讀者と共に其研究の首途に上りたい。

二

武藏野の範圍を廣義に解する人は、關東平野の大部を指すが、普通には秩父山麓から南東の方向に傾斜開展せる臺地を呼稱する。此臺地は北は荒川南は多摩川を東は荒川沿の平野を自然的境界としてゐる。

此武藏野の中には、狹山一帶の丘陵の如く隆起せる地帶を見ぬでもないが、其特色は寧ろ起伏する事波浪の如きローリーングプレーンにある。高き處は畑となり森林繁り、低き處には水田開かれ小河が流れてゐる。かくて武藏野は垂直的の高さの短かきに比し、水平的には多樣な開展をなし、從つて其風景を多趣ならしめてゐる。

三

此ローリングプレーンの特相を觀得る捷徑は、武藏野を北から南に南から北に橫斷するに如くはない。京王電車にしても玉川電車にしても、はた中央線や武藏野線にしても、下車すると共に、或は北に或は南に通ずる路を辿るがよい。かくして丘から谷に、畑から田に起伏する武藏野の面影を味ふ事が出來る。

は元來武藏野は北西から南東に傾斜してゐるから、多くの河が同じ方向に流れてゐる。從つて臺地の分岐も同じ方向に、溪谷の分布も之によつて支配されてゐる。神田上水、石神井川、目黑川など皆此例に洩れない。だから南北の方向に歩く事は、臺地と河谷とを幾つか横ぎつて、よく其特色を明にする事になる。

四

こんな地形だから、武藏野には到る處小さな窪地が溪谷の谷頭となつてゐる。そしてチク／＼滲み出てゐる地下水は、或は小流となり或は小池となつてゐる。此小流や小池こそ、水に乏しい武藏野に取つては、全く砂漠中のオーシスともいふべきもの。

我々が居住に適する要件は種々あるけれども、簡易に飲料水を得る事が第一で、米食人たる我々には、水田を作り得る地點が之に伴ふて來る。此二點から見て、武藏野の窪地は、我々の祖先が此武藏野を開いた歷史に對し、全く發祥地の價値がある。林を伐つて家を建て清水を汲んで飲み、排水をよくして田をつくり、藪を開いて畑となし、或處には共同移住を營み、或處には單獨移住をなし、かくして本家より分家と廣がつたのが、其開墾史の第一章と見るべきであらう。

これは想像ばかりでない、各部落のホンムラ(本村)の位置を見ると如何にもと首肯かれる。即ち和田堀内村永福寺の如きは、甲州街道の北方約三町、神田上水に沿へる水田を南に控えたる緩傾斜地に分布し、其本村たる安藤氏は、部落中最も水田に近き所に位し、安藤姓は部落四十四戶中二十一戶を占めてゐる。松澤村の上北澤千歲村の根ケ原碑衾村の向原杉並村の阿佐ケ谷何れも永福寺と同じ地形で、其他二萬分一地形圖上に本村の位置を檢すると、幾らも同じ例を見出す事が出來る。

五

窪地のうちには、年中地下水がチク／＼滲み出してゐる所と、降水量の多い梅雨季や秋霖の長く續いた季節丈、所謂野水の出づる所とがある。後者には何久保何窪などいふ小字がつけられてゐるが、片山村から大泉村に亘つて細く長く窪んだ所には、永久保などいふ小字がある。

終始水の出てる所は、低濕であるから、谷地と同意義な谷戶、谷津などの小字が多く、下練馬村の谷戶は、北向の臺地の間にある狹い低濕な窪地だが、此處には百五十戶の特殊部落が住ひ、武藏野の農村には珍らしい下駄表製造業が發達してゐる。赤塚村の低濕な窪地にも、バンタのコジベイといふのが住つてゐたといふので、今でもコジベイ窪といふ所がある。

六

チクチク出る水が溜つて小池をなしてる處は、今日の武藏野には少ないけれども、開墾の行屆かなかつた、森林の繁つてゐた昔には、隨分多かつた事であらう。之は石器や土器の分布により、先史考古學で立證しつゝある所であるが、今日殘つてる二三の池によつても、當時の面影を偲ぶ事が出來る。池の最も大きなのは、近年東京市の公園になつた井頭池で、周圍の臺地より一段低い細長い窪地に、地下水の溜つてる樣子は、其流頭によつて知らるゝのみか、內務省で集めた『郡村誌』にも此池に就いて、

深き處一丈餘淺き處四尺、水湧ロ七箇所、其他一圓冷水湧出す。水中沼土にして底砂利一枚板の如く是神田上水の源なり。

とあるによつても明かである。かく水の湧き出る所は、赤土の下の砂利層からで、井頭池の北岸近くの水底には、それを指點し得る所は少なくはない。池のまはりには明治の初年までは、一面に太い萱が生え繁つてゐて、秋の半には如何にも淋しい氣分を漂はしたものだが、今日ではそれが悉く杉林に變つてゐる。

石神井村の三寶寺池井荻村の善福寺池など、何れも此種の稍小なるもの、三鷹村の仙ケ谷池に至つては、大さ十餘坪に過ぎないけれども、滾々として水の湧き出づる有樣は、小さい丈によく窺はれる。池畔の寺や社はた池に結付いたローマンスは、新編武藏風土記其他によりて味ふべきである。

七

武藏野を南北に横ぎりて其特相を觀、更に窪地によつて湧水の姿を眺めたる後、高處より之を大觀する事を必要とする。東京の極近くにはかゝる好位置はないけれども、西方約二里半の距離にある三鷹村の大番山、西方更に一里半に位する多摩村の淺間山は共に、好箇の展望臺である。

大番山は海拔六十五米七、井ノ頭池の南東僅に十二町に過ぎないから最も展望に便で、「此處からは武藏野の最も平遠なる光景と、井ノ頭池から流出する神田上水の溪谷とを下瞰する事が出來る。自分の上つたのは、春の淺い小雨ふる日の午後だつたが、畑には麥苗を見るばかりで、麓の桑も遠い武藏野村の屋敷林の欅も、枯木同樣になつてる中に、四谷丸太の杉林のみが、黑い點を所々に印して、如何にも曠野の感が起つた。

淺間山は甲州街道から十三四町北方に位し海拔八十米に達して狹山の丘陵以外には見られぬ高さ。だから新編武藏風土記の編者などは、築山らしいなどと疑つてゐる。大關高師教授は地形研究の一部として、武藏野をよく調べて居られるが、淺間山の成因を內力に歸してゐた。自分が此山に上つたのは晩秋木枯

の頃、山體の大部殊に東南部は悉く桑畑に仕立られてゐるが、北麓から東麓にかけ十數町に開展してゐる楢や櫟の雜木林は、樺の單色に化し、赤松の喬木が其間にポツリ〳〵立つてゐる。山上からは廣い此森林帶の後方に小金井村の農村を指點するを得るので、何如にも武藏野のワイルドな氣分に接するやうな心地した。

八

自分の感じからいへば、武藏野特有の氣分——荒れた淋しい感じを起さする時と處とは、秋の雜木林だと信じてゐる。乾いた北風が肌を引締めるやうにソヨ〳〵吹く秋晴の空は、夏には見られぬ清澄の色をあらはし、風も通さず空も見透す事の出來なかつた林は、葉の落つると共に樹陰に日光を浴びる事を得るやうになる。

こんな時に大きな赤松の幹に凭れつゝ、櫟の疎林を通じて傾斜の緩かな畑地のウネリを眺めたり、櫟の株間を辿りて逍遙したりすると或時代の武藏野がこんな樹木地で蔽はれてゐた當時の事が、アリ〳〵と眼底に浮んで來る。武藏野鐵道の三ケ島驛附近は、こうした逍遙をするに最も適した雜木林が十數町續いてあり、東上鐵道の膝折驛附近には、赤松の逞しい喬木の多く入り混つた樹木地がある。自分はいつも武藏野線や東上線で此處を通る時分、どうか此處の一部分でも天然紀念物として保存するやうにしたいものと思はぬ時はない。

九

しかし東京に近くなるほど、こんな雜木林は見られなくなり、あつても河に沿うた急斜地に殘つてる位のもの、見渡す限り畑地である。畑地の間を縱橫に走つてる道路は、丸で蜘蛛の巣の如く縫つてる處、風の強い時には、輕い灰のやうな土は吹雪のやうに飛んで、殆んど前後を辨へぬやうになる事がある。こんな時には昔のやうに道路の兩側に並木があつたならばと思ふ。

イヤ今日でも道路沿に並木の殘つてる所がないではない。しかしそれはほんの一部分になつて了つた。老農の語る所によれば、三十年前までは地廣であつたから、木の根が蔓つたり並木の蔭で日蔭になつたりする所は、打擲り放したものだが、今日では人口が殖え稼きが強くなつたから、年から年に開墾を行ひ、とう〳〵路傍の並木を伐り、道路と畑地との間にあつた畦隙を埋め、漸次に耕地の擴張をはかるやうになつたといふ。もとは畑半分山半分であつたと下練馬村の役場吏員が語つてゐたが、それは三十年前の武藏野の實情であつたらしい。

一〇

道路沿ひの並木や畑地の境界にあつた並木は、耕地を廣むる

必要上から、漸次に伐採せられたけれども、屋敷林や宅地回りの生垣のみは、必要上保存されてる所が多い。勿論屋敷林としての欅は、從來も用材として珍重されたけれども、近年殊に船材として高價に購入さるゝやうになつてから、段々賣拂はれて少なくなつて來た。だからどんな村でも、遠見で屋敷林の多い所は富裕だと見ても差支がない。實際百年や二百年經つた屋敷林を殘してる家は、格を崩さぬ舊家である。淀橋角筈の渡邊氏など、自分は舊名主だつた事も知らなかつたが、其屋敷林たる欅があまりに立派だから、訪れてみると舊名主の家だといふ事が分つた。

中野町と地續な杉並村には、舊名主の相澤氏があるが、其屋敷林たる欅が如何にもよく愛護せられてゐる。自分の知つてる限りでは、東京市より西方數里の間でこれほど整つた屋敷林はない。だから地の人達は俗に欅大盡とよんでゐる。二抱もある欅の大木が、門前から庭前に立繁つてる趣は、何と見てもある意味の表標である。しかし由緒ある家構のみが殘つて、周圍の屋敷林が悉く伐り拂はれたり、屋敷林のみが殘つて、空屋敷となつた處などは如何にも空寂な感に堪えざるものである。

一一

かく農家の表標である屋敷林や由緒ある家構が、比較的手が入らずに保存されてゝも、其家にあるべき筈の舊記なり系圖などが、散逸したりしてゐる事を聞くと、全く盃の底なきが如き感起らざるを得ない。中には當然保存されて居るらしいが、出すのが面倒で何もないと斷るのも、隨分心のない業だ。此點から考へると、三鷹村牟禮の高橋氏の如きは、研究家に取つては實に有難い舊家である。同氏の祖先は天正年間に小田原北條の麾下に屬し、牟禮の後丘たる大番山に陣地を構へたのが緣で、此處に居住するに至つたのだが、當主は村の小學校を勤め、よく故記錄を保存し、且研究家には喜んで其資料を開放する。

志村の新井村長の如き、狛江村の石井氏の如き、何れも舊名主の家柄とて、相當の資料を有してゐる。志村の大野氏の如き、故あつて家居を他に移したけれど、舊記丈は長持二ッに保存してあるのを床しく思ふ。

一二

自分は舊名主の家などに殘つてゐる民政の資料を觀る每に、何等かの方法によつて之を保存し整理する事が必要であると切に思はざるを得ない。勿論かゝる資料は、各時代の政治史を研究するにはそれほど必要でないかも知れぬが、國民生活史はた經濟史などを研究するには究竟のものだと信ずる。

然るに村々を踏査してみると、何處の家はもと舊名主で、澤

山の古文書があつたけれども、零落すると共に散逸したとか、火事で燒いて了つたとかいふ話をよく聞く。だから自分は今のうちに之を保存し整理してみたいやうな氣がする。南葛飾の水元村に行つた時など、三十幾歲になる村長が生れてから、まだ一度も開いてみた事がないといふ古記錄を、記念にとて村長の母上と三人で開き、半日かゝつて大體の整理をした事もある。

一三

武藏野の農村をまはつて、自分の一番疑問であつたのは、農家の構なり農民の樣子が何となく粗野なる事であつた。日々蔬菜の賣出で相當の收入があるから、今少しどうにかなりさうなものだがと思ふた。何事にも一家言を持つておられる大隈侯に質したが、分らぬといふ事であつた。横井博士に聞いたら「それは蔬菜農の常で、普通農業よりも非常に其經營に時間を要するから、家庭など顧みる時がないからだ」といはれた。それ丈の理由であらうか、今なほ幾分の疑問を持つてゐる。

一四

農民といふと、武藏野の農村殊に東京市に隣接してゐる農村は、東京市の發展につれて漸次都市化されつゝあるから、今日の小學兒童が壯年となる頃には、かゝる都市的地域の農村の氣分なり經濟生活なりが、隨分著しい變化を來たすであらう。其時には今の農民なり其子孫なりがどうなるであらう。こんな事を考へると、自分は何時も都市的地域に當る農村に對し、今のうちに特殊の教育を何等かの形式で行ふ事が必要であると切に感ずる。義務教育を終へだ所謂青年に對して殊に其必要あると感ずる。東京ならば其隣接五郡の如き、殊に此點に於て意を致さねばならぬ事と自分は思ふ。

都市的地域の教育に對しては、特殊の教育を必要とするのみならず、現に教鞭を取りつゝある教員諸君が、東京との交通機關の便宜なる結果、其村に居住する事なしに、日々東京市より往復するもの多い事である。下練馬村の校長さんは板橋町から汽車で通ふので、學校には落付いた氣分がないと役場吏員がこぼしてゐた。上板橋村などは、村長が本所から日通する事を聞いた。都市的地域に當つてる町村は、いつも都市のみを主として考へられるから、農村的部分は蹂躙せられ犧牲となる傾向が多い。殊に都市計畫などの施設の聲高き今日に於ては、其地域に生活せる農村はた農民は、此施設に對して自覺しなければならぬものと思ふ。

一五

都市的地域殊に東京市に接續せる町村は、今や東京市への通勤者の居住地となつてるので、其居住の狀態は著しく密集して

ゐる。我々が山手線に乘つた時に窓外を眺めた丈でも、草葺の農家がポツ／＼瓦葺の貸家風の建並の中に埋まつてゐのを見るが、自分は何時も波浪に浸さるゝ巖石を見るやうな心地がする。實際東京附近の町村は著しい密集的居住で、試に之を比較すると、東京市の中心日本橋より直徑一里乃至二里の圏内にある日暮里町や澁谷町は、一戸當の宅地坪數が僅に三四十坪、多くて大久保町の七十一坪、千駄ケ谷町の八十三坪であるが、直徑二里から三里の間にある目黒村は百十二坪、和田堀内村は百八十五坪となり、直徑三里から四里の間にある志村は二百二坪玉川村は二百十坪、高井戸村は二百七十五坪となる。直徑四里から五里の間にある農村に至れば、二百四十坪から三百五十坪の間に上る。

　これはほんの平均狀態を示すに過ぎないが、東京より三里か四里離れた村々の農家は、廣い宅地を持つてゐるに反し、接續してゐる町になると、農家の宅地は殆んど貸家に利用されてゐる。從つて小作人のみを相手にしておつた大農も、一躍して貸地の大地主や貸家の大家主とならなくなり、日夕官公吏や工場主や商人や勞働者と交渉しなければならなくなり、從來僅かな小作料ばかりより得られなかつた土地から、思ひがけぬ多額な地代と家賃とを得るに至つた結果、堅實な農民心理は急變して浮華なる都市生活を憧憬するやうになる。周圍には立派な欅の屋敷林を有し、由緒のある家構であるのに見惚て訪れると、こんな家に似合はぬやうなケバ／＼した女の居るのに呆れ、近くで聞いてみると、地所成金となつた大農が、浮れ氣分になつて糟糠の妻を捨てゝ賣春婦を入れた事を高田村で實見した。

　中農が地所熱に浮され、一攫千金を夢みつゝ其所有地を抵當として畑地を買入れたのが、購客がないので元利の仕拂に逐はれ、終に其所有地をも手放さなければならなくなつた事や、家屋敷を賣つた金で事業を始め、それが全く失敗して今は貸長屋に詫住居をするやうになつた例はよく聞く所である。

一六

　かく都市の威力が、之を圍繞せる地帶の農村を征服しつゝある間にも、自覺せる農民は靜に普通の蔬菜を栽培するより、更に集約的な速成栽培をなすのみか、或は時間の經濟の爲に、或は自家の修養の爲に、特殊の設備をなすのを見た。即ち大井町の倉本氏の如き胡瓜の速成栽培を主として經營しつゝあるが、硝子張の三坪ばかりの土足で出入し得る書齋を建て、立ちながら亂抽し得るやうな書架をつくり、農業及經濟に關する新刊書は勿論、宗教や文學に關する新刊書をも陳列してあるのを見た。又野方村の伊藤氏は農業大學の出身で、蔬菜栽培の傍京濟を得

意とするカーネーションの溫室栽培を營みつゝあるが、應接時間を節する爲に、土間の一部を應接室風に直し、テーブルと椅子とを置いて輕便に人に接し得るやうにし、其一方には書架を置き、中にはガーデニングやケミストリーに關する新刊書など入れてあつた。

郊外農業の經營なり進歩なりは、將來かゝる農民の建設に侍たねばなるまい。今日ではそれが放任されてゐるが、こんな人々の苦心なり理想なりを、當事者がよく聞取つて更に統整し立案する所に「新しき農業」は生るゝものではなからうか。下練馬村の役場吏員上野氏の如き、農家の建築に對して一種理想的なプランを有してゐるのさへある。

都市的地域は、都市計畫の上より新しき施設を要すると共に、特殊農業の上よりも大に工夫を要する事であると思ふ。

一七

ある建築學者は、住宅の樣式には、其居住者の職業なり思想なり趣味なりが表現せられゐると言つた事を讀んだ事があるが、東京市より武藏野に逍遙すると、實に此學者の立言を裏書するやうな感が起つて來る。

或日タウンプランニングを專門とする今君と甲州街道を東京市から農村へと踏査したが、新町より代々幡、代々幡より笹塚、笹塚より荻久保と、其間僅に一里に滿たぬ間に、居住の狀態が純都市的より純農村的に變じてゆくのを見た。

かくて高燥なる臺地の東向や南向の處には、貴族や富豪の住宅地を見るのであるが、市內電車の終點や山手線の各停留場附近には、中等階級の住宅地が續々新設されつゝある。而して工場の新設と共に其附近には職工町なる一種特別な居住形式が發達する。かく居住地が各階級によつて異るが如く、其建築の樣式亦異ならざるを得ぬ。低濕なる窪地に點在する細民地區に於ける住宅の如き著しき標式の一で武藏野方面では、新宿南町のを其適例とする。

一八

東京より武藏野に。武藏野より東京に出入する人事の活動狀態を明にするには、青梅街道、中山道、東海道の如き主要なる道路の門口に立ちて未明より正午迄、之を往來する車馬人物を觀察するのも、一つの面白き觀察方法である。今日東京府廳で、所謂交通調査の名の下に之を實行しつゝあるが、かく精密なる統計にあらぬまでも、半日の實感猶よく大都市と農村との關係を直觀する事を得ると思ふ。

* * * * * * * * *

武藏野に趣味を持つ人は、行くべき地區の地圖（參謀本部の二萬分一か、一萬分二）を手にし、一日の逍遙を郊外に取られたい。武藏野の自然と人事は、恐らくは無言の雄辯を以て諸君に酬ゆるであらう。（九月十五日記）

今秋美術界の收獲批判（一）美術院と二科會

院展日本畫管見

小杉未醒

今歳は心がけた作品が意に滿たなかつたので、私は院展の無出品者になつてしまつた、展覽會の爲に藝術があるわけではないから、力を入れた作品がいつも展覽會期間際に作られると云ふことは本當でない、私は三回目のやり直しが八月に入つたので、どうも此の會期が氣になつて可けなかつた、人間普通の情で、特に出品物を作らうとは思はなくも、出來たら出品しやうと位に思つたものでも、會期眼前に迫ると、どうも其の爲に多少心が急がれるやうです、日本畫の方の人は、多忙勝ちであるから、こ思ひ乍らも遂會期の脅威を受けることも有らうと思ふ。

尤も是は普通風流の用心で、非凡な豪傑になれば、會期も展覽會もあつたものではない、製作的時間なり位置なりが、どんな不便な事になつて居ても、時處を超越して製作の力が振はれ、感興の光が輝き亘るであらう、人間の穢土も菩薩には即ち淨土と化するであらう。

中央公論の約束の爲に、批評を書かうと思つて會場を見亘す今年の私は、前陣の丸腰であるが爲に、甚だ氣散じな心で此の自分共の會場を眺められます。會場のプランは前年私が受持つて人々の修正を經たものを今年もそのまゝに使つたのであるが、此の室に彫刻彼の室に洋畫と、間取りがいつまでも同じでは可けないかも知れない、來年は又誰れかの考案が新に施される事であらう、日本も何日になつたら此の間取りの心配などの

ない、適當の本建築の會場が出る事やら、此のバラツクに貧しい飾りをつけた外觀、汚い木柱の亂立する內部、殊に步行者の腦に衝擊を與へ無駄な疲勞を觀衆に覺えさするタヽキの床は尤も善くない、巴里のサロンの會場の建物の、十分一の大きさで間に合ふ日本の美術館は、成金が何十人起つても倒れても出來ない。

しかしそんな不平は不平だけで、私共の力の範圍外であるが、今年殊に私の氣のついたのは會場の布の色です、是は何の會でも皆構はずに同色で通して居るが、畫に依つては壁面の布の色の影響を少からず受ける、此の院展の鈍い海老茶色は、强い印象派的の色彩の油繪、乃至は岩物の層々として重なつて居る美人畫などには佳いかも知れない、淡泊な色彩のものには甚だ損な場合が多い、是からは一つ、室によつて布の色を變化し、それと調和のとれさうな畫を其處に集める事としたいものです、たとへば彼の溪仙氏の問答屛風の如きは、美術院の二階で見た時は、薄い彩色の中に少しづゝの變化があるのがよく見えて、あつさりとした灑味あり、未だ深みの不足とか、面相の模糊とか云ふ事を缺點とするに到らなかつたのが、此の海老茶色の上に置かれて見ると、どうやら紗を隔てゝ物を看るが如き心地がする、大觀氏の屛風も、畫室で之を建て廻した中に坐つて居ると、如何にも庭の內に靜かに居るやうに覺えたが、此處へ持つて來ると、それほどの感じを與へない、是等は皆、薄い鼠色などの壁色、つまり日本の建築の內部の色を綜合したやうな壁色の中に置かるべきものかと思ひます、問答屛風は併しながら溪仙氏の是迄の作品の中での尤物かと思ふ、色の好みも卑しくなく、人物の在り場も納つて居る、斯う云ふものは殊に人物の顏で極まりが付くものだらうが、それも先づ相當な坊さんに見える、慾を云へば若い坊さん達の顏を、大和尙位の顏にして、大和尙の顏をモ一段上の人間のにしたい、バーンジヨンスが、ホイスラーの新畫を評して、彼れは自分達が是からと云ふ處で筆を收める、つまり未完成の處で體よく逃げる、と云つたさうですが、克明な支那の古い畫家を引張つて來て此の問答屛風を見せたら、是は下塗りかと云ふだらうと思ふ、其點が又觀者の目をサラ〳〵と輕く導く所以であるけれども、要するに螺旋鋲はゴク淺い處で緊めてあるやうです、善く對比される人であるが、彼の關雪氏は溪仙氏に力を加へたやうな處がある、力が餘つてその爲に時々品を落す事がある、溪仙氏は關雪氏の力を拔いたものゝやうである、力が無いのではなく拔いたのです、何で拔いたかと云へば俳味で拔いた、すると關雪氏の畫は詩の嫌ひな漢學者見たやうにもなる。

方久斗氏の雨月物語と云ふのは、實は隨分奇拔な圖柄で、二つの畫題が一つの畫面に收まつて居たり、物の大小の比例が丸切り無視されて居たりする、それがさして目立たず、却つてその間に一種の味をさへ出して居る所以のものは、全く彼の技巧の纖細精緻に在るでせう、是を見ては奇妙な美しい幻想をさへ得れば可いので、必ずしも雨月物語の書中の事柄を調べるには及ばない筈です、又此の不規則の散在は私に未來派の或者の作品を回想せしめる、成立ちは勿論違ふ、是は技巧に於て古畫の筆法の怜悧な集成だから、只奇妙な裝飾的效果に相似た處がある。此圖は同人以外の出品中の優秀な方であらうか、今の處美術院も新なる勃興者が少し途絶えた形ちに見える。しばらくは同人各個の發達に委するのみかも知れない、昨年の勃興者御舟氏の修學院村が少し遲れて陳ねられたが私は去年の作に左袒したい、自然の追究者として、日本には古に初期の四條派があつた、是は輸入の南畫によつて、自然に對する眼を新たにされ、當時にあつては其の淸新平明を以て勢力を得たと思ひますが、今から見れば單に自然の表皮を手輕に撫で廻して、都合よく畫面を繕つたものに過ぎず、忽ち型式を生じて若且那のお坐敷藝に墮してしまつたやうですが、兎も角日本畫壇に少々なりとも寫生の道は開いた、却つてお可笑しく思ふのは、寫生寫意を重んず可き筈の南畫の傳習者、つまり幕末明治の南畫家達が、目を自然の前に瞑り、つくね芋と唐人形の置き換えに甘んじて居た事です、現代に到つて西洋畫の輸入が盛になつた、是は日本畫壇の大變化期で、如何なる人も此の影響を受け動搖を感ぜぬわけには行かない、忽ち比較が始められる、寫生を重すると稱する四條派はその皮相淺薄を以て貶される、自然に親むと號する南畫家の末流はその無根底を洗はれる、官學的權威に依つた狩野派は印刷物と異る事なき甚だしき定型を指摘される、只巍然として動かざるは古大家の豪勢な個性と豐富な藝術精神を有せる人々で、それ等の各方面に現はした東方思想が、希臘伊太利佛蘭西の流派々々の持つて居る西洋思想と、相異れば異るほどに光を增して來る、賢才ある日本畫人は此處に留目せざるを得ないだらう、そこで大小の畫人は悉く個性の發見に走る、少し前に岡倉氏が初期の美術院に於て提唱した無線描法は日本畫の筆法の積弊に對しての反感でもあるが、洋畫の影響を受けなかつたわけでもなかつたらう、主義として寫實を排し、觀念を崇んだのは洋畫に對しての特質保存の意味かと思ひます、次には新らしき自然の追究者が出るわけになる、日本畫脈の特質の中にも、自然主義の含有の無いわけではない、或は又支那人の南畫を顧みても見る、古土佐狩野四條の各派は、之を提げて自然を

分解す可く餘りに硬ばつたものに見える。

一方に後期印象派の風景畫が、どうやら支那日本の風景畫と、遙かに相通ずるが如きものあるをも見発せない、目黒の一黨と、國畫創作協會の人々の事業は、斯んな狀態の下に各々の酒を醸して居ると私は見ます、現代は個性の亂立である、此内必ず二三の大個性は殘るでせうが、他は新を追ふて知らず知らず新の模倣を行つて居る事、東西共に同じでせう、ともかく七顚八倒して得物々々を磨いて居る時勢です、その中に目黒の人々と國畫創作協會の人々とは、その質實な態度を以て自然の追究に精進して居る注目すべき團體と取られる、國畫創作協會の人々は目黒の人々に比して仕上げが綺麗に行く、是は師傳と地方的の關係と思ふ、目黒の人々の方がより多くの自然味を含む、仕上げがきたない、此處に將來をほの見せる。

行く先きがまだ何の邊まで延びるか分らない、現在の作品はまだいろ／＼な期待と計畫とが雜居して居る、たとへば青樹氏の菜園屛風を見る、うしろは金箔です、當然金色を畫面の中に入れて考へなくてはならない、すると是は裝飾的扱ひ方になる、それにしては彼の雜草と畠の物との描寫が、餘り其儘すぎはせぬか、是ではその周邊に、雜草の根と交り南瓜の葉ともつれ合つて、土の色空の色まで同じ目的に動かなくてはなるまい、モツト簡化された寫生、同じ自然の亂雜も一度ピツクアツプされた亂雜でありたい、是などを私は計畫の交叉と思ひます、決して此處に光琳を引張つて來はしない、光琳は金屛風の上の自然主義には緣が遠い、御舟氏は目黒黨の中に尤も期待される、去年の行き方は尤も場中に光つて居た、私はあのまゝで延びてモツト大手に行く事と思つて居た、今年は餘りに異常な物件の追究となつたやうです、神經の尖頭が畫面に露出して居るやうで、靜かな圖柄ながら不安です、研究の階段は故紫紅氏よりも進んだ處に在るでせう、たゞ故人の太つ腹が今でも惜しきものに思はれる、

私の貧弱な經驗を引くのも恐縮ですが、私は先づ一口に云へば油繪具を以て日本畫趣味のものを作る、しかし乍ら雲煙の搖曳が中心興味であるもの、風に動く竹の四五本が主題たるものと云ふやうな圖柄に油繪具を使はうとは思はない、油繪具は隨分廣汎な範圍にその可能性を持つて居るものであるが、それでも限度がある、日本畫の材料は今少し狹まい、と同時に日本畫的思想は寫實を最も重しとしないから、その個性を盛るに此の材料で不便はない、材料に東西はない、只此の材料について積まれた經驗と親しみとが東西の別を生ずる、此處を賢明に智解して居る人に靫彥氏と古徑氏等を擧げたい、岳陵氏も亦此の系統

の人と私は思ひます、然るに今年の岳陵氏は破天荒に變轉した風景にじのひかりを描いて居る、圖柄に對して材料の選擇を誤りはしなかつたらうか、此の如き目的には空や樹木芝生等に物質の區別が描寫されなくてはならない、物質描寫は油繪具等の得意とする處で、日本繪具及絹地には寧ろ有る事を欲しない處です、是は思ふに岳陵氏の動搖の過程であらう、岳陵氏の空想は永く此處に安住し得ないだらう、古徑氏は前年の鳳凰堂を描くが如き心持ちを以て、今年のいで湯を描いたと云はれたとか聞きます、その如くであらうと思ふ、たゞ鳳凰堂は題材の關係で餘計神異秘密の幻想を帶びて居た、いでゆは清新の間によく品を落さずに居ます、勿論近來の美人畫乃至古の浮世繪などからズツと違つた生面を開いたものである。但し一方に油繪畫家があつて、色彩や形狀の角逐を挑まれる恐がある、そこで之に對するに畫面物體に彷彿する氣分を以てせざるを得ない、前に云つた古徑氏の材料の智解は此處に存します、私は此の色彩形體を一に淸冷な氣分感情の具に供して了つた處を、モツト突き進める爲に、乳の尖や指の尖に點じたやゝ顯著な紅色を沒くしたいと思ひます、それと同じ意味で靫彦氏の御夢の屛風の描寫を、他の部と同じやうにモツト夢幻的にしたかつた。

展覽會の出品を一々に列評することは私の根氣が許さない、無理にすれば空虛が生じコヂ付けが出來、甚だ自身のあと口を不味にする、私は初めから二三の作品を摘擧して、それに依つて平生の懷抱を少々述べたいと思つて居た、で是で筆を擱きます、まだ愚存はいくらも殘つて居る、來月時間が有つたら文展に是を試みませう。

院展の洋畫

山本鼎

今年は、毎年院展の特色とせられて居る未醒君の壁畫はないし、恒友君の詩情に富むだ畫も見えないから同人の氣勢は甚だ揚らないが。長谷川君が大いに振つて居り、山脇、片多、木村、椿等、常に世評に入る人々の畫も可なり出て居るので陳列面は相當に賑かである。陳列の總數は七十三點で、同人の作十八點、無鑑査の形で受け容れた山脇、片多兩君の作十二點を除いたあとの四十二點は、集つた八百二十六點から選拔したものである。昨年は同人一致で及第した畫が僅かに三つしかなかつたが今年はそれが十二點あつた。百號二百號といふ樣な大きな構成畫も十枚以上もあつたが皆落選した、それ等の仕事の骨折りに

は同情したが、技工の不備を看過する事が出來なかつた。水彩畫は皆失脚した。油繪のなかにあると表現の弱さが目立つのである。集つた畫の傾向は昨年と變りもない。概ね寫生で出來た靜物及風景畫であつたが。安井君や岸田君の聲色を使つた畫が可なり多かつた。又、全然新手を現さうとしたものや、習作といふ畫型に畫を作り上げて居るものや、直卒振り、稚拙氣取り等いろ／＼あつた。觀る所、一般の意向は、深刻にならう――個性を發揮しやう――といふのであるらしいから結構な事であるが、深刻とか、個性とかいふ事は態度の問題でなく人間の力の問題だから、他人の表現を届つて來てはいけないし、知識で探り當てやうとしても駄目である。態度は『自然なれ』といふ他にない。吾々の場合自然なれといふのは、眼より捉えよといふ事である。藝術品から指命されずに對象――卽ち自然から掴み入れろといふ事である、自然から掴み取つた表現が、一見AもBもやつて居る樣な傾向であつた處で仕方がない。少くとも、己れの聲が頗る平凡であるにしても、聲色を使つて居るよりは價値がある筈だ。僕は近來の流行の陰濁粘皮の表現を人々の自づなものとする事に躊躇する。人々の眼に入る『自然』はもつと素直な表情を有つて居る筈だ。木の根つ子でも、溝泥の面でも自然は常に寛濶な觀を現して居るぢやないか。今日猖獗する處の胸苦しい、不潔な感じを與へる畫面は人々の眼に映つた實相ではなく、認識に傷むだ蒼轂でもなく、作畫上の或機略や技工上の浮氣な趣味から生れた私生兒だと思ふ。而も、ひよつとすると、それを一番藝術的な仕事をやつて居るやうに考へて居さうだからじれつたい。

選ばれたものは稍々眞卒なものだ。其處には議論を仕掛けて來るやうな畫も、魅して來るやうな畫もないが、表現の純を掴かもうとする熱心の覗はれるものがだいぶある。自分は鑑別といふ、氣味のよくない事をやつたから、此處に出品畫の寸感を記して責を償ふうと思ふ。

○

若山段透君の『靜物』は美しい繪の具がくつついて居るが生物の色の美しさを嗜慾して、なほあれだけの寛かさと冴えとを失はぬ樣だといゝのだが。

鬼頭甕二郎君の畫を見ると、作者にもつと印象を重んじてもらひ度くなる、形態を簡約する事を何が命令したか？。『趣味』ではあるまいか。何にしろ冷めたい自然だ。

小柳正君のは三枚共まつたくの習作だらう。緻かな筆や色は一寸周圍に見ない表　示を有つて居る。其かわり形態に對しては盲者だ。

西村叡君の『靜物』は眞重すぎて平凡に見える位だ。かまわないぐん／＼熱心に同じお經を誦むで居るべしだ。

木村義雄君の『水郷の夏』は昨年より進歩して居る。此人のこせつかない描寫は僕の好む處だ、たゞいつも影の色と日なたの色の關係に觀察の不備がありさうだ。

小島善太郎君の『靜物』は氣持ちの良い色だ、もつと立體的表現を進めて、そしてあれだけにすつきりした處を失はなければいゝんだが。

片多德郎君の畫の醱酵は『自然』よりも『藝術品』にあるらしい。此人には參考にすぎない觸目の自然が、僕には强敵なんだ。ほんに勝つ見込のない强敵だ。世は樣々です。辻愛造君は昨年の『日さかり』の方が僕は好きだ。あの銀色の調子(トーン)は良かつた。今年のは燈し油に染められた樣な黄色さが厭だ。少し描きつ振りに縛られて居はしないか。

武藤辰平君のは二枚共風情のある良い畫だ。唯影の色が寒すぎるだらう。

棚橋秀吉君の『小女』は良い畫だし面白い畫だ。

小林德三郎君の『風景』は氣の利いたスケッチといふだけの事だが、厭味のない技工だ。

前田嘉三郎君の『積藁』は鉛筆畫の樣な氣がする。色の印象が稀薄だからだ。併したしかな寫形(ドローイング)である。

小川千甕君の油繪は又鉛筆淡彩だ。同君の漫畫の機略が『山蔭閑居』の生命になつて居る。水木伸一君の畫には面喰つた。昨年『赤犬』や『岩』を描いた人の畫だからだ。とにかく何んでもやれる人だ。

伊藤彌太郎君の『ダリヤの花』は思ひの外危つかしい技工だつた。

藤林喜一君の『煙の響』は未來派の機略をちつとばかり借りてる。それだけ！。

長島重君の畫はいつのも無難すぎて睡むたくなる。

木村荘八君の『二本の灌木』といふ畫は場中で僕の好きなものだがあれが千九百十四年の風景で、あとの二枚は十七年と十八年に出來て居る。『二本の灌木』の後に他の二枚のある事によつて此作者の前途はまことに賀す可しだ。

小山敬三君の『小牛等遊ぶ大島の海岸』といふ畫はなか／＼質の良い技工だ、たゞ牛が皆張子細工の樣に死むで居る。

坂口左右覗君の『雲影の湖水』といふ畫は、濃淡としての調子(トーン)があまりばら／＼だ。だからまるで寄せ切れの布のやうに見える。

宮坂千代三君の『春光』は印象を語つて居ない。何に惚れて描

いたのだが少しも分らない畫だ。

原田恭平君の畫の『斜陽』は『春光』と缺點を同じくして居るが、色が前者より軟かい魅力を有つて居るだけ胸に通りいゝ。

山脇信德君の十一枚は皆初期印象派の點畫的手法によつたもので、場中に比類ない畫型(スタイル)であるが、往年に比べると其光線の魅力を誇る事は段々消極的になつて居るやうだ、だから僕には點畫法が不便さうに感じられてならない。十一のうち『浮木に雪』といふのが立派なものである。

林崎祝君の『木蔭』といふのも點畫法で描いてある。浮薄な處がなくてよいが、すべての觀察が幼稚だ。木の蔭なぞは毛氈の上にこぼしたインキの染みのやうだ。

長谷川昇君の畫は技工の豐富な事を示して居る。作者は腕があるが描くものに困つて居るのではないかと思ふ。で『隣のおかつちやん』は最も手なれた表現であるが、他の二つの構成畫(コンポジション)は嚙みこなすに辛かつた樣に思ふ、併しあれだけの試みはなか〳〵出來難いものだ。僕は愛す可き畫(ジャンティ)として『日向葵』を擧げるがあの全體の努力からむしろいろ〳〵に彼の人の未來を樂むで居る。

椿貞雄君の畫は三枚共弱くて良いが、少女の肖像などには、い視覺的のクアールを愛護せぬ不純な表現がある樣に推されていけない。

中出三也君の畫は愼重な描寫であるが、外光を感受する所などから彩を豐富にしてもらひ度いものだ。

倉田白羊君の畫は非常に精細な描寫であるが、物が正しく描かれて居る割合に物と物との關係に觀察の不備がありさうだ。そして色が寒すぎる。『晩春』は併し完備して居る。

萬鐵五郎君は今年は懶けた樣だ。來年は是非寫生(ダツプレナチユール)を見せて貰ひ度いものだ。

保田龍門君の畫はゆつたりとした良い畫だ、併し長く見て居ると倦きて來る、彩の印象が粗いためだらう。

七年九月十八日

今年の二科會

正宗得三郎

○

二科會で受取つた作品は、會員以外に八百有餘點あつて、素人や女の畫もかなりあつた。九州や北海道のやうな遠い處から送つて來たものもある。然し内には素人で、一寸畫をやつたや

うな人などがかゝなりあつたので、集まつた作品の三分の一位は隨分非道いものだつた。畫の種類は各種類あつたが、主なるものは印象派、後期印象派それから獨逸のデューレル等の傾向を帶びた所謂草土社風のやうなものと、未來派、立體派の作が多少集まつた。去年閨秀作家の畫が少し出たので、今年は澤山集まつた。若し男の人の作品と列べても敗けない樣な作物が數あれば、一つに纒めて特別に一つ室を拵へるのも一つの方法だと考へてゐた人もあつたが、やはり實際に當つて見ると程度が隨分低いので、落す方が會としても至當であるし、氣持が好いので、埴原久和代さんのを一枚だけ取つて他は失敬した。

○

二科會の選抜の立場は何の展覽會よりも情實無くやつて居る。流派で取捨する事もしない。同人に於て了解が出來て、藝術的價値が多少でもあれば、どんな流派でも取るといふのが同人仲間の鑑別する標準であるからに、其鑑別は同人の藝術に對する理解が他の會のと違ふやうに違つて居る。文展や院展に通るやうな作品でも二科へは通らない事もあるし、二科に通つたものでも文展や院展で受けられないかも知れない。そして今年は成るべくいゝ人の――二科會の定連といつたやうな人の畫は成たけ數を澤山取つて一つ處に纒めて行きたいと思つて居る。その方が出品者にもよいと思ふ。

○

第一室は多少變化したもの――未來派、立體派などの爲めに設けて置いた部屋である。順番として海老名文雄君がある。水彩はそれ程不自然だとは思はないし、又色にはよい感じの分子もある。併し、『休息』の畫はどうしても拵へものだ。此人の一番惡い癖は熟く自然を研究しないで、器用に畫面に種々な物を集めてたゞ單に畫をつくる事だからに、畫面を見れば見る程詰らなくなる。畫の後ろに何物も無い。自然の現れもなければ又誠實もない。も少し熟く自然に卽して、其處に根柢を置いて自分のものを立てゝ行かないと、毎年つまらなくなる。一寸と立派さうに見えて、何物も無い。折角の才分を實に無駄にして居ると思ふ。神原泰君の「自我の分裂」は、多少物の交叉力がある。東郷青兒君の畫を自分は、キュービスト、未來派といふ意味でなくして、カンジンスキイなどの色の合奏といふ意味に多く畫面が造られて居ると見る。水彩二點を見れば君の才能を窺へるが、たゞ君のやり方は行きつまつてゐる。新印象派が自分の理論に自縄自縛されて苦しみ、立體派が平面に形づくる畫でもりきれなくなつた事は君にも一つの暗示になりはしないか。關根正二君の「自畫像」は丁度ゴーガンなどの畫のやうな、線の洗練され

た所と、色調の狂亂するやうなエキセントリツクでない所に多少興味がある。

第二室の國枝金三君の四點は皆なか〳〵努力した作である。不眞面目な點はちつとも無いけれども、少し息ずまり、又多少色があくどくて、外の光輝を失つてゐる。そして調子が乏しいと共に、距離が現はれない全體の效果が確か相で不明瞭になつてゐるのは悲しい事だ、松岡正雄君の作品は自然の事柄を細かく描いたのが面白いと云ふ位で、それ以上に何もない。畫の質とやり方が餘り良くないやうである。濱田葆光君の作品は國枝君の作と同じく眞面目であるけれども、色調がどうも良くない。あれ程眞面目な人だから、も少し良くなければならないと思ふが、眞面目と自然の氣息が能く了解出來てゐないやうだ。埴原久和代君の「少女」は昨年の作から見れば進歩してゐる。

第三室の硲伊之助君、此人の作品は其數量に於て少くも相應の努力があり、又それが無駄許りに終つてない。硲君は眼に見た、又感じた場所は、どんな處でも描いて行くリアルの力がある。それが一番同君の强味である。人の話しに據ると同君は少し色盲だと聞いて居るが、畫を見ても多少赤味が失せて、青く黄色い不快な所もあるが、さういふ事も中にある良い作品を見ると、寧ろ一の特色となつて居るとも云はれる。「我孫子附近」「黄金水仙」などはなか〳〵確かりした畫だと思ふ。全體には畫面の汚れた晦澁の不快の點と、作によつては物の賢實と云ふよりぶく〳〵したものも、又調子に於て不足の所があるやうに思ふ。

第四室、中川一政君の作品は感じは惡くはないが、少し判明しない所がある。横井弘三君の「私」「婦人」を見ると。横井君は自分の有つて居る感じを、センチメンタルであるが、其儘自分の技巧に於て勝手に寫す良い所があると思ふ。然しそれにしても今年は弱い。岸田劉生君の「川幡氏之肖像」は中で一番出來が良いが、「靜物」なり「晩春の草道」なりなどには、からびた、生き〳〵した所が無い。無論「川幡氏の肖像」でも「靜物」でも、ゴツホなぞの持つ「生」又ゼザンヌの「實相」「量」その様な質とは全く違つた、或る物の所有するカラクテル、それに連關した象徴的とでも言つたものがあるけれど、今年の靜物はそのモチブの現れがわざと拵らへたらしく見える。又「晩春の草道」の風景畫は淺くして詰らない。「男の首」といふ彫塑なども近寄つて細部を見れば、油繪と同じやうに細かにいろんな事をして居るが、少し離れて見ると、ブク〳〵してエフエが無い。岸田君の畫に列んである木村莊八君の畫は未完成の感じはあるが多少生き〳〵した感じがある、それは同君の强味だ。

第五室にある石井柏亭君の作は、或るカラクテルを捉へた面白味と、作者が旅行中に捉へた感興のある作である。石井君の畫は何方かと云ふと、「男の子だとか」「簞笥の前」だとかいふ素描で書いたもの丶方が、「物の表はれ」もはつきりして居るし又畫面の感觸も良い。「紅蓮」「厨」といふやうなものも、朝鮮を風俗的に味つた感じは受取る事が出來るけれども、色の厚味とか調子といふものは、餘り問題になつて居ない。寧ろ水彩の「景福宮の奥」「尾後」といつたものの方が自由な感じがする。君の前途の問題は油繪具を更に深く有効にさす事でないかと思ふ。坂本繁二郎君の作品は何時見ても君の良い所を有つてゐる。然し君の作品には又何時も不分明な所がある。それは畫其ものが神秘的と云ふのでなくて、調子などに不分明な所が混つて居るのである。「靜物」などでもなか〳〵好い作だと思ふが、部屋の内と緣から先の外光に浴した部分との關係が判明しない爲め、多少畫の印象を薄すくして居る所がある。然し曇つた光が薄く石膏の面に當つてゐる、沈んだ感じが自分は大變に好きだ。も一つ「那古海岸」もこなれたよい調子のある小品だ。「苗木畑」は君の特有のモチブでありつ丶四點中で駄作だ。

第六室の山下新太郎君の「コンヴレッサンス」は、山下君の小供さんの病氣揚句を描いのださうですが、鳥渡其感じはある。山下君の畫はあれ程薄く塗つとつても、他の人の畫と違つてちやんと完成した大家の俤がある。我れ〳〵の要求から云へば如何にも弱すぎる感じはあるが、然し會の中で最も可愛い作の一つである。有島生馬君の作品はいろんな物があると思ふ。それに一つの思想家といふやうな所もあるし、印象派といふやうな所もある。構圖などにも一つの才氣を持つて居るし創造的でもある。然し其作品は皆未完成で、一枚の作の內でもいろ〳〵の意味のものが溷濁して居るやうに思ふ。中で「曙光」といふのが一番良い作で、有島君らしい色が出て居ると思ふ。氏には前途には統一さと純一さと熾烈のエネルギーが必要だ。次に安井曾太郎君の作品は一體色トーンよりもデツサンを重んじた藝術といふ事を感ずる。「支那服を著たる女」、形に統一された鋭感さはあるが、色調がない。いろんな派手な色は附いて居るけれども、どうも繪の具臭い感じがする。景色なども自然の塊（ヴァリュー）又質量（マッス）の力を得やうとしたのであるけれどもそれが力になり得ないで煩瑣に感ずる。例へば遠近、又は「蔭」と「日向」の關係がバラ〳〵して居る。靜物畫に殊にその感じがする。撤退された「少女」はこの兩方のものが最も巧く行つて居る、良い作品だと思ふ。愉快ではないけれど。九里四郎君の作品は凝つた、併しこれでは未だ同君の單なるディレツタンチズムの藝術である。

第七室の湯淺一郎君はも少しうまい人なんだけれども、此頃の作品はどうも元氣が無くて餘り感心しない。熊谷守一君の「某夫人像」は勿論昨年の作品よりも數等良いものだけれども、氏も亦美術家校時代の意氣がないのは惜いと思ふ。津田青楓君の「芭蕉庵の下」は横井君のやうな意味で、思つた事を自分の勝手な技巧で勝手に描いた所に興味がある。然し畫の有つ質とか量とかいふものに於て多少蕪雜な感じがする。

第八室の鍋井克之君の作は一つの印象派の藝術で、中に「雪の山」「池畔早春」などの自然の情趣を捉へた作で惡くない方である。林倭衛君は全體靜かないゝモノトーンを有つて居る作家だ。「K氏肖像」「冬の海」「海邊の小屋」等淡いが何か考へさすやうな點がある。非常な偉大なる力だとか、湧き出る泉といふやうなものはないけれども、淡くて薄つぺらにならない思想を有つた人と思ふ。

序でながら、美術院展覽會には今年は日本畫にも洋畫にも、餘り感心した作を見出せなかつた。唯中原悌二郎君の「肖像」だけは一つ良いと思つた。今秋の中では此の作などは最も良い收穫であると思ふ。

○

吾々は急がずに休まずに進まねばならぬ。そして總てに打勝つて勝利を得ねばならぬ。二科會は世間的に浮かれず、衆をたのんで妥協せず、吾々は吾々の理解者と集まり研磋し、最もよき意味で競い、そして日本に於ける最もよきレベルをつくる。それは渾沌たる日本現在の畫界に最も必要の事である。

又會として二科の觀覽者の多くは殆んど將來日本の智識階級たるべき青年に限られてゐる。將來の解決はそこにある。二科會の作品は誠實にして若い。吾々は騷がずに靜かに強き曙光を認めつゝ步んで行かねばならぬ。

次號の本欄には「今秋美術界の收穫批判」(二)として

文部省展覽會批判

を掲載すべし

穩田行者の片影

大庭柯公

一

世に穩田行者と云はれるほどの者に、多少とも豫言めいた事が出來たからと云つて、左程に驚くこともない。それは恰度鷄が本能的に時を歌ふやうなもので、外界の光度の增進とか、色彩感覺の變化とか云ふことから、發聲運動を解發される鷄と同樣、自他共に行者などゝ言ひ來つた彼が、何等かの神經運動的刺激を受けて放言したことの、百中の二十プロセント位が、適中したからとて別段不思議はない。大鹽平八郎が天滿與力時代の、三大功績中の一として算へられるものに、有名なバテレン婆逮捕事件といふのがある。京都の陰陽師豐田貢一味連類の逮捕事件で、事は寬政十一二年頃から文政十二年まで、前後三十年に亘つての邪宗門一件といふので有名なものである。當時は吉田白川兩家配下の神職、聖護院三寶院配下の山伏修驗者、土御門家配下の陰陽師、鞍馬大藏院配下の願人などと、種々雜多な怪行者が、京大阪人の信仰心を煽つてゐた。斯かる際に京都からの宮方の隱居といふ觸出しで、大阪の堂島に本居を構へて、加持祈禱、吉凶禍福を未然に示す、即ち現代語で言へば豫言者的言動を爲す婆さんが、大阪町奉行の手で召捕りになり、夫れが緒となつて、京都八坂の豐田貢といふ婆さんが捕縛され、天帝如來の畫像といふものが、其邸內から發見された。バテレン婆さんといふのが夫れである。

文政十二年の十二月に、バテレン婆さんが其連類一黨と共に、大鹽平八郎の手で鞫問審理の末、大阪で磔になつた。其際婆さんの遺言的豫言として、『爾平八郎、今より十年を出でずして、必ず其身は吾等同樣磔になるであらう』と言つた。處が不思議にも夫れから丁度八年目の天保八年には、有名な大鹽亂で、平八郎、其人は燒打暴動の末、結局自裁の上自から火炎中に投じて死んだものゝ、幕府の處刑は、大鹽父子の死體を鹽詰にした上磔といふことになつた。大正の穩田行者飯野吉三郎を以て、文政のバテレン婆さんに比し、又假初めにも穩田の邸

內に祀れる天照皇太神を以て、所謂天帝如來に比すべくもないが、文政天保の當時に在てさへ、天下の陽明學者たる大鹽中齋先生の死狀を、その八年前に豫言し得たバテレン婆さんの存在してゐたことを想へば、大正の穩田行者なるものが、原內閣出現の月並的豫言を爲し得たとて、何程の不思議があらうか。

過般はジョン君といふ讀心術家―實は讀筋術（muscle reading）の熟練家が渡來して、我國の社交界から知識階級までの嘆賞を收め得たが、西洋諸國に現存する心靈現象研究會（The society for Psychical research）などの研究上から見れば、左程珍奇な事でもない。穩田行者が故伊藤公や兒玉大將などを驚かしたほどの神秘的言動も、畢竟は白無垢の裝束に御祈禱などいふ、有難さうなものを手品にした交靈現象に過ぎまい。彼が今一二割ほども愚物であつたならば、三田光一の徒と何等擇ぶ所のない男であらう。心靈現象に幾多の詭妄、欺瞞、錯誤の含まれをることの免かれぬことは、心理學者も認めて居ることで、時には全く神經的と見える現象さへ行はれ得るものである。初對面の故伊藤公の面前で、備前物の名刀を掌でしごい見せて、それで公の敬服を買ひ得た事なども、畢竟此種の神怪的事蹟に過ぎまい。

二

敬は曾て目白の呵呍波羅婆はガポンの如く、穩田の穩田行者はラスプチンに似てをると言つたことがあるが、ガポンよりもラスプチンの方が事實大芝居を打つたと同樣、呵呍波羅婆よりも穩田行者の方が、確かに數段立優つてをる。呵呍波羅婆に就ては、頭山滿翁との問答で至極面白い一幕がある。現今南米はブラヂルに落延びてをる山縣勇三郞といふ豪傑流の男が、この目白行者の客分であつたが、勇三郞一日頭山翁を訪ふて、呵呍波羅婆が是非一度お近づきに與かりたいと云ふ。幾度も幾度も餘り五月蠅く言ふので、料理屋でゞも逢はふと翁が返答されたので、早速偕樂園で落合ふことゝなつた。當日遣つて來た呵呍波羅婆を見ると、縞の羽織に角帶で、至極平凡な世間話しをして歸つた。それから復幾度か勇三郞が翁の許へ尋ねて來て、是非一遍目白の寺へ遊びに來て貰ひたい、決して尊公を擔ぐやうなことはせぬといふ。無造作な翁の事ゆゑ一日目白の寺を尋ねられた。やがて奧の方から出て來たのは、先日の縞の羽織には似も附かぬ金爛の法衣裕かに、侍曹從者をさへ隨へさせて、威容堂々と正面の小高い處へ上つた。少時口に呪文を唱へ手に惡魔を拂ひ、やがて喋り出したと思ふと、頭山翁の過去現在に亘つて、曾て心に畫かれた事、今現に考へて居ることなどの尋常一樣ならざる節々を、事も細かに述べ始めた。對手は大山前に

崩るゝも知らぬ顔の頭山先生、變な事をやりをる男ぢやワイと思ひながら、他人の事のやうに聽かれてゐると、それが亦一々適中した事實である。語り了つた呵呍波羅婆は、「如何で御座る、一々其通りで御座らう」と言つた。實は餘り中り過ぎたほど中つてゐたが、流石は頭山翁「少しも中らぬ、嘘ばつかりぢや」と至極無造作に返答された。すると金衣の呵呍波羅婆、天狗が羽團扇を取られたやうに、痛く悄れ返つて奧へ引込んだぎり、それ以後勇三郎さへ尋ねて來なくなつたといふ。

飯野行者が故兒玉將軍へ取入つた初めは、或日飯野自身將軍の御玄關へ飛出て、取次の者へ申すには「拙者は日頃將軍を崇敬致す飯野と申す者、一度お目通りを相願ひたいに就ては、此の風呂敷包みを此の儘閣下へ御覽に入れて載きたい」と云つて立歸つた。食後の隙に將軍が其風呂敷包を解いて見られると、半紙約百帖ほどを綺麗に積み重ねてあつて、それに一枚々々「兒玉源太郎々々」と、お淸書風に叮嚀に書いてあつた。その根氣に驚かされたものか、妙な事をする奴だ位に思はれたものか、その次に飯野が來た時分には、面會が叶つて、それから取入つて喰ひ入つた。『來た、見た、勝つた』といふシーザー式の筆法である。

三

穩田行者とは第三者間の通稱であらうが、飯野自身が「予は靈體なり、後醍醐帝の後なる飯野宮の後裔なり」などゝ言ひ始めたのは、餘程後の事で、穩田なる外松前主計總監の邸、卽ち今の行者の屋敷へ、明治四十年十月に引移つてから後の事である。兒玉、伊藤、山縣と云ふ順で、それには傍系として下田歌子など云ふ怪物に聲援をさせて、見事に長閥に取入り、見事に彼等を征服した。外松とか長谷川大將とか、今の主馬頭の澁谷などいふ軍人連を虜にしたことは、世間周知の事實である。大正四年に例の旭銀行恐喝事件で、穩田行者たる彼が法廷の人となつた時分には、年貢の納め時が來たと、世人をして小氣味好く想はしめたが、惜い事に大鹽平八郎ならぬ何某判事の無罪の宣告で、事濟みとなつた。當時花井鵜澤といふ報酬引當ての辯護商賣人は別として、行者の知友として、例の押川方義君が飯野の爲めに辯じたのは、好い相棒であつた。

ラスプチンがあれほどロマノフ宮廷に、怪力を逞ふしたが、元を質せば西伯利はイルクーック在の小さな修道院の痩坊主だ。飯野も元岐阜縣惠那郡の或る寺の小僧である。大島健一中將と竹馬の友と云ふからには、或は例の種族ではあるまいか。先づ長閥の大頭株を虜にし、當時は宮中にお出入りの叶つた下田歌子を女弟子のやうに取り附け、家には天照太神を祭り門下には

飯野宮後裔説を振廻はさせるなど、併せ考へて來ると、ラスプチンのロマノフ宮廷へ入込んだ歴史に髣髴としたものがある。斯く彼の目論見の那邊にあつたかを考へ來ると、危哉々々と呼びたくなる。そして彼をして斯程にまで僭上な氣分を養はせたものは、どう見ても長閥連の罪過である。

彼が故伊藤公に會ひ出してから後の事、或時對坐した公に向つて「閣下、ヨク私の顔を熟視してゐて御覽なされ、必ず閣下が時々拜せられる尊嚴な御容貌を想ひ浮ばされるに相違ない」と怪しからぬ事まで言つたさうである。併し流石は伊藤公であつた、彼をして宮中へ足ぶみさせることだけは、決してさせなかつた。それにしても頭山滿翁が、呵呍波羅婆の宣明を、空嘯いて退けた正大な風は、惜いことに伊藤にも兒玉にも無かつたと見える。

昔の修驗道の行者は、有髪俗形の優婆塞で、密教と同じく物心一如を説き、眞如の一戒を守り、慈悲の一念に住すと云はれたものであるが、穩田行者には果して如何ほどの修行があるか。水垢離を取つたり、白無垢の法衣を被たり、祈禱や呪文を唱へる傍には、盛んに女人をも近づけ、銀行の利子や日歩をも考へ、自動車へも乘り、權門訪問を吹聽もし、新聞記者を自動車内へ同乘させたりする。彼れ畢竟は東洋諸國の特産たる高等遊食の徒で、聊か心靈現象の一端を實驗し得る小魔法使(マヂシャン)ひに過ぎぬ。「マヂック」の語源は波斯語の mogh 即ち拜火教に出でゝをるが、穩田の行者も何かといふと火を焚いたりする。近頃の政變には長い杖を御自慢の三浦觀樹老人が、あれこれと飛廻られるが常例のやうになつてをるが、同じ長い杖でも、これから新政を始めんとする原敬君などは、穩田行者の魔法杖だけは、門前拂で遠けたが宜しからう。

原内閣成立經過

無名氏

一 山縣と西園寺

第四十議會閉會後、寺内は山縣に向つて辭意を告げた。山縣

も其の以前、平井赤十字病院長から寺內の病氣は本人の考へよりもモット重大であると聞いて居たので、內心辭職に贊成であつたらしいけれども、何分自分の好む後任者を見出し得ない爲めに、先づ〳〵と言つて差し止めたが、其の後京都で西園寺と會見し、夫れとなく西園寺の出廬を慫慂した。

山縣の言葉は露骨ではなかつたが、山縣の意中を察した西園寺は頗る露骨に『自分には全然出廬の意がない、如何に御勸めあるとも承諾しないと云ふことを斷言して置く』と答へたさうである。其れで山縣歸京して尙も寺內を慰諭し、小田原古稀庵に歸臥したのであつた。

然れども山縣は、尙ほ西園寺を起すの計畫を斷念せず、西園寺が伊香保に避暑中も、書面で慫慂する所があつたらしい。之れに對しても西園寺は依然謝絕の返答を送つた筈である。所が七月十日米國から浦鹽出兵の交涉到るに及び、政府は西比利亞出兵の計畫を立て、玆に一先づ寺內辭職問題は打切りとなつたのである。

七月三日だと記憶する。平井赤十字病院長が三浦觀樹を訪問して、寺內の病氣は此のまゝ打ち捨てゝ置くと危險至極であるから辭職を勸告して貰ひたいと賴んだので、三浦は山縣を訪ふて此の事を話したが、其の時は既に西利亞出兵計畫が成つて居た際で、山縣は『是れ〳〵のわけだから今は辭職などの話ではない、自分は寺內に死ぬまでやれと勸めて置いた』と答へたさうで、有繫の三浦も愕然として二の句が繼げずに退き下つた次第である。

其の後、出兵問題も一段落付いたので、三浦は又々臼井哲夫をして寺內に辭職を勸告せしめたが、遇々米騷動が起つて辭職の機會を失したわけで、其の後三浦が寺內を訪問した所が、寺內は『御勸告は誠意を以て有り難く拜聽したが、考慮中に米騷動が突發したので、辭職の機會を得なかつた』と言つたさうである。以て寺內の心事を察することが出來る。

米騷動も何うやら斯うやら鎭靜したので、九月一日頃、寺內は小田原に山縣を訪ねて、愈々辭職の決心を告げた。今は山縣も止むることは出來ず、近い內に自分も上京する積りであるから、其れまで待つて居れと言つた。そこで寺內は同月四日頃、原に辭意を仄めかしたのである。所が山縣はなか〳〵上京しない。病氣だと言ふ口實であつたが、實は後任推薦に就て考へが定まらぬ爲であつた。

併し寺內は山縣が遲くも九月十日頃には出京するだらうと信じて居たので、某新聞に辭職確定と云ふ記事を書かせたものである。其れには山縣の上京を急がせる意味でもあつたのであ

う。山縣は此の記事を見て驚いたらしく、平田東助が寺内を訪問して、寺内の輕卒を責めたと云ふ事であるが、寺内は辭意矢の如く、却つて山縣の上京の遲きに就て不平を訴へた。

二　官僚黨結成運動

山縣は解散後の總選擧で、官僚黨を百名位得たいと云ふ希望であつた。田健次郎と有松英義が其の意を受けて選擧委員となり、慘憺たる苦心をやつたものだが、地方の地盤は政友會にあらずんば憲政會、憲政會にあらずんば國民黨と云ふ有樣で、中立議員を出す餘地は甚だ少ない。是に於て後藤や仲小路は、中立候補者を立て過ぎて政友會の邪魔になるのを不得策とし、寧ろ全力を政友會に傾注するが可いと云ふ考へであつたが、其れでも政友會を百六十に止め、中立議員を六十許り出し得たのは、成功と言つても可い位である。

山縣は總選擧の結果に失望した。其の上、中立議員が二派に分れて、清和俱樂部は却つて政友會に接近し行くのを見て、政府の手腕を冷笑し、田等に對して度々其の無能を揶揄したものである。

所が寺内の辭職が愈々決行せられねばならぬ事になつたので、山縣は後繼内閣製造の材料として、兎も角中立議員を纒めて行かねばならぬ必要を感じ、之れを田に命令した。田は懼れ畏みて、寺内の名を以て中立議員を招待し、其の席上で合同を慫慂する手筈であつた。寺内は今更ら餘計な事と、甚だ迷惑に思つたであらうが、山縣の命令とあれば嫌々ながら一通りの手段は講じなければならず、田に口說かるゝまゝに中立議員を接待する事を諾したのである。そして田は其の準備行動として、清和俱樂部の重立つ者を個々に勸誘し、伊東巳代治などにも依賴して、太刀越三郎などにも勸誘して貰つた。

山縣は西園寺が到底出廬しないと云ふ事を充分に知つて居る。西園寺が出なければ差し方り原より外に適當の候補者はないが、元來政黨内閣は山縣の嫌ふ所であるのみならず、寺内を推薦した時に、大隈、加藤に對して、時局中は一黨一派の內閣は宜しくないと言ふ事を言つた手前、何うも自分で原を推薦するわけには行かぬ。幸ひ政友會は絕對多數でないから、先づ中立議員を纒めて、夫れから段々平田なり清浦なりを出す手段を廻らさうと思つたのであらうと思ふ。

所が中立議員合同計畫は全然失敗に歸した。さア何うすれば宜しいか、山縣は徒らに苦心煩悶して、なか〳〵上京しない。寺内は世上に曝し物になつて迷惑千萬と云ふので、遂に强硬に山縣の上京を促した。そこで山縣はまだ計畫は定まらなかつたけれども、餘儀なく上京して、到底出來ない相談とは知りなが

ら、松方と會見協議の上、西園寺を推薦することに決したのである。

而して一方に於て山縣は、一黨一派の內閣は不可ないと云ふ輿論を喚起しやうと企てたらしい。憲政會の濱口と安達が曩に山縣を小田原に訪問した時も擧國一致の可なる所以を說き、下岡忠治などが山縣が大隈、加藤に對して入れた證文、即ち一黨一派の內閣は不可であると言つた事を持ち出して、山縣として此の際原を推薦する條理がないと叫び立てたのも、山縣は寧ろ思ふ壺だと喜んで居たのであらう。

斯くて山縣と松方は各別に陛下に謁見して西園寺を推薦したが、山縣は同時に大隈をも御召し出しありて御下問あらんことを言上した。山縣が大隈御召を言上したのは、曩に濱口と安達が小田原に山縣を訪ねた時、之れを依賴し、山縣も承諾して置いた結果である。併し元老が會同して大隈をも加へるなら、大隈が例の調子で混ぜ返すであらうことを恐れた結果、各別に謁見奏上すると云ふ形式を取つたのである。故に山縣と松方とは相談の上で奏上したけれども、會議と云ふ形式を避けて、各別に奏上したのである。山縣は何うかして原內閣の出現を阻止しやとは希望しながら、大隈に混ぜ返へさせて、事件を紛糾せしむることは好まなかつたのである。所が大隈も溫和しく一應西園寺を推薦に及んだ。

斯くて西園寺の御召しとなり、廿日西園寺は伊香保から歸京して寺內、山縣等と會談し、廿一日參內內閣組織の大命を拜したが、西園寺は熟慮の上奉答すべき旨を言上して御前を退いた。實は其の折り、御受け致し兼ねるやも知れないと言ふ意味の奏上をも附け加へたらしい。御前を退出後、西園寺は松方とも山縣とも會見して、羸弱老齡の身、到底大任に堪へずと云ふ理由を以て辭退し、明廿二日參內奉答する積りであると言つた所が、山縣は百方西園寺の奮發を促がし、原君も居る事なれば閣下は臥て居ても可いではないかと言つたけれども、西園寺は寺內伯も病氣の故を以て辭職すると云ふ事であるが、自分が臥て居ても大任が勤まるなら、寺內も臥て居て宜しいではないかなどゝ押問答の末、山縣は兎も角明日の奉答だけは一日だけ延期して貰ひたいと言ひ、西園寺は之れを諾した。

是に於て山縣は急使を腰越の原に遣はして上京を促がし、原をして西園寺を勸めしめ、又た平田をも勸めにやつたが西園寺の決心を飜すことが出來ず、廿四日西園寺は山縣を訪問して、愈々明廿五日參內拜辭する積りであるが、其の折若し陛下より後任者に就て御下問があつたなら何と奉答すべきか、閣下に御考へあらば承り置きたいと言つた所が、山縣は『さア誰れが宜

しからう』と首を捻る許りで、なか〳〵名を擧げないので、西園寺は遂に原では如何であらうと切り出した。

山縣も絶對に政黨内閣を排斥する所存はないけれども、此の際は成るべく擧國一致内閣が可からうと信じ、切に閣下の御奮發を願つたわけだが、閣下が如何にしても御承諾ない以上、原君が最も適任者であらうと信ずるけれども、自分より陛下に推薦することは差し控へたいと答へたので、西園寺は然らば是から松方を訪問して此の事を告げやうと言つた所が、山縣は暫しと押し止め、松方の方には自分から話すことに致さうと言つたので、西園寺は翌廿五日參内前松方を訪ひ、前日山縣と相談した所を述べて松方の同意を得、夫れより參内拜謁の上、大命を拜辭すると共に御下問に應じて原を推薦した次第である。

そこで陛下は松方を召させられて、西園寺の推薦に就き御下問があつたが、松方も原を推薦した。更に陛下は正親町侍從長を山縣、大隈兩邸に差遣はされ、後繼者の御下問あり、大隈は西園寺が拜辭した上は加藤高明を以て最適任と信ずる旨を奉答し、山縣は元老の多數が原を適任者と認むる以上は、自分に於ても異存はない旨を奉答したのであつた。

三　政友會と憲政會

政友會には昨年末頃より政權を急ぐ一二の領袖があつて、西園寺を押し立て、政友憲政兩派聯合して寺内々閣を倒さうと企てた者もあつたが、其れはいつしか立ち消えとなつた。四十議會閉會後、寺内の辭職を豫期した一二の領袖は、寺内が辭職すれば政權が原に來るだらうと思ふのは大間違ひである。山縣は屹度平田か淸浦を持ち出して憲政會と提携せしむるに違ひない、故に此の際西園寺の内閣説を鼓吹して輿論を作れば、山縣も西園寺を差し置いて他を推薦することは出來ないと云ふ考へを持つて居た。元田肇などが最も悲觀派で、早く西園寺を口説いて出廬せしめなければ、政友會は如何なる逆境に陷るかも知れぬと心配して居たが、一方には成るべく新らしい原内閣を作りたい、只今の所原總裁が必ずしも推薦を受けないとも限つて居ないから、擧國一致などゝ言つて、トテモ圓滿に行く見込みもない事を騷ぎ立てずとも、今暫く靜に形勢を觀望するが可いと云ふ論者が多かつた。出兵問題で原の評判が揚つてからは、此の説が益々盛んになつて來た。

而して一方には野田卯太郎、横田千之助が寺内、後藤等を動かして原推薦に加擔せしめ、一方に臼井哲夫、三浦觀樹が暗中飛躍をやつて、寺内、後藤、田、仲小路なども、原内閣の出現を妨害しないのみならず、事に依りては援助しても宜しいと云ふ氣分を作り、遂には田中義一までも原内閣派となつて、山縣

にも其の意を通じた答であるが、寺内と山縣との關係は今や昔日と異なり、寺内も山縣に不平があり、山縣も寺内に不平がある。斯くて官僚派に二潮流が現はれ、寺内、伊東、後藤を中心とする者と、平田を中心とするものとが對抗する觀を呈して居る。即ち寺内は山縣に對し第二の柱になつた姿である。而して貴族院の大勢は今や次第に寺内派に傾き、平田の威望に大變化を起しつゝあるのである。

斯んな形勢となつては、山縣も遂に原推薦説に屈せざるを得なかつたのである。併し山縣としては大隈、加藤に言つた一言があるので、其の口から原を推薦するわけに行かず、遂に西園寺の發言を待つて之れに贊成し、責任を輕くしやうとしたのである。

斯んな形勢になつて居ると云ふ事を知らない憲政會は、何うかして山縣や平田を動かさうと企て、濱口とも言はるゝ者が山縣を訪問したり、下岡が曾て政敵たりし西園寺を擔いで其の内閣に割り込まうとしたり、實に其の醜態は目も當てられぬ。斯んな時は正論を唱へて活潑な運動をやるのが少數黨として世の同情を得る道だ。政友會は多數を擁して居るから、能動的に活動しても功を收める可能性に富んで居る。而かも彼等は容易に動かなかつた。少數黨としては正論を唱へて活動しなければ、權變を以て活動しても功を收め得ず世上の同情を失ふ許りである。併し少數黨は形勢觀望的にジッとして居ては不可ない、民衆の耳に入り易い、簡明な正々堂々の議論で大活動をやるべしである。所が憲政會は少數黨でありながら、政權に割り込むコソ／＼運動をやつて、實に明るみに出されない事許りである。

吾輩は加藤が歸京すれば、必ずや正々堂々の態度を發表するであらうと期待して居たが、歸來何事を言ふかと思へば、北海道で『國民を基礎としたる内閣と言つたのは、必ずしも政黨内閣と云ふ意味ではない』とか、原内閣よりは平田内閣が可能性が多いとか、實にくだらぬ事ばかり言つて居る。

所が憲政會にも人物が無いと云ふわけではない。所謂少壯派なる者は下岡等に反對して正々堂々の議を發表した。彼等の唱ふる如く、政黨内閣を高調し、尚ほ一歩進んで原内閣説を唱へたならば、此の次ぎの内閣に必ず加藤内閣であつたに違ひない、策士は策に斃る、無策の大策たる所以を知らなければ駄目だ。加藤の爲めに計れば下岡や安達輩を其の周圍から一掃すべしである。

四　西園寺と原

西園寺は政友會に遠慮して出盧しないではなからうかと云ふ評が、往々にして世間に聞へた。是れは實に西園寺と原を知ら

ぬ者の評だ。原は之れを聞いて『斯の如き評は西園寺を侮辱するものだ』と云ひ、西園寺は『吾輩にして眞にやつて見やうと云ふ決心が付くなら、政友會の思はくなどは眼中にない、又た政友會は必ず吾輩に從つて來るに違ひないと信じて居る』と言つたさうである。西園寺と原との仲は一朝一夕の事ではない。巴理以來の關係で、まだ伊藤が政友會總裁時代から、遊びに往つたり來たりして居た。故松田は西園寺と友人、原は西園寺の弟と云ふ關係で、此の三人はやつて來たものだ。

政友會には若し西園寺が出て、擧國一致內閣を作るならば、最後の責任は政友會獨りで引き受けなければならぬ。併し夫れも西園寺の爲めとあれば致し方がないけれども、成るべく西園寺を出したくない、西園寺には元老として納まつて居て貰ひたいと言ふ希望が多かつた。西園寺は其れを知つて居る。そして其れは當然な事だと言つて少しも氣にして居ないと云ふ事は吾輩にも斷言が出來る。

西園寺が出なかつた理由は、山縣の推薦が擧國一致內閣と云ふ條件附きであつたと云ふのも其の一つである。西園寺は开んな形式的の內閣を作る氣は少しもなかつた。擧國一致でないなら强ち自分が出なくとも原で澤山ではないかと言ふのである。

併し开んな事は一寸理屈を言つて見たまでの事で、西園寺の眞意は、自分等は山縣も松方も大隈も、行先き短き身體であるから、今の間に後繼者を仕立てゝ置かなければならぬ。そして政黨に責任を持たせて、之れを充分に發達せしめて置くより外に、安心の道はないと言ふのである。一時尾崎や犬養を憲政の神と言つた世人は、西園寺に對してこそ憲政の神と崇めなければなるまい。

■新渡戸、山崎兩博士指導並序・井上府知事序■

東京府囑託・早稲田大學・東京女子大學講師 小田内通敏君著

帝都と近郊

十月一日發賣

菊版二五〇頁・圖並表一八頁・寫眞四四頁・實價參圓・郵税拾貳錢

新研究法の提唱

本書の由來

小田内氏は人文地理學の見地より夙に都市と村落の研究に志し數年前『都市と村落』の著ある人、大倉發身氏は身實業界にあるも新學術の研究奬勵の志厚く都市問題の喧しき今日我國に於て此種の資料甚だ乏しきを識り其研究が國民生活の研究上必要なるを認め三年前より新渡戸山崎兩博士指導の下に小田内氏に囑して東京市、其近郊の關係を踏査研究せしめ居りしが、今回其結果を公刊し一定の部數を限り實價を以て同好の士に頒たんとす。

本書の價値

著者の此研究に從ふや兩博士の指導に基きて先づ其綱目をつくりノートと寫眞機とを手にしつゝ日々近郊を踏査し或は郡衙・町村役場に或は老農舍員に其資料を尋ね或は無言の自然より體得し、更に之を統整したる者は即ち本書也されば本書は全く未墾の分野を耕せる獨創的勞作也。

發賣所 東京神田區表神保町三 東京堂

本書の内容

目次

■緒說 ●第一章 江戸及東京の都市的發達●第二章 東京市の郊外地帶

■特說 ── 東京市の西郊(武藏野) ●第一章 自然的環境●第二章 住民と其居住●第三章 土地と其利用●第四章 農業●第五章 工業●第六章 交通機關

挿圖

●東京市郊外地域圖●武藏野臺地地層斷面圖●武藏野村人口密度及宅地坪數比較圖●武藏野町村土地利用地積比較圖●武藏野住宅地帶及農業地帶圖●四谷丸太分布圖●工場分布圖●郊外電車各驛乘客比較圖●居住狀態の都市化●表土と作物關係

挿繪(著者撮影)

●武藏野臺地の特相●武藏野遠望●井ノ頭池全景●善福寺池●仙ヶ谷地●神田上水善福寺流●玉川上水●名主の瀧●唐澤●瀧野川の櫟林●目黑川下流●石神井川下流●石神井川中流全景●宅地と島地●甲州街道沿の居住狀態●近郊の住宅地區●大農の屋敷林と母屋●舊名主相澤氏●大久保町の貸家●住宅地區經營の順序●新住宅の標式●細民の住宅●本村安藤氏●田を宅地に畑ヶ畑地に●二種の森林●二種の原野●蔬菜農と穀菽農●自作農の大中小●苗床と害蟲驅除●肥料小賣と肥料車●製藍の消長●竹林●大根と甘諸の收穫●植木畑と山葵田●市場の種類●林業の種類●牛乳搾取業●養雞●道路の種類●荷車の種類

發行所 東京小石川區關口臺町七二 大倉研究所

茅原華山先生著

國民的悲劇の發生

定價金二圓廿錢

菊版五百頁 税十二錢
臺鮮樺郵税三十錢

■海上望喜望峰圖・華山世界漫遊圖・外數葉挿繪 別に毎章簡明要領を附す■

ドン底に墜落したる日本の運命をば如何に展開すべき私は先づ日本國民の實生活をば忌憚なく暴露するでなければ、此の問題は到底解決されない事と信じ精密に日本國民と英佛と獨逸及び兩米、東洋諸國の生活と思想とを比較研究せんとして世界再遊の途に上りました。

此書は歐洲戰爭以後四年、外遊二年を以て成つたもので、日本國民が如何に世界の表面に於いて、眞、善、美を包容したる意義ある生活をなすべき乎の大本大體を樹立した積りであります。私は不敏ながら日本を救ふは是より外に途はないと存じます。玆に之を世に公にして、廣く識者の批判を求めたいのである。（著者自ら申す）

最後審判の日來る

發行所 祖國書院
東京市赤坂區新町三ノ三七
振替口座東京四一一九一番



人物評論（九十八）

新内閣で
初舞臺を踏む
新四大臣



床次内相　田中陸相
中橋文相　野田遞相

▽無爵首相の下の新大臣

文學博士　三宅雪嶺

今回成立した内閣は、首相の如何よりも、顔觸れの新奇で注意を惹く。首相が無爵と云ふだけで、少からぬ興味はある。前には首相は爵無くして勤まらず、爵が高い程いよ〳〵可い

かに考へられた。所が多くの有爵者中、首相適任者を求め得ないと云ふので、大命が原氏に下る事になつた。個人としての原に下つたのでなく、政友會總裁としての原に下つたのである。内閣と政黨との關係については議論があらう。然し原氏が政友會總裁でなければ、大命の下りやうも無いは明かである。衆議院で比較的多數を占め、與黨と共に絶對多數を占め得るとの見當から來て居る所が多い。而して原氏が其位置を占むるに至つたのは、何と云うても尋常の腕前でない。と云ふて能力で彼に優る者が無いのではない。

「人間萬事塞翁馬」と曰ふが、萬事と云ふが如何であるけれども、原に於て類似のものを見る。原は確かに才幹ある人物であつて、書生時代から之を認められて居つた。官吏と成つて都合好く、若し其儘繼續したなれば一層早く大臣に成つたらう。或は大使となるか、又は其他の事で男爵と成り、子爵と成つて居る。所がさうなつては到底首相と成る譯に行かぬ。樞密院か貴旗院かで幅を利かし、**時として首相候補者に數へられるかも知**れぬが、いよ／＼内閣を組織するとなると容易に立てない。平田・清浦・伊東の數氏の如く、一種の亡者仲間に腕を撫する事にならう。政黨に頭を突込み、それで續いて來たのは、自ら知る處あつてであるか、又は拔き差しならぬ事情で、意地になつて、それで遣り通す事になつたか、何れにしても星の後繼者と云ふ事になつた。

兎も角も政黨員としての力を發揮したのは星である。星の政界に於ける力を認めねばならぬ。惡辣に過ぎたにしても、前に星無く後に星無いと云はれる。伊藤公は自由黨を讓り受けやうとせず、自ら政友會を創立し、我主張に同意なる者は來れ、我が言ふ事を聞かぬ者の居るを許さぬとし、獨裁專制の態度に出でたが、實際の事は星の切盛りを免れなかつた。星が仆れてすぐと後繼者が無いやうで原が轉じ、其の後繼者たる實を示し來つた。西園寺侯が總裁となつても、原が副總裁の格で切り盛りをする。西園寺が總裁を罷めたと後となつては原の順番となる。今でも政友會は總裁專制の組織であつて、形式上原の云ふ事を聞かねばならぬ樣になつて居る。大隈内閣の下、多數を恃んで一敗地に塗れたが、寺内内閣の下、勢を盛り返し、比較的最大黨の位置を占め、其れで政友會内閣を組織し得るまでに漕ぎつけ**た。世間に原の手際が顯はれて居る。彼は星程獨自の力に富ん**で居らぬ。星の居る處、何處でも星自らの個性が顯はれて居り、原にはそれがない。原が政友會で何をして居るか、總裁として如何に世間に對するか、特別に認むべきものがない。然しそこが原の短所であつて長所である。星のやうに個性を發揮し、他

と衝突せぬ。要らざる波瀾を起したりせぬ。人にいけ好かないと思はれても、別段憎まれるやうな事が無い。かうして辛抱して居りさへすれば、段々政友會の基礎が固まり、官僚と感情も融和し、遂に政權の落ち來るを見拔いた處がある。「勝利は待つことを知るものゝ手に歸す」るとあるが、原はよく之れを呑み込んで居る。

彼がよく忍耐し、急かず、周章てず、歩一歩力を貯へる處、餘り眞似手が無い。有つても彼の如くなるを得ぬ。よくも今まで辛抱し、政友會を締括り守り立てゝ來たと云へる。彼は自ら知るの明がある。政友會で我力を振ひ得ぬ事を知つて居る。總裁は獨裁專制であるべきでも、濫りに其調子を示してならぬ事を心得て居る。伊藤公は伊藤公、西園寺侯は西園寺侯、時として勝手な振舞あつたにしても、自分は其の眞似が出來ぬ。眞似すれば失敗することを心得て居る。獨裁專制と云ふても、實は六團體の權衡が肝要であり、多數團體と調子を合す丈けで、其の怒りを買つては、何事も出來ぬ。總裁の位置さへ危い。原總裁はよく自分の弱點を知り、其の弱點を突かれぬ限りに於て政友會を統卒し來つて居る。外から見れば堂々たる大政黨の首領であり、又實際黨內にも之れを首領とするに不平が無い。不平あるやうなことをせぬのである。さりとて總裁の體面を損ふやうなこともせぬ。調子を合せつゝ總裁專制のやうな態度を續けて行く。そこで無爵の身を以て、內閣組織の大命を拜するやうな記錄を止めることになつた。

首相となつても之れと同一の狀態である。原氏が大局を語らぬなどゝは、大分以前より知られ來つて居るが、眼前を巧く遣つて行けば、それで事が濟むとして安んじ得られる。人に依て好んで大局を語り、理想を說き、然も眼前の事に氣付かぬのがあるが、彼れ原は正に其の反對に屬する。大局が分るか分らぬか曖眛では大事に臨んで氣遣はしいとの懸念あれど、首相たるものが、勝手に理想を設け、之に向つて突進して貰つても困る。大局の見透しが着き、以て閣員を統卒し得れば、これに踰した事は無いが、さういふ人が有るか無いか覺束ない。何でもそれ〴〵分擔して、大體を括る方が安全である。然し目覺ましい事を望む事が出來ぬ。外交問題、經濟問題の差懸つて困難なのはあるが、此邊は衆智を集めて處置する外無からう。原は郡制問題のやうなものに厄鬼になつたりしたが、一層重大なる問題では、衆智を集めることに努めやう。內閣が失敗しても、己れ自らの爲めで無く、他に責任ある者が居らう。唯其責任を引受けると云ふ位の度胸は有る。原首相の下にこれぞと云ふ程際立つた事を望む譯に行かず、講和談判及び其他に腕を振はねばなら

ぬやうになつても、夫れは其時の機運であり、自ら進んで機運を作らうと企てるやうな事は無い。無爵で首相となつただけで、其の首相となつたのに意義ありとせねばならぬ。此上に成績が上れば、政治家としての原の地位は押しも押されもせぬ者になる。

而して原内閣には首相が無爵の上、初めて大臣となつた者のいろ〳〵有るのを面白いとする。世間普通の人情で仕方無い事ながら、大臣となるを此上もなく芽出度いやうに言ひ囃す。大臣となる當人も何程かその形跡がある。然し今回初めて大臣となつた者は、餘り芽出度く感ずべきでもない。大學出身の上から云へば、二十五年出の水野氏が内相であり、二十八年出の勝田氏が藏相であつた。中橋氏は十九年出で、床次氏は二十三年出である。其の官吏であつた頃、水野も勝田も共に後輩であり、中に頗る附きの後輩もある。單に大臣たるところより云へば、後の雁が先になり、追ひ越されて今更大臣になつたので、餘り有難くも無い。當人自ら其邊の事を承知して居る。大臣にならうとの慾があつたけれど、何かの釣合で大臣に列するといふだけを以て滿足せうとせず、又滿足出來ぬ境遇になつて居る。從來何十と數へ切れぬ程大臣あるが、多くは何かの釣合で宛て嵌められ、辭職と共に何處に轉つてゐるか分らなくなる。何事かを爲して居つても、政治界に特別の地位が無い。元老准元老に從つて、貴族院で口を開く位のものである。つまり元老准元老のお蔭で存在するに過ぎぬ。それから見れば衆議院議員で、新に大臣になつた連中は確かに惡戰苦鬪し、自ら運命を作り來つた所がある。誰のお蔭と云ふよりは、己れ自ら何等かの力を具へて居る。元老准元老のお蔭を蒙らずとも内閣に立ち得る事を證明したのは、新大臣初めの手柄とも云へる。

中橋氏は官吏生活を續けて居れば、大臣となり難くなかつたらう。隨分いろ〳〵の大臣がある。其内に加はること困難でない。實業界に入り、相當の資産を作り、金力でも政黨に重きをなし得るところで政黨の幹部に入込んだのは、大臣となる年數がかゝつただけ、お情け大臣と違ふ處がある。而して官廳に居つても、會社に居つても、腕利きを以て目されただけ、大臣としても何事かを成さう。兎角人に惡感情を持たす癖があり、思はぬ所で面倒が起つたりするけれど、仕事する位置に立てば、何人でもおらぬだけの仕事をする事が出來る。

床次氏は或程度迄中橋氏の正反對である。何處ぞとなく人に好い感じを與へる。多くを語らずとも、人が納得をする。得な性分であり、人德とでも云ふべき所でもあらう。けれども仕事を爲す上に於て如何であるか。時として思ひ切つて事を爲した

ことゝもあるが、どうも結構な出來榮えでない。矢張り人に仕事を委ね、其上を括つて行くのが長所である。何の見識あるか、何の才幹あるか、往々疑を招くが　責任の觀念はなか〳〵強い。而して貴族院議員となるべきを他人に譲り、自ら衆議院で立て通さうとしてゐるが、少くとも一身上に見識の認むべきものがある。政治に關しても、分らぬ方でなからう。唯靑筋立てゝ人と爭つたりするを好まぬのであらう。從來人受けが良かつたが、大臣として如何であるかは今後に知られる。

最も奇なのは野田氏が内閣に入つた事である。前にも野武士が大臣になつたとの話あつたが、野武士と云ふてこれ程野武士らしいのはない。實は野武士以下豆腐屋である。相當に羽振りを利かすに至つた今日でも、當年の卯太の面目そつくりである。郷里の人は卯太と云へば、笑ふ事になつて居る。卯太が大臣になつたとて、郷里で話にして居るが、然し笑はれて次第に位置を高め來つた處、其の凡物でないことを示す。身體の大きいので人目を惹くと同じく、野人禮に嫻はずのやうな處で面白がられ、面白がられて大風呂敷に包んで行く。野人禮に嫻はぬやうでなか〳〵調子がよく、如才が無い。明治維新の際福羽美靜といふ小男があつた。四尺に足らず、椅子より離れゝれば、初め腰かけて居つた時より低くなる。所が有志家の間に說いて歩くのは頗る都合が好い。人は其の小男なるを見て恐れを懷かず、早く話が纒つたりする。其功で子爵に成つた。野田は之と反對にズヌケて圖體が大きく、而してタワイが無いやうな調子をして居る。人が之に對して警戒せぬ。タワイ無く話し合ふ間に事が纒まる。福羽は歌を詠み、歌でもいろ〳〵と緣故を作つたが、野田は俳句を作る。俳句が結構でない所が却つて愛嬌になる。かゝる者も大臣に成つたといふことが時勢の變化を示す。官僚の勿體も次第に薄らいで行くのである。

野武士連と云へば物騒に聞えるが、野武士でなく人をして物騒に思はしめるのは田中氏の陸相となつた事である。之れ豫ねて問題の人物であつて、いよ〳〵問題を六つかしくして來た。曾て海軍に權兵衞大臣あり、大いに幅を利かせたが、長州の田中はこれに當る處もある。早くから問題になり、一種の低氣壓視される。確かに才幹あり、軍事にも政治にも腕を伸し得らるゝ。官僚が大隈侯を忌み嫌つて居つた時、聯隊に招いて演說させたなど何の意が有つたにしても尋常の頭でない。陸相となり、後首相となるの日あるか如何か。只だ焦せり過ぎる嫌ひがある。何か遣つて見たくて堪らず、遣らうと思ふ事を直ぐと遣りかける。事を敢てする處は稱すべきであつても、今一層思慮する處あらば、いよ〳〵善い、何分輕卒の嫌ひがある。兒玉大將以後の人物であ

るけれど、兒玉は何處かゆとりがある。念に念を入れる餘地がある。焦つても焦つたやうにならぬ。大事をやつてのけて後の始末に困らぬ。困つても人がどうとか出來るやうにやつて居る。田中氏は機會が熟せねは、溫室の内に入れて熟させやうとする傾向がある。此の邊原首相の隱忍時を待つ處を學んだならば、程よく成れさうである。唯權力を得さへすればよく、別段何を爲さうとの當ての無いのも困るけれど、苟しくも地位を得れば、其の位置に於て爲し得られる限りの事を爲さうとし、爲し得られぬ事までも企てるのも考へものである。何にせよ新大臣は目新しい處が有り、耳新らしく聞える。世間に新話題を供給するの利益がある。夫れ以上の事は今後の經過に徵すべきである。

▽適材適所と適材不適所

川尻東馬

（一）

▲内實の事情は兎も角として、原君は元老の總大將として威權赫々、當代に並ぶものなき山縣公との大相撲に、マンマと勝利の月桂冠を戴いた。政友會從來の歴史行動、殊に最近二年間寺内内閣を支持し來れる共同責任よりすれば、此際の原内閣出現は、立憲の常道に反すること云ふ迄もないが、名は憲法政治にしても、其實は閥族官僚に政權を壟斷され來れる我國の明治大正政治史に顧みて、今更ら斯の如き純正的の議論も、多少は割引して然るべしだと思ふ。

▲此意味からして、吾人は原内閣の組織を目するに、我國政治界の一進歩と斷じても、盖し過言にあらずと思ふ。此際は政友會が有する過去の政治的幾多の大小罪惡を、暫らく高閣に束ねて強いて追窮せぬが、寧ろ寛大の處置だと考ふるものである。其故如何となれば第一に山縣公を見事土俵際に打つちやつたお手際の如何にも痛快な事、第二は思ひ切つて純然たる政友會内閣を組織した態度決心が、從來の原君としては、如何にも別人の爲せる業にもあらずやと思はるゝ程、鮮かな遣り方であると是れである。官僚閥族に何等勢援を求めず、又貴族院、樞密院等にも殆んど沒交渉にて、單獨に其率ゐる政友會員のみを以て閣僚を揃へたると、之れが從來世間から餘り好感を寄せらなかつた政友會なるにも拘らず、其新内閣が案外に一般的好人氣な所以であらう。

▲組織された新内閣の顏觸れは、首相の原君を初めとして、閣

僚の半數は一度若しくは二度大臣の椅子に据つた人々である。加藤海相は留任だから無論の事だが、內田外相、山本農相、高橋藏相は、共に西園寺內閣若しくは山本內閣の時代に於て、夫々共閣班に列した所謂前大臣である。而して新たに大臣となつたのは床次內相、田中陸相、中橋文相、野田遞相の四人で、陸相を除く他の三人は、云ふ迄もなく政友會員である。

▲四人者共に吾人は其人材なることは之れを認めるが、只果して之れが適材を適所に据へられたか、乃ち椅子の分配乃至人物の配置に就て、萬遺憾なきを得たかに就ては、其處に自ら批評の餘地もあり、又意見も相當に存するのである。床次君の內務田中君の陸軍は、吾人之を適材適所と斷じて憚らざるが、野田君の遞信と中橋君の文部は、遺憾ながら之れを適材不適所と云はざるを得ない。若し夫れ高橋男の藏相の如きは、單に不適所たるのみならず、實に國家の必要、國民生活の實際問題より見て、殷憂に堪へざる大問題であるが、之れは與へられたる問題外に屬するを以て、玆には遺憾ながら之を叙述することが出來ぬ。

●●●　（二）

▲床次君の內務は、頭腦手腕の點に於て、勿論感服すべきにあらぬも、其人格が如何にも國務大臣として耻かしからぬ點、殊に元々官僚出身にして內務行政には多年經驗あり、部內の統一も、又地方官の系統人物技倆にも通じ居るを以て、從來政黨出身の大臣が、兎角最初はお客樣扱ひを受けたると違ひ、部下に對しても、又外間に之を代表する場合に於ても、適れ相當したる內相たるを得ると云ふ迄もない。薩摩人の殆んど通有性として、風袋の如何にも大きく、細事に拘泥せぬ處（或ひは外面的皮相觀なるやも知らねど）何となく人氣を集むる所以であるが、殊に君の一層好評を博する原因は、普通薩摩人と云へば、兎角金錢に愛着心強く、殊に一般的吝嗇との世評あるに對し、君は此點に於て淸廉潔白、極めて恬淡であるとの評判を取つて居る爲めである。

▲君に對し政治家としての卓拔せる經綸抱負等を望むものありとせば、夫れは寧ろ望むもの丶無理な注文であるが、由來政友會は漁利を目的とし、殊に地方地盤の擴張に關しては、思ひ切つたる惡辣不法を敢てしたること、二十年來其歷史の炳乎として明白なる處。之れ政友會の從來閥族と苟合し若しくは政權を自黨の手に收めつ丶ある間に、基礎を固め、勢力を擴大したる唯一無二の身上なれば、若し今度の原內閣組織に於て、黨派の色彩如何にも濃厚にして、爾も常住坐臥、此以外に何等の念慮希望なき人物を以てして、此椅子に据へつけんか、世間の氣受

けは頗る思はしからぬものありしと云ふ迄もなく、殊に反對黨に對しては、如何にも强いて挑戰的態度を採るもの丶如く見做され、政爭は來年の府縣會議員選擧を控ゆる今日に於て、一層險惡深刻となるべき嫌ひありしに、幸ひにも比較的黨派色彩の餘り濃厚ならざる君を以て、內相の椅子に配したると、勿論原首相苦心の存する處なるべく、而して之れが又世間一般より見て、頗る好感を寄せらる丶所以である。

▲併し地方官の人格理想、近年著しく低下して、動もすれば時の政府に迎合する傾向が多い。斯くて中央部の御機嫌芽出度ければ、一支半給之れ得らる丶ものとして、殆んど娼婦にも均しき無主義無節操の輩が多數な今日の實狀に於ては、彼の我黨內閣を笠に着て、地方に跋扈跳梁する地方政治家と結托し、又は意志の薄弱にして、只管位置の安固を計るの弱點に乘ぜられ、心ならずも例の不公平、片手落の所謂手加減を敢てせぬとは限られぬ。是れ寧ろ杞憂にあらずして、將來必ずや隨所に起り來るべき實際問題なるべきを以て、此點は床次內相の人格と至誠に信頼し、斷じて斯る不正不法不條理沒義道なる偏頗の處置なからんことを切望し、又要望して止まんものである。之れ小にしては原內閣の不信不道德たるは勿論、引いては政黨內閣の利害生命問題に直接し、不幸國民の怨聲隨所に起るに於ては、忽ちにして官僚閥族の乘ずる所となり、折角政黨の手に收めたる政權を再び彼等の手中に奪還せらる丶に至るべく、政黨自ら好個の口實を彼等に與へるの結果を產むもので、國家國民としては、實に非常の重大問題であることを、吳れ〲も心して貰はねばならぬ。是れ君が今回內相に新任した各種重大なる責任問題中、特に最も重要且つ切實な最大要諦なのである。

▲兼任鐵道院總裁としての君は、既に二度の勤めであるから、無論之れは問題外だが、以前の成績は確かに良好な方でなかつた。今度は一時の兼任か又半永久的か知らぬが、若し半永久的のものならば、多少雪辱的施設を遣つて貰ひたいものである。併し之れは謂はゞ第二義の希望で、第一義の內相としての重大責任問題さへ完全に果し得れば、吾人は國家の爲め又政黨政治の爲めに、君の偉動を賞稱して國民と共に其萬歲を謳歌するに吝かならぬものである。

(三)

▲問題の人、田中陸相は餘りに多く顏も明かに世間に紹介された人物である。手腕もあり勇氣もあり、計劃もあれば精力も絕倫、軍人でありながら立派に政治家としての素質を具備し、陸軍大臣としては確かに申分なき人である。只從來の行動擧止が、如何にも猪突主義にして、傍若無人、常に暗中飛躍を試みて、

無理無體に横車を押さんとした事が、君に對する世間一般の悪しき印象である。此印象は單に政治界に危險視さるゝのみならず、一般世間からも亦同様の感を以て迎へられて居る。人動もすれば陸軍の後藤新平男と評し、其脫線的行動とオッチヨコチヨイな共通點は、確かに夫れであると斷ずるものも少なからぬが、吾人は夫程迄に君を輕蔑はしない。併し彼の二個師團問題や、大隈內閣末期の對支外交に關して採りたる君たの行動は、明かに評者の言に相違なかつた。又過般西伯利亞出兵問題に對する行動の如きも、無論夫れに違ひなかつたのである。

▲併し吾人の後藤男と多少の相違あるべしと觀ずる所以は、過去にあらずして勿論將來にあるのである。從來は無責任の位置にあればこそ、又無暗なる活躍もしたのである。横車も押し、傍若無人の行動も敢てし、暗中飛躍は其常職の如き感を一般世間に抱かせたのだが、愈々責任の位置に立てば、其處には自ら諒解も出來、緩和も生じ、自然と秩序あり分別ある行動に出づべきこと、吾人は之を豫想するに難からぬのである。之れは勿論未來の問題で、觀る人々により元より見解を異にするを以て、判斷の當否は之を他日に徴する外なきが、吾人の見解によれば君は案外悧巧な人物である、熱し易き性分の、時に往々脫線猪突的傾向を現はすことなきにしもあらざるべきも、暫くにして常識の教ゆる處、遠大なる利害問題の分らるゝ點に想到して、飜然平靜の態度に歸るべきを、恐らくは今後の實際問題に際會して、實現を見得べしと信ずるものである。

▲但し眼前に控ゆる問題、即ち西伯利亞出兵問題の跡始末、更らに進んで英佛側よりの希望ありと傳へらるゝ或る重大問題に對しては、君が從來の主張に照し、果して原首相と如何なる調和點に一致せんとするか。殊に外相として極端なる非出兵論者の內田子と同一閣班に列する關係上、其調和一致點は、差當りての原內閣に於ける大難關として、世間の注目する處である。されど斯の如き見へ透きたる大問題を無關心にて入閣を承諾したるにもあらざるべく、既に首相との間に相當諒解を得、又互讓の餘地も發見しての事なるべければ、之れが爲めに忽ち衝突して飛び出すが如き、不體裁も演じまじく、結局は世間の注目が案外大いそれた杞憂に了ることもなきやと思はるゝが、事實は果して如何に落着すべきや。

▲今一つの大難關として目さるゝは、例の軍團組織問題である。寺内々閣の倒れた一ツの原因は、來るべき議會に於て、到底其通過の見込なかりしことにもあるらしく、陸軍としては隨分強き意氣込みなるが、果して此大問題が、無難にスル〳〵と通過すべしとは、我國財政の現狀並に將來に於て、殆んど信ぜ

られぬのである。政友會として他日の大增稅尙辭せざる大決心あらば、夫れは勿論問題でないが。斯樣の大決心は、如何に我黨內閣の熱に浮かされ居る今日に於ても、左樣に容易には解決出來ぬ問題である。政權は一時の問題だが、政黨の生命は永久である、殊に今後政黨內閣主義に始終せんとせば、國民の輿論、社會の人氣に對して、平生不斷の深甚なる注意を拂ふべき必要がある。此重大關係を殆んど度外視して、輕々に大增稅の決心を固めることは、如何に原首相の果斷不屈を以てするも、恐らく容易の業にあらざるべきを信じて疑はんのである。

▲或ひは曰く、小川平吉君の紹介に依り、君一日腰越の別莊に原君を訪問し、其處に何等かの諒解を得て以來、君は例の暗中飛躍を試みて、西園寺內閣の出現阻止に盡力し、專ら原內閣組織に其力を致せりとの說を爲すものもあるが、之れ果して事實なるや否や、頗る疑問とせざるを得ない。小川君の平素より考定して、君と原君の會見に盡力せりとの說は、假令夫れが事實無根としても事體あり得べき事として、相當世間の信用を得べしと雖も、軍團組織問題に關し、靈犀一點早く既に通ずるものありとは、餘りに談何ぞ容易なるとの疑問は、普通政治界の情僞に通ずるもの﹅均しく共に抱かざるを得ざる處である。若し果して風說眞ならば論外であるが、吾人の疑問が其儘事實なるに於ては、君を內閣に入れたる首相、而して又其勸めに應諾して閣したる君の心事、之れ實に注目に値するのが當然の結論であらぬねばなら。

▲中には加藤海相の大隈內閣以來、三代に居殘りて、海軍計劃の完成に努力せんとする擧に倣ひ、君は十年間繼續の決心を以て入閣し、其間に細く長く軍團組織完成の遠大なる思慮信念を藏し、愈表面に乘り出し來れるにあらずやと觀測するものもあるが、事實果して如何にや、若し果して後者の見解が眞相に近きものとせば、或ひは一二年延ばすことも能はざるにあらざるべく、又長年月に涉る繼續豫算を計上して、例の些少なる頭を出さしむることは、原首相も內相當時には屢々實行したる手段故、斯樣なる胡魔化方法も、或ひは苦し紛れに案出せられずとも限られず。要するに內部に於ては或ひは案外大事なく、閣議の通過を遂行し得る段取となり居るやも知らねど、兎に角世間の注目は此問題に集りつ﹅あることも事實である。

▲之を要するに君は、平素が問題の人にして、爾も新陸相としては、當然如上の二大問題に重大責任を有する關係上、殊には官僚系より一人の入閣者なき現內閣に於ては、官僚系の乘ず可き弱點玆にありとして、衆目一致此一所に集中さる﹅こと、又止むを得ざる次第である。何れにしても君の周圍を繞りて、

後の問題は絶へず賑はうに相違ない。

▲陸軍部内に於ける君の勢力威望は、君自身の實力以外に、何人も知る最も强固なる背景を有するが故に、極めて安固強大なるものである。人物が人物丈けに、實際の內情は隨分强い反感を抱いて居るものも多く、贊否或ひは半ばする程のものかも知らぬが、何せ背景が背景故、蔭で彼是と批評する位が關の山で、表面から公然楯突くものは先づあるまい。

（四）

▲中橋君の文相は、寧ろ滑稽である。內實本人となりて靜かに考ふれば、或ひは一種の悲劇たるやも知れぬ。世間では新內閣のお愛嬌と云ひ、又原首相の一幕入れた茶番狂言など、色々冷評はあるが。大岡育造君さへ文相となつたこともある、又長谷場純孝君でも、文相となつて評判好かつた歷史に顧みて、中橋君たるもの決して落膽すべからずと、無理に元氣をつけてやり度なる。世間傳へて大臣病患者と云ひ、中に甚しきはセイコウ會社の社長など異名を呼ぶ者がある。何の事かと質せば、大臣にならぬ前に、既に施政方針の原稿が出來て居るとの話だ。夫れで根が實業家出身故、政鋼會社の社長といふのだと、全く落語家の口調其儘を云ふ。何は兎も角として、君は大臣志願には首尾能く及第したが、如何にもお情及第の格で、其處に椅子が殘つて居るから、仕方がない其處にでも据はれと、全くお殘り頂戴の形はあり〳〵と現はれて居る。同じ大臣になつたお祝詞を述べるにしても、何となく氣の毒な樣な感じがする。

▲然らば君は大臣として殆んど無資格者かと云ふに、吾人は決して左樣には思はぬ。君が從來の實業界に於ける手腕行跡から察して、十分に其技倆抱負の存する人材たることは疑はんのである。只如何にも何等緣故なき文部に行つたから滑稽視されるので、若し遞信にでも据へたならば、確かに立派な大臣と云はれるに相違ない。是れ吾人の適材不適所と評する所以で、運不運といふものは、何時の世、又何人にも到底免れぬことであるから、君深く此點に觀念して、今より再擧の修養準備を怠らぬが肝腎である。

▲文相としての君に彼是望むのは、勿論之れ無理の注文だが、セメては最も適所を得たる材幹卓拔の次官を得、萬事之れに聞いて敢て或ひは過誤なきを期することである。之れ君の新文相として第一の要件であるまいか。最後に政治家としても、君は兎角滑稽扱ひされて居た傾向がある。詰らぬ者の煽動に乘りて得意になる、言動は頗る不謹愼で、政黨の駈引きも黨略も、何等おかまひなしの樣である。別けて喋舌にして秘密を守れぬ一點は、政黨の幹部として、大なる缺點であるとの評判が專らであ

つた。自稱豪傑も自分免許の大政治家も、斯く他の幹部連から信用がなくては、將來の立場にも甚だ困ること故、敢て苦言を呈する次第である。況して苟くも國務大臣となつた以上は、尙一層此點に細心の注意を拂ふことこそ肝要であらう。

（五）

▲野田遞相に對して、庭石としては價千金の結構なものだが、之を床の上に飾るには、極めて不適當なものだと評した人がある。吾人も亦此庭石の床飾り說に、遺憾ながら同意を表せざるを得ない。政黨の總務としては、殆んど理想的の適材である。各政黨凡てを通じて恐らく君の右に出づる、萬事に要領を得た總務は又とあるまい、此點に於ては、君は將さに天の成せる傑作である。常識は此上なしと云ふ迄に發達して居る。圓轉滑脫些の厭味なく、人間全體が禪味の結晶とも云ふべき佳味を以て充たされ、三十餘貫の大軀ノツソリと運ぶ其步みにも、溫味が何となく知らぬ人迄チヤームする魔力がある。萬事に要領を得て居ることは勿論として、表面何等無關心、事物に拘泥せぬ如く見ゆるが、其實極めて細心の注意を事々物々に拂つて居る。智慧は大男の癖に其總身に在り餘り、頭腦明晰にして數理的に發達し、伎倆あり手腕あり、交際最も巧妙にして、强いて拵へざる裡に何人にも好感を以て遇され。珠に瑾は無學の一點にあるも、如上の長所特長は、之を蔽ふて餘りあるのみならず、優に縱より見るも橫より見るも、大臣たる要素は十分に具備して居るのである。

▲只玆に逸物終に床上に置く能はずして、依然庭石たる所以のものは、其品位と禮節の甚しき缺如に原因するのである。品位の備はらずとか、禮節に嫻はずとか普通一般によく云ふ處であるが。君の此缺點に到りては、殆んど形容し盡されぬ程度に皆無なのである。一言にして云へば全く問題にならぬのである。眞に田夫野人の擧止動作とは、君の如きを云ふのであらう。一口に愛嬌と云へば夫れ迄であるが、苟くも一國の大臣として威容品位を保つ以上は、品格と禮節とは之れ重大なる要素の一であらねばならぬ。然るに君は此一點に於て全然ゼロなりとせば、吾人は遺憾ながら、萬能餘りありて一能足らずと斷ぜざるを得ないのである。身を豆腐屋の一微賤に起して、爾も今日の位置を贏ち得たる君の如きは、幼時米國に奴隷として賣られたるに拘らず、精勵刻苦の餘、終ひに今日の榮達を自力に依りて獲たる高橋藏相と共に、明かに明治立志傳中の人物たるに相違なきも、野性は結局訓練する能ずして現時に至れりとせば、君の爲めには返すぐも遺憾の極みであるが、今更ら如何とも仕方がない。

▲さなきだに政黨員と云へば、宛も野武士でもあるかの如く、輕蔑する貴族院の殿樣連、又野蠻人でもあるかの如く嫌厭の念盛なる樞密院、貴族院等の老人連に於ては、詰らぬ感情の發作より、飛だ處に迄祟を爲すこと、從來とても往々ある實例なるを以て、殊に君の如き作法を知らず、禮儀に嫻はざる大臣の出席は、其間に處するの妙諦呼吸、普通の政黨員以上に、更らに一段の苦心を要すことゝ思はる、之れ吾人の矢張り野に置け紫雲英で、君を依然總務の位置に殘し、政府政黨間の連絡に專念せしむることの、如何に君をして晩節を完うせしむる所以であり、又政友會としても、如何程利益便宜が多大でありしかを、惜しみても尙餘りある次第である。

▲中橋野田の兩君で思ひ出したが、世間で新內閣を一名臺所內閣と惡謔を云ふものがある。何の事か譯を質せば曰く『政友會五大臣中床次君を除いては、悉く之れ政友會のお臺所を引受けて來た人のみではないか。永く細く爾も其分量から云へば、最も多量に引受けて來たのは野田君で、太く短く其分量から云へば一番少ないのは中橋君、其他高橋男、山本君の或る期間各一手で政友會の兵站部を引受けて來た事は、今更ら聞く丈け野暮ぢやないか』と、成る程ソウ云はれると、好く又お揃へなもので、臺所の勢力盛大なるには、流石に黨員としても我れながら驚かざるを得まい。

（六）

▲最後に一言、原首相今度の決心態度而して其努力に就ては、一般に感服と好意とを以て迎へ居る丈け夫れ丈け、閣僚中一人の法律的素養ある人物を見ぬことを危ぶんで居るものが多い、司法大臣の缺員を充たすに、恐らく其方の專門家を發見する豫定だらうが、差當り樞密院に行つて、最も困難するぢやあるまいか、又議會が開けたら如何する胸算であらう。今日丈けの顔觸れでは、之れも餘程の弱點と云はねばならぬ。

▲今一つは、大命を拜して僅かに三日、如何にもお手際鮮かに閣僚を揃へた原首相の腕前、明かに日本の大政治家と稱されし、從前の諸先輩を凌いで居るが、司法大臣を得る能はずして、終ひに首相兼任の儘親任式を行つた杯は、千辛萬苦の內にも自ら一失の跡見へて、或ひは焦り過ぎたる首相の心裏の反影と評するものもある。

▽原內閣の初大臣

鵜崎鷺城

一

待ち設けた熟柿は西園寺侯が御免を蒙つた爲めに、豫定の如く原君の手に落ちて政友會の天下になつた。原君が內閣の組織の準備ありと云ふので大命を拜受した以上、顏觸れを揃へるのに餘り手間暇取つては不體裁であるが、案外早く組織の運びに至つたのは何よりである。新內閣は輪廓からいふも色彩からいふも殆んど純政友會內閣で、從來の第一次及び第二次西園寺內閣及び山本內閣に比すれば、政黨內閣に一步を進め今度といふ今度は政友會も天下晴れて我黨內閣を言ふことが出來る。固より原君が首班たる以上、第二流內閣であることも、短命であることも初めから分り切て居り、恐らく原君にしても短命を覺悟してゐるに相違ない。然し短命丈けに尙更思切つて獨立獨行の內閣を造り、他の分子を交へずして、名實共に政黨內閣とするのは面白い事であり、世間一般も其の趣構を望んだのである。首相としての原君、政黨としての政友會に多少不滿があつても、政黨內閣の第一著手を執るといふ點で他の不滿を補ふことが出來る。

政友會の領袖は孰れも大なり小なり大臣病に罹り、中には入閣の希望を遂げなければ氣が狂ひはせぬかといふ程熱心なものもある。然し黨外からも一二枚加へなければならぬ必要があるし、總ての希望を滿たすことにすれば、人が餘つて椅子が不足することになる。特に政友會には地方團體があつて、昔から黨の役人の如きも團體を元にして選定することになつてゐる。元田、山本、野田、床次君は孰れも九州であるから、四人を入閣させることになれば九州に偏するとて他の地方團體が不平を言ひ、高橋自身は入閣の意志が無かつたと言つても、東北團體が承知しないといふ理由で、原君も此の地方團體の折合に苦心したらしい。初め確實とせられた元田君が拔けたのは、副總理として專ら黨と議會の方を遣らせる必要以外に、九州に偏することを避けた點もある。中橋の北信八州、高橋の東北に對して九州の三人は多いようであるが、さりとて近畿、東海中國に適當な代表的人物がゐないとすれば、是れも已むを得ない事であらう。

山本、高橋、內田の三相を除けば文相の中橋、內相の床次、遞相の野田、陸相の田中義一君はいづれも初舞臺で中にも中橋、床次、田中は新人物である。原首相が司法を兼攝したのは、親任式を急いだ爲めで、多分檢事總長の平沼か次官の鈴木喜三郎に交涉中であらうと思ふ。無論原は初めから外務と司法を黨外に求める方針で、司法の方は大に意味のあることである。今の司法省に平沼が閥を造つて固めてゐるから、自黨から大臣を出しても平沼の勢力に制せられるし、又た司法省を政友會に收めるといろ〳〵世間から痛く無い腹を探られる心配があると云ふの

で、旁々黨外に求めようとしたのであるまいか。平沼なら申分ないが、或は鈴木になるかも知れぬ。鈴木は司法省生抜きで大隈内閣以來次官職にあつて充分司法行政の經驗と手腕があるのみならず、平沼系のチヤキ〳〵であるから都合が好い。平沼も第二次西園寺内閣のとき次官を勤め、特に松田に傾倒したと云ふから、政友會には萬更馴染の無い方で無く、自ら大臣にならずとも鈴木を身更りにして置けば自分の勢力に影響する所が無い。

二

中橋君は初めから最も熱心に入閣した一人で、世間でも必ず入閣するものと見てゐた。而も文相とは意外である。前内閣時代から次の内閣は必ず原内閣で無ければならぬと言ひ、寧ろ西園寺に反對であつたのは、西園寺内閣なれば入閣せぬといふ意味で無く、迚も入閣の見込みが無いから、大臣の希望を達するには原内閣に限るとしたからである、彼は政友會の新參であるが、イキナリ總務に擧げられて最高幹部に列し、今復た入閣するなど、政友會の彼を遇すること隨分厚い。初め彼と原との間に、若し政友會が政府を取つて代つた曉は、大臣にするといふ約束があつて入黨したとの噂もあるが、縱令ひハツキリとさる約束をしなかつたにせよ、少くも以心傳心にさういふ意味の事があつたかも知れぬ。

原としては中橋を粗末に出來ぬ譯があると云ふのは、第一是れ迄の位置である。役人としては衆議院書記官、遞信省書記官を經て管船局長になつたに過ぎぬけれども、三十一年官を罷めて大阪商船會社長になつてからは、兎に角財界の大達者で商船會社以外にも種々の事業に關係し、中橋德五郎の名は社會的に大を爲してゐる。特に原は元と大阪毎日新聞社長、北濱銀行頭取、大阪新報社々長として大阪に居住したときから彼と知合ひの間柄である。次に原は中橋の人物よりも財力に目を著け、政友會の爲めに之れを利用しようとの頭がある。既に商船會社長時代から内々軍資を政友會に貢いでゐたと云ふものもあるが、兎に角彼が公然政友會に關係して以來、可也多くの金を出してゐるのは事實で、現に山本、高橋と共に大事の金穴である。政友會内には彼が金力を鼻に掛けるのを胸糞惡く思ふものもあるさうであるが、少くも在來の位置と金力とが政友會で物を言つてゐる。又た中橋としても商船會社長を罷めて政黨に飛込んだのは、大臣にならうと云ふ目的からで、此の場合是が非でも入閣せねばならぬとしたのは無理もない。

彼は多少世間から買被られてゐる。自分を偉く思はせようとして態度口吻に衒誇の跡が見ゑ、大問題なら論じるが小問題は

知らぬと言はぬ許りに放談したり、邊幅に頓著せぬ風を裝ふて豪傑振つたりする癖がある。然し絶えず讀書して新知識を養ひ、法螺を吹く丈けの材料を頭に蓄へてゐる。床次のように渾然たる大處はないが、人間の輪廓はさまで小さい方でない。唯だ政治家として實際の手腕が何程あるか未知數であり、或は名の實に過ぐる點があるかも知らぬが、趣味といひ肌合といひ、實業家よりも政治家に向き、少くも何等かの點に於て新人物である。

床次君は初め入るとか入らぬとか多少疑問にされたが、原内閣の新色彩を發揮する爲めには是非此の人を入れる必要がある。中橋と違つて行政上の經驗もあり、特に鐵道院總裁にもなつたから、大臣の資格がある。容貌風采はよし、人間に奥行と幅とマルミがあつて、餘り黨派根性がなく、案外公平な人であるから、人物の點に於ては黨内のみならず、政友會以外からも一般に好感情を以て見られてゐる。評判の好い點では恐らく新大臣中第一であらう。地方官、局長、次官を長く經驗して内務行政に通じ又た省内に人望があるから、内務は蓋し適處である。斯ういふ人を一枚加へて置くことは、第一内閣の品位を好くする所以である。

三

床次や中橋は何人も異存ないとして、野田卯の新大臣は少し滑稽味を帶びてゐる。少くも品が好いとは言へぬ。唯だ彼は一種奇妙な男で、後繼内閣詮議のときから或は山縣に行き、或は西園寺に行き、元老の間をマメに奔走してゐたが、原が遣ることになつてからも毎日の如く原邸に行つて相談に與つてゐる。彼は元と豆腐屋であつたと云ふが、政界と財界を兩天秤に掛け、三井にも九州の炭坑家にも相當結附があつて。其の關係から從來政友會に軍資を取次ぎ、福岡の代表人物といふので幹事長及び豫算委員長に擧げられ、山本内閣のとき東拓副總裁となり、現に總務として飛廻つてゐる。

彼は顏貌言語、動作がチャーミングとユーモアに滿ち、何も丸出しの九州辯で瓢輕な事を言ひ、豪傑笑ひで人を撫でゝゐるが、智慧と常識と精力に富んだ男で、實際は看板程に無邪氣でなく、案外喰へぬ所がある。昔から愛嬌と瓢輕を賣物として、伊藤、井上、山縣に取入り、特に井上のお氣に入りで、如何に肝癪玉を破裂させてゐるときでも、野田が來ると直ぐ機嫌が直つたと云ふ位である。伊藤が政友會を組織するとき、彼は井上を說き、或は星亨を井上に伴ふて相談を纏めることに盡力した。今度も原内閣出現に就て裏面で働いたと云はれてゐる。彼の特點はトボケ返つた中に明晰な頭腦と機略を藏し、手輕に劃策奔

走する所にある。元は新聞も碌々讀めなんだが、今では碧巖録をヒネクリ、字も一寸書けば、大塊と云つて俳句もやる。

世間では政界の名物男位にしか見て居らぬが、政友會には隠然勢力があつて、或は緩和劑となり、或は新聞操縦家となり、隨分役に立つので原に信用されてゐる、閣僚の詮衡についても原は彼を相談對手にしたらしい。併し謂はゞ一種の高等幇間で、政治の頭はなく、國務大臣といふ柄で無い。

田中の陸相は大に好からう。人間は少しオッチョコチョイだが、腕はあるし頭は新しいし、特に人氣者だから一寸注意を引く。參謀本部ではチョイ〳〵妙な事をした彼も、陸相になればそれ丈け自重するし、内閣を困らせるような突飛な行動を取るまいと思ふが、原首相も軍閥を背景とした此の男の取扱ひには骨が折れるだらう。が、兎に角陸軍の秘藏息子を手に入れたのは大出來である。

四

最後に首相としての原君に少しく言及ぶ必要がある。彼は第三伊藤内閣の遞相を初め、第一次及び第二次西園寺内閣と山本内閣に入て三度内相となり、或は内相を以て遞相若くは鐵道院總裁を兼ね、大臣としては可也甲羅を經てゐるが、總理大臣としては初舞臺である。然し閣僚としての力量と首相としての手腕とは種々の意味に於て違ひ、大臣に成功したから必ず首相でも成功するとは限つてゐない。初め元老も世間一般も西園寺で無ければならぬやうに言ひ、殆んど原を問題にしなかつたので、彼も氣を惡くしたに相違ない。何故西園寺が辭退して原に振り向けたかと云ふに、元老の希望は擧國一致内閣にあり、輿論も亦た擧國一致といふを前提として侯を適任としたのであるから、侯が立つ以上は否が應でも或る程度まで各方面の勢力を網羅した内閣を造らなければならぬ。然るに斯ういふ三元的四元的の寄せ集め内閣を捏上げることは事實上却々困難である。假りに捏上げた所で是れから先き、都合好く政務を統一遂行することは矢張り困難で、船頭多くして船山に上ると云ふ所がある。第一西園寺は此の點に充分の確信が無く、確信がないのに輕々しく引受けることは侯の氣質として出來ない。次に侯は原が自分でやりたくてムヅ〳〵してゐるのを見拔き、又た政友會全體が其の氣になつて捕らぬ狸の皮算用してゐるものが多いのを知つてゐるから、先輩の身として後輩の進路を妨げ、折角熟柿拾ひをヒキアテに前内閣を援助して來た政友會を失望させることは、情に於て忍びない所がある。少くも此の二點は侯が、大命を拜辭した理由の主なる部分を占めて居りはせぬか。

西園寺既に起たぬとすれば、侯自ら後繼者を推薦すべき順序

である。而して侯は初めからヤキモキ氣を揉んでゐる原を意中の人としてゐたから、扨こそ彼を推薦し、他の元老も勢ひ之れに同意したのである。是れは單に政變中の一挿話に過ぎないことであるが、玆に笑止千萬なのは大隈侯である。此の場合大隈を疎外するは穩かで無いから、山縣の計ひで單に形式上仲間に加へることになると、侯は以下次號の大仕掛けで二日に亙つて參內し、侍從長を煙に捲いた迄は好いが、既に侯の意見が、擧國一致內閣――西園寺推薦にあることが分つたから、其の後は專ら、山、松、西三老の間で往復相談して早稻田には最早用が無いといふ態度で、聾坐敷に逐込んだのは隨分見縊つた遣方である。

西侯拜辭後の政局に就ては初め政界の觀測區々にして、或は曩に大隈が加藤を推薦したとき、山縣は一黨一派に偏するを避けた行掛上、原を推すの不可能なるを言ひ、或は平田若くは清浦と原の聯立になるかも知れぬと言ひ、縱令ひ原內閣の可能性絕無ならざるにせよ、那邊にかキマリの附くまでは多少の曲折を免れぬと豫想された。然るに政機は早く進行して面倒なしに次興行の蓋を開けることになつたのを案外に思ふものが多かつた。少くも今まで擧國一致內閣でなければならぬとしたものが、時間の距離を置かずして、其の希望を裏切つたやうな內閣に急轉したのは意外である。御下問を蒙つた元老は孰れも責任を免れぬが、別して原推擧の直接發言者たる西園寺は原內閣に關して成敗共に最も責任ある地位に立つた譯である。之れと同時に原君も西園寺の顏を潰さぬ丈けの責任があると云ふことになる。

五

多年西園寺の一番々頭として用ゐられたから、誰よりも先づ西園寺が一番原を知つてゐる。山縣は原を嫌はない迄も信愛してゐない。小くも彼を首相とするには氣が進まぬと云ふ所がある。現に西園寺以外に適任者なしと言つて原推擧を避たのでも分る。特に公が態々原を西園寺に差向けて蹶起を說かしめた抔は隨分皮肉な遣口で、原の色氣を抑へる爲めの手段であつたかと思はれる。それ故に山縣が原內閣に同意したのは衷心より歡迎の意味に於て Recognize したもので無く、自分の宗門內には首相級の人物が品切れになつたのと、一つは一日も早く政局收拾を急いだのとで不本意ながらと云ふ意味に於て Tolerate したのが政黨である。山縣が斯うである以上、官僚系は無論政權に行つたのを快しとはして居るまい、獨り官僚系のみならず、憲政會の如きも純理論では政黨內閣の出現を歡迎する如く裝ひ、其の實滿腹の嫉妬心を以て原內閣を呪つてゐる。斯かるは官

僚の勢力をして乘ぜしめる間隙を政黨自ら造る譯であるが、嫉妬心や黨派感情の前には往々にして理性の力を失ふ。

世間には原の力量を認むるも、内閣首班として信望と貫目に乏しきを言ひ、少くも何處かに物足らぬとするものがある。特に今まで西園寺に意を囑した目で見るから、著しく劣るように思ふのは無理もないが、然し原とても年配に於て六十三、從來幾度か、大臣職に就き、特に大政黨の首領であつて見れば、首相たるべき閲歷資格が無い譯では無い。清浦が司法大臣と農商務大臣の閲歷を以て、内閣組織を命ぜられ、又た平田が農商務大臣と內務大臣を勤めた丈けで首相に擬せらるゝに比すれば、原の方が資格に富むのみならず、手腕に於ても確に勝つてゐる、彼が初めて政友會總裁になつたとき、世間には伊藤や西園寺に對照して重量を缺くとし、其の威望と統卒力を疑つたが何時とはなく總裁の位置が貫目を附け、彼の節度に依て政友會の統一を保ち、或る點に於ては西園寺よりも黨首として、勝るとせられ少くも黨員との接觸がある。年來高位高爵の金ピカ首相を見慣れた目には。成上り首相のように見えるかも知れぬが、初め桂公が第一次内閣を造つたとき、世間から安ツぽく見られ、それが何時の間にか箔が附いて政界の巨頭公になつた如く、原君も原首相と呼ぶ中には自然貫目が附いて來る。別製の白頭丈けでも充分首相らしい所がある。

日本人の年輩として六十三は餘り若い方で無いが、首相級と言はるゝ人物――山縣の八十一、松方の八十四、大隈の八十一、西園寺の七十、平田の七十、清浦の六十九、寺内の六十七に較ぶれば新人である。少くも過去の惰力に生きずして現在の力に生きてゐる丈け新しい匂ひがする。今まで老物を擔ぎ出した因習を破つて比較的若い人間に内閣を組織させる例を開いた一點丈けでも、時代の一進步である。唯だ政黨出身と言つても是れまで元老や官僚に渡りを附けることと許り考へてゐた原首相が飽まで政黨政治の忠實なる實行家となり得るか、從來政權を黨勢擴張に利用し來つた政友會が、黨閥黨略を離れてキレイに行動し得るか、其點に充分の安心を置き兼ねる。

▽新大臣一口評

前田蓮山

▲**原新首相**　吾輩が原敬評を書いたこと、既に五六回であるから、此の上書くべき事もない。唯だ今回の政變に際し、吾輩は度々原氏に面會して、新たに感じたる事が頗る多い。其の一端

を玆に書いて見やうと思ふ。

▲原氏が内閣組織を拜受して歸つた其の夜、吾輩は氏に面會した。氏曰く『内閣組織に就て、世間の下馬評が色々あるやうだが、是れは彼らの斯うのと六ケ敷考へるまでもない事だ、簡短明白ぢやないか』と語つたので、吾輩も細かい質問はしなかつた。

▲其の時、吾輩は外務と文部を黨外から採る位の事かなと想像した。所が蓋を開けて見ると、吾輩が文部と思つて居たのが司法であつたのには、手を拍つて感歎した次第である。吾輩察するに、是れは氏が司法權の獨立に關して、世上の猜疑誤解を避くるの用意に出たものと思はれる。

▲其の翌日午後二時頃、吾輩は又た氏を訪問した。何日頃親任式の運びに行きますかと問ふたら、氏は事もなげに微笑して『ナニ吾輩の方は今日でも宜しいが、まだ考へさして呉れと言つて居るがある。イエスかノウか、孰れでも其の返答が來ると、今日でも親任式を奏請して宜しい、一應交渉を始めたから、返答を待たぬわけにも行かんのでねえ』と語つた。

▲其の勇斷果決、眞に卓勵風發の慨がある。然れども氏に接すると、一寸も緊張した態度は見へない、丸で女中でも雇ひ入れるやうな、日常茶飯事に對する風をして居た。廿六日大命を拜受してから、廿七日の夜まで、新聞記者をも引見する、陣笠にも面會する。寸暇もなく客に應接して、『何だか欝淘しい天氣だねえ、内閣組織の大命を拜したが、世間の下馬評は何うだ』などと語つて居る樣子は、只今内閣組織の最中だとは全く思はれなかつた。

▲大命拜受の日、宮内省では原の參内振り如何と待ち受けたさうだ。實際新大臣が初めての參内に度を失つて痲胡付かない者は稀であるとか云ふ事で、東北の平民が總理大臣の大命を受けるのであるから、既に數回大臣は勤めたものゝ、今日は聊か落ち付きが惡るからうと内々囁き合つて居たさうである。

▲所が車寄せに自働車を廻はした時、早くも此の想像は裏切られた。自働車の廻はし振りが悉く作法に叶つて、少しもあわてた樣子がなかつたと云ふ。更に長い廊下を御座所に參入する態度が、悠揚迫らずして垢拔けし切つた、馴れ切つたもので、宮内官は一同に『有繋は大宰相の器だ』と感歎したさうである。平民宰相と云ふので宮内省の評判は好くなからうと想像する者もあらうが、此の參内振りに依りて平民宰相と云ふ事が、却つて評判を高くしたと云ふから面白い。

▲平民宰相と言つても、氏の家は南部二十萬石の家老であつた。生れて貴族的に育てられ、未だ曾て綿服を着た經驗がない

と云ふ位で、薩長の公侯伯よりも氏や育ちは好いのである。其れに外交官出身で、おまけに度胸が好いと來て居るのだから、總理大臣になつて平常を失ふやうな男ではない。

▲内田外相　原氏は西園寺侯に『牧野君が入閣して呉れると喜ばしいが……』と語つたさうだが、何と思つたか入閣の交渉はしなかつた。そして電話で内田氏と交渉し、手つ取り早く定めて仕舞つたものである。是れは非常に秘密にされて居たものと見えて、内田子は小川平吉君などゝ親任式の前後遲くまで某所で酒を飲みながら、著述でもして暮らさうかと話して居たさうだが、其の時は既に新外相と確定して居たのであつた。内田子は『日本の外交家では乃公だ、伊集院は一寸話せる』と人に公言する程の天狗で、面白い男である。

▲床次内相　床次氏は原氏意中の第四代政友會總裁で、今度の選任は德川の大御所の竹千代を上坐に据へたのと同じ觀があるではないか。原氏と床次氏とは水魚も啻ならぬ間柄で、原氏の胸中には床次、中橋の兩氏を眞先きに定めてあつたらしい。然るに床次氏には親任式の前夜まで、入閣の交渉がなかつたので、薩摩の後進達が寄り集まつて、何うか斯うかと心配すると、床次氏は泰然自若として、總裁と自分とは交渉して取り定めるやうな間柄ではない。總裁が自分を入閣させなければ自分の將來のため其れが可いと總裁が思つて呉れるからだらう、と言つて居たが、親任式の朝になつて、總裁から電話で午後二時に親任式だから用意しろと通知して來た。床次氏に就ては吾輩が曾て本誌上に詳論した事があるから、今更言ふの必要もあるまい。

▲中橋文相　中橋氏は最初遞信大臣に定まつて居たらしい。原氏は第一に元田氏に對して文部大臣たるべく交渉したが、元田氏は山本内閣の時に、文部大臣なら受けない積りであつたが、重要なる遞信の倚子であるから引受けたと威張つて廻はつた事があるのと、今度は内務だらうと自惚れて居たのと、旁々文部に苦情を述べたので、原氏は然らば君の入閣は後廻はしにすると言つて、サツサと進行し、最後に野田氏を入閣せしめて遞相とし、中橋氏を文部に廻はしたのである。野田氏を文部に据へることは餘りに不似合だからだ。中橋氏に對しても亦た原氏は其の將來に屬望して居るらしい。第二次原内閣には床次、中橋兩氏が中堅になるであらう。氏の人物は嘗て本誌上に述べた通りである。

▲野田遞相　最初氏は入閣しない積りで、原氏の相談相手になつて居たらしいが、元田氏がクダラヌ苦情を言つたので、其の補充として入閣したのであらうと思ふ。大男總身に智慧が廻り

兼ねと云ふ事があるけれども、此の大男は總身に智慧が充滿して居る。大なる常識家で、何をやらせても危な氣の無い點は、恐らく閣員中第一等であらう。筑後の國は三池の豆腐屋の悴と生れた人だが、大膽不敵の小僧で、自由黨の壯士となり、銀行家となり、會社の社長となり、段々と人格を鍛錬して、今や殆んど禪に悟入して居る觀がある。

▲山本農相は人格の人であるが、難を言へば聊か我執が强過ぎて抱擁力に不足がある。高橋藏相は大膽にして細心、財政上に就ては一家の識見を備へて居るが、餘り巾が廣過ぎて世人に誤解せらるる事がある。此の兩氏と前内閣の仲小路、勝田兩氏と比較し、其の優劣は論ずるまでもない。

▲田中陸相は計畫沸くが如きの才人で、且つ勇氣溢るゝ人である。世上の毀譽褒貶は多いが、原首相と意氣投合すれば立派な事が出來やう。原首相が如何にして此の悍馬を御するかは眞に見ものである。加藤海相は頭腦明晰の勇士である。原首相が氏に惚れ込むこと久しいものであるから、海軍の方は最も圓滿に行くであらう。

▽予の觀たる新四大臣

某高等官

●新四大臣は何れも大臣としての貫祿に乏しくない。のみならず其所を得さすれば皆之を適材といふに妨げない。就中床次、田中の適材にして適所を得たるものたるは衆目の視る所を一にする。只野田、中橋の地位に至つては決して適材を待つに適所を以てしたといふ事は出來ない。

●中橋の從來の經歴からいへば寧ろ遞相たるべきであらう。只之を遞相に据えては野田を持つて行く場所がない。彼を文相に据ゆるは中橋を以て行くよりも尙不似合である。そこで野田を遞信に据えて中橋を文部に廻したのかも知れない。中橋ほどのものが、多少の抱負と自任となくして甘んじて文相の地位を受けたものとすれば、彼も世評の如く案外名利榮達に淡泊でない男と見える。

●又見やうに依つては、中橋は大阪商船會社と密接の關係あり、從つて從來遞信省と何等かの交渉あるのみならず、彼を遞相の地位に据えては他の競走會社が納まるまいと云ふ所から、故らに文部に廻したとも考へらるゝ。或は之が本當かも知れな

い。西洋では鐵道會社の社長を鐵道局長にしたり、船會社の重役に船舶管理の全權を委任したりして、切りに適才適處の妙用を發揮して居るのに、獨り日本で之が安心して行はれないのは、一方に於て秉私奉公の精神并びに相互信頼の缺如を示し、他方に於ては政界と實業家との間に醜汚なる悪因緣の伏在するの事實を語るものではないか。中橋を遞信に持つて往けなかつた事の眞意は何れにあるにしろ、我々は之に依つて必らずしも我國政界特有の弱點を考へさせられずには居られない。

●野田は一種の調和劑として無くてならぬものとするならば、須らく無任所大臣たるべきである。若しその才能を以て論ずるならば、何處に持つて行つても駄目、從つて又何處に置いてもいいといふ事になる。只特殊の手腕と素養とを要する内務とか外務とかに之を置くの餘りに滑稽なるはいふを待たない。

●野田にしても中橋にしても、閣員として重きをなし、大局の上に相當の働をなすべきは之を期待し得るも、只行政局部の長官としてどれ丈の事功を擧げ得るやは次官次第と見なければならない。次官に適材を得るや否や、大臣と次官との信頼の關係如何が問題になる。然し彼等が其不得意とする政務の範圍につき、虚心天下の輿論に敬聽し、又次官の施政經營を適當に諒解し、而して彼等の重望を以て強く閣議に之を主張すると云ふなら、彼等は又案外に事功を奏する事が出來るかも知れない。

●斯う云ふ見地から世上は何となく中橋に多少の期待を置くかも知れない。彼の文相は恐らく不適當であらう。其豫想外の役割たる事は勿論云ふまでもない。けれども西郷侯や樺山伯ですら文相として普通以上の成績を擧げた例もある。況んや多少の稗氣と衒氣との裡に、勃々たる覇氣を包藏する彼に於ておや。大岡の時には部内に反感を以て迎へたものあると聞いて居るが、彼に對しては特別の歡迎もなければ又特別の反感もない。謂はゞ白紙である。只彼に文政に理解ありや否やが問題となるも、勤めて倦まざる精力家丈け、兎に角一旦其地位を引受けた以上、何等かの事功を擧げずしては濟むまい。只成功を急ぐ派手好きの彼に、華多くして實少き後藤男の轍を踏むことなきやが大に危まれる。

●床次は新大臣といふも内務當局としては已に試驗濟といつてもいゝ。適材適所といはゞ一番に所を得た適材であらう。それだけ世上の期待も亦大なるものがある。而して彼の德望は、彼の内相の地位にあることを以て少からず敵をして安心せしめ、從つて又政友會に對する反感を緩和せしむる原因とならう。又考へやうによつては、期待の多い丈け彼は一番困難な地位にあるといふ事も出來る。

●田中の適任たることは何人も疑はないが、只政友會内閣にあつて彼は如何なる經綸を行ふやに世上多少の疑問が懸つて居る。田中の出兵案に痛快な打撃を與へたものは原氏であつたと知られて居る。内田子に至つては對支對露の外交問題について田中と全然正反對の見地にあると認められて居る。田中も參謀本部に居る間は思ふ通りに仕事の運ぶ經驗を積んで居るけれども、一旦軍事行政の局に當り、初めて内外から兎や角批評される地位に立てば、初めて人事の意の如くならざるを悟るかも知れない。只之れ丈ではない。斯くして彼がもつと廣い世間を知り、世界を見るにも別の眼鏡があるといふ事を悟るに至らば、之れ獨り彼一人の發達のみならず、又國家の幸福である。折角の奇才を抱きながら、沒理想の目前の仕事師たるに終らしむるは誠に遺憾の極である。けれども、若し彼が玆に訓練の功を積まずして、才に任せていろ〱の事をやつたなら、新内閣の破綻は或は此處から來ないとも限らない。



標準的和英大辭典

本辭典の利用者は「不可能」を「可能」ならしめ、「朦朧」を「明確」ならしめ、「不安」を「安心」ならしめ、「緩漫」を「敏活」ならしめ、「死譯」を「活譯」ならしむ。
只今見本を請求せよ無代進呈す。

武信 和英大辭典

武信由太郎先生編

Get This Dictionary To-day

英語學習の困難が、和文英譯・英作文に於て殊に甚しきは何人も熟知する所、其相談相手たる坊間多くの和英辭典が、少なからざる直譯・拙譯・死譯・誤譯・妄譯を以て充たさる、事も亦顯著なる事實なりとす。

「武信和英大辭典」は實に我が英學界の最高標準を示すものにして、從來の缺陷を補ひ、正譯・適譯を以て終始するは勿論、到底他の企及し難き妙譯・名譯亦隨所に見出さる。眞に是れ和英辭典界のウェブスター、スタンダードたるべき至高の權威たり。諸君は單に本辭典を机上に飾る事に依つて既に多大の自信を得たるの感あるべく、日夕之を活用する事によつて恐らく將來十年の勞力を節約する事を得べし。

著者武信先生は本辭典の爲めに其の蘊蓄を傾倒せらる事廿有餘年、其學を仄聞するや學界の神經悉く緊張して一のセンセイションを起せり。此事實は偶々以て如何に本辭典の眞價の絶大なるかを立證するに足るべし。

總クロース製テップ式本綴特製美本極めて堅牢綴目特に注意、携帶至便、縱五寸七分、横二寸一分、
定價金參圓五拾錢
五萬部限り

特價金參圓
內地小包送料十二錢、臺、朝、滿各廿錢、海外四十錢

東京麹町區富士見町
振替東京二八六〇一番
研究社

評論

時論

法學博士　吉野作造

所謂擧國一致內閣論の迂愚と其失敗

（一）

今度の政變に際しても、擧國一致內閣論は復政界の一部を風靡した。千載一遇の大戰局に際し、國內の凡ての勢力を網羅して、最も有力なる政府を作るべしと云ふのは、一見甚だ尤もらしくして併し實際之ほど迂愚の說はない。擧國一致內閣論は、大隈內閣倒壞の際にも盛んに唱へられた。而して此要求に應ずるものとして出來たものは寺內內閣ではないか。擧國一致內閣の空名に迷はされて、今日尙ほ寺內內閣以上のものを贏ち得べしと期待するならば、大いなる誤りである。

山縣公の一派が政黨嫌ひの先天的本能に促されて、擧國一致の美名の下に政黨內閣の風潮を抑壓せんとするのは致し方ないとして、理義の徹底に於て特別の傑出を認めらるゝ加藤總裁を

戴く憲政會の最高幹部迄が、又平然として擧國一致內閣論を主張するに至つては、予輩は其迂愚を哂ふよりも先づその何の理に出づるやを怪まざるを得ない。新聞に表はれたる所謂某領袖の談なるものに據ると、憲政會の一部には、原內閣の出現を喜ばず寧ろ西園寺內閣の成立を希望するの風潮がある。而して其理由とする所は、當今の時勢に於ては必ずや貴衆兩院及び樞密院のすべてに關係を有する所謂擧國一致內閣でなければならない、一黨一派に偏するを許すなら、斯くして出來た政府は寺內內閣と何の擇ぶ所がなからう、而して今日の場合かゝる要求を充たし得る人は、西園寺侯を措いて外に無いといふのである。之れ西園寺內閣の成立を豫期し、擧國一致論の提唱の下に憲政會の割込みを策せんとするの魂膽に出でたりといふのは、誣妄の說明であるに相違ないが、事によつたら原內閣の出現を妨ぐるが爲めの其場限りの便宜論であるかも知れない。それにしても堂々たる大政黨が、黨の目前の利害が何れにあるにしろ、政府の組織を一黨一派に偏せしむべからずなど丶云ふのは、自ら侮るの甚だしきものである。若し憲政會の一部に眞面目に之を主張せんとするものあるならば、予輩は彼等に向つて次の二點を反問したい。

(第一)擧國一致內閣は貴衆兩院及び樞密院の勢力を包擁するものでなければならないと云ふ事が已に擧國一致の精神に背くものではないか。貴族院は衆議院に對し、又樞密院は議會に對して各々割據的精神を抱いて無用の對抗を常とすればこそ、此等を包擁する寄木細工的內閣を必要とするのではないか。擧國一致の實蹟の擧るは組織にあらず其精神にあり。眞に時局の重大を思うて政務當面の遂行に國力を集中するの要ありと思ふならば、擧つて時の內閣を援ければいゝではないか。此際に方つて政府を組織するものゝ適不適、能不能は問題になる。其衆議院に根據を有すると貴族院に根據を有するとが、肝要なる問題となるべき道理は無い。而かも尙ほ此等各方面の勢力を洽く包含せざるへからずといふならば、之れ形に於て擧國一致の體裁を備へ、而かも其實に於て其精神に遠いものである。

(第二)一黨一派に偏するを非なりとするは、各政黨の聯合を必要なりとするの意か、又は全然政黨を除斥すべしとするの意なるか。若し後者ならば、そは全然政界の無能力者を立たしむるものであつて、其結果として來るものは時局の紛糾を甚だしからしむるに過ぎない。現に元老官僚のあれ程の熱望を以てして倘平田淸浦の諸子に天下を取らしむることが出來ず、自然の大勢は結局多數政黨の首領に政權を歸せしめんとしつゝあるではないか。たゞ手腕があり威望があるといふ丈けで今日の時勢

に天下を取る事が出來るものなら、德川公を首相として華胄の俊才を網羅すべしとする一部の滑稽なる提案も、夙うの昔に實現して居つた筈である。若し夫れ官僚畠の一俊才を拔いて首領となし、之と二三政黨とを提携せしむべしとするの說に至つては、我々已に伊藤桂以來かゝる沒理想的實際政治の苦き經驗を嘗め過ぎて居る。然らば殘る所は各派聯合の寄木細工內閣であるが、斯くの如きは日本に於て果して成立存在し得るや否や。之れ我々の愼重なる攻究を要する一問題である。

（二）

一體政治上の原則として擧國一致と云ふ事は無意義である。國の爲めに盡すといふ至誠に於ては何人も一致し得るけれども扨實際の政務を如何に取まかなうかの個々の問題に就いては人に依つて意見は全然同一でない。之を打つて一丸とする事は不可能でもあり、又希望すべき事でもない。各種の意見を大いに爭はしめ、而して其中有力なるものが、他の反對の意見に牽制されつゝ進んで行く所に政界の妙味がある。世人動もすれば「無用の政爭」を說く。無用の徒事に精力を消耗するは固より褒むべき事ではないけれども、然し政爭其物は決して無用の徒事ではない。只從來政爭は非論理的の形を執つて行はれたが故にいろ〱の弊を國家社會に與へた。而して現代憲政の進步は一面に於て政爭の論理化を意味するが故に、今日は寧ろ大いに政爭を活潑ならしむる事に依つて政界の進步を導く事が出來る。此點に於て我々は、擧國一致內閣論の誤りを明かにし、殊に其名の美しき丈け、此說の與ふる害毒の大なるを警戒せねばならない。只今日の如き軍國多端の際は、暫く複雜なる夥多の政治問題を高閣に束ね、專ら單純なる軍國の施設に專念するの必要あるが故に、臨時應急の策として「擧國一致」の說が意味をなし又必要となる。之れ交戰各國が殆んど例外なく擧國一致內閣を作りつゝある所以である。そこで我國に於ても、重大なる今日の時局に應ぜんが爲め、擧國一致內閣論が唱へらるゝのだが、こゝに一つ考へなければならぬ問題がある。西洋で易々と出來たとて我國でも之が譯もなく出來得るものかどうか卽ち之れである。

今日の時局が重大だ些末の爭を廢めて精力を集中せねばならぬと云ふ考丈けで、直ちに擧國一致の實が內閣組織の上に現はるゝと思ふならば、之れ餘りに政界の複雜なる關係に通ぜざる議論である。予輩の觀る所に依れば、擧國一致論の實現には尙次の二つの要素が政界に行はれて居る事を前提としなければならない。第一は政界に於ける相互信賴である。假令政見は彼此異つても、政治家としての人格と識見を互に尊重信任するでなければ、安じて政敵に國事を托する事が出來ない。英國には政

治は一國民生の利害休戚に關する最も高尙なる仕事なるが故に又最も高尙なる人物のみが之に携はるべきであると云ふ言葉があるが、其通り實際所謂高尙な人物にあらざれば政界に立つことが出來ないと云ふ事であれば、敵ながらも我々は國家を托して意を安んずることが出來る。而して日本の政界には斯くの如き相互の尊敬信賴を見出す事が出來るか。否政界にどれ丈け所謂高尙なる人物があるかと問ひたい。本當に信賴を受くるに足る人物にも富まないが、假令あつても其信賴すべきを信賴し得ざる程に精神的疏通が缺けて居るではないか。第二には政爭の公明正大に行はるゝ事がなければならない。政權の推移が常に隱微の間に行はれ、而して一旦緊要の地位に立てば、更に其地位を利用して拔く可らざる根據を据ゆると云ふ樣な狀態では、一度蹴落された反對黨は容易に再び浮び上れない。力を以て天下を取るにあらず、天下を取つて初めて力を養ふと云ふ狀態であれば、目的の爲めに手段を選ばざるに至るは勿論、只勝つことが政爭に於ける唯一の目標になる。さうすれば、如何なる非常の場合でも、暫くも政敵に天下の政を任かすと云ふ雅量を示す餘裕がない。今日政敵に許しても、他日實力を以て正々堂々と爭ふことが出來るでなければ、眞の擧國一致論は承認さるべきものではない。而して斯の如きは所謂民本主義の徹底せる政界に於て、初めて觀るを得べきものである。

斯くして官僚主義の尙多少の勢力を有する今日、而して政治道德の尙甚だ低調なる我國には、今日西洋に於て見るが如き擧國一致內閣說は到底實現さるべき見込はない。擧國一致論其物には今日の場合固より異議を唱ふべきではないけれども、我國に强いて之を作るは、啻に擧國一致の目的を達し得ざるのみならず、却つて政界の空氣を混濁するに止るであらう。

以上の論を草し終つた翌々日、所謂擧國一致論者によつて擔がれて居つた西園寺侯は堅き決心を以て其起立の意なきことを奏上し、內閣組織の大命は遂に政友會總裁原敬氏に降るに至つた。之れ明かに擧國一致論の失敗ではないか予輩は之を以て必然の理であり、且つ勢であると觀ずる。而かも尙擧國一致の美名は一部の論客によつて繰り返さるべく、又今後と雖も政變のある每に其跡を絕たざるべきを惟ふが故に、之が迷妄を指摘して置くは、今日に於ても尙其必要ありと信ずるものである。(筆者附記)

和機果して熟せりや否や

（一）

九月中旬墺國の和議交渉に關する提議は一時世界の注目を惹いた。唯未だ普く交戰各國に正式の通達を見ざるに先つて、拒絕排斥の擊裡に葬られんとしつゝあるのは、獨墺側の旗色が不良い今日としては又已むを得ない。而して墺國換議の動機を解するもの、或は之を以て聯合國間離間の策なりと云ひ、或は聯合諸國內部の非戰的講和論を煽揚せんとするの魂膽なりと云ひ又は國內の民心を鎭撫し、よし講和の目的を達せずとするも、戰爭繼續の責任を敵國に嫁して自國民心の緊張に資せんとする策略なりと云ふ。此等の說は共に墺國の提議を以て獨逸の使嗾に出づるものとなすのであるが、其眞僞は暫く之を別問題として、兎に角墺國が特に獨り平和を欲する事久しきものあるは疑ふべくもない。殊に最近西部戰場に於ける形勢の非より獨逸の壓力稍々減退したるべきを想像し得る今日、墺が獨に無相談で單獨行動を取るに至つたと、强いて解すれば解せられない事もない。少くとも我々は假令此度の提議が獨の使嗾に出でたものとしても、之に應じた墺國は、一旦之に手を染めた以上、獨國其物の希望する以上に平和の途に突進せんとするの傾あるべきは之を想像するに難くない。

獨逸が八月下旬以來敗退を續けて居るのは、一部の獨逸崇拜論者の說くが如く、之を彼の戰略上の必要に出でたものと見るべきか、又は本當の敗北と見るべきかは今日最早疑問ではない百戰百捷の素晴らしい從來の勢に比して昨今の獨逸軍の餘りに粘着力に乏しいのは何人も意外とする所であつたから、當初は今に聯合軍が獨逸の罠に陷りはしないかと危んだものもあつた併し敗退に敗退を續けて軍略上の重要地點を數々失つた所を見れば、獨逸が容易に此形勢を挽回し得べしとは思はれない。蓋し之れ獨逸が其內部に於て何等か重大の困難に遭遇して居るものであらう。獨逸が如何に昨今窮迫の狀態にあるかは、西班牙の要求に屈したといふ報道によつても分る。獨逸潛航艇の跋扈跳梁に對して久しく屈服して居つた西班牙は、最近俄かに其態度を改め、自國商船擊沈の代償として、今后は其度每に其噸數に當るだけのものを、自國港灣に抑留中の獨逸商船の中から取るといふのである。之は一時獨西兩國の外交案件として諸國の注目を惹いたものであつたが、今や獨逸の讓步によつて漸く圓滿の解決を見たといふ事である。此交涉に於て西班牙の主張の通つたのも、獨國窮迫の一つの賜に相違ない。

若し夫れ墺國に對しては、直接の關係あるだけ、獨逸は餘程其

希望と要求とを重ずるやうになつた。九月初めの西電の報ずる所に據れば、獨は墺に對し大部隊の軍隊を西部戰場に送らん事を求めたが、之に對して墺は(一)波蘭問題を墺の主張通りに解決する事(二)獨國の豫て主張せる講和條件をもつと緩和する事殊に白耳義に對しては撤兵還附並びに賠償の宣言を發表すべき事の二條件を提出したとある。央ば過ぎの報道に據れば、墺軍の來援已に西部戰場に顯はれたとある。之と相前後して獨逸宰相の將來に於ける白耳義の撤兵・還附に關する宣言を發表せるものがある。之れ必ずしも獨が墺の要求を容れた直接の結果に非ずとするも、兎に角平和的風潮の段々獨墺の上に吹き漂うて居る事だけは明かである。十一月の初めを以て開かるべき獨の帝國議會に於ては、再び去年七月のそれの如き平和的決議を見るだらうと期待して居るものすらある。

(二)

啻に之のみに止まらず、平和の風は遠く巴爾幹の方面にも吹き捲うて居る。就中勃牙利に於ては此風潮は最も盛んであつて、獨逸帝國內の異分子サキソニー並びに南獨のババリヤ、ウエルテンブルグ等とは已に內密の交渉が初まつたといふ風說もある之が事實とすれば、之に維納政府の深き關係あるべきは之を想像するに難くない。否、已に二三の西電は維納とミユンヘンとの間には使節の往來頻繁にして、之を中心として又更らに近くはストツトガルト、ドレスデン、遠くはソフイアの方面にも連絡があるらしい。尤も之は或は一片の風說に止まるものかも知れない。唯疑のないのは、所謂南獨地方が墺太利と同じく、普魯西のやうに主戰的でないといふ事である。ブルガリヤの意嚮は未だ判然明白ではないけれども、最近土國との間の境界の爭あり之に就いて多少獨逸に含む所あつたといふ事は、之を看過する事が出來ない。

之と牽聯してセルビア軍が昨今再編成の功を完うし、聯合軍殊に佛軍の援助を得て、サロニカ線より攻勢を取り、着々勃軍を追窮して居るといふ事實も注意し置くの必要がある。

聯合軍の方略から云つても、若し西部戰場に餘裕を見出せば更に巴爾幹方面に手を伸ばすのは當然である。聞く所に據れば目下西部戰場に於ける敵味方双方の兵數は殆ど相若くの形勢にあるとの事である。事によると軍團の數は同じでも、各軍團を構成する兵員には或は獨逸側の方が少し尠いかも知れない。けれども此冬までには更に米國から夥しき兵數を送る譯になつて居るから、遠からず聯合軍は先づ兵數に於て相當の餘裕を見出す事が出來よう。軍器彈藥其他必要なる物資の供給に至つては今日最早獨は到底聯合軍の敵ではない。斯くして聯合軍に段々

餘裕を見出す事になれば、第一に伊軍の活躍を見るべく、第二に巴爾幹半島に大活動の開始を見るべく、次いで北露に於て活潑なる攻勢を取るであらう。而して今や此等の徴象は已に吾々の眼の前に現はれつゝある。外の方面は暫く措き獨り巴爾幹半島だけを取つても、此等の形勢が自ら勃牙利や土耳古に平和の考を起さしむる力あるものたる事はいふまでもない。

（三）

此等の形勢から考へて見れば敵國側に今や平和を希望するの底意の強くなりつゝある事は恐らく我々の想像以上であらう。從つて今度の墺國の提議のやうな事も起るのであるが、併し、さればとて之を以て和機已に熟したりと見るのは大なる早計である。何故なれば如何に獨墺側が之を希望しても、彼等が聯合國の講和條件を全然容認する所まで行かなければ、實際の問題となり得ないからである。何となれば聯合國側は已に先に最小限度の講和條件を明示して居る以上、而かも敵國側の旗色の頗る振はざる今日に於て、姑息の平和を買んが爲に更に其條件を讓るの必要がないからである。されば獨墺側が（第一）自己の講和條件を明白に擧示し（第二）其條件が聯合國側の要求に著しく接近するでなければ和議の交渉は到底開かるべき見込はない。而して獨逸も左るもの、今更オメ／＼と敵國の條件に服する譯にも行くまい。之れ和機の熟せりや否やを疑ふ所以である。

聯合國側の講和條件は已にウイルソンや、ロイド・ジョーヂの明白に宣言した所で、今日の所略ぼ明白である。殊にウイルソンの主張は聯合國としての最小限度の要求で、之を達せんが爲めに彼は戰爭に參加し、又參加した以上は其目的を達するまでは斷じて途中でやめないと云ふ決心を表明して居るから、先づ之を獨逸が其儘承認するでなければ平和の問題に手のつけやうがない。故に今後に於ける和機の熟成は專ら獨逸がウイルソン所述の條件を容るゝか否かに繫る。併し之がなかなか困難である。今日までの所獨逸は如何にしてオメ／＼ウイルソンに屈從するの醜態を免れんかを苦心して居つたやうだ。其爲めに彼は敵國の非戰論者なり、又は極端な平和論者を使嗾して內側から敵國の講和條件を緩和せしめんと試みた。之が爲めには、どれ丈けの獨探を送り、どれ丈の金を使つたか分らない。不幸にして聯合國內にも過激なる社會主義にかぶれて露西亞の過激派などに共鳴する者も少からずある。例へばかの英國勞働黨が今年の夏分裂の凶兆を呈したのも畢竟之が爲めである。が併し獨逸煽動の努力も結局に於て效はなかつた。九月十八日倫敦に開ける萬國聯合勞働會議に於て國際委員會がウイルソンの發表にかゝる講和條件十四ケ條は其儘とつて之を我黨の條件となすべ

しと報告したのによつて見ても、又米國勞働黨首領コンバースが黨を代表してウイルソン條件に賛同するを述べた後、自由國民の聯盟、正義と平和とを確保する共通誓約、小國民權利の承認を要求したと云ふ報道に依つて見ても、勞働階級の對戰爭觀の略ぼ何れにあるやを知る事が出來る。故に米國が聯合諸國を代表して發表せる條件は、此戰爭によつて達せんとする最小限度の目標であつて、之れ以上多きを望まないが又之を達するまでは飽くまで戰爭を繼續すると云ふのが、聯合國全般に亘る上下協同の覺悟である。故に聯合國が見苦しき敗北を見ると云ふ不幸なる事實の起らざる限り、此等條件を完全に容認せらるゝ見込の立つまでは和議の熟成を認むる事は出來ない。從つて獨逸側が條件の明白なる提示を以て來るならば格別、只拘束なき豫備的協議を試みようではないかと云ふ位では、米國大統領ウイルソンが例によつて齒切れよく痛快なる拒絕の意志を發表したるが如く、平和の實現の上には何等步を進むるものではない。

聯合國にかゝる戰爭繼續の堅き決心ありと云ふ事は、他の一面に於て、假令獨逸が折れて出ても之につけ入つて窮迫を縱ままにするだらうと云ふ推測を許すものではない。從來の戰爭なら其表面に揭ぐる目的の如何に拘らず實際上之によつて獲得せんとする目的には際限がない。いよ〳〵講和となつた時の形勢に基き、求め得らるべき最大限を得んとするのが從來の例であつた。どれ丈けの利益を守らんが爲めに又主張せんが爲めに干戈をとつたかと云ふ問題と、講和の席上でどれだけのものを主張すべきやの問題は全然同一でない。そこで勝つた方にも負けた方にも掛引がある。虛々實々の苦策を弄して一方は出來るだけ多くを得んとし他方は出來るだけ少く與へんとする。然るに今度の戰爭では斯ういふ駈引を許す餘地はない。少くとも米國が戰爭に參加した以來、聯合國の戰爭によつて期する所の目的は初めから明白になつた。あれ丈け正々堂々と正札を貼つた以上は、其目的を達せざる中途でやめる譯に行かぬと共に、又不必要な窮迫を敵に加へて目的以上の侵奪を加ふると云ふ譯にも行かない。故に聯合國は其目的を達し得るの見込みさへ立つならば何時でも戰爭をやめると云ふ自制的覺悟を有つて居るに相違ない。兎角戰爭は勝てば勢に乘じて必要以上に進みたがる。否それで戰爭は終つて然るべき所で終らないと云ふ事もある。加進んで更に豫期せざる多くの利益を得んとしたがるものである之又一方が一方に無用の苦痛を與ふるの結果として禍根を將來に貽すと云ふ事にもなる。斯う云ふ懸念は今度の戰爭にも免れなかつたのであるが、只米國の參加以來彼が初めから正直正銘

の掛値なき目的を掲げ來つたが爲めに、英佛諸國の戰爭目的も大いに純化された。從つて聯合國が之から段々連戰連勝の勢で進むからと云つて、圖に乘つて、不當に獨逸を苦しめると云ふやうな事はあるまい。さすれば獨逸の出樣一つでは案外に突如として平和の端緒が開けないとも限らない。只獨逸が大國の面目として容易に屈讓の態度を示すだらうか。之れ和機の熟せりや否やを容易に斷じ得ざる所以であるが、されぱとて我々は聯合國當局者の間に、悠容として和戰の何れにも應酬するの準備あることを見逃してはならない。

追記　此論を草し了りて後、獨國宰相の所謂講和十四條件容認の飛電來る。獨逸に眞實の誠意あらば、是れ亦和機の促進を意味するものたるは言を待たずと雖も、只如何にして獨逸は其誠意を納得せしめんとするや。聯合國は既に餘りに敵の詭計に厭きて居る。予輩は之を以てして仍ほ未だ和機の熟せるを斷言するに憚るものである。

官僚的形式論を排す

（一）

後繼者の定らない中は斷じて辭表を捧呈しないと云ひ振らして居つた寺内首相は、九月二十一日の朝突如參内して闕下に骸骨を乞ふた。一般世上は二十四五日頃と豫期して居つたのに、急に此意外の報に接して其因緣を兎や角揣摩する者が多い。

一說に曰く、大隈侯は其前日松方侯との會見に於て、寺内内閣が未だ辭表を捧呈しないのに、我々が勝手に後繼者の詮索をするのは越權の沙汰ではないかとて、猛烈に山縣公等の態度を難じた。西園寺侯も亦後繼内閣組織の勸誘を受けた時、物靜かに一體寺内内閣は辭表を捧呈して居るのか否かを反問した。大臣の任免は一に大權の發動に依ると云ふ山縣公一派の豫ての論理から云へば、此等の批難なり反問なりには一言辯解の言葉がなかつたので、さてこそ急に宮中の御都合を伺ひ、寺内伯に勸めて西園寺侯の參内に先ち、急に辭表を捧呈するの順序をとらしめたと。之は固より一片の風說に過ぎないから事の眞否は他日の詮索に殘して置かう。只予輩は國家重大の問題を論ずるに當り今尚斯くの如き形式論が當然の事理なるかの如き形をとつて世上に喧傳せらるゝの事實を見て、甚だ心外の至りに堪へずとするものである。

一體政權運用の根本義に關して、徒らに形式論を振り廻はす張本は、山縣公一派の官僚者流であることは今更ら云ふ迄もない。大臣の任免黜陟は一に大權の發動なりと云ふて、多數黨の

首領をして内閣を組織せしむ可からずとは、彼等の政變毎に繰り返す所の僻論である。國家多難の際一黨一派に偏する政府の存在を許すは國家の利益にあらずと云ふ形式論を楯として、而かも彼等は擧國一致の空名の下に、既成政黨よりも尚狹い閥族政府の存在を厭はなかつた。大隈内閣倒壞の際、後繼内閣の組織に就き侯の寺内伯に相談を持ちかくるや、伯が政府組織の大事は臣下の漫に私議すべき所に非ずとて相談に乘らなかつたと云ふが如きは、最も明白に形式的政權運用論を代表するものである。而して今や此等形式論の本家たる山縣公が、大隈侯等の逆襲に逢つて俄かに狼狽を極めたと云ふ風説が果して本當なら、之れ正に官僚政治家の自繩自縛と云はなければならない。

又假令此風説は間違ひであつたとしても、有力なる各新聞が等しく之を傳へて山縣公が理の當然に屈したとして痛快を叫ぶの色あるは、亦予輩の慊らぬとする所である。況んや之を以て大隈侯の言論上の勝利となすに於ておや。敵の刄を以て敵を殺すの一戰術として多少の妙味を覺えざるに非らずとは云へ、若し侯にして眞に今日の時局の重大なるを念とするならば、斯かる無用の形式論に拘泥する事なく、單刀直入胸襟を開いて公と後繼内閣の事を計るべきではなかつたか。

（二）

予輩は今日の如き時局の重大なるに際し、臣下が後繼者の詮議をするに何等非とすべき理由を認めない。何人かよく寺内内閣失政の後を受けて國家の針路を謬りなく指導し得るやは、必ずやそれ〴〵相當の道により、洽ねく下臣の意嚮に問ふて、初めて　陛下の御決定し賜ふべき所ではないか。

然らば、制度の上に於て又は慣例の上に於てかゝる御下問を受くべき地位にあるものゝ、適當の時機に於て豫め後繼者の詮議を爲すのは固より當然の事である。只如何なる人が御下問を受く可きか、又御下問を受くべき地位を一二少數の人が壟斷するのは良いか悪いかは自ら別問題である。此點に關する論議は今暫らく措いて問はない。良かれ悪しかれ所謂元老なるものが今日此地位を占めて居ると認められて居る以上、事實上適當の時に彼等の之を問題とするは何の妨ぐる所はない。現政府の辭表提出の期の前後の如きは、固より問題とするの値打はない。辭表提出前なるが故に後繼内閣を論ず可からずと云ふが如きは戸主の死亡前に家督相續人を定むべからずとするの類で、極端の形式論なるは云ふを俟たない。

斯くの如き實益のない形式論の横行して居る間は、我國政界

の本當の進歩は期せられない。今や國家の運命と民生の利害に關する實質的問題の解決を要するもの山の如くあるのに、何の暇あつて些末の形式に拘泥するのであらうか。

(三)

若し夫れ寺内々閣の所謂辭職の理由なるものに至つては、笑ふべき形式論の最も甚だしきものである。九月廿二日朝日新聞の報ずる所に據れば、廿一日首相は閣僚其他を其官邸に召集して告げて曰く『自分は病の故を以て本日辭表を捧呈した。豫め此事を諸君に相談しなかつたのは政治上の理由に出づるにあらず、單に病氣の爲めであつたからである』と。之に對する各大臣の答に曰く『首相の辭職の理由の何れにあるにせよ、已に首相の推薦によつて就任したる以上、我々は首相と進退を共にするを當然と認むる』と。斯くして彼等も亦其辭表を一括して闕下に捧呈した。

病氣の爲めなるが故に無相談で辭職を決行したといふのも可笑しいが、首相の推薦によるから理由も無く漫然と進退を共にするといふのも變な理屈である。併しこんな事を責むるのは口矢釜しくいふ丈け野暮で、彼等の辭職の理由なるものゝ、固より堅白異同の詭辯なる事は、彼等自身と同じく天下一人として之を知らないものはない。

更に廿一日時事新報に某昵近者談として載せられたる「首相の心事」なるものに至つては、形式的詭辯の最も甚だしいものである。(一)自分は去冬來の病氣の爲め主治醫から頻りに靜養を勸められ、密かに勇退の決意を爲せしも、内外急迫の事務多端にして容易に其機を見出し得ず、寧ろ殪れて後已むの決心を以て事に當つて來た。(二)然るに五月末より七月に掛け各種の問題殊に東亞方面に於ける外交問題も略ぼ一段落を告げたからいよ〳〵九月の交を以て圓滿辭職を決行するの考を決めた。(三)然るに計らずも八月に至り暴動の勃發を各地に見た。而して世間の一部は不都合にも之を内閣の責任に歸し、以て引責辭職を迫るの暴論をなすものがあつた。かゝる不當の要求に聽いて無意義の引責をなすことは、惡例を後世に貽すものと思惟したから斷然挂冠せざるの覺悟を定めた。(四)併しながら今や人心大いに鎭まつた。且つ之に關聯して種々の調査機關をも設け爲すべき丈けの事は相當に爲し遂げたから、今や安心して辭職する事が出來る。之れ今日を好機として勇退を決行せる理由である。(五)唯時局重大にして一日も國務を曠廢する事を許さない、後繼者の決定するまでは依然政務を見よとの御諚を拜せしにより、當面の政務を處理しつゝ徐ろに後繼者の決定を待つて

居ると。

後繼者の定まるまで政務を見よとの御諚を拜せりといふ事と急遽辭表を捧呈した事との辻褄の合はぬ事や、爲すべき事を爲して自分丈け已むなき病氣の爲に辭退するのなら、何故閣僚に勸めて依然留職して國事に盡さしめなかつたかの疑やは、今深く追窮すまい。唯我々は之を讀んで其餘りに白々しき辯解に顰蹙するを禁じ得ない。之で天下を騙き得るとするも、至誠の人を以て稱せらるゝ寺内伯に省みて果して良心の滿足ありや否やを訊問したい。但し之は昵近者の談に止まつて伯其人の眞意でないと云はゞそれまでゞある。

併し斯の如き白々しき形式的辯解を弄するのは我國政界の常であつて、今度に始まつた事ではない。大隈内閣の往生際も亦決して潔いものではなかつた。凡そ政界の德義として最も尊ぶ所は、其責任を明白にするにある。形式上の詭辯を弄して責任を曖昧にするは、政界の空氣を混濁する最も重大な原因である。一身の潔白を爭ふに急にして政治道德の頽廢を顧みざるが如き態度を、特に謹嚴正直の稱ある武人寺内伯其人に見るのは遺憾の極である。

（四）

責任を曖昧にするの陋習が今度の内閣に限る事にあらざるは前にも述べた所である。何故に我國がかゝる陋習が橫行を深く咎めざるやについては、惟ふに次の二樣の原因によるものではあるまいかと思ふ。

第一は所謂失政による引退と政治的罪惡による引退との間に明白なる區別を認識せざる事である。凡そ内閣若くは各個大臣の引責すべき場合は二つある。一つは政治的罪惡を犯せる場合で、他は所謂國民より失政の責を嫁せられた場合である。前者の理由で一旦職を退けば即ち其人は政界の前科者として再び世に出づる事は出來ない。大浦氏の如きは其適例である。再び世に出られない丈け、若し少しでも自分に辯解の餘地ありと信ずるものは、飽くまで其無垢を天下に爭はんとするは當然でもあり、又之を恕さなければならない。之に反して後者の場合に於ては、多くは政見を異にし若くは自分の見解の偶々豫期の結果を奏せざりしに基くものであつて、云はゞ堂々たる君子の爭に敗れたものである。彼等が堂々の政爭に何等道德的罪惡を伴はざる以上、一旦敗北しても更に勇を鼓して捲土重來するを妨げもせねば、又其機會にも富む。否、飽くまで潔く其敗北を自任した方が却て他日再擧の計に成功する所以である。政治の爭に於て勝負に汚い程見苦しいものはない。

然るに從來の我國政治家は、全然政治的道德の潔白を衷心か

ら主張し得なかつたのかも知れないが、兎に角政治上の勝負に於て何時でも負け振りが汚かつた。非を是に枉げてもいや病氣の爲めにやめるのだとか、圓滿辭職だとか、理窟を揑ねて、責を引いて職を去るのだときつぱりと云ひ切つたものはない。斯くの如きは歐米先進國に於て全然其例を見ざる所、武士道を以て誇る我國に於て獨り此事あるは寔に奇怪な現象ではないか。

併しよく立入つて考へて見ると、之れには又其由つて來る所がある。それは日本の政爭は實は正々堂々の君子の爭では無くして、多くは隱微の暗鬪によつて勝敗の定まる小人の爭であるからである。歐米の先進國に於けるが如く、國民の良心の地盤の上に言論人格を以て堂々と雌雄を決するのではなくして、阿附緣貪朋黨比周以て政敵を陷るゝ事に寄つて、辛うじて自家の根據を築くのである。故に一旦退けられては、假令どんな有能の士でも、容易に再び浮び上がる事は出來ない。故に彼等の爭に於ては、唯勝ちさへすればいゝので、其爲めには手段の善惡を顧みるの遑は無い。唯勝ちさへすればいゝのであるから、負けても負けたとは云はない。之れ責任感の自ら鈍らざるを得ざる所以である。故に前に述べたやうな笑ふべき陋習の横行するのは、一つには我國政界の不完全なる所にも原因があると云はなければならない。而して之を救ふの途は、專ら民本主義の徹底にあることは多言を要せずして明かであらう。

第二には我國の政治家が政治的責任といふものゝ特異なる點を明白に諒解せざる事を擧げなければならない。彼等の多くは至誠を以て事に當つたと辯解が立てば、それで政治上の責任は解除せらるゝものと考へて居る。併し乍ら政治上の責任は唯誠意を以て事を見たといふ丈けでは十分に全うせられない。其誠意をどれ丈け國政の實際の上に顯はし得たかを見る事が肝要である。否、寧ろ此方が肝要なのである。誠意なきものゝ國政運用の任に膺るべからざるは初めから分つて居る。然るに自己の誠意を賴み、又は少くとも之を吹聽し、而して誠意の實際に徹底せざりしは自己の咎めにあらずとして、失政の責任を他に嫁せんとするの風潮は、殊に官僚政治家に多い。

予輩の傳聞する所に據れば、寺内伯は其至誠に對する世上紛紛の非難につき、常に口癖のやうに『自分は誠心誠意事に當つて居る。一點の疚しい所が無い。若し思ふ通りの成績が擧らないとすれば、公私一切の機關が甘く自分の考に撥を合はして吳れぬからである。自分の考をよく諒解してさへ吳れれば、世の中はよく治まるに相違ない』といふさうだ。之れ寔に官僚政治家の口吻を最もよく現はして居るものではないか。自分の考が公私一切の機關に行き渡ること、恰かも大將の一令が下一兵卒に

まで徹底するやうになる事を期待し得べきものならば、政治は猶も杓子も易々と成功し得べき仕事と云はざるを得ない。政治家に尊ぶべきは一に卓抜の經綸にありといつたのは、昔の時代の事である。今日に於ては此經綸を現實に實現するの用意と力とを具備するや否やがより多く注意せらるゝ問題となつた。寺内伯は軍人丈けに自分の考は譯も無く下に行き渡るものと考へて居らるゝかも知れないが、伯の如き固陋な人の思想が譯も無く下に徹底しては國民の迷惑此上もないが、而も伯にして其考を徹底せしめようとするならば、伯は先づ今日の政治組織の如何なるものなるかを諒解し、之に應ずる相當の努力を盡さなければならない。惟ふに伯には世上傳ふるが如く一片の誠意はあらう。併しながら近代の政界は軍隊とは仕組が違ふ。誠意は居ながらにして通るものではない。故に廿世紀の政治家は誠意を以て卓拔なる經綸を實行するに先つて、先づ民間の輿論との接觸に多大の苦心を注ぐ事になつて居る。這の苦心なく、否斯の如き點に對する何等の理解なくして、國政運用の任に當らんとするは實は僭越の甚しきものと云はねばならぬ。十年廿年前の日本ならいざ知らず、今日の日本は最早や專制的官僚の專横を許すには既に餘りに民本的に覺醒した。之れ人物其物に於て一日の長あるに拘らず、政界の實際に於ける地位に於て平田清浦兩子の遠く原氏に及ばざる所以ではないか。況んや寺内伯に於てをや。伯は其誠意を徹底せしめんが爲めに無論相當の努力はした併し其爲す所は例へば彼の乾兒の田中參謀次長をして青年團の組織に奔走せしめたるが如き類に止り、根本に於て眼の着け所が異つて居る。民間と何等の連絡なき、否之れなきを誇として恬然として政界に乘出したのは、鵜の眞似をする烏の類に外ならない。其失敗に終るべきは當然の數である。

遮莫伯並びに伯を圍繞する官僚の一派は現代政界の活機に通じない。此無知は自ら彼等を驅つて其失政に對する責任感を鈍らしめたものであらう。道德的に或は彼等に責むべきものなきやも知れない。只之によつて直ちに政治上の無責任を主張せんとならば、我々は斷じて之を許す事が出來ない。

（五）

終りに一言せざるべからざるは、以上の如き形式的詭辯の社會風敎に及ぼす關係の問題である。今や天下は何人も寺内内閣の失政を認めざるものなきに至り、而かも自らは引退の原因を病氣に托して政治上には全然責任がないと云ふ強辯をする。之れ刑事辯護人が強いて被告の無罪を強辯するの類である。流石に法廷に於ては如何に熱心なる強辯も結局其效を奏せざるに、獨り政界に於ては形式的詭辯によつて容易に責任の糺彈を免れ

得るのは、之れ風敎維持の上に著しき弊毒を流すものではないか。

凡そ風敎維持には總ての場合に於て至誠を一貫せしむるを必要とする。刑事法廷に於ては、牽强附會の辯明を許さず、大臣の責任糺彈に於ては特に之を許すと云ふが如く、物に依つて道義的判斷の標準を異にするは、日本人同志の間では正直にせよ、外國人には噓を云つてもいゝ、個人間には德義を重んずべきも國際間に於ては國家の爲めに人倫の常道に外るゝも亦可なりと云ふと同樣で、どれ丈け不知不識の間に道義的良心の頽廢を來すか分らない。國家の生命は永い。吾人は官僚政治家に對し、目前の利害の爲めに國民の道德の頹廢を齎すが如き事なからん事に反省して貰ひたいと思ふ。

我國現代の社會問題

(一)

「中外」八月號に載せられた谷崎潤一郎氏の「小さな王國」は我國現代の社會問題に關し頗る暗示に富む作物である。小學生の單純な頭腦から割り出された共産主義的小生活組織の巧みに運用せらるゝ事や、前途有望を以て自らも許し人も許して居つた青年敎育家の生活の壓迫に苦しめる結果、不知不識其共産的團體の中に入つて行く經過は、一點の無理がなくすら／＼と說き示されて居る。作者の覗ひ所は何れにあるにせよ、我々は之によつて現代人が何となく共産主義的空想に耽つて一種の快感を覺ゆるの事實を看過する事は出來ない。而して少しく深く世相を透觀する者にとつて、今や社會主義とか共産主義とかいふ事は、理論ではない、一個の嚴然たる事實である。如何に理窟で以て其誤りを說いても、事實の上に生活問題を解決しないでは、此等不祥なる傾向の實現盛行は、之を阻止する事は出來ない之を國家の將來に憂ふべしとなして未然に防止せんとならば、社會政策の徹底的實行によるの外なきは言ふまでもない。

(二)

併しながら我國現代の社會問題は單に之に止るものと思ふならば誤りである。我々は生活の壓迫より來る問題の外に、更に他の重大なる社會問題あることを忘れてはならない。現に生活の壓迫を緩和する目的を以ていろ／＼行き渡つた大施設を行つて居る西洋諸國でも、社會問題は其跡を絕たざるのみならず、否、却つて盛んになりつゝあるではないか。此廿年このかた歐米諸國の社會政策の實施は、著るしく下層階級の生活を樂にし

た。何れの世にも食ふや食はずの貧乏人は絶えない。併しながら概して今日は下層勞働者階級の地位は頗る向上した。それでも社會問題は益々矢釜しくなつて居る。否、社會問題を矢釜しく起すのは此等生活に餘裕ある勞働者階級であつて、食ふや食はずの貧乏人の方は割合に大人しい。かゝる現象は果して何事を語るものであらうか。

今日でも勞働階級の訴ふる所は、昔と同じく物價騰貴による生活難である。今日西洋諸國に於て民衆騷動が起つたとすれば選擧權の擴張若くは共公平なる分配に就いてにあらずんば必らず物價騰貴の問題である。局部的には賃銀の値上げを問題とする事もあるが、大規模の民衆運動の目標は此二つに過ぎない。けれども彼等は現に生活の壓迫に苦んで居るが爲めに物價問題を提出するものと考へてはならない。昔の民衆騷動は現實に生活に困るもの丶窮餘の不平の勃發であつた、而して今日では此種の貧民は寧ろ意氣銷沈して社會に波瀾を起すの元氣なく、比較的生活に樂な者が常に世間を騷すのである。それ丈け現代の民衆騷動には堅い深い根强い所がある。

然らば何で彼等は起つて世間を騷がすのか。之れ彼等の社會的富の分配に於ける劣等なる地位の自覺によるものである。自分は敢て食ふに困らない。只隣人の暴富に對して獨り我は何故にかゝる貧弱なる境遇に甘んぜざるべからざるか。貧富の懸隔斯くの如く甚しきは、彼等の間に段々目醒めて來る社會的正義の觀念の容易に滿足し得ざる所である。斯くの如き認識は政治上に於ける權利分配の不平等のそれと共に、著しく現代の民衆を動かす所のものである。一人一人に就いてかゝる意識的諒解を有つて居るかどうかは問題でない。只我々は之を以て抵抗すべからざる一大潮流であることを認めなければならぬ。

（三）

社會問題は貧乏をどうするかと云ふ事から起ると云ふならば現代に於ては貧乏の意味が變つたと云はなければならない。食ふや食はずの生活は昔の時の貧乏である。食ふには困らないが隣りの金持に比べて餘りに貧しいと云ふのが現代の貧乏である現に困つて居るのではないから、大して之を苦にしないと見るのは、現代人を知るの言と云ふ事は出來ない。道理に基いて自分の地位を厭くまで主張すると云ふ現代人の心理を念頭に置く時に我々は初めて今日の社會問題が却つて昔よりも激しく說かれつゝある所以を解釋する事が出來る。

徒らに隣人の富を羨む勿れと云ふのは理窟である。此理窟を以て、現代の社會問題に解決を與ふる事は殆んど不可能である。社會的富の分配に對する現代人通有の不滿は現前の事實であつ

て、決して理屈から來たものではない。無論社會主義者は其不滿にいろ〳〵理論上の說明を與へんと試みて居る。或は今日の經濟組織に於ける分配制度の不當を鳴らし、更に進んでは私有財產制度の不合理を說く。併しながら理論の問題としては此等の論は學界に於て決して最後の勝利を得ては居ない。彼等は動もすれば分配の不公平を云ふ。けれども新たに作られたる富を資本家と勞働者との間に如何樣に分配するのが公平かは社會主義者の未だ十分に說明し得ざる所である。之を說明し得ずしては現在の分配制度を以て不公平なりとする理論上の根據はないではないか。斯くして社會主義の說く所には槪して理論上の根據に乏しいものが多い。然るにも拘らず彼等の言說が今日まで多數の民衆の間に多大の共鳴を得、而かも日に〳〵發展して止まざる所以のものは何の故か。之れ彼等が現今の制度組織に只何となく滿足せざる一般民衆共通の感情に觸れて居るからではないか。社會主義や其他一般社會問題を取扱ふものは先づ此事實に眼を開いて居なければならぬ。

（三）

　西洋では初めは矢張り生活の壓迫といふ事から社會問題は起つた。次いで社會問題は貧富懸隔の社會的事實に對する懷疑的批判に其原因を移した。然るに我國では此二樣の社會問題が今や一時に襲ひ來りつゝある事は、本年八月の米騷動に於て明かである。此騷動には色々の複雜な原因ある事は本誌前號の研究に於て明かであるが、併し此中から一時的附隨的若くは地方的の特別要素を除けば、後に殘る通有の要素は以上の二つである。それ丈け我國現代に於ける社會問題の解決は、極めて愼重なる攻究を要すと云はなければならない。

　此等の點を顧慮してかどうかは分らないが、寺內內閣は其沒落の間際に於て國民經濟調査會なるものを設立した。沒落の間際に斯くの如き措置に出づるの適當なりや否やの政治的批判は姑く此處に論じないが、唯斯くの如き月並の調査機關が果して首相の希望通り「戰時並びに戰後に於ける各般の國民的經濟及び社會的問題の根柢に遡り、我帝國の蒙るべき危險を未然に豫防して、國民將來の生活を安泰ならしむる方策を講じ」得るや否やは大いに疑はしい。斯くの如き空名の機關に初めから實効を期待せざる予輩は、寧ろ切に國民多數の此事に覺醒せんことを希望せざるを得ない。

民衆運動對策

（一）

米騷動によつて端なく民衆運動の怖るべきに驚いた識者階級の對應策中最も哂ふべきものは、所謂救濟施設である。尤も之によつて目前の動搖は大いに鎭つた。併しながら問題の全部が之で解決したと安心してはならない。何となれば他の一部に於て却つてかゝる施設に不平と反感とを抱いて居る者が少からずあるからである。蓋し彼等は今度の騷動に於てあらはれた問題は、臆病なる富豪のいや／＼乍ら企てる慈善的救濟に依つて解決せらるべきものではない。社會的公正の主義により、法律上の制度によつて、換言すれば貧民の富豪に對する要求を法律的權利と認むることによつて解決すべきものなりと主張する。

救濟的施設によつて問題を解決し得べしとするは、恰かも彼の溫情主義を以て勞働問題を解決すべしとするの愚論に等しい。溫情主義は之を雇主の服膺すべき道德的敎訓と見るならば妨げない。只此美風あるが故に若くは此美風を奬勵する事に依つて、社會政策的設備を不必要とし、若くは勞働者の主張を法律的權利として認むるの必要なしと云ふならば、予輩は其議論の亂暴なるに驚くの外はない。尤も封建時代の君臣の關係の如く、又此時代に於ける主人と丁稚との關係の如く、廣汎なる相倚共濟の人格的關係に結ばれて居るものならば、溫情主義で妨げない。併しながら今日の經濟組織に於ては、雇主と被雇人との關係は漸次非人格的關係になりつゝあるではないか。否雇主の方から進んで人格的關係を否認せんとして居るではないか。今の地主は小作人に對して何と云ふ。事情は氣の毒だけれども店の規則として小作料を負ける譯には行かないと云ふ。甚しきに至つては、地主が協同して小作料の取立を血も淚もない營利會社に托して居るものすらある。近頃大都市には家賃や地代の取立の請負を營業とする會社が盛んに起つて居るが、之によつて中產以下の階級がどれ丈け苦しんで居るか分らない。斯くして上の方から已に總てを非人格的法律關係で捌かうとする。而かも仍ほ溫情主義を楯にとつて下層階級の權利の主張を抑へんとするのは、自ら易きに居つて難きを他に責むるものではないか。下層階級は常に團體生活の舞臺に於ける弱者である。社會全體の健全なる發達の爲めに、弱者は特に之を保護するを必要とする。昔は溫情主義が實に此等弱者の保護者であつた。而して現代は溫情主義の過去に於てなせる仕事を、法律が代つて勤めなければならない。法律によつて勞働者の主張を權利として認むるの外に、今日彼の弱きを扶くるの途はない。

（二）

更にもう一つ必要なのは下層階級の自由開放である。今日我國の國法は十九世紀半ば以前の歐洲諸國の國法の如く、餘りに下層階級の自由を拘束して居る。之に依つて社會の安全を保ち得べしとするの果して正當なりや否やは姑く別問題として、現在に於ける實際の勢としては、どんなに之を抑壓しても民衆の活動は之を阻止する事は出來ない。嚴しき制裁を以てする國法の嚴禁も、結局民衆の運動を抑ふるに成功し得ないではないか。我々は先づ此事實に着眼する事を必要とする。而して民衆的運動が事實上抑へんとして到底抑ふべからざるものとすれば、寧ろ平素之に訓練の機會を與へて、危險なる異變の勃發を未然に防ぐの用意をなす事が必要であるまいか。

民衆運動が常に無政府的暴動を伴ふものと考ふるは誤りであるのみならず、又歐米諸國の實際にも戻つて居る。佛蘭西革命の當時には、民衆の運動は即ちモッブの暴動に相違なかつた。之れ民衆に豫め何等の訓練が與へられて居なかつたからである。今日に於ては民衆に自由が與へられたと共に、自然集合運動の經驗を積み、其間に自ら節制するの訓練を積んだ。從つて最近文明國のストライキなどを見ると、規律整然として實に敬服に値するものがある。予輩の現に目撃した有名なる一九一一年の墺太利の大示威運動、一九一三年の白耳義の大同盟罷工の如き幹部の節制に服して秩序整然一絲紊れざるの行動は、殆ど軍隊以上なるを思はしむるものがあつた。民衆運動は到底阻止する事が出來ないとすれば、之によつて蒙る社會の危害を避くるの途は、唯彼等に訓練の機會を與ふるに在る。訓練の機會を與へさへすれば、民衆運動其物に何等の危險が無い。

（四）

民衆運動の對策として更にもつと根本的なものは選擧權の擴張である。結局此處まで到らなければ此問題を根本的に解決する事は出來ない。

米騷動によつて促されたる物價問題の一解決案として、東京市に公設小賣市場設置の提案が表はれた。公設市場の必要なるは今日一點の疑はない。市民に生活の餘裕を與ふる方法として此等は一番有效なる設置なる事は已に世間の定論である。然るに此頃になつて之れ程明白な問題の實行が行悩んで居るのは何の爲であるか。新聞の傳ふる所に據れば、公設市場が設けられると小賣商人乃至問屋・仲間が困るといふので、同案撤回の請願に及び、市會議員の多數も選擧の關係から之に同情せざるを得ず、爲に折角の名案も立消えにならんとする形勢にありといふ事である。之れ選擧權の狹きに限られて居る結果が、如何に

少數者の利益の爲に、天下の生民の幸福に關する重大問題の解決が累せられて居るかの最も明白なる證據ではないか。

東京帝國大學で、學生の利益の爲めに或る條件を設けて構內に床屋の營業を許した。すると本鄕、下谷、小石川の床屋の組合は、猛烈な抗議を大學總長に提出したと聞いて居る。先年警視廳が私娼撲滅を斷行した時、從來許して居つた商賣を俄かに禁止する事によつて數千人の無職の婦女子を作るは由々しき社會問題であると怒鳴り出した市會議員もあつた。どんないゝ事でも、新しい計畫には必ず多少の反對を伴ふは免れない。此等少數者の反對を怖れては何等の改革も行はるゝものではない。而かも此等の少數者が法律上與へられたる地位を利用して有力なる反抗を試る時に、我々はどうしても多數民衆の力に訴へて改革を斷行し、以て國家永遠の利益を計るの外は無い。此點から見ても、所謂社會問題の解決に選擧權の擴張が如何に重大の關係あるかを知る事が出來よう。解決の斷行は識見手腕の非凡なる政治家に之を期待し得べしとするは專制時代の夢想である。今日の時勢に於ては、此種の偉人の役目は、唯彼の識見によつて天下の勢を指導するに存し、而して之が實行は天下の勢の自ら動くを待たねばならない。而して此勢は選擧權の擴張を外にしては如何にして作ることが出來るか。選擧權を現在のまゝにして置いては、民衆騷動の形にあらはるゝ不平の聲は、到底絕ゆる時が無いだらう。

京大教授の市會議員當選

東京では、公設市場の設置と云ふ極めて明白な問題に就いて、少數市民の思惑の顧慮から大いに行惱んで居ると云ふ醜態を暴露し、而かも多數市民は平然として之を他所事のやうに見做して居る際に、京都の市民諸君が、大に市政の刷新に發憤し、從來の一切の情弊を抛擲して、多數の學者を稀に觀る最高點で市會議員に擧げたのは、獨り京都市に於ける破天荒の快事たるのみならず、我國一般地方行政に對しても、空谷の跫音であると云はなければならない。擧げられた其人は何れも尊敬すべき知名の學者である。併し斯う云ふ立派な人物を擧げたと云ふ其事が大いに喜ぶべしと云ふのではない。學界以外ではあるけれども、從來此程度の人才の擧げられた例は決して珍らしい事ではない。けれども何等の關係や情實に拘らず、單純に學識一邊で

人才を擧げたと云ふ事が、假令其直接の動機には他にいろ〳〵の事があらうとも、此一事丈けで以て大いに之を世に吹聽すべき値打はある。

由來我國では、動もすれば國家の政治は所謂政治屋の弄ぶ所となり、地方行政は又同じく纏綿たる情實の爲めに左右さるゝ事が甚しかつた。現に伏魔殿なる名稱は、殆んど例外なく大都市の市政を形容する最も適當の言葉とせられて居るではないか。而して多年此等情實の動かす所に放任して顧みなかつた結果、偶々一個淸議の士があつて剔抉廓淸を計つても、單獨の力では奈何ともする事が出來なかつた。而して市民の多數は、殆んど市政を一部の人の勝手放題に任かして、之を自分の仕事として廓淸を計るの意思がなかつた。最近我國に於て、國民が段々政治的に目醒めて居るの事實はある。けれども斯かる事實は一般國政の上に就いて云ふ事が出來るけれども、市政などに就いては未だ殆ど見る事が出來なかつた。現に市會議員の選擧などには、國會議員の選擧の十が一の熱狂をも見る事が出來ないではないか。それ丈け市政などには弊害の深く且つ甚しいものがあると見なければならない。而して市政に目醒めずして先づ國政に興味を感ずると云ふのは、もと不自然の現象であつて、之れ偶々我國の政治の本當の進歩を見ざる所以であり、又本當に進歩して居ない徵象でもある。西洋の諺にも、立憲政治の進歩は堅實なる自治制の上に立つと云ふて居るではないか。而して京都の今度の新しい出來事は、兎に角市民が市政の革新に本當に目醒めた一のしるしであり、且つ之が此種の傾向の一般に普及すべき先驅をなすものとして、大に歡迎するの理由がある。

由來關西地方では最近、大は國家當面の重要問題より、小は市井日常の小問題に至るまで、夫れ〳〵專門の學者の說に耳傾くると云ふ風が盛になつて來て居つた。所謂政治屋・實業家より政治經濟の問題を聽くも必要ではあるけれども、公平不偏の正論は寧ろ之をそれ〳〵專門の學者に尋ぬるの外は無い。而して斯う云ふ美風は不思議にも中央の帝都よりも關西地方に流行して居つた。大阪の二大新聞が絕えず學者の長論文を掲げて讀者の歡迎を買つて居るのや、又京都市が先に一度び學者を市長に擧げ、其後また動もすれば市長を大學教授中より物色せんとして居る事實やは皆其證據である。市長になつた其人が適任者であつたか否か、又新聞にあらはれた論文が事實世を益したかどうかは姑く別問題として、兎に角市民が公正不偏の議論をなし得べき自由の地位にある學者と進んで精神的連絡を取りつゝあるのは、決して無意味な事ではない。況んや意識的に又無意識的に、學者側も亦世上の眷顧に感激して、一つには實際の問題に

興味を感じ、一つには其專門の智識を披瀝して世の質問に答へんと努むるに於てをや。而して斯う云ふ風潮の中より早晩何物かゞ產れ出て來なければならない事は、恐らく心ある者の見逭し能はざる所であつたらうと思ふ。今度數名の大學敎授が市會議員に擧げられたと云ふ事は、少くとも其主なる產物の一つと云はなければならない。

只此處に切に望む所は、此出來事に就いて最も重きを置くべき點は、學者を議員に擧げたと云ふ抽象的事實であつて、之れ〲の人が其選に當つたと云ふ事ではないと云ふ事である。無論今度其選に當つた人には、市民の期待に背かず大に市政に盡して貰はなければならない。又此等諸氏の人物經歷に徵して毫も之を疑ふの必要はないけれども、只市民に向つては、餘りに多大なる期待を此等の人々に置いてはならないことを一言したい。無論彼等を十分信賴するはいゝ。只彼等は夫れ〲他に本職がある人であるから、市會議員たる事を自分の利益として居る專門政治家のやうに、色々の問題に狂奔する餘裕は無からう。從來の市會議員に見る樣な活動を彼等に期待するならば、恐らく市民諸君は失望せねばならぬかも知れない。失望の極遂に若し折角芽ざした此傾向を再び蹂み躪るやうな事があつては、市の爲にも又國の爲にも憂ふべき事である。市民諸君が多年學者と精神的交通をとつた事から、自ら彼等を市會議員に迎ひ得ると云ふ思はざる產物を得たやうに、彼等を市會議員に迎へたと云ふ事から、他日亦何等か市政の上に思はざる獲物がある事を期待して、氣永に將來を樂まれんことを希望する。目前早急の效能を求むるは斷じて誤りである。

小題小言四則

●チエック、スロヴアックの承認

チエック・スロヴアック國民委員會本部の要求が、與國の容るゝ所となつて、九月初旬以來取り敢えず聯盟交戰國民として承認せられたのは、獨り彼等多年の宿望の實現として滿足すべきのみならず、又歐洲今後の國際關係の上にも重大なる意義がある。我國でも九月九日附を以て承認の宣明を送つた事は、先月央ばの新聞にも見えて居つた。已に第一歩を踏み込んだ彼等は、戰後必らずや獨立國として承認せらるべきは疑を容れない。

之と關連して露國領內に於ける彼等最近の活動は亦大いに注目するの必要がある。歐露に於けるチエック・スロヴアック軍の些か振はざるは遺憾とするも、西伯利に於けるものは、聯合

與國の援助の下に着々西方に發展しつゝある。而して今や彼等は當初の志望を抛ち、寧ろ更に西進して歐露の同族と連絡し、一つには直接東方より獨墺を牽制し、又一つには露國主戰黨の擡頭を助けんとして居るやうである。現に九月央ば浦鹽方面にやつて來たガイダ將軍は、早くイルクーツク以西に出でゝオルガ線に於ける同族と連絡せねばならぬ事を力說して居る。何れにしても彼等の運動は段々統一がつき段々活潑になつて居るのは喜ぶべき現象である。

只彼等を援くる我々聯合國の考は、彼等をあの儘西進せしむるのか、或は當初の考通り適當の時機に浦鹽より海路米國を經て歐羅巴に送るのか、其何れにあるやを明かにする必要がある。何故ならば之によつて帝國出兵の範圍が自ら異らざるを得ないからである。吾人は適當の時機に此事に關する政府の聲明を聽かんことを欲するものである。

●西伯利の近狀　帝國の出兵以來殆んど無人の境を行くが如く非常の速力を以て敵の根據の覆されつゝあるは兎も角も慶賀すべき事たるに相違ない。而して東方に於ける這の成功の結果、今や歐露にも國家的再興の萌しを示して居るのは之亦喜ぶべき現象である。普露西が昨今頻りに東方の防備に腐心しつゝあると云ふ九月初めの電報の報道も、恐らく此事を語るものであらう。之れ位の結果を齎らさないでは、聯合國の折角の援助も只過激派を窘めたと云ふ丈けが殘るに過ぎなかつた。

過激派を敵として戰ふは已むを得ないとして、我々は又過激派に對して一片の同情を寄するを忘れてはならない。過激派と云つても元々纏つた團體ではない。過激派の名の下に我々の攻擊の的となつて居る多數の民衆は、偶々過激思想を有する指導者に率ゐられて我々に抗敵するに過ぎぬ隣邦の良民である。我々は彼等の奉ずる主義其ものを憎んで其人を憎んではならない。我々は我國の新聞などが、彼等を以て獨墺俘虜の使嗾に動くとなし、或は暴虐無道の憎むべき行爲を敢てするものと誣ゆるのを見て、自ら省みて我國の輕薄なる言論を苦とすると共に、彼等を甚だ氣の毒に思ふの情に堪えない。

之と共に我々の甚だ心外に堪えぬのは、我國一部の識者が、國民の戰爭氣分を緊張せしめんが爲に、故らに敵を惡しざまに云ひ、誇張の報道の上に敵愾心を鼓吹せんとするの態度あることである。尤も斯うでもしなければ國民の戰爭氣分を緊張させる事は出來ないのかも知れない。從來彼等の民心煽動の慣用手段は領土的利益と敵愾心との外になかつた。併し出兵の目的を領土的利益に置けばさらでも招き易き外國の誤解を一層甚しくする。然らば殘る所は敵愾心の鼓吹であるが、かゝる誇張の報

道に甚く無用の反感を挑發するは、決して將來に於て露人と親み、東部亞細亞に活躍し得る所以ではない。

是に於て我々は返す〲も我國先輩の政治家が國民の世界的精神の開拓を怠つた事を遺憾とせざるを得ない。個人道德としては身を殺して仁をなすべき事を敎はつた。國家問題として正義の爲に犧牲を拂ふと云ふやうな事は、頓と我々の聞いた事のない問題である、之れ世界の勢に動かされて西伯利出兵の先驅を勤めながら、國民をして何の爲めに戰爭するやに迷はしむる所以である。八月下旬臨時西伯利經濟援助委員會の初會に於て、後藤外相の訓辭の中に列擧せられたる「帝國の出兵は……高尙なる意義に由來す」とか、「四海兄弟主義を以て隣國救援の實を擧げ」とか、「愛の理、心の德を普及せしめ」とかの本當の意味を體得して居るもの果して幾人あるだらうか。

●朝鮮統治策　朝鮮統治策に關して予輩は先年本誌上に卑見の一端を述べた事がある。京都大學敎授山本美越乃氏は今夏滿鮮を旅行し、其見聞に基いて我國の殖民政策を九月央ばの「大阪每日新聞」に論じて居る。其中朝鮮統治に關して氏の述ぶる所は甚だ我意を得たものがある。氏は「朝鮮人を母國文化の恩惠に浴せしむる事は彼地に於ける殖民政策上の理想」とすべきを認むるけれども、「朝鮮人は已に過去に固有の文化を有し、從つて彼等の間には牢乎として拔くべからざる獨自の思想習慣、制度、風俗等を有」するから、此等を無視して悉く母國の制度に依らしめんことは不可能である。故に「爲政者は須らく此等のものを或程度まで尊重して更にこれを善導して行くと云ふ態度に出でなければならぬ」とて、同化政策の實行は短日月の間に之を期すべからざるを說いて居る。

氏は更に進んで、殖民地を統治する場合には、先づ當該殖民地を如何なる程度まで進歩せしむべきかの最後の目標を定むることが必要であると說き、過去に於て固有の文明を有し且つ國人の常に政治に趣味を有する朝鮮にあつては、「五十年後であるか或は百年後であるかは分らないが、爲政者は之を善導する事によつて、將來朝鮮をして完全なる自治殖民地の程度にまで進步せしむることを要する……鮮人の文化の漸次進步するに伴ひ、或程度まで彼等に自治を許して彼等をして朝鮮內地の政治に參加せしめる」ことを要するといふて居る。

予はこゝに同氏の達見に服するを告白し、且つ國民が此問題に深き注意を惹くに至らんことを希望する。朝鮮問題は近き將來に於て我國內政上の最も重大なる問題たるべきは、今度の戰爭によつてあらはれた民族主義の潮流の如何に大なるかを觀ても察せらるゝではないか。現に問題が起つて居ないからとて決

して安心すべき謂はれはない。

●徐世昌の大總統就任

去る九月四日北京の新國會に於て徐世昌が新たに大總統に擧げられた。先之、十月十日を以て任期滿了となる大總統の地位を誰れが繼ぐべきかは、支那に於て矢釜しい問題であつた。勿論支那に於ては、兵權を有つて居る者が政界の實權を握り、而して今現に段祺瑞の一派が此實權を掌握して居る以上、大總統の何人たるやは政局の大勢に大した關係はない。けれども、支那では人が偉いから高い地位に就くと云ふよりも、高い地位に就いたから其人を重んずると云ふ風で、高い地位に居れば其事丈で平凡な人間にも相當の力が附く。故に先年彼の袁世凱が全權を握つた場合の如く、最高の他位と實際の權力とが同一人の手に歸した時には、比較的問題は簡單であるけれども、最近の如く實權は國務總理にあり、大總統の地位は、或は黎元洪と云ひ、或は馮國璋と云ひ、謂はゞ段祺瑞の政敵によつて占められて居る場合には、多少實權者が最高地位の者から牽制せらるゝを免るゝ事が出來ない。況んや最高地位者と實權者の政敵とは動もすれば隱密の結托をなして相手を陥れんとするに於てをや。其處で、實權が段の掌裡にあるの大勢には甚しき動搖なかるべしとするも、何人が大總統の選にる當やは、政界の人の然全雲烟過眼視し得る所ではなかつた。

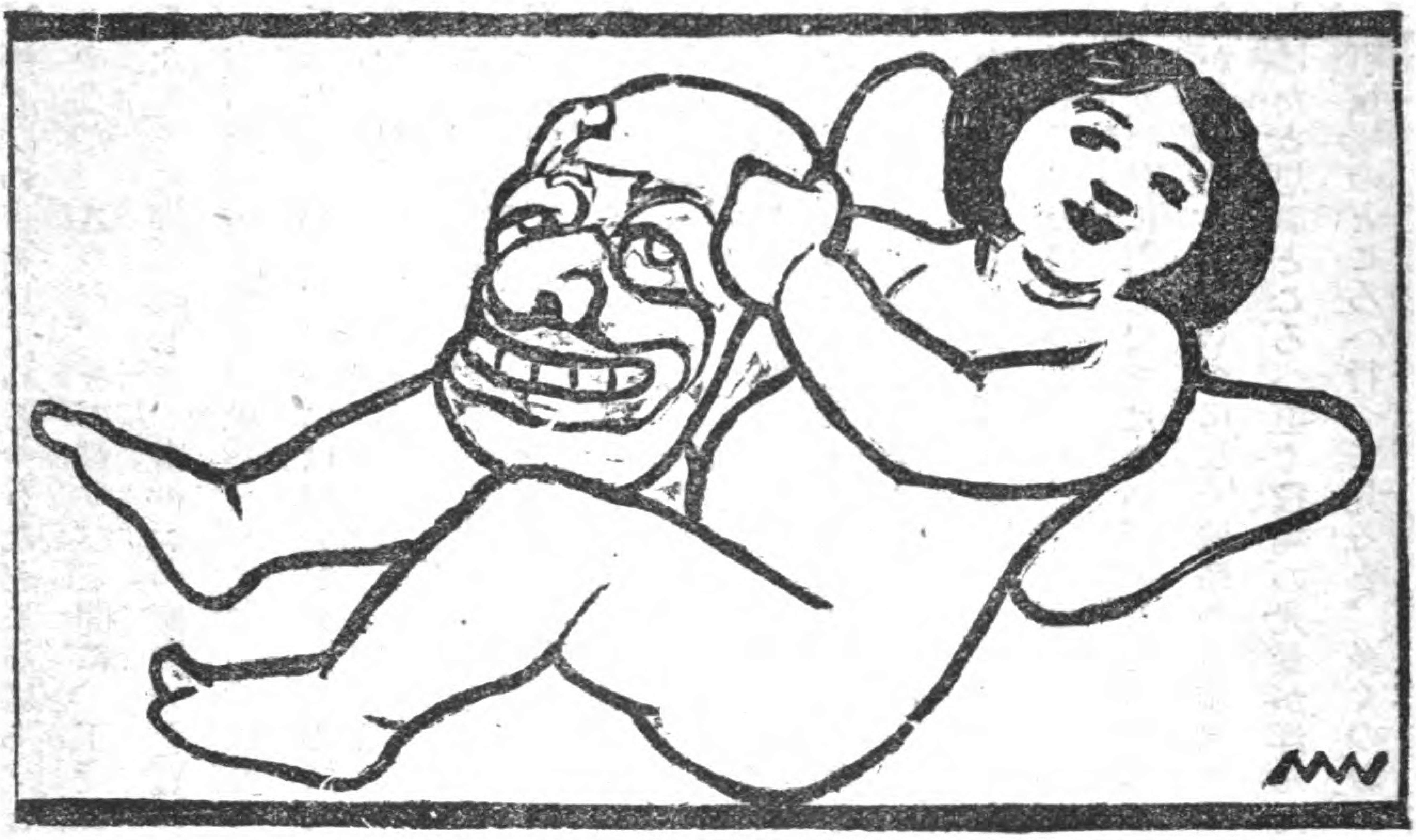
段派の希望を露骨に表白せしめたならば、段祺瑞彼自身を大總統に擧げたかつたのであらう。けれども之では流石に露骨に過ぎる。而已ならず内外輿論の一致して要求する南北妥協の大勢を作らんには、段祺瑞では不適當だと認められて居つた。さればと云つて現代行大總統馮國璋をして正式大總統たらんとするの野心を滿足せしむる事は、到底段派の許す能はざる所である。斯くして自然北方派の人にして且つ大體に於て甚しき敵なき徐世昌が問題となつた。恰かも寺内々閣の後を直ちに原敬氏をして受けしむべからずとする考からして、同じ畠の西園寺侯が期せずして天下の衆望を荷つたやうなものである。而して政友會畠の西園寺侯に擧國一致内閣の組織を期待したるが如く、北洋派の徐世昌に向つて世人は同じく南北妥協の成功を期待した。日本の徐世昌は聰明にして堅く其任を辭したが、支那の西園寺侯は一も二もなく其任を受けた。何の成算ありやは彼の今後の行動に徴するの外はない。

徐世昌は段派の人ではあるけれども、段彼自身のやうな行掛りはないから、何處までも主戰方針に執着するの必要はない。輿論の期待に應じて南北妥協に成功せんとするならば、決して段の政策を踏襲する事は出來ない。併しながら他の一方に於て、彼は固より段派の擁立する所なるが故に、段の勢力に飽くまで

抵抗する事も出來ない。其處で問題は、徐は結局段の傀儡たるに終るや、又は段の脈迫を押し除けて政界に一新局面を開くやと云ふ事になる。

徐にして段の傀儡たるに止らば、彼の大總統就任は政界の局面に何等の展開を與ふるものではない。何等かの展開を與へんとしても、今迄の所、彼は段派の勢力に對抗する事が出來ない境遇にあつた。然らば結局彼の就任は無意味に終るかと云ふに必らずしもさうでない。此處に支那の政局に重大な波動を及ぼすべきものは日本政界の動搖である。何故ならば、日本の政變は、寺內內閣の直接間接の多大なる後援によつて僅かに其勢力を維持して居つた段內閣を、根抵から動搖せしむるものであるからである。徐世昌も一旦大總統の任に就いた以上、何等か彼の就任を意味あらしむべき仕事をなさうの野心はあらう。而して此野心を遂行するに、日本の政變に伴ふ支那政界の動搖は、彼に好箇活躍の機會を與ふるものである。況んや此機會は又反段諸派の活躍を促し、一層徐に便宜を與ふべきに於ておや、徐が段を離れてかゝる活躍をなすや否やは別問題であるが、兎に角、段一派の北京政界に重きをなす所以の根據が大に動搖したと云ふ事丈けは、之を認めて置くの必要はある。

徐世昌に其志あらば北方に於て南北妥協の輿論を纒めることは困難でない。只之が更に進んで南方政府と直接に妥協の交渉を開く段取りに移るや否やは俄かに斷言し難い。昨今徐世昌と長江沿岸の勢力並びに廣東、南寧との間に密使の往復が頻繁であると云ふが、併し南北妥協の實現は、歐州戰爭の講和問題と同じく、出來さうにして之を近きに豫期することも出來ない。



要太郎の夢

岩野泡鳴

自分はどうしたのかふんどし一つであつた。それも、うちにゐてのことなら、この暑い時節を不斷のことであるから、左ほど不思議にも思へない。が、大道を歩いてゐる。

俄か雨にでも出くわしたのか知らんと見ては、さうでもない。なか〱上天氣のやうだ。そして大道と云つても、東京の街のやうなところではなく、どこか——斯う——昔、書生の時に、旅行をして通つたことのありさうな景色で、——これが全體として不思議なことには自分を不自然に壓迫してゐるが、自分の右手は一體に山が迫つてゐて、自分の左り手には、青々した田ン圃が廣がつてて、そのまた向ふには、つかひ古したのこ切りの齒のやうに缺けてでこぼこした出入りのある尖りを見せて、何かの森が空にそびえてゐる。そしてその黒いかげのおもてを螢が飛んでゐる。

自分はいつもより早く床に這入つたつもりであるから——さうだ——ぢやア、夜かと見ると、さうでもない。蚊屋の中から寢ころん

で廢兵院の森を見てゐるやうなところはちッともない。そして少しも熱天の暑さを感じないけれども、夏の眞ッぴる間のやうだ。さうだ、その眞ッぴる間に、丁度日曜日であつたから、おッ母さんと自分とは二手に分れて、大きな風呂敷をたもとに押し隱して、町役場の廉賣米を買ひに行つたッけが――

大の男が途々獨りで耻辱を感じないではゐられなかつた。さうだ、自分は穴へ這入つて、そこからこッそり拔け出して來たのだから、自分には自分が見えてゐても、多くの人にはそれと發見されないでゐる靈魂のやうな身ぶんを感じて、今や不思議なほどに氣が輕い。

ふと、氣が付くと、自分は火の見ばしごの上からその下界の混雜を見おろしてゐる。さうだ、町役場の直ぐそばには高い火の見ばしごが立つてゐる。自分が毎日電車に乘るにも、下りてからも、必らずそのはしごのもとを通らなければならぬやうになつてるが――斯う物價が高くなつて、而も役所の俸給がゐ坐わりでは、耻辱を超越して鼻の下が先づ大切にならないではゐないのである。

風呂敷をたもとに隱してうちを出る前に、おッ母さんは宣言を發した。

『お前、親子のやうなふりを少しでも見せたらいけないよ!』まるで、こちらから些かでも金を持つて行きながら、泥棒をでもしに行く氣になつてゐた。死んだお父さんはおほ酒呑みではあつたが、昔の侍ひで、その時矢張りお役人であつたと云ふ。その未亡人とその子とが――

『ぢやア、夫婦のつもりにでもなつて』と云ふ皮肉が、あとの祭りではあるけれど、今やッと口に出た。無論、これはかの女自身に對してではない。寧ろこのせちがらい世間に反抗した氣持ちでだ。が、うまいことが云へたものだとわれながら感心して、いつになく餘裕ある愉快をおぼえて、自分は寢てゐながら吹き出した。けれども、ちよッと目がさめかけたと思ふところへ直ぐ役場の光景が浮んだ。

町役場のところへ行つて見ると、多くのおかみさんやら小僧やらがどし／＼押しかけてゐた。自分も來た以上は、思ひ切つて、米のなくならないうちに買はなければ損だと云ふあせり氣が出てゐた。

おッ母さんはずん／＼進んで行つて、みんなのさきに出て、役場の門で、つッかひ棒に喰ひとめられてるやうであつた。

みんなの顔を見ると、それとなく澄ましてゐながら、がつ／＼した様子がその据わつた目つきにまで現はれてた。

『あさましい！あさましい！』

自分も押し進んで行けた時には、皆は皆解散してゐた。自分獨りこんな耻ぢをかかせられる位なら、いッそのこと、米の安い田舎へ引ッ込んで、安樂に暮す方がましだと思つた。

それが爲めにこんな田舎へ米の成る木を探しに來たのであつたか？それを發見しさへすれば、自分獨りであるから却つて占めたもので、他の誰れにも手を觸れさせない。さうだ、自分獨りで占領して、たらふくおッ母さんにも喰はせ、殘りがあらばこちらで廉賣に出してやる！

『おッ母さん、安心してゐて下さい。やがて俸給もあがりますから。』

『實際、これぢやアやり切れやアしない。人さまのやうに女中の一人も置けないで――どうして――いいお嫁さんの來やうがない。』

『おッ母さん、それどころですか？親子ふたりが喰ふや喰はずで――』さうだ、さう云つてかの女の手前は澄ましてゐるものの、自分には戀しい女がないでもないのだ。あの、お隣りへ近ごろ越して來た雪子さんだ。

向ふも勤めがあつて、電話局に行つてるので、顔を合はすのは往きや歸りの途中か、たまには同じ電車の中か、然らざれば、自分の勝手ぐちのそばに在る共同井戸へ水を汲みに來る時だ。けれど　、逢へば向ふも顔を赤くして、必らず何かこちらへ云ふことがありさうにしてゐる。自分も云ひたいことがあるので、一二度訪問して行つたが、その度毎に邪魔になるのはかの女の姉である。

妹が言葉すくなであるに反して、姉の方はおしやべりだ。雑誌などを讀んで、いろんな生意氣なことを云ふ。

『須本はん、新らしい女なんて云ふてましたけれど、みなどうしたのです？子供を持つやうになつなら、皆引ッ込んで

しもた云ふやおまへんか』などと、大阪言葉を丸出しにして、こちらを責めるやうであつた。
『わたしは新らしい女でも男でもありません』と返事してやつた。
『そりやそやけど、な、須本はん、紅吉たら云ふのは大阪の出だッせ。それがまた新らしい女を通さなんだ云ふたら、わていらのいッち耻ぢ曝らしにもなりましよう。あんた、どうおもやはる？そんなことなら、いッそ初めから舊い女で通した方がええやおまへんか？』
『あんたは、なア』と、妹はそれでも控へ目であつた、『いつもそんなこと云やはるけれど、人は人でええやないか、自分たちは自分たちのことを眞面目にしてゐたら？』
『あんたはまだ年が行かんくせに、舊いことばかり云ふてやはる！』これではかの女自身が新らしがつてるつもりだ。
『…………』妹の方もそれには答へなかつた。そしてこちらと顔を見合はせて、にッたりした。
『お互ひにそんなことどころではありますまい。どうです、この頃のやうに物價が高くなつちやアー米がとう〳〵五十錢臺にまでなつたぢやアありませんか？』
『ほんまに、なア』と、また姉が受けた。
『さうかと云つて、まさか、わたしらはあの施し米のやうな物を買ひには行けないし。』その時はまだほんとうに行くだけの勇氣が自分にはなかつた。
『…………』向ふの姉はその痩せぎすの長い顏を俄かに赤くした。そして押し默つてゐた。
『さうです、ね』と、妹が答へたけれど、これも姉と顏を見合せてちよッといやなやうすをした。
『…………』あすこでは、こちらよりも先きに、親子三人が別々に買ひに行つてたのであることを直ぐ思ひ出されたが、矢ツ張り、人には隱してゐたのだ。お互ひにまだそれをうち明けるほどの親しみになつてはゐない。
門を一つにして、向ふもうへ一と間、した一と間の同じ家賃に住んでるのだ。が、こちらよりも人數が一人多いにも拘らず、そして妹の取つてる俸給だツて電話局では知れ切つてるのに、その暮し向きがこちらに比べてさう困つてると

は思へない。多少でも、矢張り、死んだと云ふ父親の遺產があるとすれば、向ふの方がそれだけらくなわけだらうか？

　うちのおッ母さんは、然し、渠等の母なる人を見るのもいやがつてる。『おます』、『おまへん』、『さかい』、『さうだす』など云ふいやな言葉を使つて、ぺちやくちやとおしやべりで、ちよッと見ても輕薄さうだと云つてだ。けれども、うちのおッ母さんだッて、いろんな人の惡くちを云つて喜んでるところなどを見ると、あまり輕薄でないとは云へまい。

　その上、向ふが娘の自慢ばかりすると云ふのだが、こちらだッても、二階で私かに聽いてると、自分のことをだが冷あせの出るやうないい氣なことにしやべつてるのである。

　輕薄な點に於いても、おしやべりに於いても、公平な目から見れば、恐らく負けず劣らずであらう。が、そんなことは自分にはどうでもいいのだ。ただ困ることには、そんなかげでのいがみ合ひの爲めに、自分を隣りへ遊びにやつて吳れない。二度目の訪問の時には、おッ母さんの目を掠めてほんのちよッとの間を行つたのだが、直ぐ見付けられて非常に叱られた。

『お前は母親を女だと思つて馬鹿にするのだ、ね！これでもお父さんが亡くなられてからは、ね、お父さんに代つてわたしの腕一つでお前を育てて來たのだよ。』斯う云ふことを云ひ出す時の顏と來たら、靑すぢがその瘦せこけた頰ぼねの上や額のあたりにも筋立つて見えて、如何にもヒステリ性をむき出しにしてゐる。無論、さうもならう、さ、おッ母さんの通過して來た人生を思ひやれば。自分のおッ母さんは自分の父の死んだあとで一時父の友人のめかけになつてゐた。それと別れてから、また他の男ののち添ひになつたが、それも亦死に別れであつた。さんざんに苦勞をしたのはしたたらうが、開らけたものには餘り自慢すべき苦勞でないかも知れぬ。が、それを以つてかの女は子に對する權威でもあるかのやうに意張つてるのだ。『なんぼ女だッても、ね、わたしはお前に對しちやア亡くなられたをとこ親も同前だよ。』

『…………』自分は獨り身でゐる爲めにだらう、いつまでも子供扱ひにされてるのだ。はい〳〵、左樣です、御もッともですと云つた風をしてゐなければ、おッ母さんを滿足させて置くことができない。その爲めに、訪問したい隣りをそれッ切り訪問しないのだが——

さうかと云つて、三十づらを下げた男が女にさう途中で馴れ〴〵しく物は云ひかねる。ましてそれを口説くことは？寧ろ手紙を認めて置いて、それをそツと女に手渡して見ようかとも考へたことは幾度もだが、それにも勇氣が出なかつた。

その後、勤めの往きがけにも、その復りにも、門を明けるたんびに雪子さんが見えて呉れるかと思つてるのに、ついぞ見えたことがない。そして、どこへも行つてゐない姉の方ばかりが、いつも待ち受けてるやうにその家の二階の手すりへ出てゐて、

『お歸りやす』など云ふ。『けふも暑うおましたやろ、な。早う服でもぬいでお涼みなはれや。』

『…………』いや、自分は今ぬぐべき服もないままで青田と青田との間を歩いてゐるのだ。人には誰れも見付からないでゐて貰ひたい。殊に巡査にでも出逢つたら――それにしても、『ありがたう』とは答へて置くが、一體そんなことは入らざらんお世話ではないか？人が服をぬがうと、ぬぐまいと、隣りのものから命令して貰ふ必要はない。

それに、をかしいことには、かの女はこちらが家にゐる頃に限り、幾度となく井戸へやつて來て、そのついでに――おツ母さんの言葉に從へば、泥棒のやうにきよろ〳〵と――こちらの家の中をのぞくさうだ。水を汲んだり、洗濯をしたりしてゐるのだが、そこを離れる時きツと一つ何か忘れ物をして置いて、それを取りに來る時に、また家の中をのぞくさうだ。

『あの娘はお前に氣があるのだ、ね』と、おツ母さんは云つた。

『…………』自分は、まさか――ぢやア、いツそのこと、妹の方であつて呉れたらとも答へられなかつた。

『然し氣を付けないといけないよ、あんなにのらりくらり遊んでばかりゐる女だから、折があればお前を喰ひ物にしようとしてイるのかも知れやアしないから。』

『なアに、御心配にやア及びません、わたしは朝鮮米でも外國米でもありませんから。』ふふんと、自分の言葉を自分からをかしくなつて、また吹き出したやうであつた。實際に、自分の眞面目くさつた性分としては、こんなうまいことや

呑氣なことを、夢でなければ、とても云へない筈だと思つた。さうだ、自分は今夢を見てゐるのだ。不斷の窮屈な家庭や世間から拔け出して來て、空想の世界にらくな呼吸をしてゐるからこそ、斯う打ち解けた心持ちで泰平樂を云へる。それが如何にも天へでものぼつて行くやうに愉快だ！

然しおツ母さんの忠告は兎に角實世間の事實であつたのだ。そして世間にありがちだと云ふ、いやな心持ちが伴つてる。乃ち、獨身をんなや後家のひがみ根性で――さうだ、その忠告には角が生えて、見る〳〵おそろしい怒りの顏が現はれた。そして、

『お前は、まア――お前は、まア！』牛のやうな力でかの女はこちらの胸ぐらを取つて、こちらを小突きまわすのである、『そんな子ではなかつたのに――あの女に魅入られたばかりに、人を馬鹿にして、このおツ母さんを女に見替へようとするのだ、ね！見替へるなら、見替へて御覽！お前を取り喰らつてやるから！』

『…………』何だか、――斯う――死んだお父さんがこちらをおツ母さんと見違へて燒き持ちを燒き出して來たやうだ。それには、尤もまた男が女に入れ替つてるが、――人を見替へて寢返りを打つたのは寧ろおツ母さんではなかつたか？　おツ母さんこそお父さんから小突きまわされなければならぬのに――。だから、小突きまわされながらも、自分は人ごとのやうに少しも苦しくはなかつた。

さうだ、お父さんがこちらを――顏がよく似てゐる爲めに――おツ母さんと見違へてるのだらう。

果して怒つてるおツ母さんの顏が寫眞に殘つてるお父さんの顏に見えて來た。そして別にこわい樣子もしてゐない。

『わたしですよ。要太郎ですよ。』斯う聲をかけて、どうか雪子さんと一緒にして下さい、おツ母さんは邪魔をしますけれども――と云はうとした。が、この時には、お父さんもおツ母さんもどこかへ行つて姿が見えなかつた。

いつのまに妥協ができたのであらう？この世は親どもでもさう現金でなければならぬのか？何だか非常に寂しい氣がして來た。が、今一と言云ひ添へて置きたかつたのに。さうだ、こちらも夫婦を一組こしらへたい、そして自分の戀しいのは雪子さんであつて、姉の方ではない。

『どうです、ね、あなたのお勤めはちッとは面白いですか？ わたしの仕事などは毎日少しも面白くないので困りますが――』

『さうです、ね』と、妹は答へたッけ。その姉とは違ひ、努めて東京口調を用ゐようとしてゐるけれど、さうをあたまから强めて一長音に引ッ張ることはしないで、わざ〳〵二の短音に分け、而も第二の音に輕く所謂力點なる物を置くところなどは矢ッ張り大阪流であらう。東京人として育つた自分の耳には不調和だけれども、不調和ながらにも感心にこちらの流儀にならうと努めてゐることが伺はれるだけ利口さうである。『然し、どなたにでもその仕事となれば、さう面白い物ではないのぢやございますまいか？ ただ遊んでをつても詰らんとか、おかねになるからとか、つまり、そんなことで止むを得ず、致してをるのだらうと思はれます。』

『…………』さう云はれて、自分は成るほどと考へた。なか〳〵よく分つてる女だ。

『あの姉より妹の方はまだしも却つておとなしさうで、人間らしく生まれついてるらしい』とおッ母さんも、云つたことがある。

その人間の住まひだらう、小さい二階家が森のかげに遠く見えた。然しその森は自分らの見なれてる廢兵院の森ではない。森のこなたには矢ッ張り青々した田ン圃がある。こんな風景は自分らの住まひする巣鴨町にはない。その爲めだらう、二階の手すりからのぞいてゐるのは戀に饑ゑた姉でもなく、またその妹でもなく、施餓鬼の米にさへあり付けぬ青鬼である。

その角が見える。そのつめが見える。饑ゑ瘦せて飛び出したその目が見える。自分も神經がさう云ふ風に瘦せとがつて行つて、そんなに遠くの物までが見えるやうになつたのか？ して見ると、自分も白米に追ひ詰められて、もう、あの世へ見透しで來たのか？

道理で、父を尋ねて石童丸、高野山ではなく、ここで、死んだお父さんにも會つた。そしてそのあとは如何にも寂しい。けれども、前々通り衣食の爲めに苦勞してゐるよりは、どんなにらくか分らない。氣が夢のやうに輕い。外國米を

人に隱れて買ひに行くやうな恥辱もなく、內地米が五十錢以上になつたのを心配するにも及ばない。

ただ、このあの世にも山があり、森があり、小川が靜かに流れてゐて、而も稻を作つてあるのが少しをかしいが——これは、まだ自分がここに新米であると云ふ、乃ち、まだ米に多少でも關係がある爲めに——自分は斯う考へて、思はずまた吹き出したが、なほこのいい氣ぶんがつづいた——あのさきの世界の風景をもまだ自分が記憶に浮べてゐるのかも知れぬ。それども、また、これはここの實景で、暴動などを起したり、またその暴動に共鳴したりする必要がなくなつてることを示めす爲めのものとすれば、その靜けさが死の寂しみを伴つてゐて、如何にもよく自分に調和した一幅である。

さうだ！　自分はこの輕い心もちで靈魂の世界に來てゐるのだ。靈魂の世界には衣食の料が入らない。所帶の苦しみがない。隱し立てする恥辱もない。いや、恥辱はあつても、それをそれとしてうち明けてしまうから、詰り、ないのと同じことなのだ。だから、素ッぱだかを咎め立てするものもないのだらう。

丁度希臘の昔のやうに、人間のからだまでが神聖になつて、少しも咎め立てや、はにかみをすべき故障がない。融通無碍だ。自分の讀んだ或本に書いて在つたではないか——昔の希臘の少女どもは腰にうす物さへつけないで、神さまのお祭りの時には、皆野外にうち揃つて踊つたと？　そして多くの見物のうちから、われと思つた若い男は身づから進み出て、これと思つた少女に自分の手を提供した。男の手を提供された少女はこれを拒むことができない代りに、手の提供者たるものは自分に於いてその身體も精神も健全であつて、二人の間に生まれる子が必らず國家の爲めに第二の健全國民たる條件をあらかじめ備へてゐなければならなかつた。まして、下界の人のやうに、朝鮮米をさへ喰ふや喰はずでは——？

かかる氣もちは氣もちとしては長い時間をずん／＼進んでゐたが、自分の位置は少しも動いてゐないのに氣が付いた。

低い後ろの山から出て來た道は、田のもの靑さに對して白い砂を敷きつめたやうに見えてるが、少しさきにあるゆる

い曲り角へは一向に達しない。そして自分の向き出しな皮膚が自分の踏んで來た道その物になつてるやうに白かつた。うか〳〵してゐると、どうも見付かりさうなので、ちよツと後ろをふり向いて見たとたん、かちや〳〵云ふサアベルの音が聽えて白い服の巡査が自分の前に立つてゐた。

『こら　貴さまは――』

『…………』自分は夢が覺めかけたやうに驚いたが、直ぐ右手に建つてる一軒家の店さきへ逃げ込まうとした。が、自分の左り手に衣物の疊んだのをステツキの曲つた首のやうに掛けてるのに氣が付いた。誰れの物だか分らないが、絹もので、たてか横かの、白と紺との棒縞の單重だ。若しこれがたての棒じまなら、曾て自分が着たおぼえもあるので、これに一つの俄か思ひ付きを得て、自分は左ほどおぢけもしないで、巡査の方に向つて踏みとまつた。そして割り合ひにおほやうに笑ひながら、『どうも濟みません。實は、これを質に入れたいのですが――』

『…………』巡査もなか〳〵おほやうであつた。『ぢやア、何とかしてあげましよう。』

『…………』自分は少からず感謝の意を目に込めて渠の顏を見てゐた。

『おい』と云つた風に渠はそばなる店の方へあごをしやくつて見せた。

その方を見ると、意外にも、二人の姉妹がにこ〳〵して、店の――田舍のお休み所のやうで、何でもいろ〳〵な駄菓子ががらす箱の中に並べてあり、わらじなどもかかつてた、その――奥から、下駄を突ツかけて出て來た。そしてその姉の方が親切さうに甲斐々々しく自分の手から衣物を受け取つた。

『なんとかしてあげろ。』

『どこにしましようか』と、かの女は惡びれもせず、またこちらを嘲ける風もなく、巡査に馴れ〳〵しく聽いた。不斷からよく知つてるおまはりさんらしい。『福井がええでしようか――それとも、田中屋が？』

『どツちでもよからう』と、巡査はこだはりもなく答へた。

『…………』まさか、夫婦の約束をした仲でもあるまいが、お互ひに近處の質屋を二ケ所とも知り合つてる。して

みると、かの女の家でも、時々持つて行くらしいのだ。福井も田中屋も、實は、自分のうちの通ひつけの一六銀行だ。『それなら、なぜ自分自身で行かない』と云はれさうだ。が、自分は今や別な世界の人であつた。着て行くにも着る衣物がないのが決して惡いことではないやうだし。また、幽靈か何ぞのやうに歩く足もない。

で、ただ巡査やかの女の爲すがままを見てゐた。

かの女は雪子さんの姉さんには違ひないが、この場合、自分には苦しい時の神頼みか、いつもに似合はずありがたい人に思へた。そして姉さんの後ろについてまご〳〵ばかりしてゐる妹を却つて不甲斐なしと見た。ところが、自分も亦その店さきをいまだにまご〳〵してゐるのである。そして考へてゐた、自分の戀しいのはこの女だ、な。いつ云ひ寄つて見ればいいのだらう？　云ひ寄るにしても、先づ直接に當るのがいいか、それともおツ母さんに話をしてからにしようか？　おツ母さんと渠等の母とが仲よくつき合つて呉れると、それこそ渠等の所謂いツちえいのであるが、などと。

胸のあたりがかゆいので自分はそこへ手を持つて行つた。ぽり〳〵云ふ音が自分の耳に聽えたけれども、いい氣持ちであつた。どこかでするヴイオリンか何かの音樂を聽いてるやうであつた。

そのうちに、

『おまはりさんは』と見まわすと、その姿はどこにも見えなかつた。そして娘も店もなかつた。そしてそれが何となく惜しまれたばかりではない。『一體、自分の渡した棒じまの衣物はどうなつた？どこへ行つてしまつた？』質屋へ持つて行つてやると云ふから、そして巡査もついてゐることだから安心して、何の疑ふところもなく手渡ししたのではないか？　その相手がいつのまにか皆どこかへ行つてしまつたのだ。初めから自分は詐僞にかかつてたのか？まるで自分は雲の上に立つて雲をつかんだやうだ。

一ときは心がひやりと、氣がぼんやりとした。けれども、夢だらうからと思つて、今一度その場面を自分に恢復するやうに努めてゐると、果してまたその店さきがあり〳〵と見えて來た。そして巡査は自分に向つて、

『ただ立つてゐてもお勞れでしよう。そこへ這入つておかけなさい』と云つた。

『…………』自分は腰辨だけれども、〇〇省の屬官で、勤勉の點に於いては△△課にその人ありと聽えてる依田要太郎である。課長のおぼえもよくて、やがては俸給もあげてやると云はれた。それを知つてる爲めだらう、巡査もこちらに敬意を表してゐるやうだが、——さりとてなほこちらを罪人のやうに監視してゐるのが私かに氣に喰はなかつた。自分のあとについて——自分を逃げさせない爲めにか——店へ這入つて來て、渠もこちらのそばへ腰をかけたので、『どう致しまして、わたしは暴動にも加はりませんでした。石も投げませんでした』と云つてやつた。

ところが、これも案外であつた。

『わたしもあなた同樣に外國米を貰つてる身ぶんです』と、巡査は問はず語りをした。

『…………』こんなのが大阪で群衆の前に立つて僕等も君等と同じやうに米の高いのには困つてるのだからと云つて、群衆を說き靜めたのだ、な、と思はれた。

『なアに、困るのは』と、意張つてやつた、『働かないからでしよう。勤勉でないからです。』

『然し、どんなに娘が勤勉でおましても』と、不思議なことには、この巡査が俄かに大阪言葉とその口調を使つた、『俸給があがらないのにお米ばかり高くなるのでッさかい！』

『…………』思ひ出すと、それは姊妹の母親が井戸ばたでこちらの母に語つた言葉そッそりであつた。

『あんたンとこのは男はんだッさかい、ほん都合がよろしゆおましようが、うちはをなごばかりで、なアーー』

『…………』そのをなごとか、あなごとかを一匹欲しいのである。『どうです、少し安く負けて貰へますまいか？』

どうも——自分が云ひ出す言葉と云ひ、口調と云ひ、どうも、役所に於ける自分の周圍の人々の利口さうな言葉であり、口調である。そして自分の不斷の習慣にも心持ちにも叶つてゐない。自分はさう大膽になつてゐられない性分だのに。

『おい〳〵、負けろと云つたら負けろ！』斯う一人の愉快な同僚は、無理に叫んで見せた。やす萬年筆を役所へ賣りに來た男があまりにひやかされて、荷の箱を持つて戶を出て行かうとした時にだ。萬年筆屋が踏みとまつて、それでもこ

ちらをまだ未練がありさうに見てゐるのに向つて『然し行くなら、行け！　二度と再びこの敷居はおれがまたがせやアしないぞ！』

『ふ、ふん』と云つて、他の同僚どもは笑つた。

『どうか少しお手やわらかに――』

『ちやア、負けろ！　その代り、皆で一つづつ買つてやる。』

自分の合成金ペンやペンぢくもこの時おつき合ひに買つたのであるが――。

『それもいツそのことに一緒に質入れしたらどうです』と、巡査は云つた。

『…………』馬鹿！　そんな安ものは、雲助がふんどしを質に入れるやうなものではないか？『それでこそおれも眞ツばだかけい――は、は、は、はア！』

自分で自分の笑ひ聲に氣が付いてちよツと目をさますと、自分の隣りにおツ母さんの寢てゐるのが見えたやうであつたが、なほ自分はいい心持ちであつた。

やがて自分はあの姉妹の家とは反對の隣りなるおほ屋さんの畑に出てゐた。狹い畑ではあるが、なすびが澤山成つてゐる。その一つびとつが、よく水のまわつてるせいか、色つやがいい。八百屋で買つたら、どうしても十で四錢はするだらう。

そのなすびを――誰れも見てゐないやうであるから――少し盜んでやらうと思つた。そして手を出す前に自分の横手を見たら、矢ツ張り今の巡査が自分を監視してゐるのであつた。

自分はそのてれ隱しにだらう、わざとづか／＼と畑の中に進んで行つて、なすびの一つびとつに小さい小學生徒の帽子のやうな物をかぶせてゐた。

『いい思ひ付きです、な』と、巡査もまじめに贊成した。

『斯うして置けば色が褪せないのです。蟲も附かないのです。』

『結構です、わたくしはあなたの今月のお家賃を五圓に負けてあげます。』いつのまにかおほ屋の寛大なおかみさんも出て來てゐた。さうして呉れたら、不斷の望み通り一割り下げになる。

ところが、その畑は水田に變じた。そしてまた白砂のやうな道が現はれた。道ばたにはお休み所がある。自分はその中に矢ツ張りはだかであつた。

『衣物をどうした？　衣物をどうした』と、今、おほ屋さんに見られたあまりの恥かしさに聲を擧げて叫んだ。

そこへ丁度自分に聲をかけた者がある。――

『田中屋さんで云ひわけして、やう〳〵これだけでけました。』

『…………』質の工面が着いたのであつた。が、金を持つて來たのは、誰れかと思つたら、妹の方だ。『ありがたう御座います。ありがたう御座います。これでわたしも助かります。今月の米屋の拂ひがこれでやツとできますのです。』われ知らず自分の上官に向つての如くぺこ〳〵とあたまを下げてゐた。

五圓札らしいのを二枚手渡しされて、そこを出ると、曾て近在を旅行した時におぼえのあるやうな宿場のはづれであつた。割り合に小奇麗な藁ぶき家が兩がはに立ち並んでゐて、その向ふの方には半鐘をつるした火の見ばしごの立つてゐるのが見える。

兎に角何十軒かの人家の並んでるこんなところを、こんな風で通つて行かうとする自分だのに、これを誰れも怪しまないのが不思議であつた。

日は矢ツ張り照つてるやうだけれども、自分にはうすら暗いので、この自分の風體が分らないのだらうか？　それとも、矢ツ張り、自分は心だけあつて、形がなくなつて見えるのだらうか？

それにしても――一體、あの呑氣な巡査は下界のであつたらうか？　それとも、また自分よりも一層超脱した世界のか？

返り見ると、今自分の休んでた店がまだ見えてる。あすこの娘どもも亦不思議ではないか？　少しもこちらを怪しん

だ様子がなかつた。依田その人か何だか分らぬものに大金を持つて來て、その責任を平氣で受ける氣か？若し自分が自分でなかつたら、どうするだらう？　自分が幽靈であつて、質物があとに煙となつてたら？・若しくは、自分が泥棒であつて、あの品物が贜品だつたら？

さうだ、――自分のたて棒じまの衣物は既に、とツくの昔、一六銀行で流れてしまつたのだに！それをどうして自分が持つてゐたか分らない。

『こりやア、ぐづ〳〵してゐちやア――』誰れか一人、同僚のうちに人の財布を盜んだものがあつて、自分にまでもその嫌疑がかかつて來さうなところに臨んでゐた。取られた本人は――同僚のうちの誰れだかその人をよく確かめられないが、――段々と他いものから誰何して自分の身へ近づいて來る。『さうだ、ぐづ〳〵してゐちやア――』この時、自分は本氣になつて逃げ出さうとしたので、自分の盜んだことがばれてしまつた。『しまつた』とは思つたが、自分のふところへ渠がいきなり手を突ツ込んだ時には、品物がなかつたので自分は安心して踏みとまることができた。

その代り、例の店さきからは、皆が出て來て、こちらを果して怪しさうに見守つてる。それだのに、自分は逃げようとするからだが少しも動かない。いや動かないと云ふよりも、こちらが逃げようとすればするほど反對に向ふの方へ引きつけられる。

自分は何だかおそろしい力を感じた。何か大きな物があつて自分をあたまから抱きすくめて、獨りでにすうツと宙に引きずり上げて行く。それが不安で溜らない。

すると、その力に向ふの妹も引かれてゐるかして、うへの方へあがりながらこちらへじり〳〵と接近して來る。そのまじめな顏が玉子なりにふツくらして、鼻の低いところに却つて愛嬌があるのを雪子さんだと思へたのは、自分の間違ひであつたことが分つた。矢張り見ず知らずの、全くの他人だ。それが今しがた打ち解けてゐた樣子とは打つて變つて、俄かにこちらを不審になつて來たのだらう、じツとこちらをのぞき込むやうにして來る。

自分には――どうもこの女に巡査がのり移つてるのだと思へた。今にも接近したら、かの女が自分を捕縛するのでは

ないかと云ふ恐れが刻一刻自分に加はつた。

恐ろしいが、逃げられない。そして自分はます〳〵うへからの抱きすくめを感じる。從つて、その力がかの女をもます〳〵こちらのそばへ近づけて來る。その恐ろしさと動きの取れない爲めとで、自分は『うーん』と呻つたやうである。すると、ぱツとその場面が消えてしまつたが、一旦消えた場面が直ぐまた現はれた時には、自分は矢ツ張り例の白砂のやうな宿場道に立つてゐて、向ふから妹の方がちよこ〳〵走りに追ツかけて來るのをきまり惡い氣で待つてゐた。

『濟みませんがそのおかねは返していただきます。』

『…………』かの女がさう云ふだらうとは自分もその前からちやんと分つてゐた。自分はかねを――からだ中に、しまふところもないので――まだ兩手に一枚づつ載せて、兩方の親ゆびで飛ばないやうに押さへてゐたのである。自分はこの自分のざまを見て淺ましくもなつたけれど、かの女の世間並みな輕薄を一層淺ましく感じた。雪子さんも矢ツ張りこんな人だらうか？　若しさうなら、とてもこの戀は成功しない。

可なり冷やりとした風が吹いてゐたが、並み立つ人家の薬ぶき家根にぽつ〳〵生えてる草の葉は少しも靡いてゐないのが不思議だ。走つて來た女の袖や裳すそに餘ツぽど氣は引かれたけれど、それも風には當つてゐない。而も自分らの立つてるところは、丁度人家をはづれて、兩がはが田圃になつてるのに！

『一旦お渡しは致しましたけれど』と、かの女の言葉はつづいた、『あんたはどこのおかたとも分りまへんので、若しあとで間違ひでもでけたら困りまツさかい。』

『…………』畜生！　かの女は今やその姉そツくりの言葉を使つてる。妹までが上がた贅六の輕薄なよそ行き言葉になつてやがる。

おれはお前の隣りに住んでるものではないか？　間違ひのできツこなどがあらう筈はないではないか？　それでもなほそんなに薄情な出かたをするのか？　それなら、それでもいい！　もう、お前らとはつき合ひもやめた。おれの戀も

すツかりさめた！

『要太郎　要太郎！』

『…………』雪子さんが自分を呼びツ放しにするのはおかしいと思はれた。

『要太郎！』

『…………』また呼びツ放しだ。要太郎さんと云へ、こちらも雪子さんと云つてやつてるではないか！

『要太郎！』

『…………』なんだ、おツ母さんの聲らしい。

ふと、自分は目をさましたのである。そして自分が眞ツぱだかであると云ふ今までの壓迫觀念を脫することができて、やツと先づ安心した。壓しつぶされてるやうな自分の呼吸が全く自由になつてるのに氣が付いた。自分は靈魂の世界に行つてたのでもなく、またおぼえのあるやうな、ないやうな田舍の道に立つてたのでもなく、いつもの蚊屋の中ささうに在つて、おツ母さんのそばに寢てゐた。そしてまだ横になつたまゝこちらを向いて笑つてゐるおツ母さんも機嫌がよだ。

蚊屋のそとには、明けがたの光が戸のすきまから這入つてゐて、電氣の十燭光を早く消えろ消えろと云つてるやうだ。もう、自分らがいつも起き上る頃になつてる。そして直ぐまたけふの出勤のことが先づ心に浮んだ。

『君の勤勉に免じて、やがて俸給を上げるやうに上申してあるから』と、こないだ、みやげを携へて課長をその宅へ訪問した時に課長が云つた言葉も思ひ出された。

『どうかよろしくお頼み申します。さうなれば、うちの母もさぞ喜びますでしようから――』

『夢でも見たのだらう』と、おツ母さんは云つた。その言葉が、けさも亦寢起きからいつも通りはき〳〵してゐるのにつれて、自分もまた相變らず心のさわやかさをおぼえた。そして直ぐ、これはオキシヘラの爲めに酸素を十分吸入したのだと思つた。自分の叔父が入らないと云つてわけもなく吳れたこの機械を、けさも昨夜から自分が手あしにつけて寢

てゐたのだ。これを自分はまだ横になつてるままで取りはづしにかかると同時に、かの女の言葉はつづいた、『何かむぐむぐ苦しさうに云つてたから。』

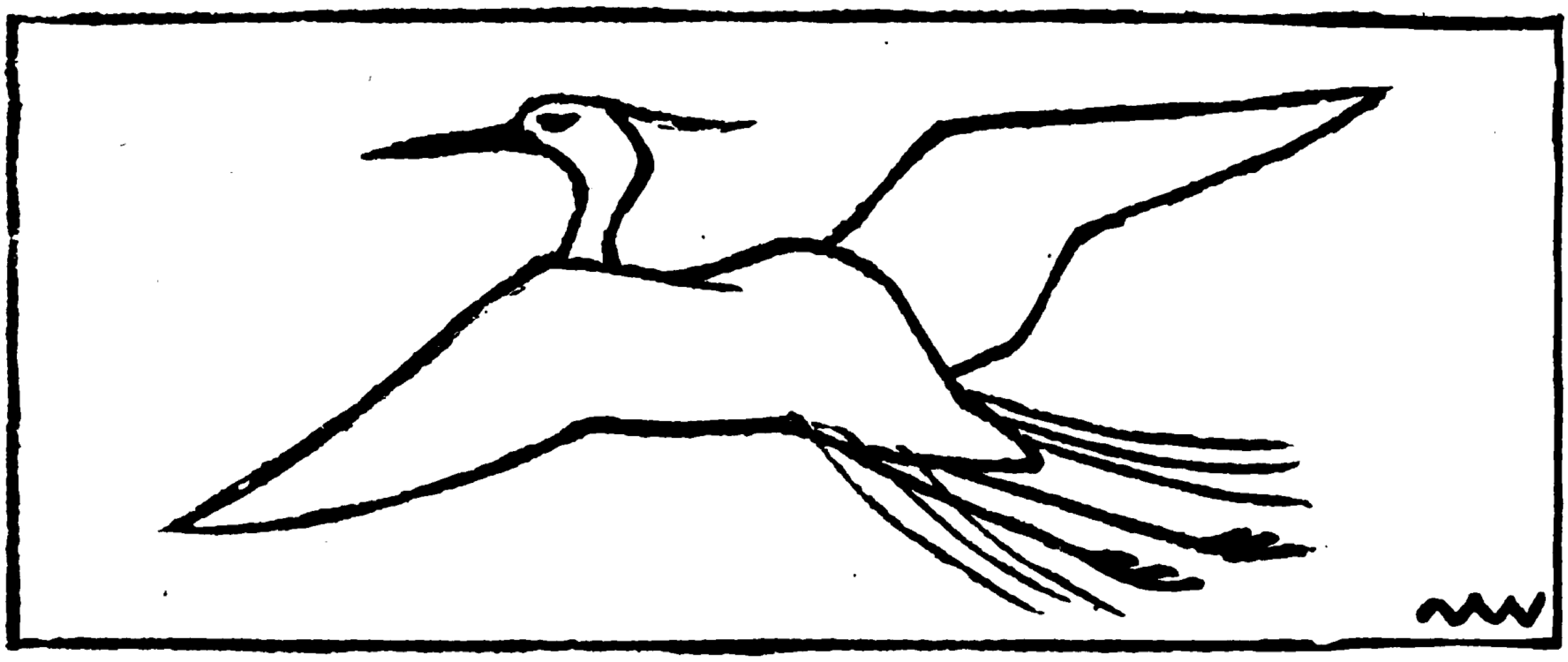
『はツきりと分りましたか?』

『何だか口をむぐ〳〵させて』と、かの女もまだ笑ひがほであつた、『何だかちツとも分らないが、苦しさうだツたから。』

『…………』分らないで仕合せだと思ひながら、『なアに、くだらない夢でした』と、あツさり答へた。が、自分はなほ私かにその夢――殊に、その最後の場面――を再び思ひ浮べて、實際にさめてる自分自身にもいやアな寂しみをおぼえた。

自分のこの健康なからだにだが、遠くて近いやうな、そしてまた近くて遠いやうな、雪子さんと自分との間をまだ〳〵水くさくしてゐる體裁や利己心やが多いのを感じた。同時に、また、その日ぐらしの貧乏人のやうには左ほど困つてもゐないのに、われからあせつて、外國米などを恥ぢを忍びながら買ひに行つた自分らの淺ましい根性が自分の今の正直な夢にそツくり現はれたのだと思つた。

――大正七年九月五日――



山上の雷死

田山花袋

二人の學生が向ふ側の溪谷の小さな溫泉場から、二千米のS岳の頂上近くにあるS溫泉に來た時には、全く思ひもかけない、驚きに目を睜らずにはゐられなかつた。人々が右往左往に織るやうに往來する。そしていつれも何か異常の事件でも起つたやうにいやに昂奮した顏をしてゐる。山合からは白い溫泉の湯氣が凄しい勢で五六十尺以上も高く噴きあがつてゐるのが見渡される。熱湯の瀧は何條となく樋から樋に傳つて流れ落ちてゐる。そして無數の群集が列をつくつて、折れ曲つた山路を蟻の行列のやうに登つて行くのが黑く連つて見えた。

全く思ひがけない混雜、雜遝、不整頓がその前にあつた。何等か不可思議の力に、または何等か大きな異常な事件に全くそこにゐる人達は引寄せられて了つたやうに、またそれにすつかり魅せられて了つたやうに、顏の輪廓の線は緊張し、眼の光はかゞやき、耳はあらゆる微細な響をも聞くやうに見えた。一種魂をそゝるやうな囁きが一つになつて集つて、それが重苦しくその一帶の平地を壓した。犬までがきよときよと駈け廻つて、頻りに空に向つて吠えた。

もし虛心平氣なすぐれた畫家が此處にあつたならば、何をも忘れて、この世の常で

ない、世間ではとても見ることも出來ない、外面は靜謐で內部は夥しく沸騰したあたりの光景を描いたであらう。そしてその畫の持つた印象は、滅びずに永久に人を動かしたに相違ないであらう。しかしいかなる天才の畫家も、恐らくは或は落附いてそれを描いてはゐられなかつたに相違なかつた。忽ちその身もその動搖、混亂、不整の中に捲き込れて行つて了つたに相違なかつた。その平地にゐる多くの群集と同じやうに――。

『變だな――何うしたんだ、一體――』

『本當だな』

かう二人の學生は小聲で囁き合つた。

テントの周圍を駈け廻つてゐる子供等、鍋や釜を大勢一緒になつて洗つてゐる上さん達、洗濯をしてゐる女達、ぢきその前からぞろぞろ出て來る銅色をした裸體の人の形態、深く澄んだ空氣の中にレリイフか何ぞのやうに浮き上り盛り上つて見えてゐる靑い色の褪めたペンキ塗の建物――『何だか、舟のやうな家屋（うち）ぢやないか』ついさつきから下から指してのぼつて來たことをかれ等は思ひ出した。

何うしても今まで眼にしてゐだ世界とは思はれないやうな特殊な氣分と空氣とがかれ等を壓した。

かれ等はぢきその近くにゐた一人の上さんに訊いた。

『何うしたんです？一體』

『…………』

何も言はずに、こんな難有い不可思議がわからないかといふやうな顏をしてその上さんは此方を見た。

『何うしたんです？一體』

學生の一人はもう一度かう言つて訊いて見た。

『あれを見なされ！』

上さんはさう言つて、山の上に續いた黑くなつた群集を指した。二人の學生もさつきから、それと氣はついてゐたが、

から指さゝれて凝つと眼を据ゑて見た時には、長蛇のやうに黒くうねつてつゞいて行つてゐる群集の上に、小さな古い堂見たいなものがあつて、そこに谷を越した夕日が明くかゞやいてゐるのが見えた。空氣の故か、何だかそれが金色の明光を放つてゐるかのやうに見えた。

『あれが何うしたんだね？』

『勿體ねえ！　お前さん方あれを知らねえのか。生佛さまが彼處に御座るだ！』

『生佛が？』

『そして皆なあゝしてお參りに行くツて譯かね』

馬鹿々々しいと云ふ語氣をして一人の學生は笑つた。

一人の方の學生はかう問ひを重ねた。

『皆なの罪を負つて、あの生佛さまがあそこで涅槃にお入りにならつしやると言ふんだ………。今の世には、こんな難有いことはねえ。お前さん達も行かつしやれ、そしてな、難有いお說法を聞いてきなはれ。あの生佛さまがお出現になつてから、こゝは、この溫泉場だけは、淨土になつたぢや、極樂になつたぢや』

その熱心な調子は學生達を笑へなくした。かれ等は默つて步いて行つた。不思議はそれに留らなかつた。その溫泉場に入つて行くにつれて、その所謂生佛に對する渴仰のあらはれは其處にも此處にも見えた。ある女は洗濯をしながら、をりをりその手を留めて、手に持つた珠數を繰つて禮拜した。ある男は路傍に立つて山上の堂の方に向いて合掌した。癩病らしい男は大地に跪いて禮拜して涙を流した。

此の溫泉場には旅舍はなかつた。そしてその代りに事務所がつた。七月十日から九月二十五日まで。それから後は全く深雪に蔽はれて、あくる年に再び戸を明けるまでは、誰もこの山の上にやつて來るものはなかつた。ところが、今年事務所の老人が來て驚いたことは、自分達より先に、その上の堂――それは堂と言ふよりも、七八年前に硫黄を採取す

る人達の住んで起臥してゐたところで、それもその事業の思はしくないために全く捨て去つて了つたものであるが、そこに一人の金緣の眼鏡をかけた、珠數を腕にかけた、眼光の烱々とした、俗ともつかず、僧ともつかないものが唯一人趺座してゐたことであつた。

かれは默して口も開かなかなつた。恐らくは誰もかれが何處から來たか、また何時そこにやつて來たかを知らなかつたであらう。また如何にしてかれが其處に生きてゐたかをも知らなかつたであらう。事務所の老人は話した。

『初めは、可哀さうだと思うて、私が米を一日おき位に持つて行つてやつたでさ。……それがなあ、何時の間にか、あんなに大勢に大騷ぎをされるやうになつた……。何でも、始めは女が行つたでさ。それから何でも、M縣の大金持の衆が行つたでさ。その衆は夏になるといつもやつて來る方だがな。それが一度ですつかり信者になつたぢやな』

學生は訊いた。

『それで說教でもするんですか』

『するどころぢやない。それはえらい說教ぢやさうぢや。大膽な說教ぢやさうぢや。世間の罪惡と言ふものに對して一歩も假さない說教ぢやさうぢや。それに、大きな聲で、丸で、鐘でも撞いたやうで、その時の顏の恐ろしさといつたらないといふことぢや。不動明王の前にでも出たやうぢやさうぢや。それに、近い中に死ぬと言ふぢや。世間の人達の罪を負つてそして死ぬから、それを見てをれと言ふのぢや』

『ふむ………』

かう二人の學生は言つて考へた。

暫くして、

『貴方は行つて御覽になりましたか』

『わしはまだ行かん。…………わしのやうな罪の多いものはとても救はれさうにもないぢやでな』ちよつと笑つて、『默りくさつてゐる男ぢやつたがな』

『何處から來たかといふことはつひにわからんですか』
『わからんな……。どの近所のものではないといふことだけはわかるが、何うしてこんな山の中にまぐれ込んで來たか私も始め度々きいて見たが、默りくさつてついぞ話しをらん』
『ふん……』
また學生達は考へて、
『金緣の眼鏡をかけてゐるのは面白いな。坊主でもないんだな』
『さうだな……一つ行つて見るんだな』
こんなことを二人は言つた。
そこでかれ等は本籍を言ひ、ゐる室をきめて貰い、自炊の道具などを借りて來た。其處でも此處でもその生佛の感化は著るしかつた。かれ等のわり込んで同宿させて貰つた旅客は、中年の紳士で、何でも東京の方の客だつたが、その人も現に行つて見て、不思議の感に打たれたといふ話をかれ等にしてきかせた。『僕も始めは笑つて行つて見た一人です。何處かの山師の坊主が食ふに困つてやつたこと位に思つて馬鹿にして行つて見たです。ところが、さうでない……。全く不思議です。人間もあそこまで行くと、あゝなるものかと思ひました………。說法をしてゐるのを聞いてゐるとその男が言つてゐるのではなくて、そのかげにある大きな力のある尊い物がゐて、そしてそれが人間に向つて、人間の罪惡、人間の惡德、または人間の醜い姿を一々指摘してゐるやうな氣がしました。それに、第一、かれは近い中に死ぬると言ふのです。それを見て居れと言ふのです。人間の罪惡を負つて、代つて自分が死ぬと言ふのです……。それなどが大勢の心を第一に支配したんですな……。』かう言つてその紳士は思ひ出すやうにして、『それに、言ふことがいかにも立派だ……本當だ……。人間の考へてゐることを、またはやつてゐることを、ちやんと見透してゐる。一々本當の、思ひ當るやうなことばかりです。肺腑をつくやうなことばかりです。確かに不可思議です』
『何んな男ですか、?』

『立派な男です。體格も大きい、眼光も爛々としてゐる。鬚がかう一面に……』と手眞似をして、自分の顏を撫でるやうにして、『一面に生えて白く垂れてゐる。信じたものには、說法してゐる最中に、後光が見えるなどと言つてゐますが……』

『それは面白い。是非行つて見ませう』

かう言つて學生達は、山路につかれた脚胖をそこで始めて脫いだ。

折れ曲つた山路の群集をわけて、その堂まで行つて說教を聞いて歸つて來た二人の學生は、最早面白いとか、めづらしいとか言ふ心持ではゐられなくなつてゐた。驚くべき不可思議を見たといふ心と、ある大きなものに渴仰する念と、人間の罪惡に恐れ戰くやうな念とが一杯にその體中に漲り渡るのを覺えた。爛々とした大きな血をそゝいだやうな眼、それがかれ等の眼前に歷々とちらついて見えた。その眼にはあらゆる世間の惡德または罪惡または虛僞に對する憤怒が燃えて生きてゐはしなかつたか。またはは人間の根本の如何ともすることの出來ない運命に熱い反抗を見せてはゐなかつたか。『一方に金持が金を貯めて持つてゐる。持つてゐるといふことは罪惡である。それだけで既に死に値してゐる!』かう言つた時にかゞやいたその眼光の中には、かれがさうした人間の惡德に無限に苦められた醫やすべからざる憤怒が充たされてはゐなかつたか。また、『妻は夫を欺き、親は子を捨て、女は男を惑はし、同胞相姦し、友人相陷れるやうなこの世の中に……』と言つた時のあの眼のかゞやきの中には、あらゆるさうしたかれの內部の憤怒があらはれては來てゐなかつたか。

『不思議だ……』

『本當に不思議だ。あの眼がちらついてしやうがない。あの聲が耳にのこつて忘れられない』

『君も、さうか。不思議なこともあるものだな』

『あれは一生忘れることの出來ない光景だ……』

『本當だな………』

かう言つて二人の學生は深く考へながら歩いた。二人は昨日まで滯在してゐた小さな谿谷の溫泉場を思ひ浮べた。かれ等には今はそこは人間界の底の底にあるやうに思はれた。さうした考へなければならないことは深く藏して置いて、むしろそれに觸れることの辛さのために傍に放つたらかして置いて、平氣で無意味に日を送つてゐる人達の醜さと慘めさとがありありと見えた。此處とは何うしても同じ世界とは思はれないやうな氣がした。こゝから比べると、その谿谷の溫泉場の人達の顏は何んなに貧弱であつたらうか。何んたに蒼褪めて勞れて見えたであらうか。また何んなに低級なあはれな生活をしてゐたであらうか。かう思ふと、自分達のゐる學舍の慘めな生活が一層慘めに、さながら『餓え疲れた餓鬼』の縮圖のやうになつて見えた。

かれ等はまた昨日登つて來た嶮しい路を思ひ浮べて見た。それはとても人間のやつて來られないやうな路であつた。晝も夜のやうな密林が深く續いた。日光らしい日光も洩れて來なかつた。谷川は深く底の方で鳴つた。

かれ等は何遍あとへ引返さうとしたか知れなかつた。時には胸を衝くやうな嶮阪に逢つて喘ぎ、時には深い谷の中に路を失つて絕望の聲を擧げた。あるところでは、『もうとても駄目だ。とても行かれない……。路といふ路なんかありやしない。もう引きかへさう……』かう一人の方は言つた。一人の方も、とてもこれは駄目かと思つた。かれ等は行かうか引かへさうかの二途に迷つて、暫らく崖の下の岩に腰をかけて休んだ。

『でも、折角こゝまで來たんだ。もう少くとも三分の二は來た。此處で歸つて了つては、折角こゝまで艱難を經て努力してやつて來たことが冗になつて了ふ。いかにも殘念だ……。それに、人の全く行けない溫泉ではない。この險を侵して行き得る人もいくらもあるんだ……行かうぢやないか』

かう一人が言ふと、

『行かう!』

かう他の一人も應じた。そしてかれ等は再び路を谷と谷との間にもとめて、そしてやつて來たことを思ひ出した。そ

してその勞苦が、普通でなかつた勞苦が、かうした不思議な溫泉場や、そこにゐる熱狂した人達や、長蛇のやうに山の堂に連續して詣でゝ行く群集や、爛々とした大きな眼のかゞやきや、鐘を撞いたやうな高い淨い聲の下にかれ等を伴れて來たことを思ひ起した。かれ等はいよいよ不思議な氣がした。かれ等の身は緣があつて、その低い低い世界からかうした高い淨土に引あげられたやうな氣がした。

『本當にさうだ……あの生佛さまの仰しやる通りだ……。そのために、私達はこれまで苦んで來たのだ。今日から思ひ改めやう。……必ず思ひ改める』

こんなことを言つてゐる人達はそこにも此處にもゐた。誰一人として、その生佛の功德を說かないものはなかつた。人達は女も男も用事を放つたらかして、朝から山の上に登つて行つた。

二人の學生は益々その特色ある溫泉場のさまに心を惹かれた。或時にはその大きな船に似た家屋が、すつかり深い霧の中に埋められて、丸で大海の中にでもゐるやうな心持になることもあれば、凄じい雷聲が山の一角から起つて、天地が今にも覆るかと思はれるやうな恐怖に全身を襲はれることもあつた。そこではすべ心が澄んで、張りつめて、疲れてだらけてはゐられないやうな氣がした。

澄んだ空氣の中に、白いくつきりした色を見せて、怒號して空に向つて迸つてゐる噴泉は、をりをりかれ等にある暗示を與へた。その坌涌にも、矢張山の上のその僧の憤怒に似た形が感じられた。

ある日、そこからさう大して遠くないS岳の噴火坑を探ぐりに行つた時には、かれ等は黌舍で教はつた種々の岩石やら高山植物やらを彼方此方にさがして、火口壁のあたりを其處此處と步いた。そこは溫泉場よりも、その溫泉場の上にある堂のある山よりも、更に高く碧い空に聳えてゐるので、その堂とその堂に向つて步いて來る人の群とがそこから少さく黒く見えた。

勞れて岩石に腰を下した二人は、默つてその堂を見下した。

『不思議な氣がするねえ。あの堂に、あゝした人間がゐると思ふと』

から一人の方が言つた。

『本當だ……』

『あゝした人間も、矢張、僕等と同じなんだからな。同じ血も流れてゐれば、同じ心や同じ感情も持つてゐるのだからな。僕等にだつて、場合に由れば、あゝした心の形になることはないと言へないからな』

『それはさうだ……』

『何の意味もなしに、實際的方面の何の要求もなしに、あゝして說法してゐるのだから不思議ぢやないか。そこがまた人を引きつける力が出て來る處ぢやないか。實際、死の近づいて來てゐるのを自分で豫感してそしてあゝして說法をしてゐるのかも知れないからな』

『實際世間の困難や不如意を餘りに多く嘗めると、あゝした氣分になるかも知れないからな……。何うしたつて、さうした鬱積した氣から起つた說法でなくつては、あゝまで人を引きつける譯はないからね』

『曾てはこの山だツてあの佾のやうに凄じい怒號をやつたことがあるんだからね』

『天然だつて、人間だつて、同じことだ。一つも違ひやしない』

から言つて深く思ひ當つたやうに一人の方は考へに沈んだ。

一人はふと思ひ附いたやうに、

『さう言へば、あの生佛は、これまでにも彼方此方で、多少の奇蹟をやつて來たといふ話だね』

『そんな話をきいたかえ?』

『昨夜、おそく湯に行つてゐると、その話をしてゐた人があつたよ。湯の中はランプ一つしかついてゐないから、それを話してゐた男は何ういふ人だつたかちよつとわからなかつたけれど、何でも白鬚でも生えてゐる老人らしかつたよ。M縣では知つてゐるものがかなりにあるといふことだよ。何でも去年はPあたりの山村にゐたさうだ。そして矢張大勢

の信仰者を率ひてゐたさうだよ』

『さうかね。それは初めて聞いた。』

『生れは何でもF縣の梁川あたりの山の中だつて言つてゐたよ。陸軍の中尉あたりまでなつて、戰爭にも行つたことがある男ださうだ……。昔から不思議な、宗教めいたことばかり言つてゐるやうな男だつたつていふことだつた。二三年前には、仙臺で大道說法をやつて、信仰者が大變出來て、警察から取締られたことがあるさうだよ。新聞などにも隨分書かれたものださうだ。しかし、決して惡いことはしないから、警察でも何うすることも出來ない。實際、生佛かも知れないんだけれども、さういふものは取締上非常に厄介なので、縣では成るたけ自分の縣に置かないやうに、他縣へ行つて貰ふやうに、やうにとしたんださうだ……。石の卷あたりでも、隨分信仰者が出來て騷ぎだつたつて言ふやうなことを話してゐたよ』

『それは面白いな』

『だから、事務所の老人の話では、丸で後も先もなささうなことを言つて、ひよつくりこの山に出現して、急に浴客の信仰を得たやうに言つてゐたけれども、さうぢやないらしいよ。かね〳〵信仰してゐた信徒が、かれのあとを追つて、この山の上まで集つて來たといふ形も大いにあるんださうだ』

『さうだらうな……。それは面白いな。何故君はそれを今まで話さなかつたんだ？』

『だつて、昨夜は君は寢てゐたし、今朝はちよつとその話を忘れてゐたからね……』

『さうかな……』一人の方は考へて、

『それぢや別に、僧侶ツて言ふ譯でもないんだね』

『僧籍にもゐたことはあるやうなことを言つてゐたよ。何でも佛教ばかりではなく、耶蘇教もやれば、哲學もやつたらしいことを言つてゐたよ。何でも、社會主義者の僧侶の中にもその名があつたつて言ふことだ……』

『兎に角、知識は豐富に持つてゐる人に違ひない。外國と日本の今の事情にも決して昧くない。それは、この間、ちよ

つときいただけでもわかる』
かれ等はそんな話をしながら噴火坑から下りて來た。
かれ等は折れ曲つた山道の雜遝を思ひ出した。またその荒れ果てた山上の堂をも思ひ出した。かれ等も矢張毎日のやうに其處に出かけて行つた群の一人であつた。敗屋の中に、周圍に一杯に滿ちて渡つた群集、大きな冴えた金石のやうな聲、難有いと思はれるところに行くと、老若男女は皆な珠數を繰つて、稱號を唱へて合掌した。ある時には、餘りに深く感動した群集は、家の外から、周圍から皆ドシドシと狹い堂の中に押詰めて行つて、その僧の立つてゐる裾のあたりを取卷いて熱狂したさまなどをも二人は頭に浮べて見た。

ある晴れた日の午后であつた。テントの張つてあるところから大きな浴槽に通ふ廣場——正面に例の高い噴泉の白く發涌してゐるのが見えて、熱湯が湯氣を立てゝ縱横に流れてゐるところに、一人の白髪の老婆の珠數を持つたまゝ跪いて泣いてゐるのを中心にして、男や女や、荒れた唇や、蓬(をどろ)なした髪や、半裸體の銅色した肌や、粗い縞の浴衣やらが取廻いた。斜にさし込んだ日は、赤く其處に立つてゐる肥つた田舎者の顔を照した。
『生佛さまの臨終はもうお近きになつた……もうあの難有い御説法も、あの難有い御聲もきくことが出來なくなる……あゝもう闇ぢや……あゝもう闇ぢや……元の闇に世界はまたなつて了ふぢや』
から半ば泣きじやくりながら、跪いた老婆は何遍となく繰返した。『あゝもう闇ぢや……』といふその言葉が、餘り度々繰返されるので、終には一種の調子を帶びて、それが『あゝでア、あゝだア、だア』と聞えた。そしてそれを繰返す度に涙はぽろぽろと大地に落ちた。
その老婆は今までいつも山の上の堂の中に見出されたすぐれた渇仰者の一人であるといふことが不思議な動搖と空氣とを四邊に齎らした。噂はそれからそれへと傳つて行つた。
老婆が涙の間に絶え絶えに話すところに由ると、その生佛さまは、去年自分等の住んでゐる地方から忽ち姿を躱して

了はれた。『もう世は末ぢや。末法の世の中ぢや……。私の力では何うすることも出來ない。』から仰しやつて、そして何處に行くといふことも仰しやらずに搔き消すごとく姿を躱して了はれた。そのため、村は闇になつた。世界は闇になつた。私達は再び元のやうに、父子相そこない、君臣相戰ひ、兄妹相姦し、利慾の下に人間同志が互にその肉を食ふやうな闇の世に戻つた。そのため私達は何んなに、生佛さまの踪跡を探がして歩いたか知れなかつた。私達は子供が親をさがすやうに、家來が主人を慕ふやうにしてそこからそこへとさがして歩いた。この世間に居られるものならば、草を分けても探し出さなければならないと思つた。ところが生佛さまはいつかこの山の上に來て居られた。それと知つた時には、私達は何んなに喜んだことか知れなかつた。誰も彼も皆なその跡をお慕ひ申して、險しい山阪を踰えてこのSの溫泉場に登つて來た。しかし險しい山阪も何であらう。若い者の容易に登れない山路も何であらう。生佛さまに再び逢ひ奉らんがために、老いたものも、女も、幼いものも皆なそれを踰えてやつて來た。そして光明はまた再び其處にあつた。渇仰隨喜の涙は瀧津瀨のやうに其處に流れた。しかし、生佛さまは幾日かの滿願の時を待つて、遂にあの世にお歸りになるといふお言葉である。それでもまだ私達はその清淨な御聲を聞き、つよい正しい御眼の光を見奉つて、この汚れた心を淨くすることが出來た。しかしもう滿願の時は近づいた。臨終に入らせられる時は近づいた。涅槃に入らせられても、生佛さまは常に私達と一緒にあると仰せられるけれど、それでももう再びあの御聲は聞くことが出來ない。あの御眼は見ることが出來ない……………。『それでかうして泣くのぢや』と言ふことであつた。

それを聞くと、信仰者は、一齊に『南無阿彌陀佛』と言つて皆な珠數を繰つて大地に泣き伏した。

老婆の步いて行く跡には、稱號を唱へる聲と、珠數を繰る音と、大地にひれ伏す氣勢とが到るところに續いた。炊事場の近くに老婆の立留つた時には、**米を炊いてゐるものは、その米を置き、水を汲まうとしたものはその柄杓を下に置いて、そして皆その周圍に走り集つた。**

大きな家屋の隅の隅にその室を持つてゐる二人の學生の耳にもその噂はきこえて來た。二人が急いで出て見た時には、その群集に取卷かれた老婆は、午後の日を一面にその後に受けながら、靜かに阪を賣店などのある方へと下りて行く、

ところであつた。時々、老婆の何か言ふのにつれて、群集は大きな聲を擧げた。

二人はあとをついて行つた。

何處の家からも人達が皆なぞろ〳〵と出て來た。群集の圈は次第に大きくなつて行つた。時には歩き、時には留り、また時には調子のついた『あゝだア、だア、だア、だア』といふ聲がきこえた。自暴になつたやうに夢中に珠數の手を高く擧げてそれを揉んでゐる男の顏からは汗がだらだら膏のやうに流れた。

『何んだ！山の上の男が今死ぬんだ？それは見物だ。』

こんなことを言つて、急いで向うへ驅けて行くものなどもあつた。

種々な噂が二人の學生の耳に入つた。或は深い信仰に入つてゐるもの、或は半ばそれを信じて半ばそれを疑つてゐるもの、または不思議なこともあればあるものだと思つた默つて見てゐるもの、何は何でも兎に角面白い現象だと思つて見てゐるもの、さうしたいろいろな人達の心度がその顏やら態度やらにあらはれて見えた。

『愚民共はしやうがないな』

ふとかうした聲が二人のすぐ上のところで聞えた。

二人の學生は振返つて見た。

かれ等にはかうした熱狂の中に、またはかうした渴仰隨喜の中に、さうした冷やかな言葉を放つものがあるのが際立つてその注意を惹いた。かれ等は群集をやりすごしてから、その男の方へ戻つて來た。

背の低い、いやに皮肉な、眼のきよろきよろしたその男は、

「矢張、田舍だ。あゝしてごまかされて賽錢の一つも投るんだからな』

一人の方の學生は近寄つて、

『貴方、行つて御覽になりましたか』

『行つた見た……大山師さ。あつちこつちで散々持餘まされて、食ふに困つて、こんな山の中に來たんですよ』

『でも……』

『君等も矢張愚民黨かね。臨終をするなんて、大きなことを言つて、まさか立腹を切つて見せるわけにも行くまい……。手でさ、それは、奴の……。この前にもそんなことをやつたことがある。………今の科學全盛の世に、新しいメシヤがあつて堪るものか。君達は知らないか、あれで、あの大山師、女にかけては、中々えらい腕を持つてるんだせ』

『へい、そんな話があるんですか』

『奴の前生を知つてゐるものには、奴のおどかしなんか駄目さ』

『それで一體何う言ふんですか』

『今に死ぬつて言ふんだよ。死んで見せるつて言ふんだよ。』

からほき出すやうに言つたと思ふと、そんなことは馬鹿馬鹿しいといふやうにして、その男はさつさと向うに歩いて行つて了つた。

二人の學生は益々不思議な氣がした。何れが本當で、何れが虚妄か、かれ等にはちよつと判斷がつかなかつた。しかし到るところで眼に映る衆人の渇仰隨喜の涙をかれ等は虚妄と思ふことは出來なかつた。また山の上の生佛もその男ヤの言ふやうに單に大山師と言ふ風に考へて了ふことは出來なかつた。しかし、實際科學の全盛の今の世に、新しいメシを見たり、または釋迦の再生を見たりすることも不思議でないことはなかつた。かれ等はかれ等の室に一度は歸つて來たが、いろ／＼なことを考へると、落附いてそこにはゐられなかつた。『おい、兎に角、行つて見やうぢやないか。』と一人の方が誘ふと『行つて見やう、行つて見やう』と他の一人もすぐそれに應じた。

二人は急いで支度をして、そして出かけた。

山の上に達するする路は、非常な雜遝で、それを押し分けて進むのは容易なことではなかつた。涙と汗と珠數を揉む音と、何とも形容の出來ない『だア、だア、だア』といふ聲はあたりに充ちた。

群集がそこに一群、かしこに一群、何も彼も忘れたやうに、または人間の本性を失つたかのやうに、泣いたり喚めたりしてゐる形は、かれ等に不思議な『繪』を展けて見せた。新しい涅槃圖の最初の一幅を見るやうな感じを起させた。

折れ曲つた路を山の上近く進んで行くにつれて、その雜遝は愈々加はつた。人達は路上に伍して跪いたり坐つたりしてゐるものもあれば、手を合せて夢中に祈念してゐるものもある。松の木の蔭に集つて趺座してゐるものもある。慈父を失つたものゝやうに聲を擧げて慟哭してゐるものもある。さうかと思ふと、雜遝した中を押分け押分け、何うしても今一度その堂に行つてその生佛の顏を拜まなければならないといふやうに熱心に進んで登つて行くものもある。そしてそれ等の人達の顏の表情のかげには、てんでに持つた、或は親に對する罪、子を對する罪、世間に對する罪、男女に對する罪、主人に對する罪、不正と我欲とに對する罪、さうしたものが一つ一つ細かに絡みついてあらはれてゐるのを見た。

二人の學生は、まだその半ばにも至らない中に、さつき聞いた小さな男の皮肉と冷笑とを憫まれするにゐられないやうな心がとんと心から起つて來た。これが本當の人間ではないか。かうした何もかくさないまた何も望まない心が本當の人間の心ではないか。かうしてあるものに熱中する形が本當の人間ではないか。それを――離れて冷かに見てゐる人間は、何のために生きてゐるのか。唯、人間を見たり觀察したりしてそれを冷かに批判するために生きてゐるのか。人間として生きるためでなくして人間として眺めるために生きてゐるのか。――二人の學生も、次第にあたりの渇仰の狀態の中にその心の解けて行くのを覺えた。

ふと氣が附くと、黑い凄じい雲が大きな鳥の翼をひろげたやうに、次第に群集の頭上に近く押寄せて來るのをかれ等は發見した。

今まで明るく照つてゐた午后五時過の日影はすつかり曇つて、何處となく凄しい陰氣な風が蓬々として暗い谷から吹き上げて來た。樹下の群集の顏もいやに暗く佗しい色を着けて來た。

『變な天氣になつね』

『さうだね』

『夕立でもやつて來やしないかな』

『さうさな』

二人の學生は、ある大きな松の樹の陰に立つてそしてあたりを眺めた。

谷といふ谷、眼に見えるすべての谷からは、半ば白く半は鼠色をした雲が渦くやうに捲き上つて、それが此方の高い峯の上の大きな雲に噴烟のやうになつて雜り合つて行くのが手に取るやうに見えた。そして黑い雲の間からをりをり洩れて來る黃い佗しい日影は、さながら地獄でも展けて見せるやうに、ぱつと一面に、群集の上を照して、そしてまたすぐ翳つて行つた。と、突然金石と金石との觸れ合はされたやうな雷聲が暗い深い谷から起つた。

『夕立だな、困つたな』

かう一人の方が言ふと、

『兎に角、堂まで行つて見やうぢやないか。此處まで來て行つて見ないのも殘念だ……。堂に行けば、夕立が來ても、何處かに入れるからな』

『この人ではな……。雨やどりをするもやうな餘地があるかしら?』

『でも、此處にまごまごしてゐたつてしやうがない』

『それもさうだな』

で、かれ等は松や杉の樹の中を拔けたり、まごまごすれば崖から落ちさうな草籔の中を通つたりして、とても路からでは、群集に遮られて近づくことの出來ない堂の方へと近寄つて行つた。しかしかれ等がまだ全く堂に達しない前に、段々大きくなつて行つた雷聲に伴つて、銀箭のやうな雨がサツと凄しく落ちて來た。

新しい涅槃圖の中軸らしい光景は始つた。縱横に鋭い角を引いて凄しく光る電光、つゞいてあたりも振動するやうな雷聲、雨の白く降り頻る中に、ぬれた髮、ぬれた衣服、さうしたものには頓着せずに、手を擧げたり、喚いたり、泣い

たり、叫んだりして、群集の堂に迫つて行くさまは、この世の光景とは思はれないやうな感じをかれ等に與へた。かれ等もあたりのさまに昂奮したやうにして、雨の瀧津瀬の降りそゝいで來る中をずぶ濡になつて辛うじて堂の庇の下のところまで行つた。

『だア、だア だア』といふ聲と、『なんまんだア、だア』といふ聲とが一つになつて、小さな堂は殆ど群集のために押し潰されさうに見えた。雷聲や雨の瀉いで來るさまなどには誰も心を留めなかつた。

學生の一人は、高窓に手をかけて、そして體を半分宙にして中を覗いた。

『見えるか』

『見える、見える！』

もう一人の方も、つゞいて、同じやうにして窓から覗いた。

驚くべき光景がそこにあつた。かれ等は、その生佛が右の手を上にして堂の殆ど中央に立つてゐるのを見た。眼は微かに明いて上を向いてゐるのを見た。そしてその周圍には、さつきの老婆を始め、信仰者の群がひれ伏して手を擧げて珠數を一心になつて揉み上げてゐるのを見た。熱狂した屋の內外の群集が混亂と不整と喧囂とを無制限に發揮してゐるにも拘らず、そこの一角だけには、驚くべき嚴肅と沈默と悲痛とが漲りわたつてゐるのを見た。二人の學生は一目見たけで胸が俄かに緊張されるやうなのを感じた。恐らくさつきの小さい男がそれを見ても矢張その嚴肅の氣に撲たれずにはゐられまいとかれ等は思つた。

しかし體を宙に浮かせてゐるかれ等は長い間それを見てはゐられなかつた。

かれ等はもつと適當な場所がないかと思つた。そして彼方此方と探した。しかし何處にもかれ等の入り込むやうな隙間はなかつたと。急に凄じい雷聲は彼方の山から此方の山へと響きわたつた。

思はずかれ等は頭を下げた。

雨は愈々烈しさを增して、今は殆ど瀉ぐばかりに降つた。飛沫は白くなつて山の雲と雜り合つた。しつきりなりに縱

横に交叉する電光につれて、雷聲が其處からも此處からも起つた。何とも言はれない凄じい嚴肅な光景となつた。

堂の中からは、その高い透つた生佛の聲が落ちて來た。

『……爾等罪ありながら、罪ありとも知らざる者よ。……魂を蔑ろに自から己を汚しつゝしかも自己の汚れたるを覺らざる者よ。火と水の中にある者よ。火と水の中にありながら火と水の中にあることを知らざる者よ……爾等は皆な救はれざるべからず……菩薩は皆爾等と俱にあるべし。イエスクリストも世尊もマホメツトも皆な爾等と俱にあるべし……爾等一度この天地の憤怒に畏怖を抱かば……しかし畏るゝ勿れ、我あらずと雖も畏るゝ勿れ……我は即ち爾等と常に俱にあり。、また、爾等地獄に落たちるものと雖も、專念にその地獄より浮び上ることを念とせよ……然らば、地獄の中にも亦新しい美しき花の咲出づるを見ん。世間に對して怒ること勿れ、世間の迫害に畏るゝ勿れ、……それよりも爾等は先づ自己を畏れよ、自己の心を畏れよ。然れどもその心も……その心も……亦……』突然凄しい雷聲が起つたので、かれの聲はそれに掩はれて了つた。

堪らなくなつたやうに、二人の學生はまた再び體を宙にして高窓に凭りかゝつた。その時は生佛は最早さつきのやうな狀態ではなかつた、巨岩の如き體はすつくと立つて、爛々とした眼は四邊にかがやきわたつた。『心も……心もまた畏るゝ勿れ、心も亦虛妄……』かう言ひかけた時、天地も覆るかと疑はれる凄じい電光と雷聲とは一緒に來た。二人は思はず打伏しになつた。しかもその瞬間に生佛のかけてゐる金緣の眼鏡がキラキラと美しく光つたのを二人は見たやうな氣がした。再びかれ等が頭を上げた時には、生佛の姿はもう其處に立つてゐなかつた。

嘆きの門

谷崎潤一郎

二

「菊村さん、ちよいと此處に待つて居て。」

築地の居留地を抜けて、靄のかゝつた永代橋が遠くぼんやりと見えて居る越前堀の海岸通りの、とある古ぼけた西洋館の前へ來た時、少女はかう云つて立ち止まつた。さうして、門の板戸を押し明けて獨りすたすたと這入つて行つた。

幸ひ朝が早いので人通りは稀であるけれど、それでも菊村は誰の目にも直ぐに分る白地の襟詰の給仕服を着て、何か事ありさうに、ぽつねんと往來へ佇んで居るのが氣に咎めた。自分は今、非常に醉興な、不道徳な冒險をでもして居るやうな心地がした。「あれはたしかカフエエ、ド、パリの美少年の給仕だ。今時分こんな所に突つ立つて何をして居るんだらう。」――ちようど其處を通りかゝつてぢろぢろと彼の様子を眺めて行つた商船學校の生徒の眼つきが、てつきりさう思つて居るらしく菊村には邪推された。……彼はもどかしさうに時々腕時計を視つめて居たが、なかなか少女は出て

來さうもない。のみならず、今しがた少女を呑み込んだ家の中は、未だに窓が深く鎖されてしーんと寢鎭まつて居るのである。いや、寢鎭ると云ふよりは、寧ろ空屋のやうに中が眞暗で、ガラン洞ではないのかとも想像される。實際その家の外觀は、少女の身の上が不思議なやうに、一つの不思議な建物であつた。西洋館とは云ふもの丶極めて粗末な、殺風景な木造建てゞ、もとはペンキが塗つてあつたのであらう、――それが長い年月の間、散々汐風に吹き曝されて、かさぶたのやうに剝げ落ちて、家全體の肌が象の皮膚のやうにザラザラした、一種陰鬱な灰色に變色してしまつて居る。家と云ふよりはまるで石炭殼の堆積のやうに薄穢く、パサパサに乾涸らび切つて居る。而も其の樣式がまた一層奇妙であつて、建築の事なぞに何等の智識のない菊村にも、餘り類のない建て方であることは、一と目で頷かれるのであつた。東京市中にある西洋館と云へば、事務所にしろ、ホテルにしろ、劇場にしろ邸宅にしろ、大概表の作りを見れば分るものだのに、その建物は何の爲めに作られたものか見當が付かない。往來に面した所に突飛な三角形の屋根を持つた、煙突のやうに無愛想な、四角な箱のやうな一と棟があつて、それに二つの窓が切つてある。その向つて左側に不釣合なほど背の低い、田舍の驛長の官舍などにあるやうなケチな黑塗りの板の小門があつて、門の奧の突きあたりに、又一と棟の三角形の屋根が見える。前と後ろとに斯う並んで居る二た棟は、平屋ではあるけれど兩隣の家よりもズツと高く、遠くから望めば大きな教會堂のやうにも見えないことはない。が、大きいだけに殺風景なのが餘計目立つて、南京蔀の圍ひの板の腐つたやうなのが、大風でも吹けば直ぐにも横腹からめりめり壞れさうに感ぜられる。おまけに其の朝は、例の三角形の屋根の背景を成して居る空が、どんよりと雨を含んで沼のやうに濁つて居るせゐか、猶更幽鬱な重苦しい空氣が、其の建物の周圍にじめじめと漂うて居るのである。菊村は西洋のペン畫などにある化物屋敷だの、古城だの丶光景を連想せずには居られなかつた。若しも其の門の柱に、「藤原寓」と記してある標札が目に入らなかつたら、彼はとても

此の家を住宅だとは思はなかつたであらう。多分は物置きか倉庫か何かだと早合點するに違ひなからう。

それにしてもこんな所に住んでゐる「藤原」と云ふ人は何者だらう。あの花やかな少女が、こんな陰氣な家の中に養はれて居るだけでも意外であるのに、何の理由で縁もゆかりもない菊村を引き取らうと云ふのだらう。——此の好奇心は、奇怪な邸を眼の前に置いてぢつと待たされて居るうちに、だんだんつよく菊村の胸に湧き上つて來るのであつた。彼は此の家の中がどんな間取りで、どんな設備になつて居るか。さうして其處にあの紳士だの、少女だの、啞の書生だのが、どんな風にして住んで居るか。その有樣をいろいろと想像せずには居られなかつた。外から見た工合では、內部は何となく薄暗さうで、日の目の通らない、戸障子の立て附けなどがところどころ曲り狂つた、ぷーんと黴の臭ひのするやうな部屋の樣子を想ひ起させる。かう云ふ不健康な、ちやうど息も絶え絶えに老衰した病人にも似た建物の屋根の下に、林檎のやうな紅い頰つぺたの少女が居ることは、何としても不調和である。

「此の家には何か秘密があるに違ひない。此の家の主人が己を引き取らうと云ふのは、事に依ると單純な物好きではないかも知れない。何か善くない事が、——危險な事か、物凄い事か、不道德な事かゞ、——此の家の中で己を待ち構へて居るのではないだらうか。」

自然と菊村はさう云ふ豫覺を受けずには居なかつた。昨夜から何か自分に幸福が來るやうな心地がして、滿更の好奇心ばかりでもなく、今日の事件を樂しみにして居た彼は、自分を陷れようとする薄氣味の惡い相談が、今しも少女と彼の紳士との間に、熟しつゝあるのではないかと云ふやうな、淡い不安が胸の底から少しづゝ這ひ上つて來るのを覺えた。兎に角、先からもう二十分も待つて居るのに、どう云ふ譯か雨戸の締まつた窓の中は未だにカタリとの物音もなく、少女の姿も容易に現れて來なかつた。「たしかに相談をして居るのだ。きつとさうに違ひない。だがそれにしてもど

んな相談をして居るのだらう。」――菊村は、彼が今迄に讀んだことのあるさまざまな探偵小説の中から、此の場合に適用されさうな筋だの場面だのを、彼れか此れかと頭の中に描いて見た。自分は少女に連れられて此の家の内部へ一歩足を踏み入れると、いきなり毛むくぢやらのでつぷりと太つた西洋人が出て來て、物をも云はずハンケチで鼻と口とを塞いでしまふ。ハンケチには痲睡藥が浸してあつて、その匂を嗅いで居るうちに自分は前後の分別もなく昏々と睡りに落ちる。……或ひは又、恐ろしい不良少年の親分が居て、自分にピストルを附きつけながら、或る忌まはしい慾望の犧牲になる事を要求する。……初めはたゞ空想を弄ぶやうな氣持ちで次ぎから次ぎへと考へ續けて居る間に、だんだん其れ等がほんたうらしく感ぜられて來て、少くとも油斷をしてはならないと云ふ警戒だけは、しつかりと彼の胸に根を据えるやうになつた。もう十五分も待つた上でいよいよ彼女が出て來なかつたら、歸つた方が寧ろ利口だとも彼は思つた。けれども、幸か不幸か其れから十分ほど過ぎた時分に、元氣のいゝ、輕い靴音が門内に聞えて、やつと少女が其處へ駈けて來た。

「お待ち遠さま。どうぞ――」

と云つて、顔で頷きながら、それ程待たせたのを別段氣にも留めないらしく、例のしやくれた口つきで、ちよつと笑つて見せたのではあるが、それが菊村にはいつものやうにひどく愛嬌に充ちた印象を與へた。

門を這入つたところには、狹い細い路に御影石が敷いてあつて、其れを二三間行き盡すと、例の教會堂じみた一と棟の正面に、階段の附いた小さな入り口があつた。階段の石は段々がないと云つてもいゝくらゐに踏み減らされて、石の地肌が見えないほど分厚な泥がこびり着いて居る。入り口のドーアは、盜賊の這入つた跡のやうに、いかにも胡算臭く半分だけ明け放されて、其處から奥を覗いて見ると、果して内部は眞暗である。が、一直線に走つて居る廊下の突きあ

たりに、ちやうどトンネルの向うを見るが如く庭の青葉がちらちらと揺いで居る。その葉が一枚一枚、くつきりと鮮やかに浮き出て居るのが、寫眞器のレンズを通して物の形を眺めるやうに美しい。

「さあ、どうぞ上つて頂戴。」

と、少女がもう一遍菊村を顧みて云つた時、暗い廊下の左側の方に人影の動くけはひがして、ぱつと二人の鼻先へ出て來た者がある。見ると先日の啞の書生であつた。紺の剝げた黒地の絣のよれよれになつた一重物に、白いメリンスの兵兒帶を巻き着けた寢間着姿のまゝで、慇懃に禮をしながら、上り口にある二足のスリッパを二人の前に揃へた後、相變らず無表情な顏をふいと横に外らして直ぐに再び引込んでしまつた。菊村は少女の後に附いて暗い廊下を奥の方へ辿つて行つた。廊下はさまで長くもないが、しかし眞ん中ごろへ來た時には、暗さが次第に濃くなつて、白い洋服の上に續いて居る少女の黒髪と闇との區別がハツキリとは分らなかつた。廊下の右側は壁で、左側には二つ三つ部屋が割つてあるらしく、而もそれ等の部屋の口には板戸の代りに黒い幕がだぶだぶと垂れ下つて居る。菊村は幕の間からヌイと手が出るのではないかと思つた。實際、廊下を通り拔けて庭の降り口へ出るまでは、何だか後から物が追ひかけて來るやうな無氣味さを禁じ得なかつた。

庭の降り口にはまた石段が附いて居た。庭は、――其處へ來た時菊村は一面に蒸し蒸しと繁茂して居る青葉の光りで、さつと額を撫でられるやうに感じた。四方を塀や部(しや)で包まれた中庭のやうな區域に、綠樹と綠草とが繪の具をべたべたに塗りこくつた如く亂雜に枝を交へて、茫々と煙つて居るのである。一方の隅には二三本の椿と茶山花とが行儀よく植わつて居るかと思ふと、一方には百日紅が意地の悪い幹を横へて、斜めにぬつと空間へ腕を突き出し、その傍には此れも恐ろしく姿勢の悪い梅の樹が、恰も隣りの百日紅と喧嘩をするやうに枝を絡み合はせて居る。一方の隅には庭中で一番

背の高い柳の樹があつて、それがちやうど降り口の石段の上へ、暖簾のやうに房々となまめかしい髪を垂らして居る。さうして、此れだけの青い物を周圍に控へながら、庭の中央には小さな藤棚が設けられて、無上に發育して居る藤の蔓が、棚から波々と盛りこぼれて四方八方へ手長猿の如く手を伸ばしつゝ、まるで其處ら中へ大きな網を懸けたやうに擴がつて居る。で、それ等の爲めに庭は實際よりも餘程ひろく見えて居るが、せいぜい十坪か十五六坪ぐらひなものらしく、ちつと眺めて居ると、何だか鼬や貉の棲んで居る廢園のやうな趣がある。活動寫眞では、よくこんな所から白衣の女神が朦朧と現はれたりする事を、菊村はぼんやり想ひ浮べたのであつた。

此れで此の家の中は通り拔けてしまつたのに此れから何處へ案内されるのかと思ふうちに、少女は降り口に揃へてある庭下駄を、襪の爪先へ不器用に引つかけて、柳の枝を掻いくゞりながら石段を降りて行つた。――此の足の入れ場もないやうな庭の中へ連れ出してどうするのだらう。――菊村はますます不思議に感じながら、なほも後に從つて行くと、やがて石段の横を其の家に添うて右へ曲つた。其處には今迄氣が附かなかつた庭の一部が續いて居て、往來に面して建てられて居たもう一と棟の母屋の裏側へ出るのである。裏側の方は、窓のぴつたりと鎖されて居た表側とは外見がすつかり違つて、殆んど一つ建物の半面とは信ぜられない。何の爲めに斯う云ふ造りにしてあるのか分らないが、三角形の屋根の、庭の方に向いた片側は恰も植物の溫室か寫眞の撮影場のやうに、曇り硝子が葺いてあつて、その屋根の下は一面に透き通しのガラス障子を篏めた張り出し窓になつて居る。さうして表側の薄穢しいのに引き換へて、窓枠でも樋でも凡べてが爽快な牛乳色の、冴え冴えとした白ペンキで塗られて居る。張り出し窓の內部には西洋の草花らしい鉢植ゑが一杯に列べてある。庭へ降りるのにはその窓の盡きた向つて右の隅のところに狹いドーアが附いて居るだけで、思ふに此の一と棟と他の一と棟とは、直接の交通が出來ないやうにしてあるのであらう。少女はその入口の扉を明けて一旦自

分だけが室内へ隱れたが、直ぐに半身を戸の隙間から現して菊村を手招きした。

「此の部屋の中にあの紳士が居る。――いよいよ己はあの人に會ふのだ。」

なぜか知らぬが、菊村は俄かに動悸の昂まるのを抑へ得なかつた。何か不思議な因緣が自分と其の紳士との間を繫いで居て、自分が今日此の家へ來る事は、生れた時から定まつて居た宿命なのではあるまいか。――そんな氣持ちが、石段を上つてドーアの向うへ足を踏み入れようとするほんの一瞬の間に、ちらりと彼の腦裡を掠めた。

室内へ歩みを運んだ菊村には、先づ第一に其處に控へて居る紳士の姿が眼に入らなければならなかつた。にも拘らず、彼は其の人を見附け出すまでに暫く注意を凝らす必要があつたほど、其れほど部屋の中にはいろいろの色彩がごたごたと配置されて居た。往來から望むとぶつきらぼうな箱のやうに見えて居たその建物の内部は、だゞつ廣い、ガランとした打通しの一と間で、二十疊ぐらゐの面積はあるであらう。――表の窓は依然として締め切つてあつて、例の曇りガラスの天井と裏の張り出し窓から、庭の綠樹の反射を受けた青い外光が、鈍く冷やかに、どんよりした夢のやうな明るさを投げて居る中に、とても一度では覺え切れないくらゐ種々雜多な家具や裝飾品が羅列されて居る。大方此處に住んで居る主人は、食事も睡眠も讀書も入浴も、凡べてを此の一室で濟まして居るらしく、殆んど日常生活に缺くべからざる調度と設備とは、一つ殘らず整つて居ると云つてもいゝくらゐである。張し出し窓の内側には、植木鉢を間に置いて更に二重のガラス障子が嵌めてあり、その前の床板の上に豹の毛皮が展べてあるのは、恐らく主人の晝寢の座席なのであらう。毛皮の背には一二枚の更紗模樣の羽根蒲團と、黑い漆の木枕とがころげて居る。木枕の面には「毎夢鸞鳳騰身舞」と漢詩の文句らしいのが朱で書いてあつて、其れが支那製の器物めいて居る事は、少年の菊村にも大凡そ鑑定が附くのであつた。が、奇妙なのは枕から二三尺高い空間に、大きな鳥籠がさがつて居て、中には一羽の眞白な鸚鵡が飼はれて居

るのである。主人公が時々此の木枕に頭を載せて、毛皮の上に身を横へるとすれば、ちやうど寢ながら其の鳥籠を眺めることが出來る譯で、鶺鴒は正しく彼の夢枕に立つたやうに、美しい畫面を作り出すに違ひない。しかし菊村は、項を擡げて新來の客の樣子を珍しさうに窺つて居る鶺鴒の動作に、いつまでも氣を取られて居る暇はなかつた。彼は自然と、左側の壁に添うて据えてある瀬戸引きの西洋風呂へ眼を移した。風呂の下には、床板に蝦色の絨氈が敷いてあつて、傍に大きな鏡を嵌め込んだスクリーンが立つて居る。そのスクリーンへ影を映して居る化粧棚の上には、香水や化粧水の外に、五六本の洋酒の壜が載つて居るところを見ると、此の家の主人は湯に浸りながら其れ等の酒を嗜むのであらうか。さうして湯から上つて來ると、彼處の衣桁にかけてある大きなタオルにぐるぐると浴後の肉體をくるむのであらうか。――實際、其處に垂れ下つて居るタオルは、不思議に芳烈な誘惑の色を帶びて居るやうに感ぜられた。一枚は濃い薔薇色で、一枚はほんのりと淡い黄橙色で、それからもう一枚はペパアミントの液に漬けたやうな艶々しい緑色で、粗い格子に織つてある三枚のタオルが、恰も小袖幕のやうに衣桁にひろげてある樣子は、それをぢつと視詰めて居ると、いかにも手觸りが柔かさうで、あの籠の中の鶺鴒の肌よりもふわふわとした、ぢつとりと露に濕つて居るらしい地質からは、今にもぽうつと湯氣が舞ひ昇りさうである。何だか菊村は急に裸になつてあの切れの中へ包まれたいやうな心地がした。同時に此の湯へ浸るものは主人ばかりでなく、あの少女もその一人ではないかと思ふと、――その度ごとに此のタオルが桃色の彼女の皮膚へぶるぶると纏ひ着くことを思ふと、――彼は眼の前が晦くなるやうな氣持ちになつた。

風呂場の隣りには紅斑竹の椅子と食卓がある。正面の鎖された窓の邊には寢臺がある。その外右側のストーブの周圍にある長椅子や、安樂椅子や、刺繍の屛風や、置時計や、花瓶や、油繪の額や、それ等の物が雜然と散在して居る工合は、一箇の居室と云ふよりは寧ろ古道具屋の陳列場に似通つて居る。就中其の感を深くするのは突きあたりの右の隅

の、本箱の蔭になつた最も薄暗い場所に、ガラス張りの白い目玉を光らせて立つて居る煤けた佛像で、何處かの古寺から運んで來たらしい、ぼろぼろに繪の具の剝げ落ちた、毘沙門樣のやうな、獰猛な顔つきをした木ぼりの彫刻である。而もその側の臺の上には、清楚な色と線とを持つた石膏の西洋人の胸像が二つ三つ飾つてある爲めに、一層佛像の方は鬼氣を帶びて、野蠻國へでも行つたやうな感銘を與へる。野蠻國——若しも此の室内の器物の配列が、何等か一定の趣味の下に統一されて居るのだとすれば、たしかに其れは野蠻趣味より外にはあるまい。何處を捜しても、いかなる部分にも、ひたすら野蠻な俗惡な趣味が發揮されて居るのみである。さうして其の趣味を更に高調して居るものは、殆んど壁の空き間といふ空き間に飾り付けてある獸の毛皮と、到るところに倚せかけてある大小さまざまの鏡であつて、いかに主人公が毛皮と鏡とを好むかと云ふ事實は、極めて露骨に現はされて居るのである。——

「先生、菊村さんを連れて來ましたわ。」

その時、少女は斯う云つて、彼を主人公の座席の前へ伴つて行つた。

主人は、此の部屋の内に充滿して居る目まぐるしい器物の中の一個に過ぎないかのやうに、床から天井に近い高さにまで書籍がぎつしりと詰まつて居る巨大な書棚を後ろにしつゝ、マホガニイのデスクに兩手を預けて、大儀らしくぐつと倚子に反り返つたまゝ、青白い顔の表面だけに微かな愛嬌笑ひを浮かべて居た。

「よく來てくれた。まあ其處へおかけ。」

と、傍の倚子を指しながら、口の内で斯う云つたのが、いかにも張り合ひのない、强ひて元氣を裝つて居るやうな聲なので、菊村はちよいと覗込みをせずには居られなかつた。主人の風貌は、此の前カフェエで會つた時の印象と大した變りはない。あの晩は上品な洋服姿であつたのに、今朝はたつた今起き出たらしい眠れつぼつたい眼つきをして、タオ

ル地の浴衣を着て居るのが、芝居へ出て來る縫ひぐるみの狐のやうに見える。その目鼻だちは優雅にふつくらとした顏で、可愛らしい青年のやうに見えたにも拘らず、傍へ寄つてしげしげと打ち眺めると少し樣子が違つて居る。あの晩には三十二三ぐらゐの年配だと推量したけれど、或ひはもう二つ三つ年喰ひであるかも知れない。顏はたしかにふつくらとはして居るものゝ、寧ろ青ぶくれにふくれて居るので、それが何處となく不健康な、水氣の來た病人のやうな佛を傳へて居る。さうして、きめの粗い兩頰の地肌が著しく荒れてばさばさに乾いて、血の氣の失せた、鈍い脂色をした唇の邊には、妙に冷酷な、殘忍な性質の人ではないかと想はせるやうな暗い影がたゞようて居る。さう思つて見るせゐか、ちやうど彼の肩の上に聳えて居る木像の、眼を瞋らし口を歪めた鬼神の容貌が、いかにも此の主人の本性を曝露して居るやうに菊村には感ぜられた。

「さあ、それにかけ給へ。遠慮しないで、――」

と、主人はもう一遍彼を促した。少女はいつの間にか主人の後に廻つて、倚子の背中に兩手をかけながら、脇の下を擽られる時のやうに肩をすぼめつゝ、さも嬉しさうな笑顏を傾けて、此れから始まらうとする面白い遊戲(?)を待ち受けて居た。

「君はいつか、僕が一遍この兒と一緖に君のカフエへ行つたのを覺えて居るかね。たしかもう半月以上も前の事だが、……」

主人はやをら、かう云ふ風にして質問の口を切つた。わざと氣取つて居るのかも知れないが、折々吃る癖のある、ゆつたりとした言葉づかひで、年にも似合はず初對面の人間をはにかむやうな樣子さへ見えた。

「えゝお顔は覺えて居ります。」

と云つて、菊村は其の時漸く倚子にかけた。が、それから暫く、客も主人もモヂモヂと下を向いたまゝ默り込んでしまつた。どう云ふ方面から問題に這入つたらよからうか、どうしたら此の少年を手なづけることが出來るだらうか、――主人は頻りに其れを考へて居るらしい。頰杖を衝いて、指先で机の上に字を書きながら、ぱちぱちと眼瞬きを續けて居る。その眼瞬きは隨分長く、いつまでもいつまでも續きさうであつた。菊村はぢつと我慢をして居るうちに、又一ときり動悸が激しく鳴り始めて、息が詰まるやうな切なさを覺えた。それに、蒸し暑い夏の朝であるのに、氣が付いて見ると室内の扉と云ふ扉は悉く密閉されて居る。菊村は折々、相手の言葉を促すが如くほつと溜息をついて、額に湧き出る汗を拭いた。

「どうしたの、二人とも默り込んでおかしいぢやないの。早く話したらいゝぢやありませんか。」

突然、少女が斯う頓興な聲で云つて、倚子の背中を搖す振るやうな眞似をした。主人はハツとして顏を擡げたが、

「あゝ、今此れから話すんだよ。」

と、云ひ譯がましく口の内で呟きながら、極まりが惡さうに耳の附け根を赤くして居る。折角少女がよい切つかけを與へたのに、彼はその切つかけを摑み損つたらしく、今度はまともに菊村の方へ瞳を据ゑて、暫く斯う、息を湛へて居るやうな、云はうとして云ひ出せないやうな、落ち着きのない表情を示した。

「君は多分、此の兒から大體の話を聞いたゞらうけれど、今日はその事に就いて少し眞面目に相談をして見たいと思ふのだ。」

話して居るうちに主人の顏はいよいよ赧くなつて、照れ隱しににやにやと苦笑ひを浮べて居たが、しかし其れをすつ

かり云ひ終つてしまふと、始めて所を得たやうに威嚴のある態度に復つた。

「……無論かうして君に來て貰ふくらゐだから、決してあの話は冗談ではない。私はほんたうに君を引き取つて、及ばずながら世話をして見たいと考へて居る。まあ其れは後でゆつくり話すとして、君は一體、いつからあのカフヱエに奉公して居るのだね。」

「十六の歳から、……あのカフヱエが開業した時から奉公して居ります。」

「君は今年十八になるのださうだね。すると、もう二年間彼處に勤めて居る譯だが、……」

かう云つて、主人はちよいと首をひねりながら、

「妙なことを尋ねるけれど、君はいつまでも彼處に奉公して居る積りなのかね。たとへば、學問をしたいと云ふやうな氣はないかね。——君が彼處へ奉公するやうになつたのには、勿論いろいろ家庭の事情もあるだらう。けれども若し事情が許せるものなら、學校へ上りたいとか、或ひはもつと將來の爲めになる職業を擇びたいとか、何か希望があるだらうと思ふ。十八や其處らの年ならば、此れからまだまだいくらでも修業が出來るんだから。」

菊村は愼ましやかに、下を向いて默つて聽いて居るばかりであつた。——云ふまでもなく、彼にしたつてカフヱエのボーイに甘んずる積りはないのであるが、それを此の場合正直に答へた方がいゝか惡いか、彼には判斷が付かなかつた。自分は不幸にも貧乏な家に生れたお蔭で、中學校へ上げて貰ふ譯にも行かず、せめて堅儀な商店へでも奉公にやらせて欲しかつたのに、たまたま容貌の美しいのを見込まれて料理屋の給仕にさせられてしまつた。此の先どうしたら自分は出世することが出來るだらう。親たちの老後を安樂に暮らさせるやうな、相當な地位に立身することが出來るだらう。さう考へると彼はいつでも前途を悲觀せずには居られなかつた。自分だつて學問をする暇さへあれば立派な家の息子たち

に負けようとは思はない。小學校に居る時分から、少くとも繪や文學の方面に幾分の才能はあると信じて居た。カフエへ住み込むやうになつてからも、惡い遊びの附き合ひなどは常に斷つて、もう二年越し英語の獨學を續けて居る。何とかして出世の機會を捕へたいと云ふ希望だけは、絕えず自分の胸中に燃えて居るのだ。——それを菊村は正直に告白しようかとも思つたけれど、何處かに相手の陷穽があるやうな心地がして、迂濶に口を利く氣にはなれなかつた。

「どうだね、それとも君は學問などは嫌ひの方かね。彼處の內に勤めて居るのが面白いかね。」

「いゝえ、そんな事はありません。」

かう云つて、彼は微かに首を振つて見せた。

「面白くなければ私の所へ來たらどうだらう。私は君を奉公人として待遇しようと云ふのではない。現に此處に居る此の兒にしても、娘のやうにして養つて居るのだが、君も無論此の兒と同じ取り扱ひを受けるのだ。私や此の兒と同樣に君は此の家の主人になるのだ。此の內に居る書生や下女には、勝手に君の用をさせるがいゝ。さうして君は、此の兒と兄弟のやうにして暮らして行く。それを承知してくれゝば、先も云つた通り君の希望はどんな事でも遂げさせて上げる。——此れだけの條件で、私は君の世話をしようと云ふのだが、一つ考へて見る氣はないかね。かう云ふと君は、私が何で緣もゆかりもない人を其れ程までに世話をしたいのか、不思議だと思ふかも知れない。露骨に云へば何かよくない腹があるのぢやないかと云ふやうな、疑問が起るかも知れない。その疑問は、私と云ふ人間を充分に理解してくれないうちは起るのが當然なのだから、私は强ひて辯解をしたり說明をしたりはしない積りだ。私はたゞ、非常に氣紛れな、物好きな男で、その物好きを滿足させる爲めには、どんな非常識な、突飛な事でもやらうとする人間であることを、一言斷つて置くだけにしやう。つまり私が君を引き取らうと云ふのは、引き取つて世話をして見たいと云ふ單純な物好きより

外には、何もないのだ。君がえらい人間になつた場合に、恩返しをしてくれろと云ふのでもない。君を養子にしてしまつて放さないと云ふのでもない。……」

こゝまで話しかけた時、主人は何と思つたか急に言葉を句切つて、ぢつと眼を伏せながら默想に耽つて居た。が、直ぐに又顏を擡げて、

「いや、此れまで話が進んだのだから、いつそもう少し突込んだ所まで打ち明けてしまはう。」

と、半分は獨り語のやうに云ひ捨てゝ、聊か狼狽した態度を示しながら、やがて今度は元氣の張り充ちた、生き生きとした口吻で語り始めた。

「私は今、單純な物好きから君の世話をするのだと云つたね。それはたしかにさうに違ひない。けれども私が、どう云ふ理由で特に君に對してそんな物好きな考を起したかと云へば、――極く淡白に打ち明けてしまへば、君の其の立派な顏だちが私の興味を惹いたからなのだ。君が、銀座通りで有名な美少年だと云ふ事は、君自身でも知つて居るだらう。或ひは心私かに、それを得意に感じても居るだらう。私は君のやうな美しい器量の少年が、カフエのボーイと云ふ卑しい境遇に身を落して居るのを氣の毒に思つたのだ。どうかして其の容貌に耻ぢないだけの滿足な敎育と、花やかな生活とを與へてやりたかつたのだ。男であらうが女であらうが、凡べて容貌の優れた人間には、私はいつも深い同情を寄せずには居られない。たとへば此處に居る此の少女でも、さう云ふ理由から私が引き取つて世話をして居る。それはちやうど、日蔭に咲いて居る花を日あたりのいゝ場所へ植ゑ直して、充分な肥料と日光とを惠んでやるのも同じ美德だと、私は常々考へて居る。神樣が美しい人間を造つたのは、美しい花を造つたのと同じやうに、此の世でその美しさを思ふ存分に發揮させたい爲めだからぢやないか。ねえ、君はさう思はないかね。私の云ふことが間違つて居ると思ふかね。

――日向に出せば美しい花の咲くものが、日蔭に捨てゝあるとすれば自然の法則に背いて居るのだ。人間にしたつて理屈が二つある譯はない。美しい器量の人間が、それにふさはしい境遇を要求するのは、當然の權利なのだ。君は君の容貌に似つかはしい服裝をして、君の器量に劣らない美しい少女を友だちに持つて、小鳥のやうに樂しい、快い、無邪氣な生活を營むのが當然なのだ。さう云ふ生活をする爲めに、君は此の世に生れて來たのだ。普通の人間は、たゞ一生懸命に才能を研き智識を弘める爲めに學問を勉強する。けれども君は、學問の修業の外に、神樣から授かつた貴い美貌を大切に保存しなければいけない。勿論容貌を美しくするには、學問も必要だ。智識のない人間の顏は、決して美しいとは云はれないものだ。しかし學問ばかりではいけない。快活な心と、健康な體と、歡樂を味ふに足る感覺と、その外にまだいろいろの物が必要なのだ。私が君を引き取らうと云ふのは、つまり其の必要なものを悉く君に授けてやりたいからだ。さうして、君の美しさが何處まで伸びて行くか、此の少女と君と、孰方が餘計美しくなるか、その樣子を側に居て見て居るのが、私には此の上もない樂しみなのだ。私はそんな事を道樂に生きて居る人間だと思つて貰ひたい。君が承知してくれるやうなら、君のお父樣やお母樣にも私からよく話をして見よう。君は、緣もゆかりもない人の世話になるのは嫌かも知れない。或ひは又、私と云ふ者を信用することが出來ないかも知れない。だがそんな遠慮や心配をして居たら、もう其れだけで其の人はえらくなる資格を失つて居るのだ。君が、生きがひのある樂しい生活を取るか捨てるか、それは君の自由だけれど、機會と云ふものはさう度び度び來る譯はない。樂しい生活をしようとするには、勇氣がなければ駄目なのだ。いかなる人をも、自分の方から征服してやらうと云ふ勇氣を持つ事が肝要なのだ。私が折角、君を見込んで此れだけの機會を與へてやるのに、君がそれを摑まないなら、私は君の臆病を笑つてやる。君は此の少女にも劣つた、意氣地のない、膽力のない、哀れな男と云ふ事に相場が極まつてしまふ。若しもそんな弱蟲の人間なら、私

の方からもお斷りする。さうして私は又外に美しい少年を捜して來る。君はよもや、そんな意氣地なしではないだらうと思ふが、どうだね、やはり私を信用する事が出來ないかね。此の少女と一緒に此の內で暮らさうと云ふ氣は起らないかね。」

主人は、彼の不思議な言葉が此の少年にどんな感銘を與へつゝあるか、その效果を見たいと云ふ風に、話をしながらも怠らず菊村の眼の色を窺つて居た。

「成るべくなら直ぐにも返辭を聞かして貰ひたいのだが、明日一日だけ待つとしよう。その間にゆつくり考へて見るがいゝ。——私が格別怪しい人間でないと云ふことを明かにする爲めに、此の名刺を君に渡して置かう。」

さう云つて、主人は抽き出しから一葉の名刺を出して其れをデスクの上に置いた。門の標札には「藤原寅」と記されて居たのに、其處には「岡田敏夫」と云ふ名前が刷つてあつたのである。

「では、あなたは岡田先生で居らつしやるのですか。」

かう云ひながら、菊村は愕然として今更のやうに主人の顏を打ち仰いだ。

「センセイ、センセイ」と云つて、籠の鸚鵡が俄かに朗らかな聲を擧げた。少女はついと走つて行つて、籠から鳥を出してやると、兩手で膝の上に抱きかゝへながら、毛皮の上へごろりと足を投げして居る。(續く)



薤露に代へて

宮原晃一郎

一

基督者といふ名は私に取つて誇らしいものであつた。懐しいものであつた。長い年月私は無自省に此の名を冐してきた。私は一個の紳士であり、又善良なる良人であつた。私が此儘で沈默を守つたならば、私は矢張り他見には立派な人間として遺るのであつたらう。けれども妻の死は私をして、そう何時までも無自省に止まることを許るさなくなつた。今にして思ふと、私が誇らしいもの、懐しいものとした基督教は、實は私の身に屬いたものではなく、私の本性は恐ろしい貪婪な狼で、外に柔和な羊の皮を被つてゐたに過ぎぬとが分つた。『氏より育ちといひますが、素性の知れない孤兒は眞個敎育といふものゝ効果を疑ふ程育て上げるのが困難です』と、私の養ひ親である××氏は嘗て或る新聞記者に話したといふことだが、私自身のとに引き比らべてみて、如何にも道理であると、私は思ふ。私の冷酷な、執念深い、妙にひねくれた、自己一點張りな根性こそ親讓りで、愼ましやかに、穩なしく、同情に富むだところは全く後からの附け燒刄であつたらしい。私は妻の死んだときには妙に涙が、胸の底から

滲み出すやうで、是までにない淋しさを感じたが、それも明らかに自分を見た今からすれば、その眞實さに疑ひがある。眞の悲哀といふものが、周圍の總てを沒却するものとすれば、私はあの涙の多かつた葬式の場面をまざ〳〵と記憶に上し得る私の冷たい心の一面を何といつて良いか分らない。

私は聖壇から遠くない、最前のベンチに、妻の里方の者共と一緒に腰掛けさせられた。私の前には黑羅紗に白く、大きな十字架を中央に縫取つた柩衣に覆はれた寢棺が安置されてあつた。四月の北地はまだなか〳〵寒く、外面は霏が降つてゐた。造花やら、溫室で咲いた生花やらが、棺の周圍に、處狹きまで置かれた。朦な光りが聖壇の奧の窓から、さし入れて、海老茶の絨氈を敷いた段階から、大きなバイブルを乘せた架の際まで、末廣な幅の線を曳いてゐた。架には紫濃の羅紗に、Jesus Hominum Savator の頭字が白く、顯著と浮び上つて見えた。其右にある演壇、其左にある大執事のクツション附傾斜机など、總てが、私の普段目馴れたものながら、一種森嚴の氣に滿ちて、人を威壓するやうであつた。

定刻になると、壯嚴な、短音階のオルガンの前奏が薄暗く、高い天井に反響して、兩翼の扇が開くと其處から聖職の列が靜々と練り出て、聖壇の階下で、一つに合つして聖卓に向ひ一禮すると、各々分れ〳〵になつて自分の席についた。何時の間にか奧の祭卓には長い蠟燭が灯れて、其取り留めのない光りは、ブロンズの小さな磔像と、其傍にある、一對の花瓶から咲きこぼれた、人工の白百合の花を照らし、唐金の香爐からは靑い煙が騰つて、ナルドの香りが堂內に燻じ渡つた。

軈て式が始まつた。悲痛な讚美歌、朗々として讀み上げられる禱文、聖書、死者の閲歷弔詞、弔歌。斯うしたものが、例により順々に行はれた。私は、愼ましやかな態度で、恰も眠つてゐる亡妻を醒まさせまいとするかの如く、足の

爪先で、忍びやかに歩るき廻つて、此間を斡旋する人々を見た。純白な法衣の上に、頸から掛けて、胸の兩側を越え、裾の端まで、二條の黑い瀧のやうに、辷り落ちる袈裟（ストール）、半白な鬚の中から出た赤い色の童顏——私は兒童の時分から、舊約聖書の課業で敎はつたアブラハムを、私共の大執事（アーチデアコン）に見た。又其傍に、黑のカソックの上に白い法衣を着て、小形な祈禱書を手にして立つ其下の聖職等をも見た。

　私の隣りに居た妻の母は、不斷ハンカチを顏に當てゝゐた。又其隣りの老父も度々目を拭つた。背後の婦人席では間斷なしに晞泣が聞えた。斯うした環境（ミリウ）が私を引き入れたのであらう。私は自分でも譯が分らぬくらゐに、淚を流した。それに痛み入つたことには牧師が演壇に立ち、喋々として故人の信仰を說き、其貞淑を褒め、私の愛情を引き合ひに出してくれたことであつた。私は座に居たゝまらぬ程の苦痛を感じた。其時は實際、ヒステリカルな信者がよくやるやうに、祭壇の前にひれ伏してあるだけのことを告白懺悔して此苦痛を免れやうかとも思つた。けれどもこれは敢へてしなかつた。否敢へてし得なかつたといふが眞實だ。

　私には此三十分ばかりの經過が非常に長かつた。此時こそ只一心になつて早く之を止めて欲しいと念じてゐた。だから牧師が深い同情の詞を終りにして、段を下つた時には、私の心も、それと一緒に或る峠を降りたやうな感じがした。けれども最後に、棺の小蓋をあけて、死者の顏を見る時が來た。是がまた厄介であつた。幸には之れは見度くない人は見る必要がないので、私は頂垂れたまゝで成丈その方を見ないやうにしてゐた。二度目の難はそれでやうやく免れた。併し眞に妻から私が解放せられたやうに感じたのは未だ後であつた。

　ノロ〳〵した行列が墓場についた時は先刻の霏はそう晴れてゐたが、空には鉛色の雲が垂れて、寒い風が熊笹をそよ〳〵と搖るがした。人夫共は濡つた土を小石と共に堀り起して、深い穴を堀つた。聖職達は其前に立ち祈禱書を開い

て、聖別の式を簡單に行つた。それから棺の兩端に綱がつけられ、ソロ〳〵と、其中に吊り卸された。さうして其眞中に木標が立てられ、幾つかのシャベルが無遠慮にパラ〳〵と、土を覆ひかけてしまつた。その時だ。私は丁度算盤の最終の珠をパチンと彈き切つたやうな氣持がした。妻と、私との一切の關係が、此處に始めて決濟を告げたとになつたのだから。――惟ふに其時、涙に膨れぼつたくなつた私の瞼の底に、包みきれぬ安心の色を浮べた眼が認め得られたであらう。若し神が其時、私の心を覩(みそな)はし給はゞ、悲哀、懺悔は矢張り薄皮一枚で、其下には、自分の讐念を徹底的に達し得た盲執の蛇が、愉快さうに首を擡(もた)げてゐるのが露らはであつたらう。

　が決濟は終つても、清算は濟んでも、私が内部生活の破産者たる事實に少しも違ひはない。私の異常な性格は、私を驅つて殆ど其半生を一個の魂(たましひ)を破滅せしむるとに消盡せしめた。私は破壞そのものに今まで生活してきたのだ。そうして私は冀つた破壞が徹底的に行はれた時には、ペリシテ人の御宮の大柱(おほばしら)を押し仆して、自分も敵と共に壓死を遂げたサムソンと同じ運命に陷つた。私は此處に亡妻と私との間に起つた一切の事情を發表して、一つは私が舊き生活を、他は哀れな妻を葬る薤露(レクイエム)に代えたいと思ふ。

二

　私は既に書いた通り孤兒院に育つた者である。大阪のある町をうろついて居る處を巡査が引張つて警察へつれて行つた。乞食の兒だらうと、眼の恐い鬚の澤山生えた警部が云つたが、其實私は勞働者の子であつたことだけははつきり記憶してゐる。母親は居なかつた。死んだのか、追ん出ていつてしまつたのか、其邊は分らないが、兎も角も父親だけは居た。酒飲みの仕方のない奴で私に碌すつぽう飯も食はさず、大抵は一錢銅貨を一つ摑ませて、それで何かツマラヌものを買つて食ふのに任せておいた。だから私は父親を好まなかつた。警察でいろ〳〵住所や、親の名や職業をきかれた

けれど、知らない〳〵と一つも言はなかつた。實際當時は知つてゐることでも、それを言ひあらはすことが出來ぬ程年も幼稚であれば、能力も低くかつたのだ。そこで大阪から可なり遠い市の孤兒院に送られることになつた。併しつれて行つて呉れる人があるではなし、襟に○○孤兒院と書いた白い布を縫ひ付けて貰ひ、鐵道の役人に引き渡されたきりだ。私はそれでも首尾よく孤兒院に到着した。この爲め私は院では「小包」といふ綽名が付いてゐた。

そして私の手足が自由に動き出やうになると、維持費募集の音樂隊に編入されて、全國の主なる都市を巡回させられた。私が亡妻と初めて會つたのは、此巡廻中のことである。私は自分でもはつきりと自分の年齡が分らんのであるが、こ孤兒院の推定によれば、十七歳の年だつた。私の隊が始めて、北方の此市に足を踏み入れた。其時妻は海老茶袴を穿き、髮をマーガレットにしたミッション學校(スクール)の女學生であつた。切符の賣り捌きやら、場内の斡旋やらなか〳〵よく働いてくれた。そして大島さん〳〵と、私の處によくやつてきた。

それから四年目の夏二度此市に巡回してきた。私はもう秀子――妻の名――のことなどは全く念頭を去つて思ひ出しもしなかつたのだが、丁度二日目私共が樂隊の演奏を終つて、樂屋に退ると、間もなく若い娘さんが、其處へ見え、オヅ〳〵と、「大島さんはゐらつしやいますか」と訊いた。皆不思議さうな顏をして其娘を見た。私は「どなたです」と、出てみると、娘は頬を少し赤めて、「先年お目にかゝりました武藤秀子です」と、云ふので、私もやうやく氣付いたやうなわけであつた。

私は其時は事務を兼ねてゐたので、永久維持員の募集に就いて、本隊が引き揚げた後も約二週間ばかり、此地に殘ることになつた。秀子の父は流行らない齒科醫で、妻君との間に男一人と、秀子と二人の子供をもつてゐたが、男の子は丁度其年、苦學生を目的に渡米して、現にオレゴンの或る市に居る。私は私の屬する孤兒院と、秀子の兩親の教會とが同

じである處からと、秀子の父が世話好きなところから、其家に滯在することになつた。此滯在中秀子と私とが夢のやうに淡く、美しい初戀に落ちたとは云ふまでもない。

秀子は私をつれて、教會や家族の集りにも出掛ければ、又暇な折には散歩にもつれて行つて呉れた。併し私は四年前の小娘とはひどい相違に驚かされた。髮形や衣裳の相違は當然のことであるが、其眞黒かつた顏の色は、寧ろ病的と見るまでに白く、そして頰のあたりが仄りと赤味を帶び、背は別人のやうに高くなつてゐた。私は秀子を今では美人であつたとは思はぬが、當時は妙齡のことて、私にはそれこそ女神かなんぞのやうに氣高く、又となく美しく見えた。それから擧動も前のやうなひどいお轉婆でなく、寧ろ沈鬱なぐらゐに穩かになつてゐた。けれども言語は極めて明白で、言ひ度いだけのことは憶せず、言つて除ける方だつた。

私の半生を通じて眞に幸福といふ感じを抱いたことが三度あつた。第一は所謂る「小包」となつて、孤兒院に到着し、親切なおばさんの御給仕で、美味しい御飯を腹一杯に喫べたとき、第二は此秀子の宅に滯在した二週間、第三は米國から歸つて、横濱の土に、靴の裏をつけたときである。今から見ればその中で、第二が最大の幸福であつたやうに思ふ。更に樂しい未來が期待されてゐたのだつたから。

其夜は院の用を終へて、土地を去らうとする前夜であつたと、私は記憶する。又其夜は月の圓かな夜であつたことを記憶する。秀子と私とはN博士の宅で、私を送別する意味の小さな集會から歸りであつた。月の美しいまゝに私共は些少の迂廻をして、T川の岸へ出た。私共は其處に積み上げた、大きな角材の蔭に並んで腰を卸ろした。私には、此儘別れてしまふと、最早永久に再び會ふを得ないものゝやうに思はれ、名殘が惜しまれた。私共はまるで兄妹のやうに親しく、腹藏なく睦み合つて來たのだつたから。

『秀子さん、貴女も東京へお出でなすつて音樂を稽古なすつちやどうです』

私は、秀子が唱歌者として、可なりの技倆と、美しいアルトの持主であることを知つてゐた。で秀子を東京に出したかつたのだ。併し實を云へば此處に居るよりは東京に出した方が自分に幾分か近いといふ漠然たる意識があつたのだ！東京と院との距離は、此地と東京との距離に劣りはしないとは私もチヤント知つてゐながら、矢張りこんな馬鹿げた考を眞面目に口にする程、年が若かつた。

『それは私も行き度いのですけれど――』と秀子は何やら思案してゐるやうだつた。

『いゝぢや有りませんか。いらしたら。わけは有りませんよ。金だつて幾何も要りやしません』

『でも兄も遠くへ行つて留守ですし、父が許しますまい』

『大丈夫、私から話しませう。そしてあの○○傳道隊の宮地さんに、私が歸りがけ御目にかゝつて、御頼みして置きませう』

『ぢや明日は何時の汽車で御出發？』と突然秀子は話頭を轉じた。

『午後三時の汽車です？』

『そう――でも私御見送りには上りませんよ』

『何ぜですか』私は吃驚して訊いた『ちつとでも長く御一緒に居度いと思ひますのに。それぢや僕淋しいですな』

『でも――』秀子の聲は曇つた『でも私泣くのを人に見られると、キマリが惡るくて』

『えゝ、何ぜ泣くのです。えゝ何ぜ泣くのです？』と私は急はしく云つて、其手を確り握りしめ、横顔を覗き込んだ。

秀子は私の視線を避けるやうに、ぢつと川向ふを望んで暫時無言であつたが、俄にその切れのよい眼から眞珠のやうな涙

が蒼い頰を傳はつてハラ〱と落ちた。同時に其頭は何者かの重い手に押へ付けられるやうに、次第〱に低く垂れたが、卒然其速度を增すと、上半身と共に、崩れるやうに、私の膝に落ちかゝつた。私は啼泣の聲を耳にし、薄い單衣を通して、浸み透つてくる、濡つぽい其顏溫りを膝の上に感じた。私は何を云ひ、何をしたか、今は一々記憶にない。只半ば夢のやうに秀子の頭を橫抱きにして、香ひのいゝその髮から、頸筋にかけて、幾度となく、唇を押し當てながら、自分でも幸福の淚にくれたといふことだけは云へる。

秋近い月は高く天心に昇つて、丸石と、小石の廣い河原を水が幾條かに別れて、きら〱と光りながら、凉しい音を立てゝ流れた。河向ふの一筋町には電燈が星のやうに照つてゐるが、其家並の背後には廣い〱野が靑い月光の下に遠く低い丘のあたりまで、夢のやうにぼけて行つた。

私は斯うした大景色のうちに、默然として、長いこと秀子と手を握り合つてゐた。

私共の戀は斯うして成つた。そうして程なくそれが秀子の兩親と、私の養ひ親の許しを得て許婚となつた。私は翌年米國カリフォルニアの或る大きな農具、種苗の販賣店に此市の聯合敎會に居るタプソン氏の紹介で、事務見習ひに入ることになつた。

三

私は今四年の間隙（ギャップ）を一足飛びに飛び越して此處に米國から歸る汽船の甲板に居る。時は九月の末だ。日はもう浪にすれ〱に落ちかゝり、水際から水面にかけて、黃、白、紅、紫の限りをいろどり、何處からともなく吹く夕風に無限の襞をのした薄暗が海をおふてくる。白帆の影は暮靄（ぼあい）のうちに止まり、往き交ふ汽船には燈火が寶石をちりばめたやうにギラギラ輝く。私は自分の前に刻々と大きくなり行く故國の陸影を眺めて、今や愈々幸福の最終頁が、其認印を押捺されやう

としてゐるのだと思ふと、何とも云へぬ感慨にあふれた。路傍に放棄された一勞働者の子。それが主の慈善の御手に、健全に育てあげられたことすら有難いのに、更に恩惠に恩惠を重ねて、美しく氣高い妻を給ひ、社會に立つてよき位置を給ふ。何といふ神の愛であらう、何といふ御情であらう。私は感謝の涙に暮れて、人のない前甲板の陰に、折柄照りはえてきた星を仰ぎつゝ、熱祈を捧げたのであつた。

船が横濱に着いたのは日がトップリ暮れてからであつた。舷梯を下りて、弧狀燈の明るい埠頭にドッシリと足が着いたときは、足の裏からぞく〳〵痛むくらゐに、感銘を催うした。あのやうな感銘は容易に得られるものではない。私は迎ひに出た人、到着した船客の湧きかへる人波の中を押し分けて、兎も角も稅關の方へ行つた。私は一足毎に今か〳〵と胸を躍らした。行きかふ若い女を見ると今度こそはと顏の筋肉をゆるました。併し道にそれらしい者を見當らぬ時、私は急に物足りなさを感じた。私の幸福の源は一體何處に居るのだらうかと、西洋人などは未だ船の着ききらぬうちから、ラーンチを飛ばして迎へに來て、甲板の上で、抱擁、接吻するものさへあつた。併し私の愛するものは見えない。

『秀子は何處』

私の心は今までのかゞやかしい幸福に引き換え、急に不安の雲がかゝつた。私へ屆いた最終の手紙には、到着時日を知らすれば、横濱まで迎に出てゐると書いてあつた。私はそれ故無線電信の通信圏に入ると、直に豫定の日時を知らした。それは聊かの相違もなく成就してゐるのである。然るに秀子は？

私があちこち見まはしながら、執念く尾け纏ふ宿引や、車夫をことはつて居ると、其處へ來たのが、私が院に居た時分には未だ神學校の生徒であつた青野さんだつた。

『奥さんは御加減が惡るくて、お迎ひに來られませんからと、私の處まで御手紙が參りました』

青野さんは私の不安、不滿足な顏を見て、何よりも先づ斯う云つて、秀子の見えない理由を說明してくれた。

『病氣ですつて？　何の病氣でせう』

私は幾分不平、幾分心配で斯う訊いた。

『サア何とも書いてありませんが、別段大したことも有りますまい。兎も角私の宅へ入らつしやい』

青野さんは車夫に吩咐けて、稅關の檢査の濟んだ私の僅かな手荷物を受け取らせ、私を其宅に連れていつてくれた。私の心は何ともえ體の知れぬ不安と、不滿とで少しも落着かなかつた。秀子の病氣といふことも少からず氣掛りであつた。私は斯うしてツマラヌ行違ひが、何かしら私共に大きな不幸を持ち來しはしまいかとも思つた。兎も角も早く歸つてみやうと私は未だ些少の要事があるのを振り棄てるやうにして、早々此市へ出發したのであつた。

私は此市へ久振りで來て、其變化したのに驚いたが、秀子の更に變つたのにはヨリ以上驚かされた。

秀子は勿論兩親と共に私を停車場に出迎へた。けれども何故か人の後ろにばかり匿れてなるべく私を避けるやうにした。

『日本の婦人は餘りにシャイだ。溫しくて良いのだらうが、せめて米國女の半分も快活であつて欲しいものだ』

私は最初秀子が未だ病氣がよく直らぬので、私にあふのを億劫がるのだ、人前だから羞むのだらう、遠慮してゐるのだらうなどと思つてみた。或は人の居ない處に二人きりになれば、きつと私の腕に身を投げて來るに違ひないと信じてみた。私はもう悉皆米國風の頭になつて、米國の婦女のやうに日本の婦女もするものと、不知不覺思ひ込んでゐたのだたつた。勿論それには私にそうした一つの記憶があつたからだ。記憶といふのは、私が米國に居る時、よく私を訪ねてくれたメーリイといふ娘のことだ。メーリイは曩に述べた聯合敎會の宣敎師タブソンさんの子で、此市で生れて、十四

の年まで育つたので、日本語が上手だ。

『大島さん』と、メーリイは、長く編んで下げた栗色の髪を弄りながら、よく私の部屋に來た。私が知り合ひになつたのは、メーリイが十五の時だつたが、西洋人だから身長は私といくらも違はなかつた。私はそのお轉婆なところが、初めて會つた頃の秀子と似てゐると思つて、大變可愛く、懐しく感じた。

『私早く學校を卒業して、Sに歸り度いわ。證書を頂いたら、其日のうちの汽車で港(ポート)へ行つて、直ぐ日本行の切符を買ふことにチヤーンときめてあるわ』

『又始まつたね』と、私は笑ふ。『そんなにSが懐しいかメーリイ』

『それや父(パパー)も母(ママー)も居るし、私の生れた處ですもの。貴下はSはお嫌ひ?』

『嫌ひどころか大好きだ』

『何(な)ぜ。秀子さんが待つてゐらつしやるから?』

『そうとも、秀子が待つてゐるからね、メーリイは秀子をよく知つてゐると云つたね』

『知つてゐますとも。父(パパー)の指揮してゐる合唱圖(コーラス)の歌者(うたひて)で、よく宅へ稽古にいらしたわ』

『そうか。メーリイは秀子が好き?』

『嫌ひぢやないわ』

『私と孰(どつ)ちが好き?』

『孰ちだらうか』と、メーリイは狡るさうに笑つた。『孰ちも好かないわ』

『よし』と、私は立ち上つた。『それぢや復讐だ。私共はメーリイが好きなんだ。どうしても接吻しなければ承知できな

い』

私はさう云ふや否や、逃げやうとするメーリイを捕らへ、顔と云はず手と云はず接吻で覆ふた。私が秀子を愛する心が幾分か之れで慰められるやうに思はれるからであつた。

併し又或る時には私がソフアにかゝつて假睡してゐると、メーリイが窃り扉を開けて、忍び寄り、突然首つ玉に噛り付き、

『大島さんの、御寢坊さん』と、呼ぶと同時に、私の額に唇を押し當てたこともあつた。

眼の碧い、栗色の髪の、色の白い肉付のいゝメーリイ。私はそれを抱く毎に、秀子を想つた。秀子も私が歸つたら、きつと私の腕に斯う身を投げてくると。

併し私の考えは段々グラ付き出した。秀子は家に歸つてからも、成るべく私を避るやうにする。言葉をかければ、それだけの答をして、遁げるやうにして、私の傍を離れる。用を吩咐けても、早々仕終はせて、立ち去つてしまふ。その上甚だ不愉快なのは、秀子の擧動だ。そわ／＼として、丁度憶病な子供が暗い淋しい路を一人で通るやうに、其踵はいつも地に確りと着いてゐない。私を見る其眼は、叱られた犬が、身を縮めながら、尾を巻いて、後を見る時のやうに、不安と惧れとに滿ちてゐる。

『變だ。秀子はマア一體どうしたのだらう。私が何ぜあんなに恐ろしいのだらうか知らん。米國で受取つた手紙の、あの濃やかな情緒は、今何處にあるだらう。不思議だ。不愉快だ。私は折を見て秀子自身の口から、其理由を必ず訊き査してみねばならぬ』私は斯う決心してゐた。

私は時折秀子が私の室に用を足しに這入つてくるのをとらへ、之を切り出してみやうと思ひ／＼したが、いつも言葉

が咽喉につまつて口に出ないうちに、秀子に外づされた。私は默つて眉に皺を寄せたまゝ、眼を光らして、いつまでも秀子の去つた方を睨んでゐるのでつた。私は堅く鎖された鐵扉の前に立ち、徒に內部を覗かうとする者の賴りなさを染々と感じさゝれた。日に暗くなる私の心は額にも出て、秀子の兩親の眼にも映つた、彼等は病氣でないかと訊いた。私は徐ろに首を横にふつて、不覺苦笑した。

四

私は此地へ着くと間もなく、土地一番の大きな呉服店、兼農具、農產種苗店で、所謂るデパートメント・ストアに傭はれた。之は前からの約束であつたのだが、私の考えでは三ケ年の期限を勤め上げ、土地の商情を心得てから、農具、種苗等の輸出入店を開かふといふのであつた。

私は亞米利加風に、萬事敏捷を尊んだ。朝は早く起きて、自分の身のまはりや、部屋を取り繕ひ、家族の祈禱を司會して、それから事務所(オフィス)に出掛けた。

私の通るアカシヤの並木は、其黃な葉を黑い泥の上に、一ぱいに振りまいた。店の煉瓦塀のそばにある櫻の葉は、眞紅に染んで、風の吹く日は事務室の入口から、混凝土の牀に、其幾つもが、ヒラ〳〵と舞ひ込んだ。雨がしと〳〵降つて、冷たい朝、夕月の濃灰色な雲間から、氷る地面を覗く宵、私はスコツチの厚外套の襟を立て、同じ道を亞米利加風の大跨に、脇目も振らずサツサと步むのであつた。

事務を執るにも私は亞米利加風に執つた。高いデスクを置き、晝飯の休憩を除く外は椅子に腰掛けず、立ち續けに仕事をした。筆一つ握るも早急で、一切のことを簡明(プレッチイ)と摘要(エンド、ポイント)で押し通した。同僚の者は之を悅ばなかつた。けれども主人は非常に私を重寶がつた。三ケ月と經たぬうちに私の位置はメキ〳〵と進んだ。適當な新種子、新種苗、改良農具

の買入れ、賣り捌き、新販路の開拓、すべてそうしたものが私の言ふが儘に行はれた。私の事業は神の限りない祝福の下にあるやうに見えた。此點から見れば私は幸福なるべき筈だつた。左樣、確に幸福でなければならなかつた、若し秀子が冴々してくれたならば、そして私の心に較(やゝ)もすれば蛇のやうに執拗に頭を擡げやうとする疑念を一掃してくれたならば――。

『クリスマス前に結婚しちやどうです。そして降誕祭と一緒に御披露をしては?』

餘り私がゆつくりと構へ込んでゐると、見たであらう、秀子の父は或る日斯う云つて私に勸めた。

『結構ですね。私の方ぢや何時でも式を上げられるやうになつてゐますが――』

私は叮嚀ではあつた。けれども其語調に一種の冷かさを帶びてゐることは、自分でも隱すことが出來なかつた。

『いや娘の病氣だつて別に大したことは無いのです』と、父親は鬚だらけな其顏に、人の好さゝうな笑を浮べた。『實は私も心配して、無理に飯倉博士に診て頂かしました。併し一寸した神經衰弱だとのことです。結婚すれば、又氣持も變つて却つて善くなりはしまいかと私は考へるのです』

『そうですか』と、私は氣のない返事をしたが、フト私は當人に直接に訊き度い志望とは違ふけれど此處で一思ひに私の疑惑を打ち明けてみやうかと考へ付いた。『併し、私は罪なやうですが、秀子さんの神經衰弱は、私が嫌にたつたからではないでせうか。どうも私を避けられるやうにばかり見えますよ』

『飛んでも無い』と、父親は頭を強く振つた。『それは全く反對ですよ。御留守中は貴下のことばかり言ひ續けて居ました。それから御歸りの無線電信が船の上から來ましたときは、全く感動して、顏の色まで變へました。その爲めにあんなヒステリイのやうになつたのです』

私は父親の正直な顏をヂツト覗てゐた。其處には一點の疑はしい雲もなく、全く露き出しの眞實を語つてゐた。私は之に對して自分の理由の淺薄な不平や憤滿を罪だと思はぬわけにはいかなかつた。

『それなら差支はありませんが、若しか私が厭であるのだとすると、御互に氣拙づいのですから』と私はつい釣り込まれて、承諾する氣になつた。老人はいろ〳〵娘のことを話した。學校を卒業してからピアノを西洋人の處に稽古したこと、裁縫學校に通はせたこと、生花や茶の湯も習らはせたことなどを、さも〳〵大事でも決行したやうに、又それが大きな誇りであるやうに話してきかした。そんなことは私はとうに秀子の手紙で知つて居たのだつた。

『お前の妻として適はしいだけの事は皆仕込んであるから、充分安心して早く結婚しなさい』と、いふ意味が父親の詞の裏に潜むことか明白に看取された。私も强ゐられる儘に秀子の擧動に未だ幾分の不審と不安とを感じながらも、それでも結婚することにして兎も角も日取を極めた。

斯うなると、母親の悅びは又一段であつた。母親はいそ〳〵して私の處へ來て云つた。

『マア〳〵それで私も安心しました。娘が病氣で、あんな澁い顏ばかりしてゐるので、私はモウ貴方に御氣毒ではありますし、又御厭やになりはしないかと、そればかり心配してゐました。廣いやうでも東京などと違ひまして、貴方と私共の關係は此土地では皆知れ渡つてをるのですから、若しやのことが有つたら、私共の顏が潰れてしまひます。あゝ斯う纒つたのも主の御恩惠で御座います』

私は結婚の承知はした。併し矢張り物足りなさと、焦々しい氣持とは、うるさく私の心に尾き纒つてどうすることも出來なかつた。それに秀子の態度は斯う談がきまつてから、愈々私を避ける傾向があらはになつたから、私は時が經つにつれ、何ぜ早やまつて結婚を承知したらうかと、口惜む心さえ起るやうになつた。

秀子は結婚式の日取が極つてからは滅多に自分の室を出なくなつた。或る時には確に泣いてゐた。兩親もそれには幾分か不安になつたやうに、眉を顰めて、心配さうにひそ〳〵話してゐることもあつた。

『お前それぢや困るね、どうしたのだよ。今頃そんなことを言ひ出して』

私は或夜便所に行く時、フト秀子の室から母親の聲が聞えるのを耳にした。秀子は確に突俯して、啜り泣きしてゐた。

『今更お延し下さいとは云はれないぢやないの。それとも重い病氣でもあれば致方がないが、お醫者さんは、却て早く結婚なすつた方が良いと仰つしやるのぢやないか』

私は悪るいことを聞いた、と思ひ、こつそりと自分の室に引き返へした。

只事ではない。確に秀子は罪を犯してゐる。神の御前に、私の前に濟まないと信ずる罪の意識がある。併し何の罪だらう』私は頭をかゝえて籐の肱掛椅子に倚つたまゝ石像のやうに動かなかつた。フト厭な考え――汚ない汚ない疑が私の心に浮んだ。『秀子は私を裏切つたのではあるまいか。あんなうまい手紙などを寄越して、私を詐さうとしたのであるまいか』と。併し私は直ぐに打ち消した。『いけない〳〵、何の據り處もないのに、そんな疑をかけるのは罪だ。こんな疑ひを起せば、自分で自分を苦しめるものだ。併し――あゝ、矢張り秀子自身の口から聞き取ることだ。それが一番確だ。よしどんなことでもして聞いてやらう。私は是が明かにならぬうちは結婚の式を擧げない。斷じてあげない。』

機會は遂に到來した。それは十二月の寒い夜であつた。窓の硝子はまるで金剛砂で磨つたやうに水蒸汽が凍て付いて、キラ〳〵と電燈の光りに反射した。ボーッと微かな音を立てゝ、燃えるストーヴの煙筒には、夜風が淋しい歌を唱つた。私は毛絲のジャケット一枚になつて、自由椅子にスッポリ腰かけ、最近に米國から着いた雜誌を讀んでゐた。注意

を文字に拘はれてゐた私の耳は、フト緣に人の足音を聞いた。私は目を上ぐるまでもなく直ぐにそれは秀子であることを悟つた。其夜は兩親はそれ〴〵自分の用や、敎會の用で外出して留守だつたのだから。

スーツと躊躇ふやうに障子が開いたとき、私は始めて氣が付いたやうに頭を上げた。其處には血の氣の失せた秀子が少し悄れて、垂れかゝる髮を掻き上げやうともせず、きつちり口を結び、異樣に眼を光らして、這入つてきた。彼女の兩手は飛び出さうとする懷中の生物を押へてゐるやうに、確りと胸の上に拱み合はされてゐた。

『大島さん！』と、秀子は其處にあつた搖り椅子に仆れるやうに腰を卸した。其の聲は咽喉の半途で押し詰つてゐるやうだつた。

私は秀子が何を云ひに來たかは知らぬが、兎も角も求めぬうちに好機の到來したのを悅び、讀みさしの雜誌を其儘にして、クルリと椅子のまゝ向き直つた。

『どうですか御加減は？』

私は白々しくも斯樣なことを口に出して、作り笑ひをした。

秀子はそれを一切氣に止めぬやうに、少し俯向いて、一つ大きな溜息をして、顏をあげた。そして何か言ひ出さうとして其口のあたりを痙攣的に歪めた。

『私……私御詫びを貴君に申上げねばなりませんので――』

私の心は躍つた。出るぞ〳〵と期待してゐたものが、ヒヨツクリと出ても吃驚するものだ。私の疑惑が今一瞬の後には明瞭に知れやうとするのだもの、私の心臟はまるで蒸汽を一杯に受けたピストン桿のやうに、ドギン〳〵と鼓動したも無理はない。

『御詫びつて一體どんなことです』

私は唾を飲み込み〳〵訊いた。

『御宥し下さい。私は——私は神樣の前に大きな罪を犯しました。』

秀子の聲は咽ぶやうに聞えた。

『私は——もウ結婚の出來る清い身體では御座いません』

『え、ツ』と、私は覺えず椅子から立ち上り、『ぢや矢張り』

是まで云つたが私もそれ以上は詞が出なかつた。是は又餘りに大きな打擊であつたから。私は目がぐら〳〵して再びドカツと腰を据え、『矢張り〳〵』と、小聲に繰り返へしながら、額から滲み出る冷汗を、ポケツトから取り出したハンチケで頻りに拭つた。

秀子は顏を伏せひつきりなしに唏り上げた。

私は暗に豫期したことながら、今更のやうに狼狽して、一時只呆氣にとられてゐた。併し少し經つと私の意識を確實に取り返へし得た。

私は異樣に落付いて、靜に秀子を詠めた。私は米國から送つた其白いレースの襟から、出てゐる秀子の美しい首筋を見た。私は矢張り先方から送つた許婚の指環が、其細い指に嵌つてゐるのを認めた。別るゝ前夜に私の膝に凭たせた其黑髮を認めた。けれどもそれが何であらう。秀子は斯うした記憶の下に罪を犯してしまつたのではないか。神の御前に嚴かに、此者に捧げますと、誓を立てながら、其處女の純潔を他の男にムザ〳〵と汚さしてしまつたのではないか。彼の唇、彼の眼、あゝ最早永久に私の物ではない。懺悔が人に何の役に立たう。それは只神のみ受け得らるゝものだ。砕

けし心――それは私が求めたものではなかつた筈。私の求めたのは完き身體と、純なる心であつた。裏切者！ 姦婦！ 石に打たれて死ね！ 私の胸は考へてゐるうち憎惡、屈辱、嫉妬、怨恨の情で、まるで煮えくり返へるやうになつた。若し私が基督者でなかつたなら、口の中にジイ〳〵湧き出る唾を、容赦なく其首筋からひつかけ、足をあげて踏んで踏んで、踏みづぶしてやるのであつたらう。けれども私は基督教的紳士だ。素性は何うあつても今日では社會に相當な位置を占める身だ。毎日「我等他の罪を赦すべければ、我等の罪をも赦し給へ」と、祈つてゐる信者だ。「七度と云はじ、七度を十倍」せよと、他の罪を寛大に處置すべきを主に命ぜられてゐる人間だ。そんなことは怪我にも爲すべきでない。

私は靜に沈着いた聲で、なほ泣き伏して頭を上げ得ぬ秀子に云つた。

『秀子さん、よく告白して呉れました。私には貴女の罪を赦す力をもたないけれど、神様はきつと宥して下さるに相違ありません。私はもうそれ以上告白を聞く必要がありません。それで宜ろしい。私は何だか近頃貴女の素振りが變だと思つてゐましたが、それで悉皆分つて、私の心も清々しました』。

私は事實其男を知り度かつた。其以上モツト〳〵詳しい、突き込んだ點まで問詰め度いのであつた、けれでも私は寛大でなければならぬ。それには不愉快なこと、私の心を猛り立たせることを成るべく少し見たり、聞いたりせねばならなかつた。

『ぢや一緒に、神様に御祈り致さうぢやありませんか』と、私は一層聲を優しく云つた。『九十九の羊より、迷へる一の頭羊をあはれみ給ふ主は、貴女の潔よい、懺悔で、どれだけお悦びになりませう』

私は椅子を離れ、疊の上に跪さ、手を拱み、非常に敬虔な態度で祈禱を捧げた

『慈悲ある在天の御父様よ、罪ある下女と罪ある下男とが今御前に出でまして、其大きなる罪を悔ひ改め、あなたの大

なる御慈愛と御能力の下に雪よりも白く洗ひ淨められんことを祈り奉る。憐愍に富み給ふ父よ、昔御子イエス、キリストが幾多の罪人殊に姦淫の罪を犯せし婦女を……』

此處まで言ふと、秀子の啼り泣きが一段高く聞えた。私はそんなことに一切頓着せず、ズン〳〵と祈禱を進めた。

『赦し、天國の嗣子と爲し給へる如く、私の半身たる定め給へる此女を恐ろしき、亡びの淵より救ひ出し給へ。願くば此女の悔改めを嘉し、其罪を赦させ給へ、更に私が此女に對し今日まで抱き來りし不快の念を取り去り給へ、自分の悪しきを見ず、他の悪しきことのみを見ます、卑しき下僕をあはれみ、助け、此女をよく愛し、よく助け、忠實なる妻たらしめ給へ』

私はまだいろ〳〵なことを長々と祈つた。要するに私は立派な基督教徒たるに耻ぢぬ、公明、正大、寛廣、慈愛の精神を發揮した祈禱を捧げたのであつた。

秀子は最後にアーメンと云ふと、もう堪らなくなつて、ワツト聲を立てゝ泣き出して、後には私の腰掛けた膝をしつかりと、抱いたまゝ、何時までも、何時までも泣いてゐた。

哀れな秀子！　罪の懺悔と、赦された悦び、しかも結婚まで、元の約束通りに出來る其意外な幸福とに泣いてゐるのだ。

哀れな秀子！　併し其の脊を撫でる男の手にどれだけの憎惡が籠り、其頭をヂツト瞶めてる男の眼に、消し難い痛恨の光がかゞやいてゐたことをどうして氣付かう！

私は其夜秀子が去つてから、椅子に腰掛けたまゝ殆ど睫一つ動さずにぢつと固くなつてゐた。私の頭は化石したやう

で、顔の皮はぴんと糊でもつけたやうに硬ばゞつた感じがした。私の眼は釘付けにされたやうに向ふの押入の襖に注がれた。其處には私が米國から持ち歸つた創世紀の畫があつた。無花果の葉陰に立つたのはエバで、狡猾な蛇は其幹に絡み付いて、彼の女を罪に誘つてゐるところである。

――秀子をどうしてやらう？――

私の頭はしよつちう是を考えながら、眼は少しも蛇から離れなかつた。

――復讐！　眼にて眼を――齒にて齒を――

畫の蛇は段々と幹から辷り下りて、エバの脚下に來るやうであつた。そして其眼を、如何にも横着さうな微笑を隱して、何か私に示唆するやうに、此方へ向けてゐた。

私は何ぜか知ら、聊か全身の筋肉が震ふのを覺えた。

――いけない！　復讐はいけない。基督は堅くこれを御警めになつた――

蛇は妙に眼ばたきして、長く出した舌をチロリ〳〵とさした。

――けれども秀子は當然罪を受けねばならぬ。播いたゞけの種は刈らねばならぬ――

蛇は微笑を浮べたまゝ微かに肯づいた。

――淸い容器には淸い蓋が要る。今若し蓋が汚れて、容器が淸くては、一つにすることは出來ない。併し二つの物は一つで、決して二つに算ふべきでない。そうだ、私達は夫婦として最早神が定め給ふたのだ。秀子が汚れて、私が淸くても、妻は妻、夫は夫だ、唯淸い心と汚れた心と、淸い身體と汚れた身體とを一つにするとは出來ないだけだ。では此結婚で秀子は罪を受けず、私は良き樹として、良き果を結ばぬのであらうか？　決してそうでない。名のみ一つで、事實

永久に合し得られぬ事實こそ秀子に取つては大きな罰ではないか、それによつて秀子は永久に罪の記憶から離れ去ることが出來ないのだ。永久に心に蝎尾鞭(スコルピオン)を受けねばならぬのだ。そして私の行爲が潔かれば、潔い程、彼の女を愛することが深ければ、深い程、鞭の痛苦は烈しいのである。丁度清い容器と、汚れた盞とを取り揃へて置けば、盞の汚れが愈々はつきりするやうなものだ。そうだ、私はようこそ結婚すると言つた。私は是非秀子を妻にしやう、そうして愛して、愛してやらう、裏切られた私、蔑視せられた私が、いや高い德の位に座するとき、其處に秀子の罰が充分に與へられるのである――

私は始めて莞爾した。そして立つて行つて蛇の頭を撫でゝやつた。蛇はもう動かなかつた。ストウブの薪が燃え崩れて、どしんと鈍い音がした。私は自働的に部屋の中を二三度歩るきまはつた。

五

結婚式の夜は寒く晴れ渡つて、空には星が一杯に出てゐた。雪明りに黑々と聳える教會の高い塔やゴヂックの窓には燈火がついて、まるで、ジオラマを見るやうであつた。雪の中の帶程狹い路を、外套やら角卷(シヨオル)やらを着た人の影が列をつくるやうにして、其門口に急いだ。私共の橇が通ると、其人達は道を譲つて、それ〴〵會釋した。

會堂內はクリスマスの飾り付けで華やかであつた。常盤木の枝にかゝる銀紙の星、白い壁の楣間には、紅い實のなつた寄生木の枝がさゝれてあつた。

來會者はもう犇々と詰めかけてゐた。下の席は勿論、公開演說の時でなければ人を入れないガレリイにまで相等な人數が見へたくらいに盛な式であつた。ストーヴと人いきれと、香水の匂ひとで、高いアーチの組み合はせになつた會堂內もムッとする程であつた。

式は朗らかな鐘の音が六十も鳴り止むと同時に開かれた。志村さんのお嬢さんが弾いて下すつたメンデルゾーンの結婚行進の緩い拍子に合はして、右と左から秀子と私とが、花持の乙女を従へて、祭壇の下に進み寄つた。高島田に仕立てた秀子の姿も、年の割には初々しく見えた。けれども初めて見た秀子の島田は私に厭な感じを催うさした。『島田は処女のシムボールではないか。秀子がこれを結つて此處に立つのは僞善の具體化だ』私は此時きつと、我知らず鼻に皺を寄せたに違ひない。

私は先程から秀子の容子を氣付けてゐたが、確に悦んでゐることが知れてゐた。私が取つた効果は着々と上つてきてゐるのだ。秀子は彼の告白を私に僞してから、餘程浮々してきた。無論陰にかくれて泣くこともせず、又私を避けることもなくなつた。時には笑ふ聲も聞えた。

――ヘ、、今悦べば、後で悔む心が一層大きいわい――と、私は心で冷笑しながら、表面は努めて打ちとけ、親切に秀子をもてなした。

牧師の招ぎにより、私の傍に寄つて立つた秀子の顔には確に今までにない悦びがあふれてゐた。十字架の光る祭壇の前に、私共二人が立たされたとき、彼女の顔は上氣してゐた。長い禱文や、祝福やらがあつて『此花嫁を渡す者は誰ぞ』と、云ふ牧師の聲に、媒妁の野田夫人が來て、聖書の上で、秀子の繊い手を、私に握らしたとき、私はかすかにそれが震へてゐるのを感じた。

私共は式後○○館で直ぐに披露の宴會を開いた。是も私の記憶によると頗る盛んであつた。酒無しの會ではあつたが、集まつた者は暖かい料理と、どん／＼焚く暖爐のほてりで、酔つたやうに眞赤な顔をして、笑ひさゞめいた。誰とも無く立つて、卓上演説を始めると、それからそれへと、演説が出る、祝賀の腰折や駄句を自慢そうに讀み上げる。き

かぬ氣の樫村君のお婆さんまでが立つて、嫁の心得がどうの、亭主の態度がかうのと、訓戒めいた演說をした。其中で私が今想ひ起したのは宇垣氏の演說であつた、禿げた頭を電燈の下に光らしながら、人の好さゝうな顏をニコ〱さして、釦穴の花をイヂリ〱斯う云つた。

『扨て何から何まで御芽出度づくめで結構此上も御座いません。併し私共老人の經驗によりますと、結婚といふものは、之をやりました當座は御互に好きで、可愛くて、迚も迚も堪りません。が是はまづ一年、長くて二年です。それから先は御互に遠慮が無くなるにつれて、何やかやと缺點が見え、それからはモウ厭で厭で仕方がないが、子供が出來る。周圍の事情が混がらかつてくるといふ案排でモウ什麼することも出來ず、そのまゝ連れ添うて行くのが、マア是は世間に有り勝ちのことです。餘り始めに大きな幸福を期待して、後で反動が來ないやうに、一言御兩人に御忠告して置きます』

私は是を聞いて、成程夫婦つれ添ふて行くことは甚だ無雜作なやうで、難しいものだ。好きで、好きで、可愛くて、可愛くて結婚してさえ、其幸福は夢の間に過ぎ去り、苦い現實に澁面して、一生を送らねばならんとすれば、私共のやうに最初から、互に心に傷をもつものが、上部だけを飾つて一緒になることは、之は見す〱相抱いて淵に溺れるものだ、と思つた。併し又考へ直してみれば、どうせ結婚生活の幸福がそれ程果敢ないもの、結婚といふものは、男女の一騎打を圍ふ竹矢來のやうなもので、生涯其中で摑み合ひ、睨み合ひをして行くべく運命づけられてゐるものとすれば、冒頭からドン詰りを豫想し得られる此結婚も、つまりは五十歩、百歩ではないか。何うせ私が他の女と一緒になつても、又秀子が他の男と一つになつても、土臺結婚といふものがそれなら仕方がないではないか。今では私は只與へられた道を一筋に行く外はない。私はいや應なしに其處へ突きつけられてゐるのだから。私はそう思つて、私の隣りに愼しまやかに俯向いて、自分の前に置かれたナプキン一つ取ることどすらせず、人形のやうにぢつとして居る秀子を、冷やか

に偸み見た。

理想と實際と調和しないのは、心情の問題に至つて最も甚しい。今までの行きがゝりは一掃されて、隔意のない夫婦の生活が始まると、秀子自身は思つたに違ひはない。けれども私の考えは全然相違してゐた。それは勿論、私迚出來れば、そうし度くない譯ではなかつた。其が出來ないのが即ち感情の問題である。頭の上では宥恕が出來ることも、ハートの中には以前の嫉妬、怨恨、憎惡がちやんと生きてゐる。赦罪の羊皮紙（パーチメント）は渡しても、記憶の元帳には明かに罪の汚點が印してゐる。私を其夜、秀子から捻ぎ放したものは此感情であつた。

私は翌朝、秀子の顏に不安の色の漂ふのは認めた。私は其理由を勿論知つてゐたが、無作法に云ふこともならねば、又云ふ必要もなかつた。只朝餐の時、父親がフト氣が付いたやうに云つた。

『秀は又頭でも痛いか、顏色が少し惡るいよ』

母親は餘計なことを云ふ人だと、思ふやうに眼を光らし、

『眠が足りないのでせう。前夜（ゆうべ）は、歸つてから又長い間話してゐましたもの』と云つた。

『そうでしたねー』と、私は擽つたい思ひをして傍から口を入れた。眞個私共は床に這入つてから三時間も何やかやと話してゐた。私はつとめて秀子の氣に入るやうな話をして聞かした。秀子はそれを面白さうに聞いた。時には四邊を憚らぬやうな、きさくな笑ひ方をした。何時寢入つたか知らぬが、私が醒めたときは長い冬の夜があけて、寒い朝の灰色の光線が障子を通して、朦りと室内に流れ込んでゐた。私の傍には、お白粉の稍々斑になつた顏に驚愕と、不安の心を浮べてゐる秀子を見出した。

『あゝ熟睡した』と、私は大きな欠伸をして、枕元の懐中時計を取つて見た。『もう六時だ、秀子さん、ストーブを見てください』

『お母さんが、今來て火を入れました』と秀子は低い聲で物憂げに返事した。

『そう、ぢやもう五分も經つたら、起きませう』

そう云つて、私は態と莞爾とした。其時の秀子の顏といつたら、何と書いていゝか殆ど形容に苦しむ。

一日經ち、二日經ちして、ツイ一週間も經つた。秀子は今日こそはと期待して居たらしいが、其期待は何時もフイになつた。それにつれて其擧動は一度得かけて來た快活を段々失ひ、其表情は言葉を持たぬ動物の悲しみと、不安と、焦慮とをあらはした。母親は秀子に何故かと問ふたらしいが、秀子は確に答へなかつた。或日母は私に來て云つた。

『秀子はどうも身體が悪るいやうですが、又元の病氣が起つたのだと思ひます。私が病氣の直らぬうちは悪るからうと云つたのに、親父さんが結婚すれば、直ると無理を爲さるものだから、一時は元氣ついたけれど、矢張り――』

私は母親の云ふ意味を充分に飮み込んでゐた。

『一時別居して、溫泉にでもやり、悉皆身體が直つてから、又一緒におなりなすつたら、いゝぢや有りませんか』

果して、私の推測した通りのとを母親は考へてゐたのだつた。私はそれでは事實と全く正反對だと、心にお可笑く思ひながら、どうでも御好きなやうに、又本人が望むやうにして下さいと、返事して置いた。

併し私は別に骨折つて、秀子の期待を裏切つたわけでもなかつた。又餘儀なくそうしたわけでもなかつた。私は健全な身體で、男子の有する總ての能力、總ての慾望をちやんと具備してゐたのだから。只、私は秀子に對して自分でも不思議なぐらゐ冷淡で居られたのであつた。

温泉行も勸められたが、秀子は別に身體に惡いところがないのだからと、肯き入れなかつた。それに違ひないのだ。秀子の身體に何の惡いところがあらうか。普通の順序で行けば、父親が言つた通り、結婚によつて却て快くなつてた筈だ。併し結婚とは教會で牧師が祝福すればそれで足りるものでない。どうしても其處に——いや、そう露骨に言ひきる前に、甚だ不適當かも知れないが、舊約聖書の創世記から一つの話を引用して、直說するを避け度いと思ふ。

有名なアブラハムの子息にエルといふ者があつた。年頃になつたので、タマルといふ嫁を迎へた。ところが此エルはエホバの神様の前に惡事を爲したので、エホバの神様は大に怒つて此者を御殺しになつた。然るにエルには末だ子が無かつた。そこで當時イスラエル人の法律に從ひ、其妻は弟が娶つて、其出來た子が兄の跡目を相續することになつてゐたから、お父さんのユダが次男のオナンに後家のタマルを娶れと吩咐けた。ところがオナンは其生れた子は自分のものにならぬことを知つてゐるので、結婚はしたが子を孕ませぬ處置を取つた。そこで神様はオナンをも殺してしまはれた。

話はザツト以上の如くである。併し私が強ちにオナンの眞似をしたと謂ふのではない。秀子對私の夫婦關係は此様な官能的なものでない。全く超絶的、プラトーン的であつた。尤も時々には私にも秀子が女であるといふ意識が強く起らぬこともなかつた。けれどもいつも反抗的に童貞を守らうとする私の決心を破ることは出來なかつた。

それはズーツと後のことであるが、一つの例として序だから此處に書く。

雪が解けて、生溫るい風が盛に吹いてゐる四月末の夜であつた。私はフト目が醒めて、便所に行つた。風は依然強く吹いて、戸ががた〳〵と揺れてゐた。硝子を通して、外を見ると、葉のない柳に朧な月がかゝつてゐる。凍り付けてゐた土が膨軟になつて、土臺がゆるんでゐるところへ、風に押されたので、板塀の一部は崩れてゐる。其處から廣い路が

見える。仄白い月の光の下に、犬つ子一疋居ない街路を埃が舞つて行く。私は何だかノンビリした氣持で、此單調な景色を立つたまゝ暫時見てゐたが、フト私の眼は、硝子を漏れる月が薄りと、秀子の寢てゐる室の障子を隈取つてゐるのを發見した。私は心が何だか其方へ惹付けられるやうに覺えた。

『又泣いてゐはしないか』

と、私は思つた。是までもよく夜中に目が醒めると、秀子が、サメ〴〵と泣いてゐることがあつた。私は始のうちは、起きていつていろ〳〵と慰めの言葉をかけたりなぞしたが、餘りに白々しく僞善に傾くので、其後は斷じてそんなことを避けてしなかつた。

私は泣聲が聞えるかと、聽官を鋭敏にして息を殺ろしたが、月のさした其室からは何の音も聞えなかつた。只時々雨戸が相變らずガタヒシ鳴つて、私の耳を邪魔するだけであつた。私は足の爪の尖を立てゝ自分の部屋に入り、それから隔ての襖を成るべく音のせぬやうにあけた。注意に滿ちた官能は直ぐに、室中に罩めた女の髪油と、お白粉の香りを感知した。私の胸は躍つた。私はまるで盜にでも這入るやうなふうで、恐る〳〵秀子の床の傍に坐つた。秀子は私の想像に反して、スヤ〳〵と穩かな息づかひをして、熟睡してゐるのであつた。私は朧ろな光りで、秀子が上半身を夜具から出し、少し胸を露らはにしてゐるを認めた。それから一方の手は蒲團の中にあつだが、モ一方はゆるく開いて、グッタりと疊の上に投げ出されてあつた。私はそつと顏を寄せて、其寢顏を覗いた。瞼は綏く閉ぢ、唇は僅に開いてゐた。私は顏を針の尖でそつと觸られるやうな感じがしたことと、何故かしら獨りでニヤ〳〵と笑つたことだけしか覺えてゐない。**私の頭には其瞬間過去も、現在も何もなかつた。**私は自然に上半身をかゞめて、モウ一寸で、私の唇が、秀子の唇に觸れやうとした。其刹那、物におびえたやうに秀子が目を開いた。若し秀子が、瞬間の驚きの後、私を認めて、莞爾と

笑つたならば、總ての問題は立處に消滅したに違ひはない、秀子は勝者として、私は不幸な敗者となつて。然るに秀子の眼は私を認めると、不安と恐れと、羞恥の表情をして、其手は逸早く引込められ、紊れた胸の取り繕ひに用ゐられた。私はハット思つて直に頭を擡げた、そして作り笑ひをして、

『秀子さん、よく睡つてゐたのね、驚かしてやらうと思つた』と、態とらしく云つた。

秀子は明らかに機會の去つたことを悟つたに違ひなかつた。彼女は少時默つてゐたが、やうやく氣が付いたやうに、淋しい笑ひをして、

『貴夫、御寒いでせう。御風邪を召しちやいけませんよ』と云つた。

けれどもそれは既に遲かつた。私の心には氷のやうに冷たい過去の記憶が蘇つて、本當に風邪を引く程震へ上らしてゐたのだ。

『どうも有難う』と、私は眞面目腐つて云つた。『眞個に風邪など引いちやつまらない。ぢや貴女もよく御休みなさい。下らぬ惡戯をして折角心地よく眠つておいでのところを起して、濟まなかつたね。御免よ』

私はそれから秀子が一睡もしないで、泣き明したことを知つてゐる。秀子の眼は翌朝は赤く膨ぼつたくなつてゐたから。

七

雪が消えて一月の後、私共は市の南端にある、主人の果樹園に移つた。秀子は萬づ心頼みになる親の膝下を離れて、上部ばかりで、心には少しの愛情もない良人と共に捿ふことには反對であらうと、私は想像したのだが、實は却て悦んで、自分から進んで移らうと言ひ出した位であつた。思ふに秀子は自分の秘密を、どうかして、兩親の耳目から匿し度

いと、望んでたに違ひはない。又私が少しも心を許さぬのが、秀子をして、愈々焦たしめ、どうかして私を眞に自個のものと爲し度いといふ希望から、二人きりで家を持つことが、直に親密の度を増すものゝやうに誤解してゐたに違ひない。それ故、移つたときはおもひなしかホツト一安心したやうであつた。

園内には林檎と、梨と、葡萄とがあつた。園の一方の生垣を越えると、直ぐ大きな川で水の音は朝となく、夕となく私共の住居を音づれた。

私は事務所へ半道以上あるのを散歩の積りで、毎朝早くから出掛けた。生垣をめぐらした家々はどれも〳〵古く低いこけら葺か、草葺で、偶に亞鉛葺の家根が見えると、其家はきまつて新らしく、壁など白い漆食の色が鮮かで、朗らかな春日の下に、悦ばしげに光つてゐた。

家が盡きるところには廣い畑が開らけた。遠い〳〵山の麓まで、唯ポツリ〳〵群を爲した家と樹木とを除く外は皆一様に麥の新芽が、きら〳〵と青く萠えてゐる。空には幾つとなく雲雀の聲が聞えて、遙か向ふの小路を行く荷馬車が玩具のやうに小さく見える。

私は此處に移つてから、折々カリフオルニアに居た時分のことを想ひ出して、其折の樂しい未來の夢が、今は苦しい現實になつてゐるのに苦笑を催した。

秀子の期待も强ち無駄ばかりではなかつた。移つてから二三週間經つと顏色も幾分よくなり、擧動も可なり快活になつた。夕方など私が歸宅して園内を散歩してゐると、よく後からついて來た。

『秀子さん、合唱しませう。何かお唱ひな』と、私は云つたこともあつた。

『何を唱ひませう』と、秀子も打解けた調子で云つた。

『〳ちとせの岩よ、我が身を圍め〵、がよからう、私がテノールを唱ふから』

二人は薄紅に蕾むだ林檎の枝に、夕やけの光りが、星とかはつてからまでも、しばらくは歌聲を絶たなかつたこともあつた。

秀子は矢張り總てを秘密にする考えから、下女を使はふとしなかつた。かひ〴〵しく襷をかけて臺所に働いてゐるのを夕方などよく見掛けた。

果樹園の隣には矢張り主人の所有で、大きな畑と、ちよつとした牛舍があつた。馬も三頭ばかり飼つて、背の高い赤塗の馬車があつた。私は日曜日、教會には大抵此馬車を自分で御して行つた。秀子もその傍に乘せて行つた。世間では之を見て私共を女房天下と見た。教會の人は、なか〳〵妻を愛する立派な紳士であると見た。親達は夫婦の中のよいことを非常に悦んだ。秀子自身ですら段々自分が良人を惹き付けてゆくと考えたらしい。段々馴々しくなつて、遂には接吻でも強請るのではないかと思はれる素振を示すことすらあつた。私は此處に於て、一寸と私の心を暗示して置く必要を認めたので、今となつては餘りやり過ぎたと思はぬでもないが、一首の歌めいたものを書いて、そつとデスクの上に置いて出た。其文句はモウ忘れたが、意味は「赤い布を二つに裂いてから、又元通り縫ひ合せても、縫目は如何とも爲し難い」と、いふのであつた。

毒藥の效能は直ぐにあらはれた。秀子の擧動は其日から元の通りになつた。

『どうしたの秀子さん。又元氣がなくなつたのね』と、二三日經つてから私は素知らぬ顔して問ひかけた。

『そうですか、私別にどうも有りませんけれど』と、秀子は強ゐて、笑顔をつくつて答へた。けれども其眼には明かに怨みの色が浮んでゐた。

『ぢや、其處らを散歩しませう』
秀子は躊躇した。
『いゝでせう。工合が惡い?』
秀子は首をふつた
『でなければ行きませう、サア』と、私は立つて行つて、態と其手を取つた。
『御免下さい――どうぞ、御赦し下さい』と、云ふかと思ふと秀子は、モウ其處にペタ〳〵と坐つて、袂を顏に當てて泣き出した。
『どうしたんです、秀子さん、薩張り、譯が分らんね』と、私は殊更驚いたふりをして手を其額に加へて、熱でもありはせぬかと、疑ふやうに見せかけた。
『私――私全く思ひ違ひをしてをりました。赦るして――赦るして頂けたものとばかり思つてをりました』と、秀子は杜絕れ〳〵に云つて、後は淚に咽び入つた。
『何のことです。私には分りませんが』と、私は愈々迷惑そうに云つた。
『あの机の上の歌で――』
『あゝ彼の歌を御覽でしたか』と、私は俄に思ひ當つたやうな口吻で、さも〳〵困つたことが出來たと思つたらしく、『彼の歌は――いや私の不注意でした。彼は裂いてしまふとよかつたのです。誰しも古い疵をあばかれるのは不愉快なものです。御免なさい。私が重々惡るかつた』
私は秀子の背を撫り〳〵いろ〳〵と慰めの言葉をかけた。併し決して秀子の罪を赦すとも、忘れるとも云はなかつ

た。そんなことはよし口に出したところが不可能なことなのだから。私は嘘は云ひ度くない。只私の出來る範圍で秀子に親切にしてやれば、それで事は足りるのだ。

斯うした騒ぎの最中であつた。私の耳は玄關に來た人の聲を聞いた。

『ヤア、お親父さんがいらした』と、私が低聲で云つたのが耳に入ると、秀子は急に、臺所の方へ逃げて行つた。

『何時來ても遠いことだ。大島さん感心だね毎日此處から通ふのは』

父親は大きな聲を出して語りながら、案内もなしに、ズン／＼坐敷に通つた。後には母親が尾いてゐた。

『ヤア、お母さんもですか、お珍らしい。マア御掛けなさい』と、私はそう云つて、椅子を出し、スヰッチを捻ぢて電燈をつけたりした。長い夏の日は小さな泉水の先の藤棚にかすかに殘照を見せて、室内は暗かつた。

『秀子は？』と、母親はあたりを見廻はした。

『今まで此處に居ましたが、臺所へ行きましたらう』

『秀、々』と、父親は大きな聲で呼んだが少しも返事がなかつた。

私は親達の何れかに立てゞも行かれると、迷惑なやうに感じ、先を越して、自ら臺所へ行くと、秀子は其處で顏を洗つて、化粧をしかけてゐた。

『お父さんがお出でゞすよ、それからお母さんも――』と、私は云つて、直ぐ引返へし『今お化粧してゐます、直に參りますよ』

程なく秀子も出て來て挨拶した。モウ其顏には涙の痕はなかつた。只瞼が幾分か膨れたやうなので、萬事に注意してみる母親が、

『お前眼が悪るくはないか、膨れてゐるやうですよ』と、云つたゞけであつた。

父親は酒好きであつた。古くから基督者ではあつたが、場合により酒盃を手にすることもあつたので、私は氷に冷した麥酒を出して振舞つた。父親は眞赤な顏をして、愉快さうに語つた。母親はいろ〳〵家事上のことなどを娘に話した。

『大島さん』と、洋盃を下に置いた父親は滿面に笑みを帶びて云つた。『どうです、未だ出來さうな模樣はありませんか』

私はハヽア來たなと思つたが、態と白けて、

『何ですか』と問ひ返へした。

『子供が出來さうな模樣はないですか、といふんです』

私は窃りと、秀子の方を見た。彼女は母と何やら話してゐたが、此方の話が耳に入るとヂロリと眼を此方に向けた。しかし直に聞かなかつたふりをして、又母親に何か話しかけた。

『子供？ハヽハ』と、私は高笑ひした。『さう御急ぎなさらずとも良いでせう。實のなる時は秋ときまつてゐます』

『それは秋だ。併し春に花が咲いて、それから夏にはモウ實がなつてゐる。秋は只收穫だけぢやないかハヽヽ』

『さうですな、併し播かぬ種は生えぬと云ひますからな』

『さうか知ら、君は「良き土に良き種を播く人」だと思つた』

『どうだか知れたものぢありません』と、私はアヤフヤな受答をして話を外らしてしまつた。實際私は私の純な、初心な感情を傷けた記憶を忘れて、斯うした收穫を期待すべく、餘り心の片寄つた人間であつた。

其夜私は兩親を馬車に乘せて、送り屆け、歸つてみると、秀子は洋燈の下で、聖書を開いて、祈禱してゐた。私は其眼には淚が光つてゐるのを認めた。

八

八月の央ばであつた。太陽は强く照り付けてゐるが、海から浪の水沫を飛ばす程風が吹いて、砂濱の上も涼しいので、澤山な人が其處に横仆しになつたり、腹匍つたりして、豚のやうに、ゴロ〳〵して居た。私共の店員は防風の生えた小さな砂丘の上に携帶した天幕を張り、其上に星形の店章の附いた紫の旗を立てゝ休憩所に宛てゐた。

私は無理に秀子をつれて、二度ばかり海に這入つた。白く、薄い浴衣を通して、窺ひ知られる其身體の貧弱さ。鍔廣な麥稈帽の下から、ゲツソリとした頬に、黒い髮が紊れかゝり、巨きな眼が、おびえて、震ふやうに光つてゐるのを見ると、可哀さうでもあり、又輕蔑して、唉つてやり度いやうな氣もした。秀子を其傍に奥さん〳〵と、纏つてくる女店員等の何れとでも比較して見よ。まるで御話にならぬではないか。彼等の多くは、浴衣がピンと張り切つてゐる程肉付がよく、胸のあたりは、柔かさうに、ムツクリと膨れ上つて、其下に潜む豐潤な乳房を裏切り、露き出して唉る身體の部分は、何れも赤味を帶び、白い皮膚の色は、鹽の刺戟を受けて、仄りと紅くなり、それが藍を溶かしたやうな海水の中にあるときは、薄紫に染つてみえる。そして大きな肺を充分に膨らまして、まるで海獣のやうに大氣を呼吸し、無遠慮に其肥えた手足をバタ付かして、其處らぢうに白い泡を立てゝゐる。

『貴女がたは健康そのものだね』

と私はそれを見て嘆賞しないわけにいかなかつた。秀子の顔に苦笑が浮ぶにも拘らず。

二度目に秀子を促して、海に這入つたときであつた。少し遊んでゐると、汀の方から

『武藤さん〳〵』

と、秀子の舊姓を呼ぶ聲を耳にした。

『誰だらう』と、私が手で眼庇して見ると、同じ年輩の女が、店員の三野と其處に立つてゐた。

『秀子さんの知合ひ？』と、私が聞くと、秀子は少し迷惑さうに、

『えゝ同窓よ、今此地に居ないのですけれど、さつき一寸會つたので、話しがし度いのでせう』

『ぢやお出でなさいよ』

『でも』と、秀子は、折角私の厚意を無にして其方へ行くのを躊躇するやうだつたが、結局私の勸めに従ひ、寧ろ内心は悦んで岸に引き揚げた。

私は獨りで、深い方へさつさと這入つて行つた。其處には海水浴場の安全區域を表示する棒杭が五六本一列に立つてゐて、島田と小谷との二人の女店員が、胸の上まで浸りながら、浪が寄せてくると、飛び上り／＼して、顔を濡らさないやうにしてゐた。

『游がしてあげやうか』

私は笑ひながらそう云つて二人に近いた。

『えゝどうか』と、二人のうちで餘計に肉付のいゝ島田が答えて、手を伸した。私はそれを握ると、柔かで、水に漬つてゐたにも似ず、生温かく感じた。

『少しも游げないのだね』

『えゝちつとも、だから淺い處へ行つてね』

『そんな淺い處ぢや游げないよ。此處ぐらゐが丁度良いのだ。いゝかねそれ足を浮かすのだよ』

私は十五分ばかり島田を引張り廻はして游がしてやつた。それから小谷を同じやうに游がした。二人はきやつ／＼と

騒ぎながら、私の手につかまつて、あたり構はず水を飛ばした。

　可なり水が深く、立つて手を取り、引廻はすのは面倒なので、今度は其處に浮いてゐた短かい丸太棒を取り、之に島田を縋らせ、私は其端を小脇にかゝえ、片手で游いで、少しばかり棒杭から沖へ出た。

『大島さん、いやですよ、沖に出ちや恐いわ』と島田は確り棒に縋り付いてゐるらしく、喘ぐやうに云つた。

『大丈夫、心配しつこなし』と、云ひながら、ヒヨイと後ろを向かうとする途端、一つ男浪が來て、スツポリ私を頭から被せ、小脇の棒を島田ぐるみ奪つてしまつた。私はあつと叫んで、直ぐに水上に首を出してみると、幸ひ島田は棒に縋り付いてゐた。けれども上半身は首のあたりまで、水に浸り、足だけ高く空に突き上げて、泣き出しさうな顔をしてゐた。

『今行くよ、しつかり摑まつておいで』

　私は勵ましておいて、僅か四五間の距離だから苦もなく其處へ泳ぎ付いた。足をのばしてみると、底がない。棒杭からは六尺と離れてゐないのにモウ斯麽に深いのかと思ひながら致方なしに立泳ぎで、島田の後から用心して進み寄り、其胴を抱いた。之が悪るかつたのだ。若し私がそんなことをせず、丸太に縋らしたまゝ襟首を取つて、淺瀬に引いて行けば何でもなかつたのだ。

『サア手を御離し』

　私がそう云ふと、島田は手を離したはいゝが直ぐ其儘全身の力をこめ、全體並で私に縋り付き、乗しかゝつてきた。

　私は一支えもなく沈んでしまつた。島田の腕で肩を絞められ、島田の脚で胴を纏はれ、石のやうに底へ〱と沈んでいつた。私は幸ひ澤山の水を呑まずに濟んだが、今にして思ふと驚きはあつても、何の恐れも心には感ぜず、寧ろ何かし

ら大きな力に抵抗もえせず、ずる〳〵引き込まれるやうで或る愉快をさへ感じた。併し背が立たぬと云つても左して深いと云ふでもないので、直ぐに私の足は底に着いた。私は試みに其處を踏みしめて、立つてみると、何のことだ馬鹿々々しい。私は島田に固く抱き締められたまゝ、呆れた顏をして立つてゐる小谷の前に、身體の上部四分の一をぬうと水面から突き出した。私共は折柄の上汐で、沈む間に少しばかり岸近く持つて行かれたのだつた。

『モウ大丈夫だ。島田さん。助かつたよ』

私は二三度強く島田の背中をたゝいた。島田は矢張り固く私に縋り付いてゐた。

『モウ大丈夫だ。御離しなさい。水を飲んだ？』

私は雫のしたゞる其髮の所へ顏をやつて、耳に口をつけて云つた。けれども島田は動かなかつた。勿論死んでゐるでもなければ氣絶してゐるのでもない。私の右の掌は其心臟の鼓動を觸知し、私の胸には其急しない鼻息が溫く當つてゐたから。

私の斯うした樣を見ると、そこらぢうの人達が段々此方へ集りかけた。現に小谷は傍に來ていろ〳〵世話を燒いてゐる。私は甚だ迷惑を感じた。どうしても島田が離さぬことになると、此儘で陸につれて行かなければならぬ。がそれは甚だ醜い。今はまだ下半身が水に浸つてゐるのだから知れないけれど、島田の浴衣は下前がほぐれて、確に其片脚は露き出しになつてゐる。私は斯うなつてから却つて、一種の恐怖を感じ出した。同時に又私の心はそれまでに經驗したことのない、絶望的幸福な觀念――固く〳〵豐艶な人魚（マーメード）のやうな肉體と抱き合つたまゝ青い海の底に沈まふといふ冀望をさえ抱いた程ではあるが私は斯うした美しい神の創造をムザ〳〵と手離し度くなかつたのだ。けれどもそれ程の無茶な勇氣も出ないので、私は何か別な方法を取らねばならなかつた。私は今度は打つ代りに、滿身の力を込めて、島田の胸を

平板が出來る程、緊しく抱き締めた。此方法は却て效果を奏した。

『く〻苦しい』と、島田はやうやく私の胸から顏を上げて、同時に固着さしてゐた手足も解いた。其時丁度店員の福島が其場へ驅け付たので、私はそれと小谷とに助けて貰つて島田を天幕の中につれ込んだ。

私は十五六分其處へ寢轉んで休憩してゐた。その間に僅か數分前の冒險を想ひ起し、寧ろ愉快と幸福を感じた。併しフト私は秀子の居ないことを氣付いた。秀子！　何處へ行つたらう。私はあたりの人に尋ねてみると、女の友達と二人で、濱傳ひに荒野の方へ行つたと告げた。

夕日は灣を圍む背後の山に傾きかけてきた。薔薇色に砂地は彩られ、沖はや〻かすんだやうに朦々としてゐる。海には貝を趁る舟が二三隻浮いて、泳ぐ人の頭が黑點をうつたやう、磯には蟻の群そのま〻人が往來してゐる。私は二町も來たらうか、浴場から北の方へ玫瑰の咲く砂丘の上を。軈て眼の下の渚に二つの開かれた日傘が並んで置いてあるを認めた。一つは疑もなく秀子のである。私はゆるい傾斜を足音もなく靜に其方に向つて下つた。

秀子も其友も全く人の來ない處と、安心して語つてゐるやうであつた。何を前から語つてゐたかは知らぬが、丁度私が近くまで寄つたとき、友は大きな聲を出して喋舌つた。

『Hさんも奥さんをお持ちなすつてね、今は濟していらつしやいますよ。私が此方へ來るとき會ひましたら、貴女に宜敷つて仰ついましたよ』

『Hさん？　私は聞かぬ名だ。』私はハツト思つて其處へ立ち止つた。『秀子は何んと云ふだらう。』

『後生ですから』と、秀子は哀願するやうに云つた。『Hさんのことは云はないで頂戴』

『大丈夫よ、私誰にも話しやしないわ。知つてゐるのは私達三人きりだから、話が漏れ〻ば、誰かその一人が喋舌つた

のだわよ』

『どうか其話はモウ止めて下さい。御願ひですから』

『いゝぢやないの』と、友は幾分は面白さうに依然詞をつゞけた。『今でも矢張り貴女を忘れやしないことよ。此頃は大學生の時分とは違つて莫迦にハイカラになつてね』

私はエヘンと咳拂ひをしてやらうかと思つた。併しそんなことをするのは惡い。私はその餘を聞く必要がないから、物と立ち去らうとすると、秀子は堪りかねたやうに立ち上つた。そして不平らしい顏をして置いた日傘を取らうとする拍子に、私が其處に立つてゐるのを認めた。秀子がその時仆れなかつたのが私には不思議なくらゐだつた。

『秀子さん、加減が惡いなら、彼方へ行つてやすみませう』と、私は秀子の手を取つた。其手は氷のやうに冷たく、殆ど私のを摩痺しはせぬかと疑はれた。

友達の驚きは云ふまでもない。彼女は物をも言はず日傘を引つ掴むと、其儘、殆ど一目散に驅けんばかりにして、水打際を浴場の方へアタフタと急いで行つた。

「ヘツ、女狐奴、貴樣が私の秀子を欺らかしたのだらう」と、私は心の裡に思ひながら、外面はさりげなく、友の素性を訊ねた。秀子が澁い口から語つた處によれば、其女は此海岸の漁師兼旅館の娘で、同じ學校を秀子と一緒に出て今は東京に出てゐるが、休暇中歸つてゐるとのことであつた。それでHとやら云ふ男と秀子との關係もあらましの推定は付いたのであつた。けれども私はHのことは噯氣にも出さなかつた。

私は半病人となつた秀子を抱えて、店員達より早い汽車で歸宅した。

私は其夜はいろんな夢を見た。秀子が昔の姿で、H――夢ではどんな顏だつたか忘れた――と手をひいて海岸を歩る

いてゐるところ。自分が島田と抱擁してゐるのを外の店員達が見付て笑ふのでスッカリ赤面するところ。しかも秀子が其中に雜つてゐて、恨めしげな眼付をして睨めてゐるところなど、取留めもない夢ばかりを見てゐた。

　それ以來私は島田を見ると、昔秀子が若かつた時分の豐潤の肉付と、其初々しい態度を想ひ起して、これを永久に私の手から封じ去つた妻を憎む心が一層深くなつた。併し私は島田に對し、否何れの女に對しても純潔を保つた。そして以前に倍して秀子を愛した。芝居や、遊覧といへば、秀子が固辭しても無理強ゐまでして伴れて行き、私の店に來た新流行品は何に寄らず、私の力に及ぶ限り買つて與へた。秀子は愈々困つた。床にこそつかぬが、海水浴以來秀子はブラブラとして居た。内部の爭鬪が非常に烈しいのは、私にもよく分つてゐた。此苦痛を脱かれる爲め秀子は斷えず神に祈つたらしい。けれども罪の意識はこびり付いて離れない。祈りは一時の慰安にはなつても、私といふ記憶を目の前に控へてゐる。罪は追ひかけ／＼彼女を襲ふた。秀子は一歩／＼私が頑信する正義の前に犧牲となり、徐々、しかも確實に亡滅の淵へ進んだ。此際秀子が救はれるには只二つの道より無かつた。即ち一つは全然私から離れ去ること、次には前にやつた通りHとの關係を私に告白して赦免を受けることであつた。けれども第一は私の親切、私の正義に對して義理が立たず、又私に對して多くの未練をもつてゐたから、決心がつかなかつたのであつた。第二は秀子もやつてみやうと、度々機會を作りかけたが、それは私の方で遁げた。實際私は冷酷な罰の手が秀子の上に着々と加へられ、蜘蛛の網にかゝつた蝶のやうに、秀子が悶え苦しむのを見るのがもう厭になつた――此上繰り返へしてHの關係を聞かされては迚も堪らない。もう澤山だお前の罰も！　此上私を冷たい正義の御座に押しやつて與れるな――私にだつて惻隱の心はあつた。私は段々と最初の動機を忘れ、憐愍の情から秀子を勞るやうになつてきた。只一つのもの――それにより秀子が根本的に救はれるもの――私が最後の據點として嚴守するもの――汝の淨き身を娼婦の爲めに濆す勿れといふ聖訓までも棄て

ゝしまはふかと思つたことすらあつた。けれどもそれは遲かつた。秀子が私の傍に居る時は、私はまるで氷花の傍に居るやうに感じた。花に生命はあらうが、其冷たさは私をして熱いキッスをすら授ける心を起さしめなかつた。

九

秀子の衰へ方は日に增し募つて行つた。私は屢々馬車に乘せて、病院につれて行つた。飯倉博士は首を捻るやうになつた。

『ツウベルクリンの反應を見ませう』と、言ひ出した。肺病の疑ひだ。秀子には勿論知らさなかつた。博士は最も簡便で危險の少ないピルケー氏法により、秀子の腕に四個所、食鹽水と、ツウベルクリンとを交互に刺絡した。反應は明白にあつた、二つの對照は直ぐに消滅したけれど、殘りの二つは段々紅く膨れ上り、種痘のやうになつた。私は入院を勸めたが、秀子はどうしても聞き入れないので、住つてゐる邊は幸に空氣もいゝ場所であるから、私は下女と、看護婦を雇ひ入れた。之も秀子は拒んだが、モウ身體の自由がきかなくなつてゐるので、とう〳〵意地張つてをられなくなつた。秀子自身でも自分の運命がモウ定まつたと、覺悟をしてゐるらしかつた。

病氣が極つてから後、私の態度は一層親切であつた。朝餐前は秀子の室に居て、聖書を讀んで聞かしたり、讃美歌を歌たつりしてやつた。夕方は歸つて來ると、寢るまで、枕邊に座つて、いろ〳〵の話をしたり、買つて來た土產を開いたりして慰めた。私は祈禱の度に、秀子の病を御心にかなはゞ、速に癒し給へと、熱心に祈つた。

『本當に親切な旦那樣で御座います。奧樣は陰で濟みません〳〵と、勿體ながつて、泣いていらつしやいます』

と看護婦も下女も世間に出て吹聽するので、私の美名は倏ちに其處ら中に擴まつた。

『矢張り、基督者は違ひます』

と、信者仲間では私を一つの誇りにしてゐた。だが私はモウ其頃は褒められるのに悉皆飽が來てゐた。のみならず、斯うした事情の下に、一人の生命を殺してしまふことは恐ろしいとさへ思はれ出した。あらゆる善行、美德の名を以て、此處に最も陰險、惡辣な報復が行はれてゐるではないか。「爾曹の敵を愛み、爾等を詛ふ者を祝し、爾曹を憎む者を善視し、虐遇迫害もの丶爲に祈禱せよ。如此するは天に在す爾曹の父の子とならんが爲めなり」といふ尊い聖訓も守りやうでは、良藥が變じて毒藥になるのは驚くべきことだ。ミルトンの失樂園を讀むと惡魔王は最上天使の墮落したもの、其手下のマムモンは天の御宮に居る時分には、其慾張根性から、斷えず道に鋪かれた金銀の塊りばかりを見てゐたさうだ。私の如きは神の御名と、正義を眞向にふりかざして、大それた惡事を爲すのだからサタン以上の惡魔ではあるまいか。

秋が深くなつた。棚の葡萄は紫になつて、其葉は軈て火のやうに紅くなつた。肌に透くやうに快よい風が吹いて、空は青々と晴れて赤蜻蛉が飛ぶ。山も軈て紅に、黄に、紫に彩られて、時雨の雲が時々頂を掠めた。

秀子の病は愈々重つた。重れば重る程私の親切は度が增して來た。私は秀子に影のやうに附き纏つて離れなかつた。いや秀子には確にさう見えたに相違ない。私が事務所に居るときでも、夜寢てゐるときでも、秀子は私の親切な詞を耳に聞き、冷かに、潤のない私の眼がぢつと彼女の上に佇止してゐるのを感じたに違ひはない。私は彼女に取つては、全く取り憑いたら、離れない生靈であつたのだ。

軈て冬が來た。雪が深く積つた。朝早く出ると、時には全く路のないことがあつた。私は大抵二度目に市へ行く牛乳運搬の橇に乘つて、事務所へ出掛けた。大きな亞鉛の罐が大事さうに藁を敷かして、上からズックの覆ふてある片隅に私はちゞ込まる。馬は威勢のい丶頸の鈴をヂャラ付かせて膝まで雪を押し切つて進む。朝の氣は凜として鼻の孔が痛む。雪

は純白で、强い朝の光りを照り返へして、黑い眼鏡をかけぬと、眼を損ずる恐れがある。吹雪で眼も開けられぬやうな日もあつた。更けて星明りに辿る道を失つて、雪の深味に踏み入り、溝に墜ちて、危く生命をなくしやうとしたこともあつた。併し私は一日も缺勤せず、一日も夜を他で明かしたことはなかつた。私は秀子を離れなかつた。秀子は私に守られながら、斯うして一歩々々宛死に近づいた。

秀子が亡くなつた時分には、私共の附近には未だ其處此處に殘雪があつて、日が照つても身に浸み通るやうな寒い風が吹いてゐた。

私が事務所に居て、丁度〇〇村に入つた移民團體に澤山な農具を入れるので、其發送に忙殺されてゐるところへ、妻が悪いといふ電話がかゝつて來た

『愈々決算だ〳〵』と、私は心で云つた。そして、何かしら計畫したことが成就して、其調印にでも行くやうに、心が勇まれるのであつた。

家には兩親も來てゐれば、病院から醫師も來てゐた。皆の顏に深い憂ひの色が浮んでゐた。

『けれども死ぬ者はどうしても死ぬにきまつてゐる』と、私は皆の心配や慌てかたに幾分の反感をもちながら、殊更沈着いて、秀子の枕元に坐つた。醫師と看護婦が、今酸素の吸入をやらせたところで、妻は案外に氣がしつかりしてゐた。私の歸るのを待ち兼ねてゐたやうに、又私の顏を見ると安心したやうに見えたが、軈て他の者に暫時遠慮してくれと言ひ出した。

秀子は蠟のやうな顏の中から、徒に巨きくなつた眼を力なく見開いて、低い〳〵聲で云つた。

「私はもう神樣の處へ參ります。けれども貴夫から、一言赦すと、云つて頂かなければ私はそこへ參れません」

私は默つて考え込んだ。(「赦す」といふ一言は苦もなく言へる、が私は眞實そんな心になれるかどうか。尤も斯うなつてみると、遉に私の報復も强過ぎたといふ感念はもつてゐた。どうせ死ぬるものならば、氣休めでも言つて安心さしたがよくは無からうか。いや〳〵そうは成らぬ。私は僞りを以て、此大事な場合を永劫に、糊塗することは出來ぬ。果して「赦す」と云へるか。)

私の考へ込んでゐるを不承知の意味に悟つたらしく、秀子は世にも悲しい顏をして、

『どうしても赦して頂けませぬか』と、云つて、長い息をして、眼を瞑つた。

私は矢張り默然としてゐた。(私はどうも赦すと云はれない。假に云はれるにした處が、私にそんなことをする能力がありそうに思はれない。罪は神樣より外には赦す權能がない。たか〳〵忘れてやる。氣にかけない。その意味ならマア言つて言へないこともなからう。それでさへも隨分私に取つて大きな讓步であるが――。)

『秀子さん』と、漸く私は拱んだ手を解いて呼びかけた。秀子は再び眼を開いた。

『赦すといふことは私には出來ない。私は神樣でありませんから。けれども斯う云ひませう。あなたが過去の行爲は皆忘れてしまひませう。いやそう云ふ言葉の下から皆忘れてゐます。いゝでせう。是だけ云つたら?』

秀子の眼には明かに失望と、不滿があつた。私はその時直ぐに一切の裏面を看破つた。(彼女は、私を其處へ泣き伏さしめ度いのだ。彼女の罪を赦すのでなく、私が今迄してきた行爲を彼女に詫びてしまはせ度いのだ。そして、涙と共に刹那々々に、冷え行くべき運命の下にある其唇に接吻がして欲しいのだ。只赦すと、一言云つたゞけでは決して、何の益にもならぬのだ。「赦す」といふ一言はすべて斯の如き行爲を表示しなければ、眞の意味を爲さないのだ。秀子は最後の瞬間に、私を屈服してしまはふと謂ふのだ。よしやそれが無意識であつても――。よしそういふことなら、此方にも

考へがある。臨終の悲慘な光景の下に、欺瞞せらるゝのは如何なる賢人でも免れないことだ。愚かな私は危くその手に乘る所だつた。弱者が有する恐ろしい武器！ 若し私が一言赦すといふ心が出たら、それで一切はお終ひだ。私は最後の敗北者となつてしまふ。長い間の鬪ひは、今秀子の悔恨に滿ちた死により、私の勝利となるか。乃至私が在來の態度を取り消してしまふことによつて、私の屈服に終るかの境目にあるのだ。私は讓れない。正義だ、飽くまでも清淨な自己を保つことだ。）

『秀子さん』と、私は冷かに云つた『貴女そんな無理をいつちや困りますよ。私の出來ることなら何でも仕てあげます』

・秀子は再び目を瞑つた。永久に醒めぬ睡に分け入る第一歩として――。

私は直ぐに醫師や兩親を呼び寄せた。けれども秀子は目を開けなかつた。父親が如何に叫けんでも、母親が如何に泣いても――遂に醫師が心臟に當てゝゐた聽診器を外づして、

『御氣の毒で御座います』

と云つてしまつても――。

十

私は是以上書く何物をも持たぬ。私は明朝早昧に南洋に向つて去るのである。妻の墓と其兩親とを殘して、其處に全く新たな生活を營むべく――。

（完）

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　京橋區西紺屋町	良明堂
同　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大盛社
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

○定價　金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	國外
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一郵便爲替にて御送金の場合は指定を**本郷區西片町十番地中央公論社**とし、拂渡局を**東片町局**と指定あれば途中盜取さるる虞なし

一振替貯金口座は**東京三十四番**なり

一郵券代用は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず

一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄　金六錢（集金委託料
一金五圓迄　金七錢　及送料共）

一受領證請求は必ず返信料を要す

大正七年九月廿日印刷納本
大正七年十月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　菅谷憲治
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地
中央公論社
電話長小石川一四四四
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十一年月廿九日第三種郵便物認可

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す